

# 田舎教師

田山花袋

青空文庫



一

四里の道は長かつた。その間に青縞あおじまの市いちのたつ羽生はにゅうの町が  
あつた。田圃たんぼにはげんげが咲き、豪家ごうかの垣からは八重桜が散りこ  
ぼれた。赤い蹴出しけだを出した田舎いなかの姐ねえさんがおりおり通つた。

羽生からは車に乗つた。母親が徹夜てつやして縫つてくれた木綿もめんの三  
紋つもんの羽織に新調のメリンスの兵児帶へこおび、車夫は色のあせた毛布けつとう  
を袴はかまの上にかけて、梶棒かじぼうを上げた。なんとなく胸がおどつた。

清三の前には、新しい生活がひろげられていた。どんな生活  
でも新しい生活には意味があり希望があるようと思われる。五年

間の中学校生活、行田から熊谷まで三里の路みちを朝早く小倉服着て通つたことももう過去になつた。卒業式、卒業の祝宴、初めて席に侍る芸妓なるものの嬌態きょうたいにも接すれば、平生むずかしい顔をしている教員が銅鑼声どらごえを張り上げて調子はずれの唄うたをうたつたのをも聞いた。一月二月とたつうちに、学校の窓からぞいた人生と実際の人生とはどことなく違つてゐるような気がだんだんしてきた。第一に、父母からしてすでにそうである。それにまわりの人々の自分に対する言葉のうちにもそれが見える。つねに往来おうらいしている友人の群れの空氣もそれぞれに変わつた。ふと思い出した。

十日ほど前、親友の加藤郁治かとういくじと熊谷から歩いて帰つてくる途中

で、文学のことやら将来のことやら恋のことやらを話した。二人は一少女に対するある友人の関係についてまず語つた。

「そうしてみると、先生なかなかご 執<sup>しゆう</sup>心<sup>うしん</sup>なんだねえ」

「ご執心以上さ！」と郁治は笑つた。

「この間まではそんな様子が少しもなかつたから、なんでもないと思つていたのさ、現にこの間も、『おおいに悟つた』ツて言うから、ラヴのために一身上の希望を捨ててはつまらないと思つて、それであきらめたのかと思つたら、正<sup>せい</sup>反<sup>はん</sup>対<sup>たい</sup>だツたんだね」

「そうさ」

「不思議だねえ」

「この間、手紙をよこして、『余も卿等<sup>けいら</sup>の余のラヴのために力を

貸せしを謝す。余は初めて恋の物うきを知れり。しかして今はこのラヴの進み進まんを願へり、Physicalなしに……』なんて言つてきたよ」

ここの Physical なしにという言葉は、清三に一種の刺戟しげきを与えた。郁治も黙だまつて歩いた。

郁治は突然、

「僕には君、大秘密だいひみつがあるんだがね」

その調子が軽かつたので、

「僕にもあるさ！」

と清三が笑つて合わせた。

調子抜けがして、二人はまた黙つて歩いた。

しばらくして、

「君はあの『尾花』を知つてゐるね」

郁治はこうたずねた。

「知つてゐるさ」

「君は先生にラヴができるかね」

「いや」と清三は笑つて、「ラヴはできるかどうかしらんが、單に外形美として見てることは見てゐるさ」

「Aのほうは?」

「そんな考へはない」

郁治は躊躇しながら、「じゃArtは?」

清三の胸は少しく述べつた。「そうさね、機会が来ればどうな

るかわからんけれど……今のところでは、まだそんなことを考えていな  
いね」こう言いかけて急にはしゃいだ調子で、

「もし君が Art に行けば、……そまさな、僕はちょうど小畠おばたと M  
iss N とにに対する関係のような考え方で、君と Art に対するようにな  
なると思うね」

「じゃ僕はその方面に進むぞ」

郁治は一步を進めた。

清三は今、車の上でその時のことと思い出した。心臓しんぞうの鼓動こどう  
の尋常じんじょうでなかつたことをも思い出した。そしてその夜日記帳  
に、「かれ、幸多かれ、願はくば幸多かれ、オ、神よ、神よ、か  
の友の清きラヴ、美しき無邪氣なるラヴに願はくば幸多からしめ

よ、涙多き汝の手をもつて願はくば幸多からしめよ、神よ、願ふ、  
親しき、友のために願ふ」と書いて、机の上に打つ伏したことを  
思い出した。

それから十日ほどたつて、二人はその女の家を出て、士族屋敷  
のさびしい暗い夜道よみちを通つた。その日は女はいなかつた。女は浦  
和に師範学校の入学試験を受けに行つていた。

「どんなことでも人の力をつくせば、できることはないとは思  
うけれど……僕は先天的にそういう資格がないんだからねえ」

「そんなことはないさ」

「でもねえ……」

「弱いことを言うもんじやないよ」

「君のようだといいけれど……」

「僕がどうしたツていうんだ？」

「僕は君などと違つてラヴなどのできる柄がらじゃないからな」  
清三は郁治をいろいろに慰めた。清三は友なぐさを憫あわれみまた己おのれを憫おのれんだ。

いろいろな顔と事件とが眼にうつつては消えうつつては消えた。  
路には榛はんのまばらな並木やら、庚申塚こうしんづかやら、畠はたやら、百姓家やらが車の進むままに送り迎えた。馬車が一台、あとから来て、砂す煙なけむりを立てて追い越して行つた。

郁治の父親は郡視学であつた。郁治の妹が二人、雪子は十七、しげ子は十五であつた。清三が毎日のように遊びに行くと、雪子

はつねににこにことして迎えた。繁子はまだほんの子供ではあるが、「少年世界」などをよく読んでいた。

家が貧しく、とうてい東京に遊学などのできぬことが清三にもだんだん意識されてきたので、遊んでいてもしかたがないから、当分小学校にでも出たほうがいいという話になつた。今度月給十円でいよいよ羽生在の弥勒みろくの小学校に出ることになつたのは、まったく郁治の父親の尽じんりょく力の結果である。

路のかたわらに小さな門があつたと思うと、井泉村役場いづみむらやくばといふだう札ふだが眼にとまつた、清三は車をおりて門にはいつた。

「頼む」

と声をたてると、奥から小使らしい五十男が出て來た。

「助役さんは出でいらっしゃいますか」

「岸野さんかな」

と小使は眼をしょぼしょぼさせて 反問した。

「ああ、そうです」

小使は名刺と視学からの手紙とを受け取つて引つ込んだが、やがて清三は応接室に導みちびかれた。応接室といつても、卓や椅子テーブルいすがあるわけではなく、がらんとした普通の六畳で、粗末な瀬戸火鉢そまつがまんなかに置かれてあつた。

助役は肥ふとつた背ひくの低い男で、縞しまの羽織を着ていた。視学からの手紙を見て、「そうですか。貴郎あなたが林さんですか。加藤さんからこの間その話がありました。紹介しょうかい状じょうを一つ書いてあげまし

よう」こう言つて、汚ない硯箱すずりをとり寄せて、何かしきりに考えながら、長く黙つて、一通の手紙を書いて、上に三田ヶ谷村みたやむら村長石野栄造様あてなという宛名みろくを書いた。

「それじやこれを弥勒の役場に持つていらっしゃい」

## 二

弥勒まではそこからまだ十町ほどある。

三田ヶ谷村といつても、一ところに人家がかたまつてゐるわけではなかつた。そこに一軒、かしこに一軒、杉の森の陰に三四軒、野の畠はたの向こうに一軒というふうで、町から来てみると、なんだ

かこれでも村という共同の生活をしているのかと疑われた。けれど少し行くと、人家が両側に並び出して、汚ない理髪店、だるまでもいそうな料理店、子供の集まつた駄菓子屋などが眼にとまつた。ふと見ると平家造りの小学校がその右にあつて、門に三田ヶ谷村弥勒高等尋常小学校と書いた古びた札がかかっている。授業中で、学童の誦讀の声に交つて、おりおり教師の甲走つた高い声が聞こえる。埃に汚れた硝子窓には日が当たつて、ところどころ生徒の並んでいるさまや、黒板やテーブルや洋服姿などがかすかにすかして見える。出はいりの時に生徒でいっぱいになる下駄箱のあたりも今はしんとして、広場には白斑の犬がのそのそと餌をあさつていた。

オルガンの音がかすかに講堂とおぼしきあたりから聞こえて来る。

学校の門前もんぜんを車は通り抜けた。そこに傘屋かさやがあつた。うちじゅ家中ちゅうを油紙やしぶ皿や糸や道具などで散らかして、そのまんなかに五十ぐらいの中爺ちゅうおやじがせつせと傘を張つていた。家のまわりには油を布いた傘のまだ乾かないのが幾本となく干しつらねてある。清三は車をどどめて、役場のあるところをこの中爺にたずねた。

役場はその街道に沿つた一かたまりの人家のうちにはなかつた。人家がつくると、昔の城址しろあとでもあつたかと思われるような土手と濠ほりとがあつて、土手には笹ささや草が一面に繁り、濠には汚ない鏽さ

びた水が樺や椎の大木の影をおびて、さらに暗い寒い色をしていた。その濠に沿つて曲がつて一町ほど行つた所が役場だと清三は教えられた。かれはここで車代を二十銭払つて、車を捨てた。  
 笹藪のかたわらに、茅葺の家が一軒、古びた大和障子にお料理そば切うどん小川屋と書いてあるのがふと眼にとまつた。家のまわりは畠<sup>はた</sup>で、麦の青い上には雲雀<sup>ひばり</sup>がいい声で低くさえずつていた。

弥勒<sup>みろく</sup>には小川屋という料理屋があつて、学校の教員が宴会をしたり飲み食いに行つたりすることをかねて聞いていた。当分はその料理屋で賄いもしてくれるし、夜具も貸してくれるとも聞いた。そこにはお種<sup>たね</sup>というきれいな評判な娘もいるという。清

三はあたりに人がいなかつたのをさいわい、通りがかりの足をとどめて、低い垣から庭をのぞいてみた。庭には松が二三本、桜の葉になつたのが一二本、障子の黒いのがことにきわだつて眼についた。

垣の隅には椿と珊瑚樹との厚い緑の葉が日を受けていた。椿には花がまだ二つ三つ葉がくれに残つて見える。

このへんの名物だといいう赤城おろしも、四月にはいるとまつたくやんで、今は野も緑と黄と赤とで美しくいろいろどられた。麦の畠を貫いた細い道は、向こうに見えるひよろ長い榛の並木に通じて、その間から役場らしい藁葺屋根が水彩画のように見渡される。

応接室は井泉村役場の応接室よりもきれいであつた。そこから

は吏員の事務をとつてゐる室が硝子窓をとおしてはつきりと見えた。卓の上には戸籍台帳やら、収税帳やら、願届けを一まとめにした書類やらが秩序よく置かれて、頭を分けたやせぎすの二十四五の男と五十ぐらいの頭のはげた爺どが何かせつせと書いていた。助役らしい鬚の生えた中年者と土地の勢力家らしい肥つた百姓とがしきりに何か笑いながら話していたが、おりおり煙管をトントンとたたく。

村長は四十五ぐらいで、痘痕面で、頭はなかば白かつた。こあたりによく見るタイプで、言葉には時々武州訛が交る。

井泉村の助役の手紙を読んで、巻き返して、「私は視学からも助役からもそういう話は聞かなかつたが……」と頭を傾けた時は、

清三は不思議な思いにうたれた。なんだか狐きつねにつままれたような気がした。視学も岸野もあまり無責任に過ぎるとも思った。

村長はしばらく考えていたが、やがて、「それじゃもう内々転任の話もきまつたのかもしない。今いる平田という教員が評判が悪いので、変えるつていう話はちょっと聞いたことがあるから」と言つて、

「一つ学校に行つて、校長に会つて聞いてみるほうがいい！」

おうへい 横柄な口のききかたがまずわかいかれの矜持プライドを傷つけた。

何もできもしない百姓の分際ぶんざいで、金があるからといつて、生意気な奴だと思った。初めての教員、初めての世間への前途かどで、それがこうした冷淡れいだんな幕で開かれようとはかれは思いもかけなか

つた。

一時間後、かれは学校に行つて、校長に会つた。授業中なので、三十分ほど教員室で待つた。教員室には掛け図や大きな算盤や書籍や植物標本やいろいろなものが散らばつて乱れていた。  
女教員が一人隅のほうで何かせつせと調べ物をしていたが、はじめちよつと挨拶したぎりで、言葉もかけてくれなかつた。やがてベルが鳴る、長い廊下を生徒はぞろぞろと整列してきて、「別れ」をやるとそのまま、蜘蛛の子を散らしたように広場に散つた。今までの静謐とは打つて変わつて、足音、号令の音、散らばつた生徒の騒ぐ音が校内に満ち渡つた。

校長の背広には白いチヨークがついていた。顔の長い、背の高  
せびろ

い、どつちかといえばやせたほうの体格で、師範校出の特色の一  
種の「氣取り」がその態度にありありと見えた。知らぬふりをし  
たのか、それともほんとうに知らぬのか、清三にはその時の校長  
の心がわからなかつた。

校長はこんなことを言つた。

「ちつとも知りません……しかし加藤さんがそう言つて、岸野さ  
んもご存じなら、いざれなんとか命令があるでしょう。少し待つ  
ていていただきたいのですが……」

時宜によればすぐにも使者をやつて、よく聞きただしてみても  
いいから、今夜一晩は不自由でもあろうが役場に宿つてくれとの  
ことであつた。教員室には、教員が出たりはいつたりしていた。

五十ぐらいの平田という老朽ろうきゅうと若い背広の閔せきという准教員じゅんぎんとが廊下の柱の所に立つて、久しく何事をか語つていた。二人は時々こつちを見た。

ベルがまた鳴った。校長も教員もみな出て行つた。生徒はぞろぞろと潮うしおのように集まつてはいつて來た。女教員は教員室を出ようとして、じろりと清三を見て行つた。

唱歌の時間であるとみえて、講堂に生徒が集まつて、やがてゆるやかなオルガンの音が静かな校内に聞こえ出した。

村役場の一<sup>ひとよ</sup>夜はさびしかつた。小使の室<sup>へや</sup>にかれは寝ることになつた。日のくれぐれに、勝手口から井戸のそばに出て、平野をめぐる遠い山々のくらくなるのを眺めていると、身も引き入れられるような哀愁<sup>かなしみ</sup>がそれとなく心をおそつて来る。父母<sup>ちちはは</sup>のことがひしひしと思い出された。幼いころは兄弟も多かつた。そのころ父は足利<sup>あしかが</sup>で呉服屋をしていた。財産もかなり豊かであつた。七歳の時没落して熊谷<sup>くまがや</sup>に来た時のこととかればおぼろげながら覚えている。母親の泣いたのを不思議に思つたのも覚えている。今は——兄も弟も死んでしまつて自分一人になつた今は、家庭の関係についても、他の学友のような自由なことはいつていられない。人のいい父親と弱々しく情愛の深い母親とを持つたこの身は、生

まねながらにしてすでに薄<sup>はつこ</sup>俸<sup>こう</sup>の運命を得てきたのである。こう思<sup>う</sup>と、例のセンチメンタルな感情が激<sup>はげ</sup>しく胸に迫<sup>せま</sup>ってきて、涙<sup>せま</sup>がおのずと押<sup>お</sup>すように出る。

近い森や道や畠は名残りなく暮れても、遠い山々の頂<sup>いただき</sup>はまだ明<sup>あ</sup>るかつた。浅間の煙<sup>はけ</sup>が刷毛<sup>はけ</sup>ではいたように夕焼けの空になびいて、その末<sup>し</sup>がぼかしたように広くひろがり渡つた。蛙<sup>かわづ</sup>の声がそこにもここにも聞こえ出した。

ところどころの農家<sup>ともしび</sup>に灯<sup>ともしび</sup>がとぼつて、唄<sup>うた</sup>をうたつて行く声がどこか遠くで聞こえる。

かれはじつと立ちつくしていた。

ふと前の榛<sup>はん</sup>の並木のあたりに、人の来る氣勢<sup>けはい</sup>がしたと思うと、

華<sup>はな</sup>やかに笑う声がして、足音がばたばたと聞こえる。小川屋に弁当と夜具を取りに行つた小使が帰つて来たのだと思つていると、夕闇の中から大きな夜具を被<sup>かず</sup>いた黒い影が浮き出すように動いて来て、そのあとに女らしい影がちよこちよこついて來た。

小使は室のうちにドサリと夜具を置いて、さも重かつたといふように呼吸をついたが、昼間掃除しておいた三分心<sup>ぶじん</sup>の洋燈<sup>らんぱ</sup>に火をとぼした。あたりは急に明るくなつた。

「ご苦労でした」

こう言つて、清三が戸内<sup>こない</sup>にはいつて來た。

このとき、清三はそこに立つている娘の色白の顔を見た。娘は携<sup>たずさ</sup>えて來た弁当をそこに置いて、急に明るくなつた一室をまぶし

そうに見渡した。

「お種坊たねぼう、遊んでいくが好えいや」

小使はこんなことを言つた。娘はにこにこと笑つてみせた。評判な美しさというほどでもないが、眉まゆのところに人に好かれるようになえん艶なところがあつて、豊かな肉づきが頬ほおにも腕にもあらわに見えた。

「お母おも、加減あんべいが悪いって聞いたが、どうだい。もういいかな」

「ああ」

「風邪かぜだんべい」

「寒おもい思いをしてはいけないいけないって言つても、仮寝うたたねなぞしているもんだから……風邪かぜを引いちやつたんさ……」

「お母<sup>つかあ</sup>、いい気だからなア」

「ほんとうに困るよ」

「でも、お種坊はかせぎものだから、お母<sup>つかあ</sup>、樂ができらアな」  
娘は黙つて笑つた。

しばらくして、

「お客様の弁当は、明日<sup>あした</sup>も持つて来るんだんべいか」

「そうよ」

「それじや、お休み」

と娘は帰りかけると、

「まア、いいじやねえか、遊んでいけやな」

「遊んでなんかいられねえ、これから跡仕舞<sup>あとじま</sup>いしねきやなんねえ

……それだらお休み」と出て行つてしまふ。

弁当には玉子焼きと漬け物つ ものとが入れられてあつた。小使は出流でながでの温ぬるい茶をついでくれた。やがて爺じじいはわきに行つて、内職うちの藁わらを打ち始めた。夜はしんとしている。蛙の声に家も身も埋めらるるようく感じた。かれは想像にもつかれ、さりとて読むべき雑誌も持つて来なかつたので、包みの中から洋紙を横綴よことじにした手帳を出して、鉛筆で日記をつけ出した。

四月二十五日と前の日に続けて書いて、ふと思いついて鉛筆を倒さかさにして、ゴムでゴシゴシ消した。今日は少なくとも一生のうちで新しい生活にはいる記念の第一日である。小説ならば、編パアトが改まるところである。で、かれは貞ペジの裏を半分白いままにしておい

て、次の頁から新たに書き始めた。

四月二十五日、（弥勒にて）……

一頁ほど簡単に書き終わつて、ついでに今日の費用を数えてみた。新郷で買った天狗煙草が十錢、途中の車代が三十錢、清心丹が五錢、学校で取つた弁当が四錢五厘、合計四十九錢五厘、持つて來た一円二十錢のうちから差引き七十錢五厘がまだ蝦蟇口の中に残つていた。続いて今度ここに来るについての費用を計算してみた。

25.0..... 認印

22.0..... 名刺

3.5	歯磨および楊子
8.5	筆一本
14.0	硯
1,15.0	帽子
1,75.0	羽織
30.0	くの帯
14.5	下駄
—	
4,07.5	

、)れに前の七十錢五厘を加えて総計四円七八錢也と書いて、

そしてこの金をつくるについて、父母の苦心したことを思い出した。わずか一円の金すら容易にできない家庭の憐むべきをつくづく味気なく思つた。

夜着の襟は汚れていた。旅のゆるやかな悲哀がスウイトな涙を誘つた。かれはいつかかすかに鼾をたてていた。

翌日は学校の予算表の筆記を頼まれて、役場で一日を暮らした。それがすんでから、父母に手紙を書いて出した。

夕暮れに校長の家から使いがある。

校長の家は遠くはなかつた。麦の青い畠のところどころに黄いろい菜の花の一畦が交つた。茅葺屋根の一軒立ちではあるが、つくりはすべて百姓家の構えで、広い入り口、六畳と八畳と続い

た室<sup>へや</sup>の前に小さな庭があるばかりで、細君<sup>ほそ</sup>のだらしのない姿も、子供の泣き顔も、茶の間の長火鉢も畳<sup>よこ</sup>の汚れて破れたのも、表から来る人の眼にみなうつった。校長の室<sup>へや</sup>には学校管理法や心理学や教育時論の赤い表紙などが見えた。

「君にはほんとうに氣の毒でした。実はまだ手筈<sup>てはず</sup>だけで、表<sup>おもてむ</sup>向<sup>むか</sup>きにしなかつたものだからねえ……」

と言つて、細君<sup>ほそ</sup>の運んで来た茶を一杯ついで出して、「君もご存じかもしれないが、平田というあの年の老<sup>よ</sup>つた教員、あれがもう老朽でしかたがないから、転校か免職かさせようと言つていたところに、ちょうど加藤さんからそういう話があるツて岸野君が言うもんだから、それでお頼みしようツていうことにしたのでし

た。ところが少し貴君あなたのおいでが早かつたものだから……」  
言いかけて笑った。

「そうでしたか、少しも知りませんものでしたから……」

「それはそうですとも、貴君あなたは知るわけはない。岸野さんがいま  
少し注意してくれるといいんですけど、あの人はああいうふう  
で、何事にも無頓着むとんじやくですからな」

「それじゃその教員きょういんがいたんですね？」

「ええ」

「それじゃまだ知らずにおりましたのですか」

「内々は知つてるでしようけれど……表向きはまだ発表してない  
んです。二三日のうちにはすっかり村会で決めてしまうつもりで

すから、来週からは出ていただけますか……」こう言つて、少しどぎれて、

「私のほうの学校はみんないい方ばかりで、万事すべて円くいつていますから、始めて来た方にも勤めいいです。貴下も一つ大いに奮発していただきたい。俸給もそのうちにはだんだんどうかなりますから……」

煙草たばこを一服吸つてトンとたたいて、

「貴下はまだ正教員の免状は持つていませんね？」

「ええ」

「じゃ一つ、取つておくほうが、万事都合つごうがいいですな。中学の証明があれば、実科を少しやればわけはありやしないから……教

授法はちつとは読みましたか」

「少しは読んでみましたがけれど、どうもおもしろくなくつて困るんです」

「どうも教授法も実地に当たつてみなくつてはおもしろくないものですが。やつてみると、これでなかなか味が出てくるもんですがな」

学校教授法の実験に興味きょうみを持つ人間と、詩や歌にあくがれている青年せいねんとがこうして長く相対あいたいしてすわつた。点心ちやうけには大きい塩煎餅しおせんべいが五六枚盆にのせて出された。校長の細君あおじろうは挨拶あいさつをしながら、顔の蒼白あおじろい、鼻の高い、眉と眉との間の遠い客の姿を見て、弱々しい人だと思った。次の間までは話をしている間、今

年生まれた子がしつきりなしに泣いたが、しかし主はそれをやかましいとも言わなかつた。

襷袴むつきがあたりに散らばつて、火鉢の鉄瓶てつびんはカラカラ煮え立つていた。

中学の話が出る。師範校の話が出る。教授上の経験談が出る。

同僚になる人々の噂うわさが出る。清三は思わず興に乗つて、理想めいたことやら、家庭のための犠牲ということやらその他いろいろのことを持ち明けて語つて、一生小学校の教員をする気はないというようなことまでほのめかした。清三は昨日学校で会つた時に似ず、この校長の存外性質のよさそうなところのあるのを発見した。

校長の語るところによると、この三田ヶ谷という地は村長や子

弟の父兄の権力の強いところで、その楫かじを取つて行くのがなかなかむずかしいそうである。それに人気もあまりよいほうではない、発戸ほつと、上村君かみむらぎみ、下村君しもむらぎみなどいう利根川寄りの村落では、青縞まきの賃機ちんばたが盛んで、若い男や女が出はいりするので、風俗もどうも悪い。七八歳の子供が卑猥ひわいきわまる唄うたなどを覚えて来てそれを平氣で学校でうたつている。

「私がここに来てから、もう三年になりますが、その時分は生徒じぶんの風儀はそれはずいぶんひどかつたものですよ。初めは私もこんなところにはとてもつとまらないと思つたくらいでしたよ。今では、それでもだいぶよくなつたがな」と校長は語つた。

帰る時に、

「明日は土曜日ですから、日曜にかけて一度行田<sup>ぎょうだ</sup>に帰つて来た  
いと思いますが、おさしつかえはないでしようか?」

かれはこうたずねた。

「ようござんすとも……それでは来週から勤めていただくようにな  
る……」

その夜はやはり役場の小使室<sup>べや</sup>に寝た。

## 四

朝起きると春雨<sup>はるさめ</sup>がしとしと降つていた。

ぬれた麦の緑と菜の花の黄いろとはいつもよりはきわだつて美

しく野をいろどつた。村の道を蛇の目傘が一つ通つて行つた。

清三は八時過ぎに、番傘を借りて雨をついて出た。それには

三田ヶ谷村役場と黒々と大きく書きつけてあつた。

小川屋のかたわらの川縁のかわべりの繁みからは、雨滴あまだれがはらはらと傘の上に乱れ落ちた。鏽びた黒い水には蠅蠅いもりが赤い腹を見せている。ふと街道の取つきの家から、小川屋のお種という色白娘が、白い手拭いで髪をおおつたまま、傘もささずに、大きな雨滴あまだれの落ちる木陰を急いで此方にやつて來たが、二三歩前で、清三と顔見合させて、ちよつと会釈して笑顔を見せて通り過ぎた。

学校はまだ授業が始まらぬので、門から下駄箱の見えるほとりには、生徒の傘がぞろぞろと続いた。男生徒も女生徒も多くは包

みを腰のところにしょつて尻をからげて歩いて来る。雨の降る中をぬれそぼちながら、傘を車の輪のように地上に回して来る頑童もあれば、傘の柄を頸のところで押さえて、編棒あみぼうと毛糸とを動かして歩いて来る十二三の娘もあつた。この生徒らを来週からは自分が教えるのだと思つて、清三はその前を通つた。

明方あけがたから降り出した雨なので、路みちはまだそうたいして悪くなかつた。車や馬の通つたところはグシャグシャしているが、拾えば泥濘どろにならぬところがいくらもある。路の縁ふちの乾いた土には雨がまだわずかにしみ込んだばかりであつた。

井泉村の役場に助役を訪ねてみたが、まだ出勤していなかつた。路に沿つた長い汚ない溝どぶには、藻もや藺いや葦あしの新芽や沢瀉おもだかがごた

ごたと生えて、淡竹の雨をおびた藪がその上におおいかぶさつた。  
雨滴あまだれがばらばら落ちた。

路のほとりに軒の傾かたむいた小さな百姓家があつて、壁には鋤や犁や古い蓑などがかけてある。髪の乱れた肥つた鳴かかあが柱によりかかつて、今年生まれた赤児あかごに乳を飲ませていると、亭主らしい鬚ひ面げづらの四十男は、雨に仕事のできぬのを退屈そうに、手を伸ばして大きなあくびをしていた。

鎮守ちんじゆの八幡宮の茅葺かやぶきの古い社殿は街道から見えるところにあつた。華表とりいのかたわらには社殿修繕の寄付金の姓名と額たかとが古く新しく並べて書いてある。周囲しゆういの櫻けやきの大木にはもう新芽がきざし始めた。賽錢箱さいせんの前には、額ひたい髪がみを手拭いで卷いた子傅こもり

が二人、子守歌を調子よくうたつていた。

昨日の売れ残りのふかし甘薯いもがまずそうに並べてある店もあつた。雨は細く糸のようにその低ひくき軒をかすめた。

畑にはようやく芽を出しかけた桑、眼もさめるように黄いろい菜の花、すみれげんげや董わや草の生えている畔あぜ、遠くに杉や檜かしの森にかこまれた豪農の白壁しらかべも見える。

青縞を織る音がところどころに聞こえる。チャンカラチャンカラと忙しそうな調子がたえず響いて来る。時にはあたりにそれらしい人家も見えないのに、どこで織つてるのだろうと思わせることがある。唄うたが若々しい調子で聞こえて來ることもある。

発戸河岸ほつとかしのほうにわかれ路みちの角かどには、こちらで評判だという

餃餄屋うどんがあつた。朝から大釜おおがまには湯がたぎつて、主らしい男が、大きなべ板にうどん粉をなすつて、せつせと玉を伸ばしていた。赤い櫻たすきをかけた若い女中が馴染なじみらしい百姓と笑つて話をしていた。路の曲がつたところに、古い石が立ててある。維新前からある境界石で、「これより羽生領はにゅうりょう」としてある。

ひよろ長い榛はんの片側並木が田圃たんばの間に一しきり長く続く。それに沿つて細い川が流れて萌え出した水草のかげを小魚こうおがちよろちよろ泳いでいる。羽生から大越おおごえに通う乗合馬車が泥濘どろを飛ばして通つて行つた。

来る時には、路傍みちばたのこけら葺ぶきの汚ないだるま屋の二階の屋根に、襟垢えりあかのついた蒲団ふとんが昼の日のどかな光に干されて、下で

は蒼白い顔をした女がせつせと張り物はものをしていたが、今日は障子がびっしやりと閉じられて、日当たりの悪いところには青ごけの生えたのが汚なく眼についた。

だんだん道が悪くなつて來た。拾つて歩いてもピシヤピシヤしないようなところはもうなくなつた。足の踵かかとを離さないようにして歩いても、すりへらした駒下駄からはたえずハネがあがつた。風が出て雨も横しぶきになつて袖そでもぬれてしまつた。

羽生の町はさびしかつた。時々番傘や蛇の目傘が通るばかり、庇ひさしの長く出た広い通りは森閑しんかんとしている。郵便局の前には為替かわせを受け取りに来た若い女が立つていて、呉服屋の店には番頭と小僧うんざとがたまつて話をしているし、足袋屋たびやの店には青縞と雲

斎織りとが積み重ねられたなかで、職人がせつせと足袋たびを縫つていた。新式に硝子戸がらすの店を造つた唐物屋とうぶつやの前には、自転車が一個、なかばは軒の雨滴あまだれにぬれながら置かれてある。

町の四辻には半鐘台はんしょうだいが高く立つた。

そこから行田道ぎょうだみちはわかれている。煙草屋たばこや、うどん屋、医師いしやの大きな玄関、堀へいの上にそびえている形のおもしろい松、吹井ふきいが清い水をふいている豪家の前を向こうに出ると、草の生えた溝みぞがつて、白いペンキのはげた門に、羽生分署はという札がかかるつている。巡査が一人、剣をじやらつかせて、雨の降りしきる中を出て來た。

それからまた裏町の人家が続いた。多くはこけら葺ぶきの古い貧し

い家並みである。馬車屋の前に、乗合馬車が一台あつて、もう出るとみえて、客が二三人乗り込んでいた。清三は立ちどまつて聞いたが、あいにくいつぱいで乗せてもらう余地がなかつた。

清三の姿はなおしばらくその裏町の古い家並みの間に見えていたが、ふと、とある小さな家の大和障子やまとしようじを開けてはいつて行つた。中には中年のかみさんがいた。

「下駄を一つ貸していただきたいんですが……、弥勒みろくから雨に降られてへいこうしてしまいました」

「お安いご用ですとも」

かみさんは足駄あしだを出してくれた。

足駄あしだの歯はすべて曲がつて、歩きにくいくこと一通りでなかつた。

駒下駄よりはいいが、ハネはやつぱり少しづつあがつた。

かれはついに新郷から十五銭で車に乗つた。

## 五

家は行田町の大通りから、昔の城址のほうに行く横町につた。角に柳の湯という湯屋があつて、それと対して、きれいな女中のいる料理屋の入り口が見える。棟割長屋を一軒仕切つたといふような軒の低い家で、風雨にさらされて黒くなつた大和障子に糸のような細い雨がはすに降りかかつた。隣には蚕の仲買ひをする人が住んでいて、その時節になると、狭い座敷から台

所、茶の間、入り口まで、白い繭でいっぱいになつて、朝から晩までごたごたと人が出はいりするのが例であるが、今は建てつけの悪い障子がびつしやりと閉しまつて、あたりがしんとしていた。

清三は大和障子をがらりとあけて中にはいつた。

年のころ四十ぐらいの品のいい丸髻に結つた母親が、裁物たちもの板いたを前に、あたりに鉢はさみ、糸巻き、針箱などを散らかして、せつせと賃仕事をしていたが、障子があいて、子息の顔がそこにあらわれると、

「まあ、清三かい」

と呼んで立つて來た。

「まあ、雨が降つてたいへんだつたねえ！」

ぬれそぼちた袖やら、はねのあがつた袴<sup>はかま</sup>などをすぐ見てとつた  
が、言葉をついで、

「あいにくだつたねえ、お前。昨日の工合<sup>くわい</sup>では、こんな天気に  
なろうとは思わなかつたのに……ずっと歩いて來たのかえ」

「歩いて來ようと思つたけれど、新郷<sup>しんごう</sup>に安いかえり車があつた

から乗つて來た」

見なれぬ足駄<sup>あしだ</sup>をはいているのを見て、

「どこから借りて來たえ、足駄<sup>あしだ</sup>を？」

「峰田<sup>みねだ</sup>で」

「そうかえ、峰田で借りて來たのかえ……。ほんとうにたいへん  
だつたねえ」こう言つて、雑巾<sup>ぞうきん</sup>を勝手から持つて來ようとする

と、

「雑巾ではだめだよ。母さん。バケツに水を汲んでくださいな」

おつか

「そんなに汚れているかえ」

と言いながら勝手からバケツに水を半分ほど汲んで来る。

乾いた手拭てぬぐいをもそこに出した。

清三はきれいに足を洗つて、手拭いで拭いて上にあがつた。母親はその間に、結城ゆうき縞じまの綿入れと、自分の紬つむぎの衣服きものを縫い直した羽織ははきとをそろえてそこに出して、脱いだ羽織と袴はかまとを手ばしこく衣紋えもん竹たけにかける。

二人はやがて長火鉢の前にすわつた。

「どうだつたえ？」

母親は鉄瓶<sup>てっぴん</sup>の下に火をあらけながら、心にかかるその様子<sup>ようす</sup>をきく。

かいつまんで清三が話すと、

「そうだつてねえ、手紙が今朝着いたよ。どうしてそんな不都合なことになつていただろうねえ」

「なあに、少し早く行き過ぎたのさ」

「それで、話はどうきまつたえ？」

「来週から出ることになつた」

「それはよかつたねえ」

喜びの色が母親の顔にのぼつた。

それからそれへと話は続いた。校長さんはどういう人だの、や

さしそうな人かどうかの、弥勒みろくという所はどんなところかの、下宿するよいところがあつたかのと、いろいろなことを持ち出して母親は聞いた。清三はいちいちそれを話して聞かせた。

「お父さんとうつは？」

しばらくして、清三がこうきいた。

「ちよつと下忍しもおしまで行つて来るツて出かけて行つたよ。どうしても少しお錢あしをこしらえて来なくつてはツてね……。雨が降るから、明日あしたにしたらいいだろうと言つたんだけれど……」

清三は黙つてしまつた。貧しい自分の家のことがいまさらに頭あ脳たまにくり返される。父親の働きのないことがはがゆいようにも思われるが、いっぽうにはまた、好人物こうじんぶつで、善人で、人にだまさ

れやすい弱い鈍い性質を持つていながら、贋物の書画を人には  
めることを職業にしているということにはなはだしく不快を感じ  
た。正直なかれの心には、父親の職業は人間のすべき正業ではな  
いようにつねに考えられているのである。

だまされさえしなければ、今でも相応な呉服屋の店を持つて  
いられたのである。こう思うと、何も知らぬ母親に対する同情と  
ともに、正業でない職業とはいながら、こうした雨の降る日に、  
わずか五十銭か一円の錢で、一里もあるところに出かけて行く老  
いた父親を氣の毒に思つた。

やがて鉄瓶がチンチン音を立て始めた。

母親は古い茶箪笥から茶のはいつた罐と急須とを取つた。

茶はもう粉になつていた。火鉢の抽斗しの紙袋には塩煎餅が二枚しか残つていなかつた。

清三は夕暮れ近くまで、母親の裁縫するかたわらの暗い窓の下で、熊谷くまがやにいる同窓の友に手紙を書いたり、新聞を読んだりしてゐた。友の手紙には恋のことやら詩のことやら明星派の歌のことやら我ながら若々しいと思うようなことを罰紙に二枚も三枚も書いた。

四時ごろから雨ははれた。路はまだグシャグシャしている。父親が不成功で帰つて來たので、家庭の空気がなんとなく重々しく、親子三人黙つて夕飯を食つていると、「ご免なさい」という声を先にたてて、建てつけの悪い大和障子やまとしようじをあけようとする人があ

る。

母親が立つて行つて、

「まア……さあ、どうぞ」

「いいえ、ちょっと、湯に参りましたのですが、帰りにねえ、貴女なた、お宅へあがつて、今日は土曜日だから、清三さんがお帰りになつたかどうか郁治いくじがうかがつて来いと申しますものですから：：いつもご無沙汰ばかりいたしておりますねえ、まアほんとうに」

「まア、どうぞおかげくださいまし……、おや雪さんもごいっしょに、……さア、雪さん、こつちにおはいりなさいましよ」

と女同士はしきりにしゃべりたてる。郁治の妹の雪子はやせぎ

すなすらりとした田舎にはめずらしい娘だが、湯上がりの薄く化粧した白い顔を夕暮れの暗くなりかけた空気にくつきりと浮き出すように見せて、ぬれ手拭いに石鹼箱を包んだのを持つて立っていた。

「さア、こんなところですけど……」

「いいえ、もうそうはいたしてはおりませんから」

「それでもまあ、ちよつとおかけなさいまし」

この会話にそれと知った清三は、箸を捨てて立つてそこに出で来た。母親どもの挨拶し合っている向こうに雪子の立つているのをちよつと見て、すぐ眼をそらした。

郁治の母親は清三の顔を見て、

「お帰りになりましたね、郁治が待つておりますから……」

「今夜あがろうと思つていました」

「それじゃ、どうぞお遊びにおいでくださいまし、毎日行つたり来たりして、いた方が急においでにならなくなると、あれも淋しくつてしまたがないとみえましてね……それに、ほかに仲のいいお友だちもないものですから……」

郁治の母親はやがて帰つて行く。清三も母親もふたたび茶湯ちゃぶだ台に向かつた。親子はやはり黙つて夕飯を食つた。

湯を飲む時、母親は急に、

「雪さん、たいへんきれいになんなすつたな！」

とだれに向かつて言うともなく言つた。けれどだれもそれに調

子を合わせるものもなかつた。父親の茶漬けをかき込む音がさらさらと聞こえた。清三は沢庵たくあんをガリガリ食つた。日は暮れかかかる。雨はまた降り出した。

## 六

加藤の家は五町と隔たつておらなかつた。公園道のなかばかり左に折れて、裏町の間を少し行くと、やがていつぽう麦畑むぎばいつぽう垣根かきねになつて、夏は紅くれないと白の木槿もくげが咲いたり、胡瓜きゅうりや南瓜とうなすが生つたりした。緑陰りょくいんの重なつた夕闇ほたるに螢かさの飛ぶのを、雪子やしげ子と追い回したことあれば、寒い冬の月夜を歌留かるた多にふ

かして、からころと跔音<sup>あしおと</sup>高く帰つて來たこともあつた。細い巷<sup>こ</sup>  
路<sup>うじ</sup>の杉垣<sup>すぎ垣</sup>の奥の門と瓦屋根、それはかれにとつてまことに少なか  
らぬ追憶<sup>おもいで</sup>がある。

今日は桜の葉をとおして洋燈<sup>らんぱ</sup>の光がキラキラと雨にぬれて光つ  
ていた。雪子の色の白いとりすました顔や、繁子のあどけなくに  
こにこと笑つて迎えるさまや、晩酌に酔つて機嫌よく話しかける  
父親の様子<sup>ようす</sup>などがまだ訪問せぬうちからはつきりと目に見えるよ  
うな気がする。笑い声がいつも絶えぬ平和な友の家庭をうらやま  
しく思つたことも一度や二度ではなかつた。

郡視学といえба、田舎<sup>いなか</sup>ではずいぶんこわ持<sup>も</sup>てのするほうで、む  
ずかしい、理屈<sup>ほい</sup>ぽい、とりつきにくい質<sup>たち</sup>のものが多いが、郁治の

父親は、物のわかりが早くつて、優しくつて、親切で、そして口をきくほうにかけてもかなり重味おもみがあると人から思われていた。

鬚ひげはなかば白く、髪にもチラチラ交まじつてゐるが、気はどちらかといえば若いほうで、青年を相手に教育上の議論などをあかずにして聞かせることもあつた。清三と郁治と話している室へやに来ては、二人を相手にいろいろなことを語つた。

門を開けると、ベルがチリチリンと鳴つた。踏み石をつたつて、入り口の格子戸の前に立つと、洋燈らんぱを持つて迎えに出たしげ子の笑顔が浮き出すように闇の中にいる清三の眼にうつつた。

「林さん？」

と、のぞくよにして見て、

「兄さん、林さん」

と高い無邪気な声をたてる。

父親は今日熊谷に行つて不在であつた。子供がいないので、室がきれいに片づいている。掃除も行き届いて、茶の間の洋燈らんぱも明るかつた。母親は長火鉢の前に、晴れやかな顔をしてすわつていた。雪子は勝手で跡仕舞あとじまいをしていたが、ちょうどそれが終わつたので、白い前掛けで手を拭き拭き茶の間に來た。

挨拶をしていると、郁治は奥から出て来て、清三をそのまま自分の書斎につれて行つた。

書斎は四畳半であつた。きり桐の古い本箱が積み重ねられて、綱こうか鑑んいちろく易知錄とうそうはつかぶん、史記、五經、唐宋八家文などと書いた白い紙がそ

こに張られてあつた、三尺の半床の草雲の蘭の幅のかかつているのが洋燈の遠い光におぼろげに見える。洋燈の載つた朴の大きな机の上には、明星、文芸俱楽部、万葉集、一葉全集などが乱雑に散らばつて置かれてある。

一年も会わなかつたようにして、二人は熱心に話した。いろいろな話が絶え間なく二人の口から出る。

「君はどう決まつた？」

しばらくして清三しほんがたずねた。

「来年の春、高等師範しほんを受けてみることにした。それまでは、ただおつてもしかたがないからここの中学校に教員に出ていて、そこで勉強しようとおもう……」

「熊谷の小畑からもそう言つて來たよ。やつぱり高師を受けて  
みるツて」

「そう、君のところにも言つて來たかえ、僕のところにも言つて  
來たよ」

「小島や杉谷はもう東京に行つたツてねえ」

「そう書いてあつたね」

「どこにはいるつもりだらう?」

「小島は第一を志願するらしい」

「杉谷は?」

「先生はどうするんだか……どうせ、先生は学費になんか困らん  
のだから、どうでも好きにできるだらう」

「この町からも東京に行くものはあるかね？」

「そう」と郁治は考えて「佐藤は行くようなことを言つていたよ」

「どういう方面に？」

「工業学校にはいるつもりらしい」

同窓に関する話がつきずに出た。清三の身にしては、将来の方針を定めて、てんでに出たい方面に出て行く友だちがこのうえもなくうらやましかつた。中学校にいるうちから、卒業してあとの境遇をあらかじめ想像せぬでもなかつたが、その時はまたその時で、思わぬ運が思わぬところから向いて来ないとも限らないと、しいて心を安んじていた。けれどそれは空想であつた。家庭の餓うえは日に日にその身を実際生活に近づけて行つた。

かれはまた母親から優しい温かい血をうけついでいた。幼い時  
 から小波のおじさんのお伽噺を読み、小説や歌や俳句に若  
 い思いをわかしていた。体の発達するにつれて、心は燃えたり冷  
 えたりした。町の若い娘たちの眼色をも読み得るようにもなつた。  
 恋の味もいつか覚えた。あるデザイアに促されて、人知れず汚な  
 い業をすることもあつた。世間は自分の前におもしろい楽しい舞  
 台をひろげていると思うこともあれば、汚ない醜い近づくべから  
 ざる現象を示していると思うこともある。自己の満しがたい欲望  
 と美しい花のような世界といかになり行くかを知らぬ自己の将来  
 を考える時は、いつも暗いわびしいたえがたい心になつた。

熊谷にいる友人の恋の話からArtの君の話が出る。

「僕は苦しくつてしかたがない」

「どうかする方法がありそうなもんだねえ」

二人はこんなことを言つた。

「昨日公園で会ったんさ。ちょっと浦和から帰つて来たんだツて、先生、いたずらに肥えてるツていう形だツた」

郁治はこう言つて笑つた。

「いたずらに肥えてるはいいねえ」

清三も笑つた。

「君のシスターが友だちだし、先生のエルダアブラザアもいるんだし、どうにか方法がありそうなもんだねえ」

「まあ、放つておいてくれ、考えると苦しくなる」

胸にひそかに恋を包める青年の苦しさというような顔を郁治はして見せた。前にも言つたように、郁治は好男子ではなかつた。男らしいきつぱりとしたところはあるが、体格の大きい、肩の怒つた、眼の鋭い、頬骨の出たところなど、女に好かれるような点はなかつた。

若い者の苦しむような煩悶はんもんはかれの胸にもあつた。清三にくらべては、境遇もよかつた。家庭もよかつた。高等師範にはいれぬまでも、東京に行つて一二年は修業するほどの学費は出してやる気が父親にある。それに体格がいいだけに、思想も健全で、清三のようにセンチメンタルのところはない。清三が今度の弥勒みろく行きを、このうえもない絶望のように——田舎いなかに埋うずもれ出られな

くなる第一歩であるかのように言つたのを、「だツて、そんなことはありやしないよ、君、人間は境遇に支配されるということは、それはいくらかはあるには違いないが、どんな境遇からでも出ようと思えば、出て来られる」と言つたのでも、郁治の性格の一部はわかる。

その時、清三は、

「君はそういうけれど、それは境遇の束縛の恐ろしいことを君が知らないからだよ、つまり君の家庭の幸福から出た言葉だよ」

「そんなことはないよ」

「いや、僕はそう思うねえ、僕はこれつきり埋れてしまうような気がしてならないよ」

「僕はまた、かりに一歩譲つて、人間がそういう種類の動物であると仮定しても、そういう消極的な考えには服従していられないねえ」

「じゃ、どんな境遇からでも、その人の考え方一つで抜け出しができるというんだねえ」

「そうさ」

「つまりそうすると、人間万能論だね、どんなことでもできないことはないという議論だね」

「君はじきそう極端に言うけれど、それはそこに取り除けもあるがね」

その時いつもの単純な理想論が出る。積極的な考えと消極的な

考えどがごたごたと混合して要領を得ずにおしまいになつた。

かれらの群れは学校にいるころから、文学上の議論や人生上の議論などをよくした。新派の和歌や俳句や抒情文などを作つて、互いに見せ合つたこともある。一人が仙骨せんこつという号をつけると、みな骨という字を用いた号をつけようじやないかという動議が出て、破骨はこつだの、洒骨しゃこつだの、露骨ろこつだの、天骨てんこつだの、古骨ここつだのというおもしろい号ができて、しばらくの間は手紙をやるにも、話をするにも、みんなその骨の字の号を使つた。古骨というのは、やはり郁治や清三と同じく三里の道を朝早く熊谷に通つた連中きざんの一人だが、そのほんとうの号は機山かよといつて、町でも屈指れんちゆくの青縞商あおじましようの息子で、平生へいぜいは角帶かくおびなどをしめて、つねに色

の白い顔に銀縁<sup>ぎんぶち</sup>の近眼鏡をかけていた。田舎<sup>いなか</sup>の青年に多く見る  
 ような非常に熱心な文学好きで、雑誌という雑誌はたいてい取つ  
 て、初めはいろいろな投書をして、自分の号の活字になるのを喜  
 んでいたが、近ごろではもう投書でもあるまいという気になつて、  
 每月の雑誌に出る小説や詩や歌の批評を縦横にそのなかまにして  
 聞かせるようになつた。それに、投書家交際<sup>づきあい</sup>をすることが好き  
 で、地方文壇の小さな雑誌の主筆とつねに手紙の往復をするので、  
 地方文壇<sup>じょうそく</sup>消息<sup>しよう</sup>には、武州行田<sup>ぶしゆうぎょうだ</sup>には石川機山<sup>ときさん</sup>ありなどとよ  
 く書かれてあつた。時の文壇に名のある作家も二三人は知つてい  
 た。

やはり骨の字の号をつけた一人で——これは文学などはあまり

わかるほうではなく、同じなかまにおつき合いにつけてもらつた組であるが、かれの兄が行田町に一つしかない印刷業をやつていて、その前を通ると、硝子戸の入り口に、行田印刷所と書いたインキに汚れた大きい招牌がかかつていて、旧式な手刷りが一台、例の大きなハネを巻き返し繰り返し動いているのが見える。広告の引き札や名刺が主で、時には郡役所警察署の簡単な報告などを頼まれて刷ることもあるが、それはきわめてまれであつた、棚に並べたケースの活字も少なかつた。文選も植字も印刷も主がみな一人でやつた。日曜日などにはその弟が汚れた筒袖を着て、手刷り台の前に立つて、刷れた紙を翻しているのをつねに見かけた。金持ちの息子と見て、その小遣いを見込んで、それでそそのか

したというわけでもあるまいが、この四月の月の初めに、機山がこの印刷所に遊びに来て、長い間その主人兄弟と話して行つたが、帰る時、「それじや毎月七八円ずつ損するつもりなら大丈夫だねえ。原稿料は出さなくつたつて書き手はたくさんあるし、それに二三十部は売れるアね」と言つた顔は、新しい計画に対する喜びに輝いていた。「行田文学」という小雑誌を起こすことについての相談がその連中の間に持ち上がつたのはこれからである。

機山がその相談の席で、

「それから、羽生の成願寺<sup>はにゅうじょうがんじ</sup>に山形古城がいるアねえ。あの人はあれでなかなか文壇には聞こえている名家で、新体詩じや有名な人だから、まず第一にあの人に賛成員になつてもらうんだね。

あの人から頼んでもらえれば、原杏花の原稿ももらえるよ」

「あの古城ツていう人はここの士族だツていうじやないか」

「そりだツて……。だから、賛成員にするのはわけはないさ」

ちようど清三が弥勒みろくに出るようになつた時なので、かれがまず  
その寺を訪問する責任を仲間から負わせられた。

その夜、「行田文学」の話が出ると、郁治が、

「寄つてみたかね？」

「あいにく、雨に会つちやツたものだから」

「そりだつたね」

「今度行つたら一つ寄つてみよう」

「そういえば、今日荻おぎゅう生君が羽生に行つたが会わなかつたかね

え

「荻生君が？」と清三は珍しがる。

荻生君というのは、やはりその仲間で、熊谷の郵便局に出ている同じ町の料理店の子息むすこさんである。今度羽生局に勤めることがなつて、今車で行くというところを郁治は町の角かどで会つた。

「これからずつと長く勤めているのかしら」

「もちろんそうだろう。羽生の局をやっているのは荻生君の親類だから」

「それはいいな」

「君の話相手ができて、いいと僕も思つたよ」

「でも、そんなに親しくはないけれど……」

「じき親しくなるよ、ああいうやさしい人だもの……」

そこにしげ子が「昼間こしらえたのですから、まずくなりましてけれど……」とお萩餅はぎを運んで、茶をさして來た。そのまま兄のそばにすわつて、無邪氣な口ぶりで二言三言話していたが、今度は姉の雪子が丈だけの高い姿をそこにあらわして、「兄さん、石川さんが」という。

やがて石川がはいつて來た。

座に清三がいるのを見て、

「君のところに今寄つて來たよ」

「そうか」

「こつちに來たツてマザアが言つたから」こう言つて石川はすわ

つて、「先生がうまくつとまりましたかね？」

清三は笑っている。

郁治は、「まだできるかできないか、やつてみないんだとさ」とそばから言う。

雪子もしげ子も石川の顔を見ると、挨拶あいさつしてすぐ引っ込んで行ってしまった。郁治と清三と話している間は、話に気がおけないので、よく長くそばにすわっているが、他人が交まじるとすましてしまうのがつねである。それほど清三と郁治とは交情なまかがよかつた。それほど清三との家庭とは親しかつた。郁治と清三との話しぶりも石川が来るとまるで変わつた。

「いよいよ来月の十五日から一号を出そうと思うんだがね」

「もうすっかり決まつたかえ」

「東京からも大家では麗水と天隨れいすい てんずいとが書いてくれるはずだ⋮⋮。それに地方からもだいぶ原稿が来るからだいじょうぶだらうと思うよ」

こう言つて、地方の小雑誌やら東京の文学雑誌やらを五六種出したが、岡山地方で発行する菊版二十四頁ページの「小文学」というのをとくに抜き出して、

「たいていこういうふうにしようと思うんだ。沢田（印刷所）にも相談してみたが、それがいいだろうと言うんだけど、どうも中の体裁ていさいはあまり感心しないから、組み方なんかは別にしようと思うんだがね」

「そうねえ、中はあまりきれいじゃないねえ」と二人は「小文学」を見ている。

「これはどうだろう」

と二段十八行二十四字詰めのを石川は見せた。

「そうねえ」

三人は数種の雑誌をひるがえしてみた。郁治の持つている雑誌もそこに参考に出した。洋燈らんぱは額ひたいを集めめた三人の青年とそこに乱雑に散らかつた雑誌とをくつきり照らした。

やがてその中の一つにあらかた定まる。き

石川の持つて来た雑誌の中に、「明星」の四月号があつた。清三はそれを手に取つて、初めは藤島武二や中沢弘光の木版画のあ

ざやかなのを見ていたが、やがて、晶子の歌に熱心に見入った。  
 新しい「明星派」の傾向が清三のかわいた胸にはさながら泉のように感じられた。

石川はそれを見て笑つて、

「もう見てる。違つたもんだね、<sup>すうはいしゃ</sup>崇拜者は！」

「だつて実際いいんだもの」

「何がいいんだか、国語は支離滅裂<sup>しりめつれつ</sup>、思想は新しいかも知れないが、わけのわからない文句ばかり集めて、それで歌になつてるつもりなんだから、明星派の人たちには閉口するよ」

いつかもやつた明星派是非論<sup>ぜひ</sup>、それを三人はまたくり返して論じた。

## 七

夜はもう十二時を過ぎた。雨滴<sup>あまだ</sup>の音はまだしている。時々ザツと降つて行く気勢<sup>けはい</sup>も聞き取られる。城址<sup>しろあと</sup>の沼のあたりで、むぐりの鳴く声が寂しく聞こえた。

一室には三つ床が敷いてあつた。小さい丸<sup>まる</sup>畠<sup>まげ</sup>とはげた頭とが床を並べてそこに寝ていた。母親はつい先ほどまで眼を覚ましていて、「明日眠いから早くおやすみよ」といく度となく言つた。「ランプを枕<sup>まくらもと</sup>元<sup>ねこ</sup>につけておいて、つい寝込んでしまうと危いから」とも忠告した。その母親も寝てしまつて、父親の鼾<sup>いびき</sup>に交つ

て、かすかな呼吸<sup>いき</sup>がスウスウ聞こえる。さらぬだに紙の笠<sup>かさ</sup>が古いのに、先ほど心<sup>しん</sup>が出過ぎたのを知らずにいたので、ホヤが半分ほど黒くなつて、光線がいやに赤く暗い。清三は借りて来た「明星」をほとんどわれを忘れるほど熱心に読み耽<sup>ふけ</sup>つた。

椿<sup>つばな</sup>それも梅<sup>うめ</sup>もさなりき白かりきわが罪問<sup>つみ</sup>はぬ色桃<sup>いろもも</sup>に見る

わが罪問<sup>つみ</sup>はぬ色桃<sup>いろもも</sup>に見る、桃に見る、あの赤い桃に見ると歌つた心<sup>こころ</sup>がしみじみと胸にしみた。不思議なようでもあるし、不自然のようにも考えられた。またこの不思議な不自然なところに新しい泉<sup>いのちの</sup>がこんこんとしてわいているようにも思われた。色桃<sup>いろもも</sup>に見ると四の句と五の句を分けたところに言うに言われぬ匂いがあるようにも思われた。かれは一首ごとに一頁<sup>ページ</sup>ごとに本を伏せて、わい

て来る思いを味わうべく余儀なくされた。この瞬間には昨夜役場に寝たわびしさも、弥勒から羽生まで雨にそぼぬれて来た辛さもまつたく忘れていた。ふと石川と今夜議論をしたことを思い出した。あんな粗い感情で文学などをやる気が知れぬと思つた。それに引きかえて、自分の感情のかくあざやかに新しい思潮に触れるのをわれとみずから感謝した。渋谷の淋しい奥に住んでいる詩人夫妻の侘び住居のことなどを想像してみた。なんだか悲しいようにもあれば、うらやましいようにもある。かれは歌を読むのをやめて、体裁から、組み方から、表紙の絵から、すべて新しい匂いに満たされたその雑誌にあこがれ渡つた。

時計が二時を打つても、かれはまだ床の中に眼を大きくあいて

いた。鼠の天井を渡る音が騒がしく聞こえた。

雨は降つたりはれたりしていた。人の心を他界に誘うようにザツとさびしく降つて通るかと思うと、びしょびしょと雨滴あまだれの音が軒の樋といをつたつて落ちた。

いつまであこがれていたツてしかたがない。「もう寝よう」と思つて、起き上がつて、暗い洋燈らんぷを手にして、父母の寝ている夜着のすそのところを通つて、廁かわやに行つた。手を洗おうとして雨戸を一枚あけると、縁側に置いた洋燈らんぷがくつきりと闇を照らして、ぬれた南天の葉に雨の降りかかるのが光つて見えた。

障子を閉てる音に母親が眼を覚まして、

「清三かえ？」

「ああ」

「まだ寝ずにいるのかえ」

「今、寝るところなんだ」

「早くお寝よ……明日が眠いよ」と言つて、寝返りをして、

「もう何時だえ」

「二時が今鳴つた」

「二時……もう夜が明けてしまふじゃないか、お寝よ」

「ああ」

で、蒲団ふとんの中にはいって、洋燈らんぱをフツと吹き消した。

翌日、午後一時ごろ、白縞しろじまの袴はかまを着けて、借りて来た足駄あしだを下げる清三と、なかばはげた、新紬しんつむぎの古ぼけた縞の羽織を着た父親とは、行田の町はずれをつれ立つて歩いて行つた。雨あがりの空はやや曇くもつて、時々思い出したように薄い日影がさした。

町と村との境をかぎつた川には、葦あしや蘭らんや白楊やなぎがもう青々と芽を出していたが、家鴨あひるが五六羽ギヤアギヤア鳴いて、番傘がさと蛇の目傘じやめがさとがその岸に並べて干されてあつた。町に買い物に来た近所の百姓は腰をかけてしきりに餌うどん飴とうを食つていた。

並んで歩く親子の後ろ姿は、低い庇ひさしや地焼じやきの瓦でふいた家根や、襁褓むつきを干しつらねた軒や石屋の工作場や、鍛冶屋かじやや、娘の青縞を

織つてゐる家や、子供の集まつてゐる駄菓子屋などの両側に連なつた間を静かに動いて行つた。と、向こうから頭に番台を載せて、上に小旗を無数にヒラヒラさしたあめ屋が太鼓をおもしろくたたきながらやつて来る。

父親は近在の新郷しんごうというところの豪家に二三日前書画の幅ふくを五六品預けて置いて來た。今日行つていくらかにして來なければならないと思つて、午後から弥勒みろくに行く清三といつしよに出かけて來たのである。

ここまで來る間に、父親は町の懇意な人に二人会つた。一人は氣の抜けないなかまの者で、「どこへ行くけえ？ そうけえ、新郷へ行くけえ、あそこはどうもな、吝嗇けちな人間ばかりで、ねつか

ららちがあかんな」と言つて声高くその中年の男は笑つた。一人は町の豪家の書画道楽の主人で、それが向こうから来ると、父親はていねいに挨拶あいさつをして立ちどまつた。「この間のは、どうも悪いようだねえ、どうもあやしい」と向こうから言うと、「いや、そんなことはございません。出所がしつかりしていますから、折り紙つきですから」と父親はしきりに弁解した。清三は五六間先からふり返つて見ると、父親がしきりに腰を低くして、頭を下げてゐる。そのはげた額を、薄い日影がテラテラ照らした。

加須かぞに行く街道と館林たてばやしに行く街道とが町のはずれで二つにわかれる。それから向こうはひろびろした野になつてゐる。野のところどころにはこんもりとした森があつて、その間に白堊しらかべの

土蔵などが見えている。まだ犁<sup>くわ</sup>を入れぬ田には、げんげが赤い毛<sup>も</sup>  
氈<sup>うせん</sup>を敷いたようにきれいに咲いた。商家の若旦那らしい男が平  
坦な街道に滑らかに自転車をきしらして來た。

路は野から村にはいつたり村から野に出たりした。樅<sup>かし</sup>の高い生  
垣<sup>けがき</sup>で家を囲んだ豪家もあれば、青苔<sup>あおづけ</sup>が汚なく生えた溝<sup>はみぞ</sup>を前に  
した荒壁の崩れかけた家もあつた。鶏の声がところどころにのど  
かに聞こえる。街道におろし菓子屋が荷<sup>おろ</sup>を下していると、髪をぼ  
うぼうさせた村の駄菓子屋のかみさんが、帯もしめずにして来て、  
豆菓子や鉄砲玉をあれのこれのと言つて入用だけ置かせている。  
新郷<sup>しんごう</sup>へのわかれ路が近くなつたころ、親子はこういう話をし  
た。

「今度はいつ来るな、お前」

「この次の土曜日には帰る」

「それまでに少しほどうかならんか」

「どうだかわからんけれど、月末だから少しほくれるだろうと思  
うがね」

「少しでも手伝つてもらうと助かるがな」

清三は返事をしなかつた。

やがて別れるところに来た。新郷へはこれから 一田圃ひとつたんば 越せば  
行ける。

「それじや氣をつけてな」

「ああ」

そこには庚申塚こうしんづかが立つていた。禿頭はげの父親が猫背ねこぜになつて歩いて行くのと、茶色の帽子に白縞しろじまの袴はかまをつけた清三の姿とは、長い間野の道に見えていた。

## 九

その夜は役場にとまつた。校長を訪ねたが不在であつた。かれは日記帳に、「あゝわれつひに堪たへんや、あゝわれつひに田舎いなかの一教師に埋れんとするか。明日！ 明日は万事定まるべし。村会の夜の集合！ 嘘ああ！」一語以て「後日に寄す」と書いた。なおくわしくその気持ちを書こうと思つたが、とうてい十分に書き現わし

得ようとも思えぬので、記憶にどどめておくことにした。

翌日、朝九時に学校に行つてみた。けれどその平田というのがまだいたので、一まず役場に引き返した。一時間ばかりしてまた出かけた。

今度はもうその教員はいなかつた。授業はすでに始まつていた。生徒を教える教員の声が各教場からはつきりと聞こえて来る。女教員のさえた声も聞こえた。清三の胸はなんとなくおどつた。教員室にはいると、校長は卓に向かつて、何か書類の調しらべもの物をしていたが、

「さアはいりたまえ」と言つて清三のはいつて来るのを待つて、そばにある椅子いすをすすめた。

「お気の毒でした。ようやくすっかり決まりました。なかなかめんどうでしてな……昨夜の相談でもいろいろの話が出ましてな」こう言つて笑つて、「どうも村が小さくて、それでやかましい学務委員がいるから困りますよ」

校長は言葉をついで、

「それで家のほうはどうするつもりです？ 毎日行田ぎょうだから通うというわけにもいくまい。まあ、当分は学校に泊まつっていていいけれど……考えがありますか」

「どこか寄宿するよいところがござりますまい」とこれをきつかけに清三が問うた。

「どうも田舎いなかだから、格好かつけいなどころがなくつて……」

「ここでなくつても、少しは遠くつてもいいんですねけれど……」「そうですな……一つ考えてみましょ。どこにあるかもしません」

二時間すんだところで、清三は同僚になるべき人々に紹介された。関という準教員<sup>じゅんいん</sup>は、にこにこと気がおけぬようなところがあった。大島という校長次席は四十五六ぐらいの年かつこうで、頭はもうだいぶ白く、ちょっと見ると窮屈<sup>きゆうくつ</sup>そうな人であるが、笑うと、顔にやさしい表情が出て、初等教育にはさもさも熟達しているように見えた。「はあ、この方が林さん、私は大島と申します。何分よろしく」と言つた言葉の調子にも世なれたところがあつた。次に狩野<sup>かのう</sup>という顔に疣<sup>ほくろ</sup>のある訓導と杉田という肥つた師<sup>し</sup>

範校出はんこうしゆつとが紹介された。師範校出はなんだかそツ気ないような挨拶をした、女教員は下を向いてにこにこしていた。

次の時間の授業の始まる前に、校長は生徒を第一教室に集めた。  
かれは卓テーブルのところに立つて、新しい教員を生徒に紹介した。

「今度、林先生とおつしやる新しい先生がおいでになります、  
皆さんの授業をなさることになりました。新しい先生は行田の方で、中学のほうを勉強していらしって、よくおできになる先生でございますから、皆さんもよく言うことを聞いて勉強するよう  
にしなければなりません」

校長のわきに立つて、少しうつむきかげんに、顔を赤くしてい  
る新しい先生は、なんとなく困つたような恥ずかしそうな様子に

生徒には見えた。生徒は黙つて校長の言葉を聞いた。

次の時間には、その新しい先生の姿は、第三教室の卓の前にあらわれた。そこには高等一年生の十二三歳の児童がすらりと前に並んで、何かしきりにがやがや言つていたが、先生がはいって来ると、いざれも眼をそのほうに向けて黙つてしまつた。

新しい教師は卓の前に来て椅子に腰を掛けたが、その顔は赤かつた。読本とくほんを一冊持つて來たが、卓の上に顔をたれたまま、しばしの間は、その教科書の頁ページをひるがえして見ていた。

後ろのほうでささやく声がおりおりした。

教室の硝子戸は埃ちりにまみれて灰色に汚なくよごれているが、そこはちょうど日影が黄きいろくさして、戸外では雀すずめが百ももさえずさえずりをし

て いる。通りを荷車のきしる音がガタガタ聞こえた。

隣の教室からは、女教員の細くとがつた声が聞こえ出した。

しばらくして思い切つたというように、新しい教師は顔をあげた。髪の延びた、額の広い眉のこいその顔には一種の努力が見えた。

「第何課からですか」

こう言つた声は広い教室にひろがつて聞こえた。

「第何課からですか」とくり返して言つて、「どこまで教わりましたか」

こう言つた時には、もう赤かつた顔の色がさめていた。

答えがあつちこつちから雑然として起こつた。清三は生徒の示

した読本のページをひろげた。もうこの時は初めて教場に立つた苦痛がよほど薄らいでいた。どうせ教えずにはすまされぬ身である。どうせ自分のベストをつくすよりほかにしかたがないのである。人がなんと言おうが、どう思おうが、そんなことに頓着していられる場合でない。こう思つたかれの心は軽くなつた。

「それでは始めますから」

新しい教師は第六課を読み始めた。

生徒は早いしかしなめらかな流るるような声を聞いた。前の老朽教師の低い蜂のうなるような活気のない声にくらべては、たいへんな違いである。しかしその声はとかく早過ぎて生徒の耳にとまらぬところが多かつた。生徒は本よりも先生の顔ばかり見

ていた。

「どうです、これでわかりますか」

「いま少しゆっくり読んでください」

いろいろな声があつちこつちから起こつた。二度目には、つと  
めてゆっくりした調子で読んだ。

「どうです、このくらいならわかりますか」

にここにこと笑顔を見せて、なれなれしげにかれは言つた。  
「先生、あとのはよくわかりました」

「いま少し早くつてもようございます」

などと生徒は言つた。

「今まで先生にいく度読んでもらいました。一度ですか。三度

ですか？」

「二度

「二度です」

という声がそこにもここにも起こつた。

「それじやこれでいいですな」と清三は生徒の存外無邪氣な調子に元気づいて、「でも、初めのが早過ぎましたからいま一度読んであげましょう、よく聞いておいでなさい」

今度のはいつそつはつきりしていた。早くもおそらくもなかつた。読める人に手を上げさせて、前の列にいる色の白い可愛い子に読ませてみたり何かした。読めるのもあれば読めぬのもあつた。

清三は文章の中からむずかしい文字を拾つて、それを黒板に書い

て、順々に覚えさせていくようにした。ことにむずかしい字には  
圈<sup>けん</sup>点<sup>てん</sup>をつけてそのままに片仮名でルビをふつてみせた。<sup>テープル</sup>卓<sup>の</sup>前に  
初めて立つた時の苦痛はいつかぬぐうがごとく消えて、自分が  
がらやりさえすればやれるものだという快感が胸にあふれた。や  
がて時間が来てベルが鳴つた。

昼<sup>ひる</sup>飯<sup>めし</sup>は小川屋から運んで来てくれた。正午の休みに生徒らは  
みんな運動場に出て遊んだ。ぶらんこに乗るものもあれば、鬼<sup>おにご</sup>  
事<sup>こと</sup>をするものもある。女生徒は男生徒とはおのずから別に組を  
つくつて、綾<sup>あや</sup>を取つたり、お手玉をもてあそんだりしている。運動  
場をふちどつて、白楊<sup>やなぎ</sup>の緑葉がまばらに並んでいるが、その間  
からは広い青い野が見えた。

清三は廊下の柱によりかかつて、無心に戯れ遊ぶ生徒らにみとれていた。そこにやつて来たのは、関という教員であつた。

やさしい眼色<sup>めつき</sup>と、にこにこした円満な顔には、初めて会つた時から、人のよさそうなという感を清三の胸に起<sup>おこ</sup>させた。この人には隔<sup>へだ</sup>てをおかずに話ができるという気もした。

「どうでした、一時間お休みになりましたか」

「え……」

「どうも初めてというものは、工合<sup>ぐあ</sup>いの悪いものでしてな……私などもつい三月ほど前にここに來たのですが、始めは弱りましたよ」

「どうもなれないものですから」

この同情を清三もうれしく思つた。

「私の前に勤めていた方はどういう方でした」

「あの方はもう年を取つたからやめさせるという噂うわさが前からあつたんです。今泉の人で、ずいぶん古くから教員はやつてているんだそうですが……やはり若いものがずんずん出て来るものだから……それに教員をやめても困るツていう人ではありませんから……家には財産があるんですか」

「財産ということもありますまいが、子息むすこが荒物屋の店をしておりますから」

「そうですか」

こんな普通な会話もこの若い二人を近づける動機とはなつた。

二人はベルの鳴るまでそこに立つて話した。

午後には理科と習字とを教えた。

夜は宿直室に泊まつた。宿直室は六畳で、その隣に小使室があつた。小使室には大きな囲爐裏に火がかつかつと起こつて、自在鍵につるした鉄瓶はつねに煮えくりかえつていた。その向こうは流し元で、手桶のそばに茶碗や箸が置いてあつた。棚には桶と摺り鉢が伏せてあつた。

その夜は大島訓導の宿直で、いろいろ打ち解けて話をした。かれは栃木県のもので、久しく宇都宮に教鞭をとつていたが、一昨年埼玉県に来るようになつて、ちよつと浦和にいて、それからここに赴任したという。家は大越在で、十五歳になる娘と九

歳になる男の児こがある。初めて会つた時と打ち解けて話し合つた時と感じはまるで違つていた。大島先生は一合の晩酌ばんしゃくに真赤になつて、教育上の経験やら若い者のためになるような話やらを得意になつてして聞かせた。

湯屋が通りにあつた。細い煙筒えんとうから煙けむりが青く黒くあがつているのを見たことがある。格子戸が男湯と女湯とにわかれ、はいるとそこに番台があつた。湯気の白くいっぱいにこもつた中に、箱洋燈はこらんぱがボンヤリと暗くついていて、覧とから落ちる上がり水の音が高く聞こえた。湯殿ゆどのは掃除が行き届かぬので、氣味悪くヌラヌラと滑る。清三は湯につかりながら、自分の新しい生活を思い浮かべた。

## 十

ある朝、授業を始める前に、清三は卓の前に立つて、まじめな調子で生徒に言つた。

「今日は皆さんにおめでたいことを一つお知らせ致します。皇太子妃殿下 節子姫には去る二十九日、新たに親王殿下をやすやすとご分娩ぶんべんあそばされました。これは皆さんも新聞紙上でお父様やお母様からすでにお聞きなされたことと存じます。皇室の御おんさ榮えあらせらることは、われわれ国民にとつてまことに喜びにたえませんことで、千秋万歳せんしゅうばんざい、皆さんの毎日お歌いになる

君が代の唱歌にもさざれ石の巖いわおとなりて苔こけのむすまでと申してございます通りであります。しかるに、一昨日その親王殿下のご命令式がございまして、迪宮殿みちのみやでんか下裕仁親王ひろひとしんのうと名告らせらるるということがご発表になりました」

こう言つて、かれは後ろ向きになつて、チヨオクを取つて、黒板に迪宮裕仁親王という六字を大きく書いてみせた。

## 十一

「どうぞ一つ名誉賛成員になつていただきたいと存じます……。それに、何か原稿を。どんなに短いものでも結構ですから」

清三はこう言つて、前にすわつてゐる成願寺の方丈さん  
 の顔を見た。かねて聞いていたよりも風采のあがらぬ人だとかれ  
 は思つた。新体詩、小説、その名は東京の文壇にもかなり聞こえ  
 ている。清三はかつてその詩集を愛読したこともある。雑誌にの  
 つた小説を読んだこともある。一昨年こここの住職になるについて  
 も、やむを得ぬ先住から<sup>せんじゅう</sup>の縁故があつたからで、羽生町<sup>はにゅうまち</sup>で  
 屈指な名刹<sup>くっしめいさつ</sup>とはいながら、こうした田舎寺には惜しいといふ  
 こともうわさにも聞いていた。それが、こうした背の低い小づく  
 りな弱々しそうな人だとは夢にも思いがけなかつた。

かれは土曜日の家への帰りがけに、羽生の郵便局に荻生秀之<sup>おぎゅうひでの</sup>  
 助<sup>すけ</sup>を訪ねたが、秀之助がちょうど成願寺の山形古城を知つてい

ると言ふので、それでつれだつて訪問した。

「それはおもしろいですな……それはおもしろいですな」

こうくり返して主僧は言つた。「行田文学」についての話が三人の間に語られた。

「むろん、ご尽力しましようとも……何か、まあ、初めには詩でもあげましよう。東京の原にもそう言つてやりましよう……」

主僧はこう言つて軽く挨拶した。

「どうぞなにぶん……」

清三は頼んだ。

「荻生君もお仲間ですか」

「いいえ、私には……文学などわかりやしませんから」と荻生さ

んはどこか町家の子息むすこといったようなふうで笑つて頭をかいだ。

中学にいるころから、石川や加藤や清三などとは違つて、文学だの宗教だのということにはあまりたずさわらなかつた。したがつて空想的なところはなかつた。中学を出るとすぐ、前から手伝つていた郵便局に勤めて、不平も不満足もなく世の中に出で行つた。

主僧の室は十畳の一間まで、天井は高かつた。前には伽羅きやらや松や躑躅つつじや木犀もうせいなどの点綴てんてつされた庭がひろげられてあつて、それに接して、本堂に通ずる廊下が長く続いた。瓦屋根と本堂の離れの六畳の障子の黒くなつたのが見えた。書箱ほんばこには洋書がいっぱい入れられてある。

主僧はめずらしく調子づいて話した。今の文壇のふまじめと党

閥の弊へいとを説いて、「とても東京にいても勉強などはできない。田園生活などという声の聞こえるのももつともなことです」などと言つた。風采はあがらぬが、言葉に一種の熱があつて、若い人たちの胸をそそつた。

詩の話から小説の話、戯曲の話、それが容易につきようとはしなかつた。明星派の詩歌の話も出た。主僧もやはり晶子の歌を賞し揚ようようしていた。「そうですとも、言葉などをあまりやかましく言う必要はないです、新しい思想を盛るにはやはり新しい文字の排列も必要ですとも……」こう言つて林の説に同意した。

ふと理想ということが話題にのぼつたが、これがると主僧の顔はにわかに生々した色をつけてきた。主僧の早稲田に通つて勉

強した時代は紅葉露伴の時代であつた。いわゆる「文学界」の感情派の人々とも往來した。ハイネの詩を愛読する大学生とも親しかつた。麻布の曹洞宗の大学林から早稲田の自由な文学社会にはいつたかれには、冬枯れの山から緑葉の野に出たような気がした。今ではそれがこうした生活に逆戻りしたくらいであるから、よほど鎮静はしているが、それでもどうかすると昔の熱情がほとばしつた。

「人間は理想がなくつてはだめです。宗教のほうでもこの理想を非常に重く見ている。同化する、惑溺するということは理想がないからです。美しい恋を望む心、それはやはり理想ですから、……普通の人間のように愛情に盲従したくないというところに力

がある。それは仏も如是によぜ一心と言つて靈肉の一致は説いています  
が、どうせ自然の力には従わなければならぬのはわかっています  
すが——そこに理想があつて物にあこがれるところがあるので人  
間として意味がある」

持ち前の猫背をいよいよ猫背にして、蒼あおい顔にやや紅くれなを潮らようした  
熱心な主僧の態度と言葉とに清三はそのまま引き入れられるよう  
な気がした。その言葉はヒシヒシと胸にこたえた。かつて書籍で  
読み詩で読んだ思想と憧しょうけい憬こう、それはまだ空想であつた。自己  
のまわりを見回しても、そんなことを口にするものは一人もなか  
つた。養蚕ようさんの話でなければ金かねもうけの話、月給の多いすくない  
という話、世間の人は多くパンの話で生きている。理想などとい

うことを言い出すと、まだ世間を知らぬ 乳臭児 のように一言のもとに言い消される。

主僧の言葉の中に、「成功不成功は人格の上になんの価値もなし。人は多くそうした標準で価値をつけるが、私はそういう標準よりも理想や趣味の標準で価値をつけるのがほんとうだと思う。乞食こじきにも立派な人格があるかもしけぬ」という意味があつた。清三には自己の寂しい生活に対する非常に有力な慰藉者いしゃしゃを得たようと思われた。

主客の間には陶器の手爐りてあぶが二つ置かれて、菓子器には金米糖こんぺいとうが入れられてあつた。主僧とは正反対に体格のがつしりした色の黒い細君こまきが注いで行つた茶は冷たくなつたまま黄いろくにご

つていた。

一時間ののちには、二人の友だちは本堂から山門に通ずる長い舗石道を歩いていた。鐘楼のそばに扉を閉め切った不動堂があつて、その高い縁では、額髪を手拭いでまいた子守りが二三人遊んでいる。大きい銀杏の木が五六本、その幹と幹との間にこれから織ろうとする青縞のはたをかけて、二十五六の櫛巻きの細君が、しきりにそれを綜っていた。

「おもしろい人だねえ」

清三は友をかえりみて言つた。

「あれでなかなかいい人ですよ」

「僕はこんな田舎いなかにあんな人がいようとは思わなかつた。田舎寺

には惜しいツていう話は聞いていたが、ほんとうにそうだねえ。

……

「あいて話対手あいてがなくつて困るツて言つていましたねえ」

「それはそうだろうねえ君、田舎には百姓や町人しかいやしないから」

二人は山門を過ぎて、榛はんの木の並んだ道を街道に出た。街道の片側には汚ない溝みぞがあつて、歩くと蛙かえるがいく疋ひきとなくくさむらから水の中に飛び込んだ。水には黒い青い苔やら藻もやらが浮いていた。

大和障子やまとしようじをなかばあけて、色の白い娘が横顔を見せて、青縞せいじまをチャンカラチャンカラ織つていた。

その前を通る時、

「あのお寺の本堂に室<sup>へや</sup>がないだろうか？」

こう清三はきいた。

「ありますよ。六畳が」

と友はふり返った。

「どうだろうねえ、君。あそこでおいてくれないかしらん」

「おいてくれるでしょう……この間まで巡査が借りて自炊をしていましたよ」

「もうその巡査はいないのかねえ」

「この間岩瀬へ転任になつて行つたツて聞きました」

「一つ、君は懇意だから、頼んでみてくれませんか、自炊でもな

んでもして、食事のほうは世話をかけずに、室<sup>へや</sup>さえ貸してもらえばいいが……」

「それはいい考えですねえ」と荻生君も賛成した。「ここからなら弥勒<sup>みろく</sup>にも二里に近いし……土曜日に行田へ帰るにもあまり遠くないし……」

「それにいろいろ教えてもらえるしねえ、君。弥勒あたりのくだらんところに下宿するよりいくらいいかしれない」「ほんとうですねえ、私も話相手ができるいい」

荻生さんが来週の月曜日までに聞いておいてやるということに決まつて、二人の友だちは分署<sup>かど</sup>の角で別れた。

## 十二

昨日の午後、月給が半月分渡つた。清三の財布は銀貨や銅貨でガチャガチャしていた。古いとじの切れたよござれた財布！ 今までこの財布にこんなに多く金のはいったことはなかつた。それに、とにかく自分で働いて初めて取つたのだと思うと、なんとなく違つた意味がある。母親が勝手に立とうとするのを呼びとめて、懐から財布を出して、かれはそこに紙幣と銀貨とを三円八十銭並べた。母親はさもさも喜ばしさにたえぬよう<sup>むすこ</sup>に息子の顔を見ていたが、「お前がこうして働いて取つてくれるようになつたかと思うとほんとうにうれしい」としんから言つた。息子は残りの半分は

いま四五日たつとおりるはずであるということを語つて、「どうも田舎いなかはそれだから困るよ。なんでも三度四度ぐらいにおりることもあるんだツて……けちけちしてゐるから」

母親はその金をさも尊とおとそうに押しいただくまねをして、立つて神棚かみだなに供えた。そな神棚には躑躅つつじと山吹さんびとが小さい花瓶に生けて上げられてあつた。清三は後ろ向きになつた母親の小さい丸髷まるまげにこのごろ白髪しらがふの多くなつたのを見て、そのやさしい心のいかに生活の嵐に吹きすさまれてゐるかを考えて同情した。こればかりの金にすらこうして喜ぶのが親の心である。かれは中学からすぐ東京に出て行く友だちの噂うわさを聞くたびにもやした羨望せんぼうの情と、こうした貧しい生活をしてゐる親の慈愛じあいに対する子の境遇きょうぐうとを

考えずにはいられなかつた。

その土曜日は愉快に過ぎた。母親は自分で出かけて清三の好きな田舎饅頭まんじゅうを買ってきて茶を煎いれてくれた。母親の小皺こじわの多いにこにこした顔と息子の青白い弱々しい淋しい笑顔とは久しく長火鉢に相対してすわつた。

清三は来週から先方のつごうさえよければ羽生の成願寺じょうがんじに下宿したいという話を持ち出して、若い学問のある方丈ほうじやうさんのことや、やさしい荻生君のことなどを話して聞かした。母親はそれまでには夜具や着物を洗濯してやりたい、それに袷あわせを一枚こしらえたいなどと言つた。父親の商売の不景気なことも続いて語つた。清三のおさないころの富裕ふゆうな家庭の話も出た。

夜は菓子を買って郁治の家に行つた。雪子がにこにこと笑つて迎えた。書斎での話は容易につきようともしなかつた。同じことをくり返して語つても、それが同じこととは思えぬほど二人は親しかつた。相対して互いに顔を見合わせているということが二人にとつてこのうえもない愉快である。「行田文学」の話も出れば山形古城の話も出る。そこに郁治の父親がおりよく昨日帰つてきていたとて出てきて、「林さん、どうです、……学校のほうはうまくいきますか」などと言つた。

「あそこの学校は軋轢<sup>あつれき</sup>がなくつていいでしよう。校長は二十七年の卒業生だが、わりあいにあれで話がわかっている男でしてな……村の受けもいいです」

郡視学はこんなことを語つて聞かせた。

雪子が茶をさしにきた時、袂から絵葉書を出して、「浦和の美穂子さんから今、私のところにこんな手紙が来てよ」と二人に示した。美穂子はかのArtの君である。雪子はまだ兄の心の秘密を知らなかつた。

絵葉書は女学世界についていた「初夏」という題で、新緑の陰にハイカラの女が細い流行の小傘パラソールをたずさえて立つていた。文句はべつに変わつたこともなかつた。

——雪子さんお変わりございませんか。ここに参つてからもう二月になりました。寄宿の生活——それはほかからは想像ができるくらいでございます、この春、ごいっしょに楽しく遊んだこ

となどをおりおり考へることが、ござりますよ。ご無沙汰のおわ  
びまでに……美穂子

清三はその葉書を畳の上において、

「今度は貴嬢あなたも浦和にいらつしやるんでしよう?」  
「私などだめ」

と雪子は笑つた。

その笑顔を清三は帰路きろの闇の中に思い出した。相対していたのはわずかの間であつた。その横顔を洋燈らんぱが照らした。つねに似ず美しいと思つた。ツンとすましたようなところがあるのをいつも不愉快に思つていたが、今宵はそれがかえつて品があるかのようになつた。美穂子の顔が続いて眼前を通る。雪子の顔と美穂子の

顔が重なつて一つになる……。田の畦に蛙の声がして、町の病院の二階の灯<sup>あかり</sup>が窓からもれた。

\*

\*

\*

\*

\*

町の裏に小さな寺があつた。門をはいると、庫裡の藁葺屋根<sup>くりわらぶき</sup>と風雨<sup>ふうう</sup>にさらされた黒い窓障子<sup>まどじよ</sup>が見えた。本堂の如来<sup>にょらい</sup>様は黒く光つて、木魚<sup>もくぎよ</sup>が赤いメリッスの敷き物の上にのせてある。その裏にある墓地には、竹藪<sup>たけやぶ</sup>が隣の地面を仕切つて、墓石にはなめくじのはつたあとがありありと残つていた。その多い墓石の中に清三の弟の墓があつた。弟は一昨年の春十五歳で死んだ。その病<sup>やまい</sup>は長かつた。しだいにやせ衰えて顔は日に日に蒼白<sup>あおじろ</sup>くなつた。

医師<sup>いしや</sup>は診断書に肺結核と書いたが、父母<sup>ちちはは</sup>はそんな病気が家の血統にあるわけがないと言つて、その医師の診断書を信じなかつた。

清三は時々その幼い弟のことを思い起こすことがある。死んだ時の悲哀<sup>かなしみ</sup>——それよりも、今生きていてくれたなら、話相手になつて、どんなにうれしかつたろうと思う。そのたびごとにかれは花をたずさえて墓参りをした。

日曜日の朝、かれは櫛<sup>しきび</sup>と山吹とを持つて出かけた。庫裡<sup>くり</sup>で手桶<sup>ておけ</sup>を借りて、水をくんで、手ずから下げる裏へ回つた。墓石はまだ建ててなく、風雨にさらされて黒くなつた墓標<sup>どまんじゆう</sup>が土饅頭の上にさびしく立つてゐる。父母も久しくお参りをせぬとみえて、花立ては割れていた。水を入れてもかいがなかつた。

清三の姿は久しくその前に立っていた。もう五月の新緑があたりをあざやかにして、老鶯の声が竹藪の中に聞こえた。

午後からは、印刷所に行つたり石川を訪問したりした。今日、弥勒に帰らぬと、明日は少なくも朝の四時に家を出なければ授業時間に間に合わぬと知つてはいるが、どうも帰るのがいやで――

親しい友人と物語る楽しみを捨ててろくろく話す人もないところに帰つて行くのがいやで、われしらず時間を過ごしてしまつた。

夕飯を食つてから、湯に出かけたが、帰りにふたたび郁治を

訪ねて、あきらかな夕暮れの野を散歩した。

城址しろあとはちよつと見てはそれと思えぬくらい昔のさまを失つて

いた。牛乳屋の小さい牧場には牛が五六頭モーモーと声を立てて

鳴いていて、それに接した青縞機業会社の細長い建物からは、機を織る音にまじつて女工のうたう声がはつきり聞こえる。夕日は昔大手の門のあつたというあたりから、年々田に埋め立てられて、里川さとがわのように細くなつた沼に画のようにあきらかに照りわたつた。新たに芽を出した蘆荻あしや茅かやや蒲がまや、それにさびた水がいつぱいに満ちて、あるところは暗くあるところは明るかつた。沼にかかる板橋を渡ると、細い田圃路たんぼみちがうねうねと野に通じて、車をひいて来る百姓の顔は夕日に赤くいろどられて見えた。

麦畠と桑畠、その間を縫うようにして二人は歩いた。話は話と続いて容易につきようとしなかつた。路はいつか士族屋敷のあたりに出た。

家はところどころにあつた。今まで踏みとどまつてゐる士族は少なかつた。昔は家から家へと続いたものであるが、今は晨の星のように畠と畠の間に一軒二軒と残つてゐる。昔ふうの黒いシタミや白い壁や大きい栗の木や柿の木や 井字形せいじがたの井戸側やまばらな生垣からは古い縁側えんがわに低い廂ひさし、文人画を張つた襖ふすまなどもあきらかに見すかされた。夏の日などそこを通ると、垣に目の覚めるようなあかい薔薇ばらが咲いていることもあれば、新しい 青簾あおすだれが縁側にかけてあつて、風鈴ふうりんが涼しげに鳴つてゐることもある。秋の霧の深い朝には、桔※はねつるべのギイと鳴る音がして荔子れいしの黄いろいのが垣から口を開いてゐる。琴の音などもおりおり聞こえた。

この士族屋敷にはやはりとの士族が世におくれて住んでいた。

役場に出ているものもあれば、小学校の先生をしているものもある。財産があつて無為に月日を送っているものもあれば、小規模の養蚕などをやつて暮らしているものもある。金貸しなどをしているものもあつた。

士族屋敷の中での金持ちの家が一軒路いっけんみちのほとりにあつた。珊瑚珊さ

瑚樹こんじゅの垣は茂つて、はつきりと中は見えないが、それでも白壁の土蔵と棟むねの高い家屋とはわかつた。門から中を見ると、りつぱな玄関があつて、小屋のそばに鶏とりが餌をひろつている。

二人はその垣に添つて歩いた。

垣がつくると、水のみちた幅のせまい川が気持ちよく流れている。岸には楊やなぎがその葉を水面にひたして漣さざなみをつくつてゐる。細い

板橋が川の折れ曲おりまがつたところにかかつてゐる。

美穂子の家はそこから近かつた。

「行つてみようか。北川は今日はいるだらう」

清三はこう言つて友を誘つた。

その家は大きな田舎道をへだててひろい野に向かつてゐた。古びた黒い門があつた。やつぱり廊ひさしの低い藁葺わらぶきの家で、土台がいくらか曲がつてゐる。庭には松だの、檜ひのきだの、椿だのが茂つていた。今年の一月から三月にかけて、若い人々はよくこの家に歌留うた多牌がるたをとりにきたものである。美穂子の姉の伊与子、妹の貞子、それに国府こくぶという人の妹に友子といつて美しい人がいた。それらの少女おとめれん連と、郁治や清三や石川や沢田や美穂子の兄の北川など

の若い人々が八畳の間にいっぱいになつて、竹筒台たけづつだいの五分心の洋燈らんぷの光の下に頭を並べて、夢中になつて歌留多牌くわななまりを取ると、そばには半白はんぱくの、品のいい、桑名訛くわななまりのある美穂子の母親が眼鏡みがんをかけて、高くとおつた声で若い人々のためにあきずうたがるたに歌留多牌うたがるたを読んでくれた。茶の時には蜜柑みかんと五目飯ごもくめしの生薑しょうがとが一座の眼をあざやかにした。帰りはいつも十一時を過ぎていた。さびしい士族屋敷の竹藪たけやぶの陰の道を若い男と女とは笑いざめいて帰つた。

北川は湯に行つてゐるであつた。「まあ、よくいらつしやいましたな……今、もうじき帰つて参りますから……」母親はこう言つて、にこにこして二人を迎えた。郁治はその笑顔に美穂子の笑

顔を思い出した。声もよく似ている。

二人は庭に面した北川の書斎に通された。父親はどこに行つたか姿は見えなかつた。

母親はしばし二人の相手をした。

「林さんは弥勒みろくのほうにお出になりましたツてな、まあ結構でしたな……母おつかさん、さぞおよろこびでしたろうな」

こんなことを言つた。

浦和にいる美穂子のうわさも出た。

「女がそんなことをしたツてしかたがないツて父親ちちは言いますけれどもな……当人がなかなか言うことを聞きませんでな……どうせ女のすることだから、ろくなことはできんのは知れてるですけ

ど……」

「でもお変わりはないでしよう」

清三がこうきくと、

「え、もう……お転婆てんばばかりしているそうでな」と母親は笑つた。  
すぐ言葉をついで、今度は郁治に、

「雪さんどうして「ざるな」

「相変わらずぶらぶらしています」

「ちと、遊びにおつかわし。貞も退屈しておりますで……」

それこれするうちに、北川は湯から帰つて來た。背の高い頬ほおほ  
骨ねの出た男で、手織りの綿衣わたいれに絆かすりの羽織を着ていた。話のさ  
なかにけたたましく声をたてて笑う癖くせがある。石川や清三などと

は違つて、文学に対してはあまり興味をもつていない。学校にいたころは、有名な運動家でベースボールなどにかけては級クラスの中でもかれに匹敵するものはなかつた。軍人志願で、卒業するとすぐ熱心に勉強して、この四月の士官学校の試験に応じてみたが、数学と英語とで失敗した。けれどあまり失望もしておらなかつた。九月の学期には、東京に出て、しかるべき学校にはいって、十分な準備をすると言つている。

三人は胸襟きょうきんを開いて語り合つた。けれどここで語る話と清三と郁治と話す話とは、大いに異なつていた。同じ親しさでも單に学友としての親しさであつた。打ち解けて語ると言つても心の底を互いに披瀝ひれきするようなことはなかつた。

ここでは、学校の話と将来の希望と受験の準備の話などが多く出た。北川は東京で受けた士官学校入学試験の話を二人にして聞かせた。「どうも試験に余裕がなくつて困つた。英語の書き取りなど一度しか読んでくれないんだから困るよ。それに試験の場所が大きく広すぎて、声が散つてよく聞きとれないんだから、ドマドマしてしまつたよ。おまけに代数がばかにむずかしかつた」

代数の二次方程式の問題をかれは手帳に書きつけてきた。それを机の抽斗ひきだしやら押入れの中やら文庫の中やらあつちこつちとさがし回つて、ようやくさがし出して二人に見せる。なるほど問題はむずかしかつた。数学に長じた郁治にもできなかつた。

北川は漢学には長じていた。父親は藩はんでも屈指の漢学者で、漢

詩などをよく作つた。今は町の役場に出るようになつたのでよし  
 たが、三年前までは、町や屋敷の子弟に四書五経の素読そどくを教  
 えたものである。午後三時ごろから日没前までの間、蜂はちのうなるよ  
 うな声はつねにこの家の垣からもれた。そのころ美穂子は赤いメ  
 リンスの帯をしめて、髪をお下げに結ゆつて、門の前で近所の友だ  
 ちと遊んだ。清三はその時分から美穂子の眼の美しいのを知つて  
 いた。

郁治と清三が暇いとまをつげたのは夜の九時過ぎであつた。若い人々  
 は話がないといつても話がある。二人はそこを出てしばしの間黙だま  
 つて歩いた。竹藪のガサガサする陰の道は暗かつた。郁治の胸に  
 も清三の胸にもこの際浦和の学校にいる美穂子のことがうかんだ。

「あの時——郁治がそれと打ち明けた時、なぜ自分もラヴしているということを思いきつて言わなかつたろう」と清三は思つた。けれど友の恋はまだ美穂子に通じてあるわけではない。恋された人の知らぬ前に恋した人の心を自分はその人から打ち明けられた。それだけかれは苦しかつた。またそれだけかれはその問題につきつめていなかつた。時には「まだ決まつたというわけではない、ぶつかつてみて、どうなることかわからない。……希望がすつかり破れてしまつたというわけでもない……」などと思うこともあら。友のために犠牲になるという気はむろんある。友の恋の成らんことを望む念もある。かれの性質からいつても、家庭の事情からいつても、現在の恋の状態からいつても、はげしく熱するには

まだいぶ距離もあり余裕もあつた。

しかしその夜は二人とも不思議に胸がおどつていた。黙つて歩いていても、その心はいろいろなことを語つていた。野に出ようとすると、昨日の雨に路の悪くなっているところがあつた。低い駒下駄はズブズブはいつた。

「悪い路みちだね」

二人は互いにこう言いあつた。しかし心では二人とも美穂子のことを考えていた。

郁治にしては、女に対する煩悶はんもん、それを残すところなくこの友に語りたいと思つた。打ち明けて話したならいくらかこの胸が静まるだろうとも思つた。しかしなぜかそれを打ち明けて語る気

にはならなかつた。

二人はやつぱり黙つて歩いた。

城址しろあとの森が黒く見える。沼がところどころ闇の夜の星に光つた。蘆あしや蒲がまがガサガサと夜風に動く。町の灯あかりがそこにもここにも見える。

公園から町にはいった。もうそのころは二人は黙つていなかつた。郁治は低い声で、得意の詩吟しぎんを始めた。心の感激かんげきの余波がそれにも残つて聞かれる。別れの道の角かどに来ても、かれらはなんだかこのまま別れるのが物足らなかつた。「僕の家に寄つて茶でものんで行かんか」清三がこう誘うと、郁治はついて來た。

清三の母親は裁物板たちものいたに向かつてまだせつせつと賃仕事をして

いた。茶を入れてもらつてまた一時間ぐらい話した。語つても語つてもつきないのは若い人々の思いであつた。十二時が鳴つて、郁治が思いきつて帰つて行くのを清三はまた湯屋の角まで送る。町の大通りはもうしんとしていた。

翌日は母も清三も寝過ごしてしまつた。時計は七時を過ぎていた。清三はあわてて茶漬ちゃづけをかつ込んで出かけた。いくら急いでも四里の長い長い路、弥勒みろくに着いたころはもう十時をよほど過ぎた。学校の硝子窓がらすには朝日がすでに長なけて、校長の修身を教える声が高くあきらかにあたりに聞こえる。急いで行つてみると、受持の組では生徒がガヤガヤと騒いでいた。

## 十三

熊谷町くまがやまちにもかれの同窓の友はかなりにある。小畠おばたというのと、桜井というのと、小島というのと——ことに小畠とはかれも郁治なかも人並みすぐれて交情がよかつた。卒業して会われなくなつてからは毎日のように互いに手紙の往復をして、戯談じょうだんを言つたり議論をしたりした。月に一二度は清三はきつと出かけた。

行田町から熊谷町まで二里半、その路はきれいな豊富な水で満たされた用水の縁に沿つてはしつた。一田圃たんぼごとに村があり、一村ごとに田圃が開けるというふうで、夏の日には家の前の広場で麦を打つている百姓家や、南瓜とうなすのみごとに熟している畠や、豪

農の白壁しらかべの土蔵などが続いた。秋の晴れた日には、田圃から村に稻を満載した車がきしつて、黄きいろく熟した田には、頬かむりをした田舎娘が、鎌かまの手をとめて街道を通つて行く旅人の群れをながめた。その街道にはいろいろなものが通る。熊谷行田間の乗合馬車りあいばしゃ、青縞屋の機回りはたまわの荷車、そのころ流行つた豪家の旦那の自転車、それに俾くるまにはさまざまの人くるまが乗つて通つた。よぼよぼの老いた車夫が町に買い物に行つた田舎の婆さんを二人乗りに乗せて重そうにひいて行くのもあれば、黒鴨仕立くろかもし立てのりつぱな車に町の医者らしい鬚ひげの紳士が威勢よく乗つて走らせて行くのもある。田植時分には、雨がしょぼしょぼと降つて、こねかえした田の泥濘どろの中にうつむいた饅頭笠まんじゅうがさがいくつとなく並んで見える。

いい声でうたう田植唄も聞こえる。植え終わった田の縁は美しかつた。田の畔あぜ、街道の両側の草の上には、おりおり植え残つた苗の束などが捨ててあつた。五月晴れには白い繭まゆが村の人家の軒下や屋根の上などに干してあるのをつねに見かけた。

用水のそばに一軒涼しそうな休み茶屋やすぢややがあつた。榆ゆの大きな木がまるでかぶさるように繁つて、店には土地でできる甜瓜まくわが手桶の水の中につけられてある。平たい半切はんぎりに心太こころてんも入れられてあつた。暑い木陰のない路を歩いてきて、ここで汗になつた詰つ襟めえりの小倉こくらの夏服をぬいで、瓜を食つた時のうまかつたことを清三は覚えている。その店の婆さんに娘が一人あつて東京の赤坂に奉公に出ていることも知つている。

関東平野を環わるようにめぐつた山々のながめ——そのながめの美しいのも、忘れられぬ印象の一つであつた。秋の末、木の葉がどこからともなく街道をころがつて通るところから、春の霞のかすみ被衣かつきのようにかかる二三月のころまでの山々の美しさは特別であつた。雪に光る日光の連山、羊の毛のように白く靡くなびく煙けむり、赤城あかぎは近く、榛名はるなは遠く、足利あしかが付近ひだの連山の複雑した巒には夕日が絵のように美しく光線をみなぎらした。行田から熊谷に通う中学生の群れはこの間を笑つたり戯れたり走つたりして帰つてきた。

熊谷の町はやがてその瓦屋根かわらや煙突えんとつや白壁造りの家などを広い野の末にあらわして来る。熊谷は行田とは比較にならぬほどに

ぎやかな町であつた。家並みもそろつてゐるし、富豪も多いし、  
 人口は一万以上もあり、中学校、農学校、裁判所、税務管理局なども置かれた。汽車が停車場に着くごとに、行田地方と妻沼地方に行く乗合馬車がてんでに客を待ちうけて、町の広い大通りに喇叭の音をけたたましくみなぎらせてガラガラと通つて行つた。夜は商家に電気がついて、小間物屋、洋物店、呉服屋の店も晴々しく、料理店からは陽気な三味線の音がにぎやかに聞こえた。

町は清三にとつて第二の故郷である。八歳の時に足利を出て、通りの郵便局の前の小路の奥に一家はその落魄の身を落ちつけた。その小路はかれにとつていろいろな追憶がある。そこには郵便局の小使や走り使いに人に頼まれる日傭取りなどが住んでい

た。山形あたりに生まれてそこここと流れ渡つても故郷の言葉が失せないという元気なお婆さんもあつた。八歳から十七歳まで——小学校から中学の二年まで、かれは六畳、八畳、三畳のその小さい家に住んでいた。小学校は町の裏通りにあつた。<sup>みょうじ</sup>明神<sup>とりい</sup>の華表<sup>はなばし</sup>から右にはいつて、溝板<sup>どぶいた</sup>を踏み鳴らす細い小路を通つて、駄菓子屋<sup>だりや</sup>の角<sup>かど</sup>を左に、それから少し行くと、向こうに大きな二階造りの建物と鞆<sup>ぶらんこ</sup>鞆<sup>くつ</sup>や木馬のある運動場が見えた。生徒の騒ぐ音がガヤガヤと聞こえた。

校長の肥つた顔、校長次席のむずかしい顔、体操の先生のにっこした顔などが今もありありと眼に見える。卒業式に晴衣<sup>はれぎ</sup>を着飾つてくる女生徒の群れの中にもかれの好きな少女が三四人あつ

た。紫の矢絣の衣服に海老茶の袴をはいてくる子が中でも一番眼に残っている。その子は町はずれの町から来た。農学校の校長の娘だということを聞いたことがある。清三が中学の一年にいる時一家は長野のほうに移転して行ってしまったので、そのあきらかな眸ひとみを町のいざこにも見いだすことができなくなつたが、それでも今も時々思い出すことがある。一人は芸者屋の娘で、今は小滝たきといつて、一昨年一本になつて、町でも流行妓はやり妓のうちに数えられてある。通りで盛装せいそうした座敷姿ざしきすがたいでつくわすことなどあると、「失礼よ、林さん」などとあざやかに笑つて挨拶して通つて行く。中学卒業の祝いの宴会にもやつて来て、いい声で歌をうたつたり、三絃さみせんをひいたりした。小畠おばたがそばにすわつて「小滝

は僕らの芸者だ。ナア小滝」などと言つて、酔つた顔をその前に押しつけるようにすると、「いやよ、小畠さん、貴郎は昔から私をいじめるのねえ、覚えていてよ」と打つ真似<sup>まね</sup>をした。そのとき、「貴様は同級生の中で、誰が一番好きだ」という問題がゆくりなく出た。小学校時分の同級生がだいぶそのまわりにたかっていた。と、小滝は少しも躊躇<sup>ちゆううちよ</sup>の色を示さずに、「それア誰だツてそうですわねえ、……むろん林さん!」と言つた。小滝も酔つていた。喝采<sup>かつさい</sup>の声が嵐のように起こつた。それからは、小畠や桜井や小島などに会うと、小滝の話がよく出る。しまいには「小滝君どうした。健在かね」などと書いた端書<sup>はがき</sup>を送つてよこした。「小滝」という渾名<sup>あだな</sup>をつけられてしまったのである。清三もまたおも

しろ半分に、小滝を「しら滝」に改めて、それを別号にして、日記の上表紙に書いたり手紙に署<sup>しょ</sup>したりした。「歌妓<sup>かぎ</sup>しら滝の歌」という五七調四行五節の新体詩を作つて、わざと小畠のところに書いてやつたりした。

時には清三もまじめに芸者というものを考えてみることもある。その時にはきっと自分と小滝とを引きつけて考えてみる。ロマンチックな一幕などを描いてみることもあつた。時にはまた節操<sup>みさお</sup>も肉体もみずから守ることのできない芸者の薄命な生活を想像して同情の涙を流すことなどもあつた。清三には芸者などのことはまだわからなかつた。

かれはまた熊谷から行田に移転した時のことであきらかに記憶

している。父親がよそから帰つて来て、突然今夜引っ越しをする  
 という。明日になすつたらいいではありませんかと母親が言つた  
 が、しかし昼間<sup>ひるま</sup>公然と移転して行かれぬわけがあつた。熊谷にお  
 ける八年の生活は、すくなからざる借金をかれの家に残したばかり  
 であつた。父親は財布の錢<sup>ぜに</sup>——わずかに荷車二三台を頼む錢を  
 ちやらちやらと音させながら出て行くと、そのあとで母親と清三  
 とは、近所に知れぬよう二人口きりで荷造りをした。長い行田街  
 道には冬の月が照つた。二台の車の影と親子四人の影とが淋しく  
 黒く地上に印<sup>いん</sup>した。これが一家の零落した縮図<sup>しゆくず</sup>かと思うと、清  
 三はたまらなく悲しかつた。その夜行田の新居にたどり着いたのは、もうかれこれ十二時に近かつた。燈光<sup>あかり</sup>もない暗い大和障子<sup>やまとしようじ</sup>

の前に立つた時には、涙がホロホロとかれの頬をつたつて流れた。けれどいかようにしても暮らして行かるる世の中である。それからもう四年は経過した。そのせまい行田の家も、住みなれてはさしていぶせくも思わなかつた。かれはおりおり行田の今家の熊谷の家と足利の家とを思つてみることがある。

熊谷の家は今もある。老いた夫婦者が住まつてゐる。よく行つた松の湯は新しく普請をして見違えるようになりつぱになつた。通りの荒物屋にはやはり 愛嬌者あいきょうもの のかみさんがすわつて客に接している。種物屋たねものや の娘は 廊ひさしがみ 髮かみ などに結つてツンとすまして歩いて行く。薬種屋やくしゅや の隠居いんきょ は相変わらず禿頭はげ をふりたてて 怨や小僧を叱つてゐる。郵便局の為替受け口かわせ には、黒縫子くろじゆす とメリソ

スの腹合せの帶をしめた女が為替の下渡しを待ちかねて、たきを下駄でコトコトイわせている。そのそばにおなじみの白犬が頭を地につけて眼を閉じて眠つている。郵便集配人がズツクの行囊をかついではいって来る。

小畠は郡役所に勤めている官吏の子息、小島は町で有名な大きな呉服屋の子息、桜井は行田の藩士で明治の初年にこの地に地所を買つて移つて来た金持ちの子息、そのほか造酒屋、米屋、紙屋、裁判所の判事などの子息たちに同窓の友がいくらもあつた。そしてそれがたいていは小学校からのなじみなので、行田の友だちの群れよりもいつそうしたらしいところがある。小畠の家は停車場の敷地に隣つていて、そこからは有名な熊谷堤の花が見える。

桜井の家は蓮正寺の近所で、お詣りの鰐口の音が終日聞こえる。清三は熊谷に行くと、きっとこの二人を訪問した。どちらの家でも家の人々とも懇意になつて、わがままも言えれば気の抜けない言葉もつかう。食事時分には黙つても膳を出してくれるし、夜遅くなれば友だちといつしょに一つ蒲団ふとんにくるまつて寝た。

「どうした、いやにしょげてるじゃないか」

「どうかしたか」

「まだ老い込むには早いぜ！」

「少しは何か調べたか」

「なんだか顔色が悪いぜ！」

熊谷にくると、こうした活気ある言葉をあつちこつちから浴びせかけられる。いきいきした友だちの顔色には中学校時代の面影がまだ残つていて、硝子窓<sup>がらすまど</sup>の下や運動場や湯呑場<sup>ゆのみじょう</sup>などで話しあつた符※や言葉がたえず出る。

また次のような話もした。

「Lはどうした」

「まだいる！ そとかまだいるか」

「仙骨<sup>せんこつ</sup>は先生に熱中<sup>はつちゆう</sup>しているが、実におかしくつて話にならん」

「先生、このごろ、鬚<sup>ひげ</sup>など生<sup>は</sup>やして、ステッキなどついて歩いているナ」

「杉はすっかり色男になつたねえ、君」

かたわらで聞いてはちよつとわからぬような話のしかたで、それでぐんぐん話はわかっていく。

熊谷の町が行田、羽生にくらべてにぎやかでもあり、商業も盛んであると同じように、ここには同窓の友で小学校の教師などになるものはまれであつた。角帯をしめて、老舗しにせの若旦那になつてしまふもののほかは、多くはほかの高等学校の入学試験の準備に忙しかつた。活気は若い人々の上に満ちていた。これに引きくらべて、清三は自分の意氣地のないのをつねに感じた。熊谷から行田、行田から羽生、羽生から弥勒みろくとだんだん活気がなくなつていくような気がして、帰りはいつもさびしい思いに包まれながらその長い街道を歩いた。

それに人の種類も顔色も語り合う話もみな違つた。同じ金儲かねもうけの話にしても、弥勒あたりでは田舎者の吝嗇くさいことを言つてゐる。小学校の校長さんといえど、よほど立身したように思つてゐる。また校長みずからも鼻を高くしてその地位に満足している。清三は熊谷で会う友だちと行田で語る人々と弥勒で顔を合わせる同僚とをくらべてみぬわけにはいかなかつた。かれは今の境遇を考えて、理想が現実に触れてしだいに崩れくずていく一種のさびしさとわびしさとを痛切に感じた。

ある日曜日の午前に、かれは小畠と桜井とつれだつて、中学校に行つてみた。中学校は町のはずれにあつた。二階造りの大きな建物で、木馬と金棒と鞦韆ぶらんことがあつた。運動場には小倉の詰こくらつめえ

襟りの洋服を着た寄宿舎にいる生徒がところどころにちらほら歩いているばかり、どの教室もしんとしていた。湯呑所には例のむずかしい顔をした、かれらが「般若」はんにやという綽名あだなを奉つた小使がいた。舎監しゃかんのネイ将軍もいた。当直番に当たつた数学の教師もいた。二階の階段、長い廊下、教室の黒板、硝子窓から梢だけ見える梧桐あおぎり、一つとして追憶ついかいの伴わないものはなかつた。かれらはその時分のことを語りながらあつちこつちと歩いた。

当直室で一時間ほど話した。同級生のことを聞かれるままその知れる限りを三人は話した。東京に出たものが十人、国に残つているものが十五人、小学校教師になつたものが八人、ほかの五人は不明であつた。三人は講堂に行つてオルガンを鳴らしたり、運

動場に出てボールを投げてみたりした。

別れる前に、三人は町の蕎麦屋そばやにはいった。いつもよく行く青せいせつで、柳庵いりゅうあんという家である。奥の一間はこぎつぱりした小庭に向かって、楓の若葉は人の顔を青く見せた。ざるに生玉子、跳子ちようしを一本つけさせて、三人はさも楽しそうに飲食した。

「この間、小滝に会つたぜ！」小畠は清三の顔を見て、「先生、このごろなかなか流行はやるんだそうだ。土地の者では一番売れるんだろうよ。湯屋の路地を通ると、今、座敷に出るところかなんかで、にこにこしてやつて來たツけ」

「林さんは？　ツて聞かなかつたか？」

かたわらから桜井が笑いながら言つた。

清三も笑つた。

「Yはどうしたねえ」

清三は続いて聞いた。

「相変わらずご熱心さ」

「もうエンゲージができたのか」

「当人同士はできてるんだろうけれど、家では両方ともむずかしいという話だ」

「おもしろいことになつたものだねえ」と清三は考えて、「YはいつたいVのラヴァだつたんだろう。それがそういうふうになるとは実際運命というものはわからんねえ」「Vはどうしたえ」と桜井が小畠に聞く。

「先生、足利に行つた」

「会社にでも出たのか」

「なんでも機業会社とかなんとかいうところに出るようになつた  
んだそうだ」

三人はお代わりの天ぷら蕎麦を命じた。そば

「Art の君はどうした?」

小畠がきいた。

「浦和にいるよ」

「それは知つてゐさ。どうしたツて言うのはそういう意味じやな  
いんだ」

「うむ、そうか——」と清三はうなずいて、「まだ、もとの通り

さ

「加藤も臆病者だからなア」

と小畠も笑つた。

一本の酒で、三人の顔は赤くなつた。勘定は墓口から銀貨や銅貨をじやらつかせながら小畠がした。可愛い娘の子が釣銭と蕎麦湯と楊枝とを持って来た。

その日の午後四時過ぎには、清三は行田と羽生の間の田舎道を弥勒みろくへと歩いていた。野は日に輝いて、向こうの村の若葉は美しくあざやかに光つた。けれど心は寂しく暗かつた。かれは希望に充みたされて通つた熊谷街道と、さびしい心を抱いて帰つて行く弥勒街道とをくらべてみた。若い元気のいい友だちがうらやましかつ

た。

## 十四

六月一日、今日成願寺に移る。こう日記にかれは書いた。荻お

生君が主僧といろいろ打ち合わせをしてくれたので、話は容易にまとまつた。無人で食事の世話まではしてあげることはできな  
いが、家にあるもので入り用なものはなんでもおつかいなさい。

こう言つて、主僧は机、火鉢、座蒲団、茶器などを貸してくれた。  
本堂の右と左に六畳の間があつた。右の室は日が当たつて冬は  
いいが、夏は暑くつてしまつた。で、左の間を借りることに

する。和尚さんは障子の合うのをあつちこつちからはずしてきてはめてくれる。かみさんはバケツを廊下に持ち出して畳を拭いてくれる。机を真中にすえて、持つてきた書箱ほんばこをわきに置いて、角火鉢に茶器そろを揃えると、それでりつぱな心地のよい書斎ができるた。荻生君はちょうど郵便局ひまが閑ひまなので、同僚にあとを頼んでやつてきて、庭に生えた草などをむしめた。清三が学校から退けて帰つて来た時には、もうあたりはきれいになつて、主僧と荻生君とは茶器をまんなかに、さも室の明るくなつたのを楽しむといふうに笑つて話をしていた。

「これはきれいになりましたな、まるで別の室のようになりましたな」

こう言つて清三はにこにこした。

「荻生さんが草を取つてくれたんですよ」

主僧が笑いながら言うと、

「荻生君が？ それは気の毒でしたねえ」

「いや、草を取つて、庭をきれいにすることと、趣味がある  
ものですよ」と荻生君は言つた。

そこに餅菓子が竹の皮にはいつたまま出してあつた。これも荻  
生君のお土産である。清三は、「これはご馳走ですな」と言いな  
がら、一つ、二つ、三つまでつまんで、むしやむしやと食つた。

弁当腹で、長い路を歩いて来たので、少なからず飢<sup>うえ</sup>を覚えていたのである。

その日の晩 餐は寺で調理してくれた。里芋と筍の煮付け、汁には、たけたウドが入れられてあつた。主僧は自分の分もここに持つて来させて、ビールを二本奢つて、三人して団欒おごして食つた。文学の話、人生問題の話、近所の話、小学校の話、主僧のお得意の禅の話も出た。庭に近く柱によつた主僧の顔が白く夕暮れの空気に見えた。

長い廊下に小僧が急ぎ足でこつちにやつてくるのが見えたが、やがてはいつて来て、一通の電報を主僧に渡した。

急いで封を切つて読み終わつた主僧の顔色は変わつた。  
「大島孤月おおしまこげつが死んだ！」

「孤月さんが——」

二人もおどろきの目をみはつた。

大島孤月といえ巴、文学好きの人はたいてい知つていた。某

書肆よしの女婿じょせいで、創作家としてよりも書肆の支配人としての勢

力の大きな人であつた。昨年の秋泰西漫遊たいせいまんゆうに出かけて、一月

ほど前に帰朝した。送別会と歓迎会、その記事はいつも新聞紙上をにぎわした。雑誌にもいろいろなことが書いてあつた。ここの中僧がまだ東京にいるころは、ことにこの人の世話になつて、原稿を買つてもらつたり、その家に置いてもらつたりした。

「もう今日は行かれませんな」

「そう、馬車はありませんしな、車じやたいへんですし……それに汽車に乗つても、あつちへ着いてから困るでしよう」

主僧は考えて、

「明日あしたにしましようかな」

「明日でいいなら——明日朝の馬車で久喜くきまで行つて、奥羽線  
の二番に乗るほうがいいですな」

「行田から吹ふきあげ上のほうが便利じやないでしようか」

「いや、久喜のほうが便利です」

と荻生君は言つた。

主僧はそれと心を定めたらしく、やがて、「人間というものは  
いつ死ぬかわかりませんな」と慨嘆がいたんして、

「ちよつと病氣で病院にはいつてるということは聞きましたけれど、死ぬなどとは夢にも思わなかつたですよ。先生など幸福では

あるし、得意でもあるし、これからますます自分の懷抱<sup>かいほう</sup>を実行していかれる身なんですか」こう言つて、自分の田舎寺に隠れた心の動機を考え、主僧は黯然<sup>あんぜん</sup>とした。

「世の中は蠅牛<sup>かぎゆう</sup>上角<sup>かくじょう</sup>上の争闘——私は東京にいるころには、つくづくそれがいやになつたんですよ。人の弱点を利用したり、朋党<sup>うとう</sup>を作つて人をおとしいれたり、一歩でも人の先に出よう出ようとのみあくせくしている。實にあさましく感じたですよ。世の中は好いが好いじやない、悪いが悪いじやない、幸福が幸福じやない。どんな人でもやつぱり人間は人間で、それ相応の安慰<sup>あんい</sup>と幸福はある。それに価値もある。何も名譽をおつて、一生をあくせく暮らすには当たらぬ。それよりも、人間としての理想のラ

イフを送るほうがどれほど人間としてえらいかしれない。どんなに零落れいらくして死んでもそのほうが意味がありますからなア」

「ほんとうにそうですとも」

清三は主僧の言葉に引き込まれるような気がした。

「不幸福ふしあわせな人だつた！」

と主僧は思わず感激してひとり言ひとりごとのように言つた。得意なる地位

を知つてゐるだけそれだけ、その背景が悲しかつた。平生へいぜい戯じょうだ

談べんばかり言う男で、軽い皮肉をつねに人に浴びせかけた。まだ

三十四五であつたが、世の中の辛酸しんさんをなめつくして、その圭けいか

角く�がなくなつて、心持ちは四十近い人のようであつた。養子と

しての淋しい心の煩悶はんもんをも思いやつた。「なんのかのと言つて、

誰もみな死んでしまうんですな……それを考へると、ほんとうにつまらない」主僧は深く動かされたような調子で言つた。

こんなことでその夜は一室の空気がなんとなく低い悲哀につつまれた。やがて主僧は庫裡くりに引き上げたが、清三と荻生君との話も理に落ちてしまつて、いつものように快活に語ることができなかつた。

二人は暗い洋燈らんぽに對して久しく黙した。

翌日主僧は早く出かけた。

清三は大島孤月の病死と葬儀とについての記事をそれから毎日々々新聞紙上で見た。かれはその度たびごとにいろいろ思いにうたれた。その人の作には感心してはおらぬが、出版者としての勢力

が文壇に及ぼす関係などを想像してみたり、自分の崇拝してい  
る明星一派の不遇などをそれにくらべて考えてみたりした。時に  
は、「とにかく不幸福<sup>ふしあわせ</sup>」といつても死んでこうして新聞に書かれ  
れば光榮であるなどと考えて、音も香もなく生まれて活きて死  
んでいく普通の多数の人々の上をも思いやつた。その間に雨が降  
つたり風が吹いたりした。雨の降る日には本堂の四面の新緑がこ  
とにあざやかに見えて、庫裡<sup>くり</sup>の高い屋根にかけたトタンの樋から  
ビショビショ<sup>あまだ</sup>雨滴<sup>あまた</sup>の落ちるのを見た。風の吹く日には、裏の林  
がざわざわ鳴つて、なんだか海近くにでも住んでいるように思わ  
れた。弁当は朝に晩に、馬車繼立所<sup>ばしゃつぎたてしょ</sup>のそばの米ずしという小さ  
な飲食店から赤いメリングスの帯をしめた十三四の娘が運んで來た。

行田の家からもやがて夜具や机や書箱などをとどけてよこした。  
 かれは寺から町の大通りに真直に出て、うどんひもかわと  
 障子に書いた汚ない飲食店の角を裏通りにはいつて、細い煙筒  
 に白い薄い煙のあがる碓氷社分工場の養蚕所や、怪しげ  
 な軒燈の出でいる料理屋の前などを通つて、それから用水の橋  
 のたもとへといつも出る。時には大越に通う馬車がおりよくそ  
 こにいて、安くまけて乗せてもらつて行くことなどもあつた。

五六日して主僧は東京から帰つて來た。葬儀の模様は新聞で見  
 て知つていたが、くわしく聞いて、さらにあざやかにそのさまを  
 眼めの前に見るような気がした。文壇の大家小家はことごとく雨を  
 ついてその葬式について行つたという。雨がザンザン降つて、新

緑の中に造花生花のさまざまの色彩がさながら絵のような対コントラストをなしたという。ことに、寺の本堂が狭かつたので、中にはいれなかつた人々は、蛇の目傘や絹張りの蝙蝠傘こうもりがさを雨滴れのビショビシひさし落ちる庇のところにさしかけて立つていた。読經は長かつた。それがすむと形のごとき焼香があつて、やがて棺は裏の墓地へと運ばれる。墓地への路には新しい筵むしろが敷きつめられて、そこを白無垢や羽織袴が雨にぬれて往つたり来つたりする。小説の某大家は柱によつて、悲しそうな顔をしている。生前最も親しかつた某画家は羽織を雨にめちやめちやにして、あつちこつちと周しゆうせんして歩いてゐる。「君、實際、感に打たれましたよ。苦勞をしぬいて、ようやく得意の境遇になつて、これから多少志もと

げようという時に当たつて何が来たかと思うと、死！」こう若い和尚さんは話した。

「名譽をおつて、都会の塵ちりにまみれたつて、しかたがありませんな……どんなに得意になつたつて、死が一度来れば、人々から一滴の涙をそがれるばかりじやありませんか。死んでからいくら涙をそそがれたつてしかたがない！」

主僧の眉はあがつていた。

その夜は遅くまで、清三はいろいろなことを考えた。「名譽」「得意の境遇」それをかれは眼の前に仰いでいる。若い心はただそれのみにあこがれている。けれど今宵こよはなんだかその希望と野心の上に一つの新しい解決を得たように思われる。かれは綴とじの切

れた藤村の「若菜集」を出して読みふけつた。

本堂には如来様が寂然としていた。

## 十五

裏の林の中に葦の生えた湿地よししつちがあつて、もと池いけであつた水の名残りが黒く錆びさて光つてゐる。六月の末には、剖葦よしきりがどこからともなくそこへ来て鳴いた。

寺では慰みに蚕かいこを飼かつた。庫裡くりの八畳の一間は棚や、筵むしろでいつぱいになつて、温度を計るための寒暖計が柱にかけられてあつた。かみさんが白い手拭いをかぶつて、朝に夕に裏の畠に桑を摘みに

行く。雨の降る日には、その晴れ間を待つて和尚さんもいつしよになつて桑摘みの手伝いをしてやる。ぬれた緑の葉は勝手の広い板の間に山のように積まれる。それを小僧が一枚々々拭いてみると、和尚さんはそばで桑切り庖丁で丹念に細く刻む。

蚕の上簇りかけるころになると、町はにわかに活気を帶びてくる。平生は火の消えたように静かな裏通りにも、繭買<sup>まゆ</sup>い入れ所などというヒラヒラした紙が張られて、近在から売りに来る人々が多く集まつた。頬鬚<sup>ほおひげ</sup>の生えた角帯の仲買いの四十男が秤<sup>ばかり</sup>ではかつて、それから筵<sup>むしろ</sup>へと、その白い美しい繭を開けた。相場は日ごとに変わつた。銅貨や銀貨をじやらじやらと音させて、景気よく金を払つてやつた。料理店では三味線の音が昼から聞こえた。

ある日曜日であつた。郁治が土曜日の晩から来て泊まつていた。「行田文学」の初号ができて持つてきたので、昨夜から文学の話が盛んにでた。ところが、ちょうど十時過ぎ、山門さんもんの鋪石道しきいしみちにガラガラと車の音がした。ついぞ今まで車のはいつて来たことなどはないので、不思議に思つて、清三が本堂の障子を開けてみると、白い羅紗らしゃの背広にイタリアンストロウの夏帽子をかぶつた肥つた男と白がかつた夏外套がいとうをはおつた背の高い男とが庫裡の入り口に車をつけて、今しもおりようとするところであつた。やがて小僧きゆうかがとり次ぐと、和尚さんの姿がそこに出で來た。久潤きゅうじゅんの友に訪われた喜びが、声やら言葉やら態度やらにあらわれて見えた。

やがてその客は東京から来た知名の文学者で、一人は原杏花、  
 一人は相原健一といふ有名な「太陽」の記者だということがわ  
 かつた。いずれも主僧が東京にいたころの友だちである。

清三の室は中庭の庭樹を隔てて、庫裡の座敷に対していたの  
 で、客と主僧との談話しているさまがあきらかに見えた。緑の葉  
 の間に白い羅紗の夏服がちらちらしたり、おりおり声高く快活  
 に笑う声がしたりする。その洋服や笑い声は若い青年にとつてこ  
 の上もない羨望の種であつた。

「原っていう人はあんな肥つた人かねえ。あれであんなやさしい  
 ことを書くとは思わなかつた」

郁治はこう言つて笑つた。

勝手へ行つてみると、かみさんと小僧とはご馳走の支度したくに忙しそうにしていた。和尚さんも時々出て来ていろいろ指揮をする。

米ずしの若い衆は岡持おかもちに鯉のあらいを持つて来る。通りの酒屋は貧乏徳利を下げて来る。小僧は竈かまどの下と据風呂すえぶろの釜とに火を燃しつける。活気はめずらしくがらんとした台所に満ちわたつた。

酒はやがて始まつた。だんだん話し声が高くなつてきた。和尚さんもいつもに似ぬ元気な声を出して愉快そうに笑つた。

正午近くになるとだいぶ酔つたらしく、笑う声がたえず聞こえた。縁側から廁かわやへ行く客の顔は火のように赤かつた。やがて和尚さんのまざい詩吟が出たかと思うと、今度は琵琶歌びわうたかとも思われるような一種の朗らかな吟声が聞こえた。

若い人たちつれだつて町に出かけた。懐に金はないが、月末

ふところ

勘定の米すしに行けば、酒の一、二本はいつも飲むことはできた。その場末の飲食店の奥の六畳には、衣服やら小児の襁褓こども むつきやらがいっぴいに散らかされてあつたが、それをかみさんが急いで片づけてくれた。古箪笥ふるだんすや行李こうりなどのあるそばで狭い猫の額のような庭に対して、なまりぶしの堅い煮付けでかれらは酒を飲んだり飯を食つたりした。

帰りに、荻生君を郵便局に訪ねてみるとことになつたが、こんなに赤い顔で、町の大通りは歩けないというので、桑のしげつた麦のなかられた裏通りの田圃たんぼを行つた。荻生君は熊谷に行つていなかつた。二人は引きかえして野を歩いた。小川には青

い藻もが浮ういて、小さな雑魚ざこがスイスイ泳およいでいた。

寺に帰ると、座敷ではまだ酒を飲んでいた。騒ぐ声が嵐のよう  
に聞こえる。丈せいの高いほうが和尚さんの手を引っ張つて、どこへ  
かつれて行こうとする。洋服の原があとから押す。和尚さんはい  
つか僧衣こうもを着せられている。「まあ、いいよ、いいよ、君らがそ  
んなに望むなら、お経ぐらい読むさ、その代わり君らが木魚をた  
たかなくつてはいかんぜ！」

和尚さんも少なからず酔つていた。

「よし、よし、木魚はおれがたたく」

と雑誌記者は言つた。

三人はよりつよられつして、足もと危く、長い廊下を本堂へと

やつて来る。庫裡からはかみさんと小僧とが顔を出して笑つてその酔態<sup>すいたい</sup>を見ている。三人は廊下から本堂にはいろいろとしたが、階段のところでつまずいて、将棋倒<sup>しょうぎだお</sup>しにころころと折りかさなつて倒れた。笑う声が盛んにした。

雑誌記者は槌<sup>つち</sup>をとつて木魚をたたいた。ポクポクポクポク、なかなかその調子がいい。和尚さんも原という文学者もそれを見て、「これはうまい、たたいたことがあるとみえるな」と笑つた。雑誌記者は木魚をたたきながら、「それはそうとも、これで寺の小僧を三年したんだから」こう言つて、トラヤアヤアヤアヤアとお経を読む真似<sup>まね</sup>をした。

「和尚——お経を読まなくつちやいかんじやないか」

こんなことを言つてなおしきりに木魚をたたいた。

主僧と原とは如来様<sup>によらいさま</sup>の前に立つたり、古い位牌<sup>いはい</sup>の前にたたずんだりして、いろいろな話をした。歴代の寺僧の大きな位牌のまんなかに、むづかしい顔をした本寺<sup>ほんじ</sup>中興<sup>ちゅうこう</sup>の僧の木像がすえてあつた。それは恐ろしくむき出すような眼をしていた。和尚さんはその僧のことについて語つた。本堂を再建<sup>さいこん</sup>したことや、その本堂が先代の時に焼けてしまつたことや、この人の弟子に越前の永平寺<sup>えいへいじ</sup>へ行つた人があつたことなどを話した。メリソスの敷き物の上に鐘<sup>かね</sup>がのせられてあつて、そのそばに、頭のはげた賓頭<sup>びんずる</sup>顱尊者<sup>そんじや</sup>があつた。原は鐘をカンカンと鳴らしてみた。

雑誌記者から読経<sup>どきよう</sup>をしいられるので、和尚さんは隙<sup>すき</sup>をみて庫

裡のほうへ逃げて行つてしまつた。酔つた二人は木魚と鐘とをやけにたたいて笑つた。

ドタドタとけたたましい音をさせて、やがて二人は廊下から庫裡へ行つてしまつた。あとで、六畳にいる若い友だちは笑つた。

「文学者なんていうものは存外のんきな無邪気なものだねえ」

清三はこういふと、

「想像していたのとはまるで違うね」

若い人々には、かねがねその名を聞いて想像していた文学者や雑誌記者がこうした子供らしい真似をしようとは思いもかけなかつた。しかしこうしたことをする心持ちや生活は、かれらには十分にはわからぬながらもうらやましかつた。

東京の客は一夜泊まつて、翌日の正午、降りしきる雨をついて乗合馬車で久喜<sup>くき</sup>に向かつて立つた。袴<sup>はかま</sup>をぬらして清三が学校から帰つて来て、火種<sup>ひだね</sup>をもらおうと庫裡にはいつてみると、主僧はさびしそうにぽつねんとひとり机にすわつて書を見ていた。

剖葦<sup>よしきり</sup>はしきりに鳴いた。梅雨<sup>つゆ</sup>の中にも、時々晴れた日があつて、あざやかな碧<sup>みどり</sup>の空が鼠色<sup>ねずみ</sup>の雲のうちから見えることもある。

美しい光線がみなぎるように裏の林にさしわたらると、緑葉<sup>よみがえ</sup>が蘇えつたように新しい色彩をあたりに見せる。芭蕉の広葉は風にふるえて、山門の壁のところには蜥蜴<sup>とかげ</sup>が日に光つてちよろちよろしている。前の棟<sup>むねわり</sup>割長屋では、垣から垣へ物干竿をつらねて、汚ない檻襷<sup>ぼろ</sup>をならべて干した。栗の花は多く地に落ちて、泥にまみれ

て、汚なく人に踏まれてゐる。蚊はもう夕暮れには軒に音を立てるほど集まつて来て、夜は蚊遣り火の煙が家々からなびいた。清三は一円五十銭で、一人寝の綿蚊帳を買って来て、机をその中に入れて、ランプを台の上にのせて外に出して、その中で毎夜遅くまで書<sup>ほん</sup>を読んだ。自分のまわりには——日ごとによせられる友だちの手紙には、一つとして将来の学問の準備について言つて来ないものはない。高等師範に志しているものは親友の郁治を始めとして、三四人はあるし、小島は高等学校の入学試験をうけるのでこのごろは忙しく暮らしていると言つて来るし、北川は士官学校にはいる準備のために九月には東京に出ると言つているし、誰とて遊んでいるものはなかつた。清三もこれに励まされて、いろいろ

ろな書<sup>しょ</sup>を読んだ。主僧に頼んで、英語を教えてもらつたり、その書庫<sup>ほんばこ</sup>の中から論理学や哲学史などを借りたりした。机のまわりには、文芸俱楽部や明星や太陽があるかと思うと、学校教授法や通俗心理学や新地理学や、代数幾何の書などが置かれてある。主僧が早稲田に通うころ読んだというシェークスピアのロメオやテニソンのエノックアーデンなどもその中に交っていた。

若いあこがれ心は果てしがなかつた。瞬間ごとによく変わつた。明星をよむと、渋谷の詩人の境遇を思い、文芸俱楽部をよむと、長い小説を巻頭に載せる大家を思い、友人の手紙を見ると、しかるべき官立学校に入學の計画がしてみたくなる。時には、主僧にプラトンの「アイデア」を質問してプラトニツクラヴァなどという

ことを考えてみることもあつた。「行田文学」にやる新体詩も、その狭い暑苦しい蚊帳かやの中で、外のランプの光が蒼あおい影をすかしてチラチラする机の上で書いた。

学校の校長は、検定試験を受けることをつねにすすめた。「資格さえあれば、月給もまだ上げてあげができる。どうです、林さん、わけがないから、やつておきなさい！」と言つた。

このごろでは二週間ぐらい行田に帰らずにいることがある。母が待つてているだろうとは思うが、懷ふところが冷やかであつたり、二里半を歩いて行くのがたいぎであつたり、それよりも少しでも勉強しようと思つたりして、つねに寺の本堂の一間に土曜日曜を過ごした。しかしこれといつて、勉強らしい勉強をもしなかつた。土曜

日には小畠が熊谷からきて泊まつて行つた。郁治が三日ぐらい続けて泊まつて行くこともあつた。それに、荻生君は毎日のようにやつて來た。学校から帰つてみると、あつちこつちを明けっぱなしで顔の上に団扇うちわをのせて、いい心地をして昼寝をしていることもある。かれは郵便局の閑ひまな時をねらつて、同僚にあとを頼んで、なんぞといつては、よく寺に遊びに來た。

若い二人はよく菓子を買つて来て、茶をいれて飲んだ。くず餅、あんころ、すあまなどが好物で、月給のおりた時には、清三はきっと郵便局に寄つて、荻生君を誘つて、角かどの菓子屋で餅菓子を買つて来る。三度に一度は、「和尚さん、菓子はいかが」と庫裡くりに主僧を呼びに来る。清三の財布に金のない時には荻生君が出る。

荻生君にもない時には、「和尚さんははだすみませんが、二三日のうちにおかえししますから、五十銭ほど貸してください」などと言つて清三が借りる。不在に主僧がその室へやに行つてみると、竹の皮に食い余しの餅菓子あまが二つ三つ残つて、それにいっぱいに蟻ありがたかつてゐることなどもあつた。

梅雨つゆの間は二里の泥濘どろの路みちが辛かつた。風のある日には吹きさらしの平野へいげんのならい、糸のような雨が下から上に降つて、新調の夏羽織はかまも袴はかまもしどろにぬれた。のちにはたいてい時間を計つて行つて、十銭に負けてもらつて乗合馬車に乗つた。ある日、その女も同じ馬車に乗つて発戸河岸ほつとがしの角かどまで行つた。その女といふのは、一月ほど前から、町の出はずれの四辻よつづじでよく出会つた女で、

やはり小学校に勤める女教員らしかつた。麻髪に董色の袴をはいて海老茶のメリンスの風呂敷包みをかかえていた。その四辻には庚申塚こうしんづかが立つていた。この間郁治といつしょに弥勒みろくに行く時にも例のごとくその女に会つた。

「どうしてああいう素振りそぶりをするのか僕にはわからんねえ」と清三が笑いながら言うと、「しつかりしなくつちやいかんよ、君」と郁治は声をあげて笑つた。その時、どこに勤めるのだろうといふ評判ほつばいをしたが、馬車にいつしょに乗り合わせて、発戸ほつどにある井いずみむら泉村の小学校に勤める人だということがわかつた。色の白い鼻のたかい十九ぐらいの女であつた。

雨の盛んに降る時には、学校の宿直室に泊まることもあつた。

学校に出てから、もう三月にもなるのでだいぶ教師なれがして、郡視学に参観されても赤い顔をするような初心なところもとれ、年長の生徒にばかにされるようなこともなくなつた。行田や熊谷の小学校には、校長と教員との間にずいぶんはげしい暗闘があるとかねて聞いていたが、弥勒のような田舎の学校には、そうしたむずかしいこともなかつた。師範出の杉田というのがいやにいばるのが癪にさわるが、自分は彼奴等のように校長になるのを唯一の目的に一生小学校に勤めている人間とは種類が違うのだと思うと、べつにヤキモキする必要もなかつた。校長もどつちかといえば、気が小さく神経過敏に過ぎるのがいやだが、しかしがいして温良な君子で、わる気というようなところは少しもなかつた。関

さんは例の通りの好人物、大島さんは話しが好きの合い口——清三にとつてこの小学校はあまりいごこちの悪いほうではなかつた。

清三は一人でよくオルガンをひいた。型の小さい安いオルガンで、音もそうたいしてよくはなかつたが、みずから好奇心に歌などを作つて、覚束おぼつかない音楽の知識で、譜を合わせてみたりなんかする。藤村詩集にある「海辺の曲」という譜のついた歌はよく調子に乗つた。それから若菜集の中の好きな句を選んで譜をつけひいてもみた。梅雨つゆの降りしきる夕暮れの田舎道、小さなしんとした学校の窓から、そうしたさまざまの歌がたえず聞こえたが、しかし耳を傾けて行く旅客もなかつた。

清三の教える室へやの窓からは、羽生から大越おおごえに通う街道が見え

た。雨にぬれて汚ない布を四面に垂れた乗合馬車がおりおり喇叭を鳴らしてガラガラと通る。田舎娘が赤い蹴出しを出して、メリソスの帶の後ろ姿を見せて番傘をさして通つて行く。晴れた日には、番台を頭の上にのせて太鼓をたたいて行くあめ屋、夫婦づれで編笠をかぶつて脚絆をつけて歩いて行くホウカイ節、七色の護謨風船を飛ばして売つて歩く爺、時には美しく着飾つた近所の豪家の娘なども通つた。県庁の役人が車を五六台並べて通つて行つた時には、先生も生徒もみんな授業をよそにして、その威勢のいいのにみとれていた。

清三の父親は、どうかすると、商売のつごうで、この近所まで来ることがある。縞の单衣に古びた透綾の夏羽織を着て、なからま

はげた頭には帽子もかむらず、小使部屋からこつそりはいつてきて、「清三はいましたか」と聞いた。初めはさすがにこうした父親を同僚に見られるのを恥ずかしく思つたが、のちにはなれて、それほどいやとも思わなくなつた。近所に用事が残つているというので、清三は寺に帰るのをやめて、親子いっしょに煎餅蒲団せんべいぶとんにくるまつて宿直室に寝ることなどもあつた。

その時はきつと二人して手拭いを下げる前の洗湯に行く。小川屋から例の娘が弁当をこしらえて持つて来る。食事がすむと、親子は友だちのように睦むつまじく話した。家の困る話なども出た。ありもせぬ財布から五十銭借りられて行くことなどもある。

七月にはいつも雨は続いて降つた。晴れ間には日がかつと照

つて、<sup>ねずみ</sup>鼠色の雲の絶え間から碧<sup>みどり</sup>の空が見える。畠には里芋の葉が大きくなり、玉蜀黍<sup>とうもろこし</sup>の広葉がガサガサと風になびいた。熊谷の小島は一高の入学試験を受けに東京に出かけたが、時々絵葉書で状況を報じた。英語がむずかしかったことなどをも知らせて来た。  
 郵便脚<sup>きやくふ</sup> 夫は毎日雨にぬれて山門から本堂にやつて来る。若い心にはどのようなことでもおもしろい種になるので、あつちこつちから葉書や手紙が三四通は必ず届いた。喝<sup>かつ</sup>！——と一字書いた端<sup>は</sup>は書<sup>がき</sup>があるかと思うと、蕎麦屋<sup>そばや</sup>で酒を飲んで席上で書いた熊谷の友だちの連名の手紙などもある。石川からは、相変わらずの明星攻撃、文壇照魔鏡<sup>ぶんだんしょうまきよう</sup>という渋谷の詩人夫妻の私行をあばいた冊<sup>さつ</sup>子をわざと送り届けてよこした。中にも郁治から来たのが一番多

かつた。恋の悩みは片時かたときもかれをして心を静かならしめることができなかつた。郁治はある時は希望に輝き、ある時は絶望にもだえ、ある時は自己の心の影を追つて、こうも思いああも思つた。清三の心もそれにつれて動搖せざるを得なかつた。自己の失恋の苦痛を包むためには、友の恋に対する同情の文句がおのずから誇大的にならざるを得なかつた。——独りもだゆるの悲哀は美しきかな、君が思ひに泣かぬことはあらじ——わざと和文調に書いて、末に、「この子もと罪のきづなのわなは知らず迷うて来しを捕はれの鳩」という歌を書きなどした。浦和の学校にいる美穂子の写真が机の抽斗ひきだしの奥にしまつてあつた。雪子といま一人きよ子という学校友だちと三人して撮うつした手札形で、美穂子は腰かけて花

を持つっていた。それを雪子のアルバムからもらおうとした時、雪子は、「それはいけませんよ。変なふうに写っているんですもの」と言つて容易にそれをくれると言わなかつた。雪子は被皮<sup>ひふ</sup>を着て、物に驚いたような頓狂<sup>とんきょう</sup>な顔をしていた。それに引きかえて、美穂子は明るい眼と眉とをはつきりと見せて、愛嬌<sup>あいきょう</sup>のある微笑<sup>びよう</sup>を口元<sup>くちもと</sup>にたたえていた。清三は読書につかれた時など、おりおりそれを出して見る。雪子と美穂子とをくらべてみることもある。このごろでは雪子のことを考えることも多くなつた。その時はきっと「なぜああしらじらしい、とりすましたふうをしているんだろう。いま少し打ち解けてみせてよさそうなものだ」と思う。郁治の手紙は小さい文箱<sup>ふばこ</sup>にしまつておいた。

前の土曜日には、久しぶりで行田に帰った。小畠が熊谷からやつて来るという便たよりがあつたが、運わるく日曜が激しい吹き降りなので、郁治と二人樋といから雨滴あまだれが滝のように落ちる暗い窓の下で暮らした。

次の土曜日には、羽生の小学校に朝から講習会があつた。校長と大島と関と清三と四人して出かけることになる。大きな講堂には、近在の小学校の校長やら訓導やらが大勢集まつて、浦和の師範から来た肥つた赤いネクタイの教授が、児童心理学の初步の講演をしたり、尋常一年生の実地教授をしてみせたりした。教員たちは数列に並んで鳴りを静めて 謹きん聴ちようしている。志多見しだみという所の校長は県の教育界でも有名な老教員だが、銀のような白い鬚ひげ

をなでながら、切口<sup>きりこうじょう</sup>上で、義務とでも思つてゐるような質問をした。肥つた教授は顔に微笑をたたえて、一々ていねいにその質問に答える。十一時近く、それがすむと、今度は郁治の父親や水谷というむずかしいので評判な郡視学が、教授法についての意見やら、教員の心得についての演説やらをした。梅雨<sup>つゆ</sup>は二三日前からあがつて、暑い日<sup>ひかげ</sup>影<sup>ひかげ</sup>はキラキラと校庭に照りつけた。扇の音がパタパタとそこにも、ここにも聞こえる。女教員の白地に董<sup>すみれ</sup>色<sup>いろ</sup>の袴<sup>てき</sup>が眼にたつて、額には汗が見えた。成願寺の森の中の蘆<sup>ろ</sup>荻<sup>えがお</sup>はもう人の肩を没するほどに高くなつて、剖葦<sup>よしきり</sup>が時を得顔にかしましく鳴く。

講習会の終わつたのはもう十二時に近かつた。詰襟<sup>つめえり</sup>の服を着

けた、白縞しろじまの袴に透綾すきやの羽織を着たさまざまの教員連が、校庭から門の方へぞろぞろ出て行く。校庭には有志の寄付した標本用の樹木や草花がその名と寄付者の名とを記した札をつけられて疎まばらに植えられてある。石榴ざくろの花が火の燃えるように赤く咲いているのが誰の眼にもついた。木には黄楊つげ、椎しい、檜ひのき、花には石竹、朝顔、遊蝶花ゆうちょうか、萩はぎ、女郎花おみなえしなどがあつた。寺の林には蝉が鳴いた。

「湯屋で、一日遊ぶようなところができたって言うじゃありませんか、林さん、行つてみましたか」校門を出る時、校長はこう言った。

「そうですねえ、広告があつちこつちに張つてありましたねえ、

何か浪花節なにわぶしがあるつて言うじやありませんか」

大島さんも言つた。

上町かみまちの鶴の湯にそういう催もよおしがあるのを清三も聞いて知つて  
いた。夏の間、二階を明けつ放して、一日湯にはいつたり昼寝うどんで  
もしたりして遊んで行かれるようにしてある。氷も菓子も麦酒びいるも  
餃鈍うどんも売る。ちょっとした昼飯ぐらいは食わせる準備したくもできてい  
る。浪花節も昼一度夜一度あるという。この二三日梅雨つゆがあがつ  
て暑くなつたので非常に客があると聞いた。主僧は昨日出かけて  
半日遊んで来て、

「どうせ、田舎のことだから、ろくなことはできはしないけれど、  
ちよつと遊びに行くにはいい。貞公ていこう、うまい金儲かねもうけを考えた

もんだ」と前の地主に話していた。

「どうです、林さんに一つ案内してもらおうじゃありませんか。ちようど昼時分で、腹も空いています……」

校長はこう言つて同僚を誘つた。みんな賛成した。

上町のかみまちの鶴の湯はにぎやかであつた。赤いメリンスの帯をしめた田舎娘が出たりはいつたりした。あつちこつちから贈つたビラがいっぱいに下げてあつて、貞さんへという大きな字がそこにもここにも見えた。氷見世には客が七八人もいて、この家のかみさんが襟たすきをかけて、汗をだらだら流して、せつせと氷をかいてい

る。

先生たちは二階に通つた。幸いにして客はまだ多くなかつた。

近在の婆さんづれが一組、温泉にでも来たつもりで、ゆもじ一つになつて、別の室<sup>へや</sup>にごろごろしていた。八畳の広間には、まんなかに浪花節を語る高座<sup>こうざ</sup>ができていて、そこにも紙や布<sup>ぬの</sup>のビラがヒラヒラなびいた。室は風通しがよかつた。奥の四畳半の畳は汚ないが、青田が見通しになつてゐるので、四人はそこに陣取つた。

一風呂はいつて、汗を流して来るころには、午飯<sup>ひるめし</sup>の支度<sup>ひるめし</sup>がもうできていた。赤い襷<sup>たすき</sup>をかけた家の娘<sup>うち</sup>が茶湯台<sup>ちゃゆだい</sup>を運んで來た。肴<sup>さかな</sup>はナマリブシの固い煮付けと胡瓜<sup>きゅうり</sup>もみと鶏卵にささげの汁とであつた。しかし人々にとつては、これでも結構なご馳走であつた。校長は洋服の上衣もチヨツキもネクタイもすつかり取つて汚れ目の見える肌襦袢<sup>はだじゆばん</sup>一つになつて、さも心地のよさそうな様子

であぐらをかいていたが、

「みんな平たいに、あぐらをかきたまえ。関君、どうです、服で窮屈にしていてはしかたがない」こう言つて笑つて、「私が一つビールを奢りましよう。たまには愉快に話すのもようござんすから」

やがてビールが命ぜられる。

「姐ねえさん、氷をブツカキにして持つて来てくださいな」

娘はかしこまつて下りて行く。校長が関さんのコップにつごうとすると、かれは手でコップの蓋ふたをした。

「一杯飲みたまえ、一杯ぐらい飲んだつてどうもなりやしないか

ら」

「いいえ。もうほんとうにたくさんです。酒を飲むと、あとが苦しくつて……」

とコップをわきにやる。

「関君はほんとうにダメですよ」

と、言つて、大島さんはなみなみとついだ自分の麦酒<sup>びいる</sup>を一呼吸<sup>ひいき</sup>

に飲む。

「弱<sup>じやくそつ</sup>卒<sup>こぼ</sup>は困りますな」

こう言つて校長は自分のになみなみと注<sup>つ</sup>いだ。泡が山をなして溢<sup>あふ</sup>れかけるので、あわてて口をつけて吸つた。娘がそこにブツカキ<sup>どんぶり</sup>を盆<sup>どん</sup>に入れて持つて来た。みんなが一つずつ手でつまんで麦酒<sup>びいる</sup>の中に入れる。酒を飲まぬ関さんも大きいのを一つ取つて、口の

中にほおばる。やがて校長の顔も大島さんの顔もみごとに赤くなる。

「講習会なんてだめなものですね」

校長の気焰(きえん)がそろそろ出始めた。

大島さんがこれに相槌(あいづち)をうつた。各小学校の評判や年功加俸(ねんこうかほ)

の話などが出る。郡視学の融通(ゆうづう)のきかない失策談が一座を

笑わせた。けれど清三にとつては、これらの物語は耳にも心にも遠かつた。年齢(とし)が違うからとはいえ、こうした境遇にこうして安んじている人々の気が知れなかつた。かれは将来の希望にのみ生きている快活な友だちと、これらの人たちとの間に横たわつてゐる大きな溝(みぞ)を考えてみた。

「まゝまゝしていれば、自分もこうなつてしまふんだ！」

この考えはすでにいく度となくかれの頭を悩ました。これを考えると、いつも胸が痛くなる。いてもたつてもいられないような気がする。小さい家庭の係累けいりゅうなどのためにこの若い燃ゆる心を犠牲にするには忍びないと思う。この間も郁治と論じた。「えらい人はえらくなるがいい。世の中には百姓もあれば、郵便脚夫もある。巡査もあれば下駄の歯入れ屋はいもある。えらくならんから生きていられないということはない。人生はわれわれの考えているようなせつぱつまつたものではない。もつと楽に平和に渡つて行かれるものだ。うそと思うなら、世の中を見たまえ。世の中を：」こう言つて清三は友の巧名心ばくを駁した。けれどその言葉の陰

にはまるでこれと正反対の心がかくれていた。それだけかれは激していた。かれは泣きたかった。

それを今思い出した。「自分も世の中の多くの人のように、暢の気なことを言つて暮らして行くようになるのか」と思つて、校長の平凡な赤い顔を見た。

つい麦酒を五六杯あおつた。

青い田の中を蝙蝠傘こうもりがさをさした人が通る、それは町の裏通りで、そこには路にそつて里川が流れ、川楊かわやなぎがこんもり茂つている。森には蝉せみの鳴き声が喧かまびすしく聞こえた。

一時間たつと、三人はみんな倒れてしまつた。校長は肱枕ひじまくらをして足を縮めて鼾いびきをかいているし、大島さんは仰向あおむけに胸を露あら

わに足をのばしているし、清三は赤い顔をして頭を畳につけていた。ひとり関さんは退屈そうに、次の広間に行つてビラなどを見た。三時過ぎに、清三が寺に帰つて来ると、荻生君は風通しのよい本堂の板敷きに心地よさそうに昼寝をしている。

午後の日影に剖葦よしきりがしきりに鳴いた。

## 十六

暑いある日の午後、白しろ絣がすりに袴はかまという清三の学校帰りの姿が羽生の庇ひさしの長い町に見えた。今日月給が全部おりて、懐ふところの財布が重かつた。いま少し前、郵便局に寄つて、荻生君に借りた五十銭

を返し、途中で買つて来たくず餅を出して、二人で茶を飲み飲み  
楽しそうに食つた。「どうも、これも長々ありがとう」と言つて、  
二月ほど前から借りていた鳥打ち帽とりうちを取つて返した。

「まだいいよ、君」

「でも、今日夏帽子を買うから」

「買うまでかぶつっていたまえ、おかしいよ」

「なアに、すぐそこで買うから」

「足元を見られて高く売りつけられるよ」

「なアに大丈夫だ」

で、日のカンカン照りつける町の通りを清三は帽子もかぶらず  
に歩いた。通りに硝子戸がらすを開け放した西洋雑貨商があつて、毛糸

や 麦 程 帽子が並べてある。

清三は麦程帽子をいくつか出させて見せてもらつた。十六というのがちょうどかれの頭に合つた。一円九十銭というのを六十銭に負けさせて買つた。町の通りに新しい麦程帽子がきわだつて目にかがやいた。

## 十七

美穂子は暑中休暇で帰つて來た。

その家へ行く路には夏草が深く茂つていた。里川の水は碧くみなぎつて流れている。蘆の緑葉みどりばに日影がさした。

家の入り口には、肌襦袢<sup>はだじゆばん</sup>や腰巻<sup>ゆかた</sup>や浴衣<sup>ゆかた</sup>が物干竿<sup>ものほしさお</sup>に干しつらねてある。郁治は清三とつれだつて行つた。

美穂子は白<sup>しろ</sup>絢<sup>がすり</sup>を着ていた。帯は白茶と鶯<sup>うぐいす</sup>茶<sup>ぢゃ</sup>の腹合わせをしていた。顔は少し肥えて、頬のあたりがふつくりと肉づいた。髪は例の庇<sup>ひさしがみ</sup>髪<sup>かみ</sup>に結<sup>ゆく</sup>つて、白いリボンがよく似合つた。

ビールの空<sup>あき</sup>罐<sup>びん</sup>に入れられた麦湯が古い井字形<sup>せいじがた</sup>の井戸に細い綱でつるして冷やされてあつた。井戸側には大きな葉の草がゴチヤゴチヤ生<sup>は</sup>えている。流しには菖蒲<sup>しょうぶ</sup>、萱<sup>かや</sup>などが一面にしげつて、釣瓶<sup>つるべ</sup>の水をこぼすたびにしぶきがそれにかかる。二三日前までは老母がタベごとにそこに出で、米かし桶の白い水を流すのがつねであつたが、娘が帰つて来てからは、その色白の顔がいつもはつ

きりと薄暮<sup>はくぼ</sup>の空氣に見えるようになつた。そのころには奥で父親<sup>うたか</sup>の謡<sup>うたい</sup>がいつも聞こえた。

美穂子は細い綱をスルスルとたぐつた。ビールの罐<sup>びん</sup>がやがて手に来る。結わえた綱を解いて、それを勝手へ持つて来て、土瓶に移して、コップ三つと、砂糖を入れた硝子器<sup>うつわ</sup>とを盆にのせて、兄の話している座敷へ持つて行く。

「なんにも、ご馳走はございませんけど、……これは一日井戸につけておいたんですから、お砂糖でも入れて召し上がつて……」

麦湯は氷のように冷えていた。郁治も清三も二三杯お代わりをして飲んだ。美穂子は兄のそばにすわつて、遠慮なしにいろいろな話をした。

「寄宿生活はずいぶんたいへんでしよう」

清三はこうきくと、

「えゝえゝ、ずいぶんにぎやかですよ。ほかの女学校などと違つて、監督がむずかしいのですけど、それでもやつぱり……」

「女学校の寄宿舎なんて、それはたいへんなものさ。話で聞いてもずいぶん愛想あいそがつきるよ」と北川は笑つて、「やつぱり、男の寄宿とそうたいして違ひはないんだね」

「まさか兄さん」

と美穂子は笑つた。

その室へやには西日がさした。松の影が庭から縁側に移つた。垣の外を荷車の通る音がする。

この春と同じように、二人の友だちは家への帰途を黙つて歩いた。言いたいことは郁治の胸にも清三の胸にも山ほどある。しかし二人ともそれに触れようとしなかつた。城址しろあとの鑄びた沼に赤い夕日がさして、ヤンマが蘆あしの梢こずえに一疋、二疋、三疋までとまつてゐる。子児こどもが長いもち竿ざおを持つて、田の中に腰までつかつて、おつるみの蜻蛉とんぼをさしていた。

石橋近くに来た時、

「今年は夏休みをどうする……どこかへ行くかね？」

郁治は突然こうたずねた。

「まだ、考えていないけれど、ことによると、日光か妙義に行こうと思うんだ。君は？」

「僕はそんな余裕はない。この夏は英語をいま少し勉強しなくつ  
ちゃならんから」

美穂子がこの夏休暇をここに過ごすということがなんの理由も  
なしに清三の胸に浮かんで、妬ましいような辛い心地がした。

今夜は父母の家に寝て、翌朝早く帰ろうと思つた。現に、郁治  
にもそう言つた。けれど路の角かどで郁治と別れると、急に、ここに  
いるのがたまらなくいやになつて、足元から鳥の立つように母親  
を驚かして帰途についた。明朝郁治がやつて来て驚くであろうと  
いう一種復仇ふつきゆうの快感と、束縛せられている力からまぬがれ得  
たという念と、たとえがたいさびしい心細い感とを抱いて、かれ  
はその長い夕暮れの街道をたどつた。

寺に帰つた時は日が暮れてからもう一時間ぐらいいたつた。和尚さんは庫裡の六畳の長火鉢のあるところで酒を飲んでいたが、つねに似ず元氣で、「まア一杯おやんなさい」と盃をさして、冷やっこをべつに皿に分けて取つてくれた。今まで聞かなかつた主僧の幼いころの話が出る。九歳の時、この寺の小僧によこされて、それから七八年の辛抱、その艱難は一通りでなかつた。玄関のそばの二畳にいて、この成願寺の住職になることをこのうえもない希望のように思つていた。今でも成願寺住職実円と書いた落書きがよく見ると残つてゐる。主僧は酔つて「衆寮の壁」というついこのごろ作つた新体詩を歌つて聞かせた。

「どうです、君も何か一つ書いてみませんか」

こう言つて和尚さんは勧めた。

清三の胸はこうした言葉にも動かされるほど今宵は感激していた。何か一つ書いてみよう。かれはエルテルを書いてその実際の苦痛を忘れたゲエテのことなどを思い出した。自分には才能という才能もない。学問という学問もない。友だちのように順序正しく修業をする境遇にもいない。人なみにしていては、とてもだめである。かれは感情を披瀝する詩人としてよりほかに光明を認め得るものはないとthought。

「一つ運だめしをやろう。この暑中休暇に全力をあげてみよう。自分の才能を試みてみよう」

かれは和尚さんから、種々の詩集や小説を借りることにした。

翌日学校から帰つて来ると、和尚さんは東京の文壇に顔を出して  
 いるところ集めた本をなにかと持つて来て貸してくれた。国民小説  
 という赤い表紙の四六版の本の中には、「地震」と「うき世の波」  
 と「悪因縁」<sup>あくいんえん</sup>という三編がある。それがおもしろいから読めと  
 和尚さんは言つた。「むさし野」という本もそのうちにあつた。  
 かれは「むさし野」に読みふけつた。

七月はしだいに終わりに近づいた。暑さは日に日に加わつた。  
 久しく会わなかつた発戸の小学校の女教員に例の庚申塚<sup>こうしんづか</sup>の角で  
 また二三度遡<sup>かいこう</sup>返した。白地の单衣<sup>ひとえもの</sup>に白のリボン、涼しそうな装<sup>なり</sup>  
 をして、微笑<sup>ほほえみ</sup>を傾けて通つて行つた。その微笑の意味が清三には  
 どうしてもわからなかつた。学校では暑中休暇を誰もみんな待ち

わたつていてる。暑い夏を葡萄棚の下に寝て暮らそうという人もある。浦和にある講習会へ出かけて、検定の資格を得ようとしているものもある。旅に出ようとされているものもある。東京に用足しに行こうと企てているものもある、月の初めから正午ぎりになつていたが、前期の日課点を調べるので、教員どもは一時間二時間を教室に残つた。それに用のないものも、午から帰ると途中が暑いので、日陰のできるところまで、オルガンを鳴らしたり、雑談にふけつたり、宿直室へ行つて昼寝をしたりした。清三は日課点の調べにあきて、風呂敷包みの中から「むさし野」を出して清新な趣味に渴かつした人のように熱心に読んだ。「忘れ得ぬ人々」に書いた作者の感慨、武藏野の郊外をザツと降つて通る林の時雨、水

すぐるま  
車

の月に光る橋のほとりに下宿した若い教員、それらはすべて自分の感じによく似ていた。かれはおりおり本を伏せて、頭脳を流れて来る感興にふけらざるを得なかつた。

三十日の学課は一時間で終わつた。生徒を集めた卓の前で、

テーブル

あたま  
頭脳

「皆さんは暑中休暇を有益に使わなければなりません。あまりに遊び過ごすと、せつかくこれまで教わったことをみんな忘れてしまいますから、毎日一度ずつは、本を出してお復習さらえをなさい。それから父さん母さんに世話をやかしてはいけません。桃や梨や西瓜いかなどをたくさん食べてはいけません。暑いところを遊んで来て、そういうものをたくさん食べますと、お腹なかをこわすばかりではありません。恐ろしい病気にかかるて、夏休みがすんで、学校に

来たくツても来られないようになります。よく遊び、よく学び、よく勉めよ。本にもそう書いてありますよう。九月の初めに、ここで先生といつしょになる時には、誰が一番先生の言うことをよく守つたか、それを先生は今から見ております」こう言つて、清三は生徒に別れの礼をさせた。お下げに結つた女生徒と鼻を垂らした男生徒とがぞろぞろと下駄箱のほうに先を争つて出て行つた、いずれの教室にも同じような言葉がくり返される。女教員は董色の袴をはつきりと廊下に見せて、一二、一二をやりながら、そこまで来て解散した。校庭には九連草の赤いのが日に照らされて咲いていた。紫陽花の花もあつた。

## 十八

暑中休暇はいたずらに過ぎた。自己の才能に対する新しい試みもみごとに失敗した。思いは燃えても筆はこれに伴わなかつた。五日ののちにはかれは断念して筆を捨てた。

寺にいてもおもしろくない。行田に帰つても、狭い家は暑く不愉快である。それに、美穂子が帰つているだけそれだけ、そこにいるのが苦痛であつた。かれは一人で赤城あかぎから妙義に遊んだ。

旅から帰つて来たのは八月の末であつた。その時、美穂子は、すでに浦和の寄宿舎に帰つていた。行田から羽生、羽生から弥勒みろくという平凡な生活はまた始まつた。

## 十九

学校には新しいオルガンが一台購つてあつた。初めての日はちょうど日曜日で、校長も大島さんも来なかつた。その夜は宿直室にさびしく寝た。孟蘭盆を過ぎたあとよこの夜は美しく晴れて、天の川があきらかに空に横たわつてゐる。垣にはスイツチヨガ鳴いて、村の子供らのそれをさがす提灯がそこにもここにも見える。日中は暑いが、夜は露が草の葉に置いて、人の話声がどこからともなく聞こえた。

初めの十日間は授業は八時から十時、次の十日間は十二時まで、

それから間もなく午後二時の退校となる。もうそのころは秋の気はあたりに満ちて、雨の降る日など单衣ひとりえ一枚では冷やかに感じられた。物思うかれの身に月日は早くたつた。

高等学校の入学試験を受けに行つた小島は第四に合格して、月の初めに金沢へ行つたという噂うわさを聞いたが、得意の文句を並べた絵葉書はやがてそこから届いた。その地にある兼六公園の写真はかれ的好奇心をひくに十分であつた。友の成功を祝した手紙を書く時、かれは机に打つ伏して自己の不運に泣かざるを得なかつた。

本堂の机の上には乱れ髪、落梅集らくばいしゅう、むさし野、和尚さんおしょうさんが早稲田に通うころよんだというエノツクアーデンの薄い本がのせられてあつた。かれは、「響りんりんひびき」という故郷を去るの歌

をつねに好んで吟誦した。その調子には言うに言われぬ悲哀がこもつた。庫裡の玄関の前に、春は芍薬の咲く小さい花壇があつたが、そこにそのころ秋海棠の絵のようにかすかに紅を見せて いる。中庭の萩は今を盛りに咲き乱れた。

夜ごとの月はしだいにあきらかになつた。墓地と畠とを縁取つた榛の並木が黒く空に見えて、大きな芋の葉にはキラキラと露が光つた。

夕飯のあとに、清三は墓地を歩いてみると、新にいつか墓の垣に紅白の木槿が咲いて、あかい小さい蜻蛉がたくさん集まつて飛んでいる。卒塔婆の新しいのに、和尚さんが例の禿筆をとつたのがあちこちに立っている。土饅頭の上に茶碗が水を満

たして置いてあつて、線香のともつたあととの白い灰がありありと残つて見えた。花立てにはみそ萩や女郎花などが供えられてある。古い墓も無縁の墓もかなり多かつた。一隅には行き倒れや乞食の死んだのを埋葬したところもあつた。清三は時には好奇に碑の文などを読んでみることがある。仙台で生まれて、維新の時には国事に奔走して、明治になつてからここに来て、病院を建てて、土地の者に慈父のように思われたという人の石碑もあつた。製糸工場の最初の経営者の墓は、花崗石の立派なもので、寄付金をした有志の姓名は、金文字で、高い墓石に刻りつけられてあつた。それから日清の役にこの近在の村から出征して、旅順で戦死した一等卒の墓もあつた。

この墓地とはまつたく離れて、裏の林の奥に、丸い墓石が数多く並んでいる。これは歴代の寺の住職の墓である。杉の古樹の陰に笹やら檜やらが茂つて、土はつねにじめじめとしていた。晴れた日には、夕方の光線が斜めに林にさし透つて、向こうに広い野の空がそれとのぞかれた。雨の日には、梢から雨滴あまだがボタボタ落ちて、苔蘚こけの生えた坊主の頭顱あたまのような墓石は泣くように見られた。ここの中にはいるのだなどと清三は考えた。肥つた背の高いかみさんと田舎いなかの寺に埋めておくのは惜しいような学問のある和尚さんとが、こうした淋しい平凡な生活を送っているのも、考えると不思議なような気がする。ふと、二三日前のこと思い出して、かれは微笑した。かれは日記に軽

い調子で、

「夕方知らずして、主の坊が Wife とともに湯の小さきに親しみて（？）入れるを見て、突然のこと気に毒にもまた面喰はされつ」と書いたのを思い出した。湯殿は庫裡の入り口からはいられるようになつていた。和尚さんは二月ばかり前に、葬儀に用いる棒や板などのたくさん本堂にあつたのを利用して大工を雇つて来て、そこに格好の湯殿を作つて、丸い風呂を据えて湯を立てた。  
 煙が勝手から庫裡までなびいた。その日は火をもらおうと思つて、茶の間へ行つてみると、そこには誰もいないで、笑い声が湯殿のほうから聞こえた。何気なしに行つてのぞいてみると、夫妻は小さい据風呂に目白の推し合いのようにしてはいつている。主僧は

平氣で笑つて、「これはえらいところを見られましたな」と言つた。清三にはこの滑稽な事実が、単に滑稽な事実ではなくつて、それを通して主僧の生活の状態と夫妻の間柄とがいつそうあきらかに見えたような気がした。こうして無意味に——若い時の希望も何もかも捨ててしまつて、ただ目の前の運命に服従して、さて年を過ごして、歴代の住職の墓の中に！ 清三は自分の運命に引きくらべてみた。

時には一葉舟ひとつはぶねの詩人を学んで、「雲」の研究をしてみようなどと思つたこともあつた。信濃しなのの高原に見るような複雑した雲の変化を見ることはできなかつたが、ひろい関東平野を縁取つた山々から起くる雲の色彩にはすぐれたものが多かつた。裏に出る

と、浅間の煙が正面に見えて、その左に妙義がちよつと頭を出していて、それから荒船の連山、北甘楽の連山、秩父の連山が波濤のように連なりわたつた。両神山の古城址のような形をした肩のところに夕日は落ちて、いつもそこからいろいろな雲がわきあがつた。右には赤城から日光連山が環をして続いた。秩父の雲の明色の多いのに引きかえて、日光の雲は暗色が多かつた、かれは青田を越えて、向こうの榛の並木のあたりまで行つた。野良の仕事を終わつて帰る百姓は、いつも白地の单衣を着て頭の髪を長くした成願寺の教員さんが手帳を持ちながらぶらぶら歩いて行くのに邂逅して挨拶をした。時には田の畔にたたずんで何かしきりに手帳に書きつけているのを見たこともあつた。清三

の手帳には日付と時刻とその時々に起こつたさまざまの雲の状態と色彩と、時につれて変化して行く暮雲ぼうんのさまとがだんだんくわしく記された。

「平原の雲の研究」という文をかれは書き始めた。

彼岸のちゅうにち中日には、その原稿らいこうがもうたいていできかかつていたた。その日は本堂の如来様にはめずらしくろうそく蠟燭ろうそくがともされて、和尚さんが朝のうち一時間ほど、紫の衣に錦欄きんらんの袈裟けさをかけて読經どきようをした。庭の金木犀きんもくせいは風につれてなつかしい匂いを古びた寺の室へやに送る。参詣者は朝からやつてきて、駒下駄の音がカラコロと長い鋪石道に聞こえた。墓に詣もうする人々は、まず本堂に上がつて如来様を拝み、庫裡に回つて、そこに出してある火鉢で

線香に火をつけ、草の茂つた井戸から水を汲んで、手桶を下げて墓へ行つた。寺では二三日前から日傭取りを入れて掃除をしておいたので、墓地はきれいになつていて、いつものように檻の枯葉や犬の糞くそなどが散らかつていなかつた。参詣するもののうちには、町の豪家の美しい少女もいれば、島田に結つた白粉のなかばはげた田舎娘もあつた。清三はかみさんからもらつた萩の餅に腹をふくらし、涼しい風に吹かれながら午睡ひるねをした。夢うつつの中にも鐘の音、駒下駄こまげたの音、人の語り合う声などがたえず聞こえた。

結願けちがんの日から雨がしとしと降つた。さびしい今年の秋が來

た。

かれのこのごろの日記には、こんなことが書いてある。

十月一日。

去月二十八日より不着の新聞今日一度に来る。夜、善綱氏（小僧）に算術教ふ。エノツクアーデン二十頁のところまで進む。このごろ日脚西に入り易く、四時過ぎに学校を出で、五時半に羽生に着けば日まつたく暮る。夜、九時、湯に行く。秋の夜の御堂に友の涙冷やかなり。

二日。晴。

馴れし木犀の香やうやく衰へ、裏の栗林に百舌鳥なきしきる。今日より九時始業、米ずしより夜油を買ふ。

三日。

モロコシ畠の夕日に群れて飛ぶあきつ赤し、熊谷の小畠に手

紙出す、夕波の絵かきそへて。

四日。晴。

久しく晴れたる空は夜に入りて雨となりぬ。裏の林に、秋  
雨の木の葉うつ音しづか。故郷の夢見る。

五日。土曜日。

雨をつきて行田に帰る。

六日。

一日を樂しき家庭に暮らす。小畠と小島に手紙出す。夜、細さ  
雨静かなり。

七日。

朝早く行く。稲、黃いろく色づき、野の朝の雨斜なり。<sup>ななめ</sup>夜は

学校にとまる。

八日。

雨はげしく井戸端の柳の糸乱る。今宵も学校にとまる。

九日。

早く帰る。秋雨やうやく晴れて、夕方の雲風に動くこと早く  
夕日金色こんじきの色弱し。木犀もくせいの衰へたる香においかすかに匂ふ。夜、  
新聞を見、行田への荷物包む。星かくれて、銀杏いちょうの実落つ  
ること繁し。栗の林に野分のわけたちて、庫裡くりの奥庭に一葉ちるも  
さびしく、風の音にコホロギの声寒し。

十日。

朝、行田に蚊帳かやを送り、夕方着物を受け取る。小畠より久し

ぶりにて同情の手紙を得たり。曰く「この秋の君の心！思  
へばありしこども思ひ偲ばる。『去年冬の、今年の春！』  
といふ君が言葉にも千万無量の感湧き出でて、心は遠く成願  
寺のあたり」云々。夜、星清くすんで南に低く飛ぶもの二つ、  
小畠に返事を書く。曰く、「愚痴ぐちはもうやめた。言ふまい、  
語るまい、一人にて泣き、一人にてもだえん。」

清三はこのごろの日記の去年の冬、今年の春にくらべて、いか  
にその調子が変わつたかを考えざるを得なかつた。去年の冬はま  
だ世の中はこうしたものとは知らなかつた。美しいはでやかな  
希望も前途に輝いていた。歌留多かるたを取つても、ボールを投げても  
おもしろかつた。親しい友だちの胸に利己のさびしい影を認める

ほど眼も心もさめておらなかつた。卒業の喜び、初めて世に出す  
る希望——その花やかな影はたちまち消えて、秋は來た、さびし  
い秋は來た。裏の林に熟うみ割れた栗のいがが見えて、晴れた夜は  
野分のぶがそこからさびしく立つた。長い廊下の縁は足の裏に冷やか  
に、本堂のそばの高い梧桐あおぎりからは雨滴あまだれが泣くように落ちた。

## 二十

男生徒女生徒打ち混うぜて三十名ばかり、田の間の細い路みちをぞろ  
ぞろと通る。学校を出る時は、「亀よ亀さんよ」をいつせいにう  
たつてきたが、それにもあきて、今ではてんでに勝手な真似まねをし

て歩いた。何かべちゃべちゃしゃべつている女生徒もあれば、後ろをふり返つて赤目あかんべをしてみせてている男生徒もある。赤いマンマという花をつまんで列におくれるものもあれば、蜻蛉とんぼを追いかけて畠の中にはいつて行くものもある。尋常二年級と三年級、九歳から十歳までのいたずら盛り、総じて無邪気に甘えるような举动を、清三は自己の物思いの慰藉いしゃとしてつねにかわいがつたので、「先生」——林先生」と生徒は顔を見てよくそのあとを追つた。

学校から村を抜けて、発戸ほつとに出る。青縞あおじまを織る機はたの音がそこにもここにも聞こえる。色の白い若い先生をわざわざ窓から首を出して見る機織女はたおりおんなもある。清三は袴を着けて麦稈帽子むぎわらをかぶつて先に立つと、関さんは例の詰襟の汚れた白い夏服を着て生

徒に交つて歩いた。女教師もその後ろからハンケチで汗を拭き拭きついてきた。秋はながば過ぎてもまだ暑かつた。発戸の村はずれの八幡宮に来ると、生徒はばらばらとかけ出してその裏の土手にはせのぼつた。先に登つたものは、手をあげて高く叫んだ。ぞろぞろとついて登つて行つて手をあげているさまが、秋の晴れた日の空気をとおしてまばらな松の間から見えた。その松原からは利根川の広い流れが絵をひろげたように美しく見渡された。

弥勒の先生たちはよく生徒を運動にここへつれて來た。生徒が砂地の上で相撲をとつたり、叢の中<sup>くさむら</sup>で阜斯<sup>ばつた</sup>を追つたり、汀<sup>みぎわ</sup>へ行つて浅瀬でぼちやぼちやしたりしている間を、先生たちは涼しい松原の陰で、氣のおけない話をしたり、新刊の雑誌を読んだり、仰<sup>あ</sup>

おむ  
向けに草原の中に寝ころんだりした。平凡なる利根川の長い土手、その中でここ十町ばかりの間は、松原があつて景色が眼覚めるばかり美しかつた。ひよろ松もあれば小松もある。松の下は海辺にでも見るようなきれいな砂で、ところどころ小高い丘と丘との間にには、青い草を下したぐさ草にした絵のような松の影があつた。夏はそこに色のこいなでしこが咲いた。白い帆がそのすぐ前を通つて行つた。

清三はここへ来ると、いつも生徒を相手にして遊んだ。おにぎり事の群れに交つて、女の生徒につかまえられて、前掛けで眼かくしをさせられることもある。また生徒を集めていつしょになつて唱歌をうたうことなどもあつた。こうしている間はかれには不平も

不安もなかつた。自己の不運を嘆くという心も起こらなかつた。  
 無邪気な子供と同じ心になつて遊ぶのがつねである。しかし今日  
 はどうしてかそうした快活な心になれなかつた。無邪気に遊び回  
 る子供を見ても心が沈んだ。こうして幼い生徒にはかなき慰藉を  
 求めている自分が情けない。かれは松の陰に腰をかけてようよう  
 として流れ去る大河に眺めいつた。

あるひ、学校の帰りを一人さびしく歩いた。空は晴れて、夕暮れ  
 の空気の影濃かに、野には薄の白い穂が風になびいた。ふと、路  
 の角に来ると、大きな包みを背負つて、古びた紺の脚絆に、埃  
 で白くなつた草鞋をはいて、さもつかれはてたというふうの旅人  
 が、ひよつくり向こうの路から出て来て、「羽生の町へはまだよ

ほどありますか」と問うた。

「もう、じきです、向こうに見える森がそうです」

旅人はかれと並んで歩きながら、なおりいろいろなことをきいた。  
これから川越を通つて八王子のほうへ行くのだという。なんでも  
遠いところから商売をしながらやつて来たものらしい。そのこと  
ばには東北地方の訛なまりがあつた。

「この近所に森という在郷ざいごうがありますか

「知りませんな」

「では高木たかぎというところは」

「聞いたようですが……」

やはりよくは知らなかつた。旅人は今夜は羽生の町の梅沢とい

う旅店りよてんにとまるという。清三は町にはいるところで、旅店へ行く路を教えてやつて、田圃たんばの横路を右に別れた。見ていると、旅人はさながら疲れた鳥がねぐらを求めるように、てくてくと歩いて町へはいつて行つた。何故なにゆえともなく他郷たきょうという感が激しく胸をついて起こつた。かれも旅人、われも同じく他郷の人！ こう思うと、涙がホロホロと頬ほおをつたつて落ちた。

## 二十一

秋は日に日に深くなつた。寺の境さかいにひよろ長い榛はんの林があつて、その向こうの野の黄いろく熟した稻には、夕日が一しきり明るく

さした。鴻の巣に通う県道には、薄暮に近く、空車の通る音がガラガラといつも高く聞こえる。そのころ機動演習にやつて来た歩兵の群れや砲車の列や騎馬の列がぞろぞろと通つた。林の角に歩兵が散兵線を布いていると思うと、バリバリと小銃の音が凄まじく聞こえる。寺でも、庫裡と本堂に兵士が七八人も来て泊まつた。裏の林には馬が二三十頭もつながれて、それに飲ませる水を入れた四斗桶がいくつとなく本堂の前の庭に並べられる。サベルの音、靴の音、馬のいななく声、にわかにあたりは騒々しくなつた。夜は町の豪家の門に何中隊本部と書いた寒冷紗の布が白く闇に見えて、土官や曹長が剣を鳴らして出たりはいつたりした。

それが一日二日で通過してしまうと、町はしんとしてもとの静謐にかえつた。清三は二三日前の土曜日に例のごとく行田につたが、帰つて来て、日記に、「母はつとめて言はねど、父君のさてはなんとか働きたまはば、わが一家は平和ならましを。この思ひ、いつも帰行の時に思ひ浮かばざることなし」と書いた。怠けがちに日を送つて、母親にのみ苦労をかける父親がかれにははがゆくつてしまつたがなかつた。かれは病身でそして思いやりの深い母親に同情した。顛こめかみ顛そつこうしに即効紙よふをはつて、夜更けまで賃仕事にいそしむ母親の繰り言くごとを聞くと、いかなる犠牲も堪たまえなけれどならぬといつも思う。時には、父親に内ないしょ所で、財布の底をはたいて小遣いを置いて来ることなどもある。それを父親は母親か

ら引き出してつかつた。

二三日前に帰つた時にも、あつちこつちに一円二円と細かい不義理ができて困つてゐるという話を母親から聞いた。

「行田文学」は四号で廃刊はいかんするという話があつた、石川はせつかく始めたことゆえ、一二年は続けたいが、どうも費用がかさんで、印刷所に借金ができるようでも困るからという。郁治はどうせそんな片へんぺん々たるもの出したつて、要するに道楽に過ぎんのだからやめてしまうほうが結局いいしかただと賛成する。清三はせつかく四号までだしたのだから、いま少し熱心に会員を募つのつたり寄付をしてもらつたりしたならば、続刊の計画がたつだろうと言つてみたがだめだつた。日曜日には荻生君が熊谷から来るのを

待ち受けて、いつしょに羽生へ帰つて來た。荻さんは心配のな  
さうな顔をしておもしろい話をしながら歩いた。途中で、テバ  
ナをかんで見せた。それがいかにも巧みなので、清三は体をくず  
して笑つた。清三は荻さんの無邪氣でのんきなのがうらやまし  
かつた。

朝霧の深い朝もあつた。野は秋ようやく逝<sup>ゆ</sup>かんとしてまた暑き  
こと一二日、柿赤く、蜜柑青しと、日記に書いた日もあつた。秋<sup>あ</sup>  
雨<sup>きさめ</sup>はしだいに冷やかに、漆<sup>うるし</sup>のあかく色づいたのが裏の林に見え  
て、前の銀杏<sup>いちょう</sup>の実は葉とともにしきりに落ちた。掃<sup>は</sup>いても掃い  
ても黄いろい銀杏の葉は散つて積もる。清三は幼いころ故郷の寺  
で、遊び仲間の子供たちといつしょに、風の吹いた朝を待ちつけ

て、銀杏の実を拾つたことを思い出した。それがまだ昨日のように思われる。そこに現に子供の群れの中に自分もいつしょになつて銀杏を拾つているような氣もする。月日がいつの間にかたつて、こうして昔のことを考える身となつたことが不思議にさえ思われた。このごろは学校でオルガンに新曲を合わせてみると興味をもつて、琴の六段や長唄の鉄幹てつかんの「残照」は変口調の4／4でよく調子に合つた。遅くまでかかつて熱心に唱歌の楽譜を淨じょう写しゃした。

月の初めに、俸給の一部をさいて、枕時計を買つたので、このごろは朝はきまつて七時には眼がさめる。それに、時を刻むセコンドの音がたえず聞こえて、なんだかそれが伴侶ともだちのように思わ

れる。一人で帰つて来ても、時計が待つてゐる。夜更けに目がさめてもチクタクやつてゐる。物を思う心のリズムにも調子を合わせてくれるような気がする。かれは小畑にやる端書はがきに枕時計の絵をかいて、「この時計をわが友ともわが妻とも思ひなしつつ、この秋を寺籠てらごもりするさびしの友を思へ」と言つてやつた。学校からの帰途には、路傍の尾花おばなに夕日が力弱くさして、蓼たでの花の白い小川に色ある雲がうつつた。かれは独歩ひとりぽの「むさし野」の印象をさらに新しく胸に感ぜざるを得なかつた。寺の前の不動堂の高い縁側には子傳こもりの老婆がいつも三四人集たかつて、手拍子をとつて子守唄を歌つてゐる。そのころ裏の林は夕日にかがやいて、その最後の余照よしうは山門の裏の白壁しらかべの屏にあきらかに照つた。

荻生さんはいつもやつて來た。いつしょに町に出て、することを食うことなどもあつた。「それは僕だつてのんきにばかりしてい るわけではありませんさ。けれどいくら考えたつてしまかたがない ですもの、成るようしきやならないんですもの」荻生さんは清 三のつねに沈みがちなのを見て、こんなことを言つた。荻生さん は清三のつねに悲しそうな顔をしているのを心配した。

後の月は明るかつた。裏の林に野分の渡るのを聞きながら、庫 裡の八畳の縁側に、和尚さんと酒を飲んだ。夜はもう寒かつた。

くつわむし 蟬 虫 の声もかれがれに、寒そうにコオロギが鳴いていた。

秋は日に日に寒くなつた。行田からは袴あわせと足袋とを届けて来る。

## 二十二

小畠から来た手紙の一。

今日、ある人（しひて名を除く）から聞けば、君と加藤の妹との間には多少の意義があるとのことに候ふが、それはほんたうか如何いかに、お知らせくだされたく候そうろう。

先日、加藤に会ひし時、それとなく聞きしに、そんなことは知らぬと申し候。けれどこれは兄あにが知らぬからとて、事実無根とは断言出来難がたしなど笑ひ申し候。君にも似合はぬ仕事かな。ある事はありてよし、なきことはなくてよし。一臂びの力を借さぬでもないのに、なんとか返事ありたく候。

加藤の浮かれ加減はお話にもならず、手紙が浦和から来たとて、その一節を写してみてくれろといふ始末、存外熱くなりておれることと存じ候。

秋寒し、近況如何。

### 手紙の二。

お返事難有ありがとう。

そんなことをしていられるかどうか考えてみよとのご反問の手厳しさ。てきび君の心はよくわかつた。けれど、「あんなおしゃらくは嫌ひだ」は少しひどすぎたりと思ふ。あの背の高い後ろ姿のいいところが気に入る人もあるよ。またあの

背の高いお嫌ひな人が君でなくつてはならなかつたらどうする。

「嫌ひだ」と言うたからとて、さうかほんたうに嫌ひだつたのかと新事実を発見したほどに思ふやうな僕にては無くそうちう之へ候。かう申せばまた誤解呼はりをするかもしけねど、簡単に誤解呼はりをする以上の事実があるのを僕は確かに人から聞いたの故だめに候。

この次の日曜には、行田からいま一息車いきるまを飛ばしてやつて來たまへ。この間、白滝しらたきの君に会つたら、「林さん、お変りなくつて?」と聞いていた。また例の蕎麦屋そばでビールでも飲んで語らうぢやないか。小島からこの間便りがあつ

た。このごろに杉山がまた東京の早稻田わせだに出て行くさうだ。  
 歌を難有う。思はんやきはいへそぞろむきし野に七里を北  
 へ下野しもつけの山、七里を北といへば足利あしかがではないか。君の  
 故郷ぢやないか。いつか聞いた君のファストラヴの追憶おもいで  
 ではないか。

### 手紙の三。

君の胸には何かがあるやうだ。少なくともこの間の返事で僕  
 はさう解釈した。解釈したのが悪いと言はれてもこれもしか  
 たがなしと存じ候。

加藤このごろ別号をつくりたりと申し居り候。

未央生みおうせいの号

を書きていまだ君のあたりを驚かさず候ふや。未央みおうと申せば、すでにご存じならん。未央は美穂に通ずるは言ふまでもなきことに候。「予にして加藤の二妹まいのいづれを取らんやといへば、むしろしげ子を。温順にして情に富めるしげ子を」をさなき教へ子を恋人にする小学教師のことなど思ひ出して微笑ほほえみ申し候。また君の相変らぬ小さき矜持ほりをも思ひ出し候。

#### 手紙の四。

久しぶりで快談一日、昨年の冬ごろのことと思ひ出し候。

あの日は遅くなりしことと存じ候。君の心のなかばをばわれ解したりと言ひてもよかるべしと存じ候。恋——それのみが

ライフにあらず。真に然り、真に然り、君の苦衷察するにあまりあり。君のごとき志を抱いて、世に出でし最初の秋をかくさびしく暮らすを思へば、われらは不平など言ひてはをられぬはずに候。

### 手紙の五。（はがき）

運命一たび君を屈せしむ。なんぞ君の永久に屈することあらん。君の必ずふるつて立つの時あるを信じて疑はず。

意氣の子の一人さびしの夜の秋木犀の香りしめりがちなる

これらの手紙をそろえて机の上においた。そして清三は考えた。

自分の書いてやつた返事と、その返事の友の心にひき起こしたことを細かに引きくらべて考えてみた。さらに自己のまことの心とその手紙の上にあらわれた状態とのいかに離れているかを思つた。美穂子のことからひいて雪子しげ子のことを頭に浮かべた。<sup>うわべ</sup>表面にあらわれたことだけで世の中は簡単に解釈されていく。打ち明けて心の底を語らなければ、——いや心の底をくわしく語つても、他人はその真相を容易に解さない。親しい友だちでもそうである。かれは痛切に孤独を感じた。誰も知つてくれるもののない心の寂しさをひしと覚えた。<sup>こがらし</sup>なが裏の林をドツと鳴らした。

天長節には学校で式があつた。学務委員やら村長やら土地の有志者やら生徒の父兄やらがぞろぞろ來た。勅語の箱を卓の上に飾つて、菊の花の白いのと黄いろいのとを瓶にさしてそのそばに置いた。<sup>テーブル</sup> 女生徒の中にはメリソスの新しい晴れ衣を着て、海老茶色の袴をはいたのもちらほら見えた。紋付<sup>かめ</sup>きを着た男の生徒もあつた。オルガンの音につれて、「君が代」と「今日のよき日」をうたう声が講堂の破れた硝子<sup>がらす</sup>をもれて聞こえた。それがすむと、先生たちが出口に立つて紙に包んだ菓子を生徒に一人一人わけてやる。生徒はにこにこして、お時儀<sup>じぎ</sup>をしてそれを受け取つた。ていねいに懷にしまるものもあれば、紙をあけて見るものもある。中

には門のところでもうむしやむしや食つてゐる行儀のわるい子もあつた。あとで教員連は村長や学務委員といつしょに広い講堂にテーブルを集めて、役場から持つて来た白の晒布をその上に敷いて、人数だけの椅子をそのまわりに寄せた。餅菓子と煎餅とが菊の花瓶の間に並べられる。小使は大きな薬罐に茶を入れて持つて来て、めいめいに配つた茶碗について回つた。

大君のめでたい誕生日は、茶話会さわかいでは収まらなかつた。小川屋に行つて、ビールでも飲もうという話は誰からともなく出た。やがて教員たちはぞろぞろと田圃の中の料理屋に出かける。一番あとから校長が行つた。小川屋の娘はきれいに髪を結つて、見違えるように美しい顔をして、有り合わせの玉子焼きか何かでお膳をぜん

運んだ。一人前五十銭の会費に、有志からの寄付が五六円あつた。それでビールは景氣よく抜かれる。村長と校長とは愉快そうに今年の豊作などを話していると、若い連中は若い連中で検定試験や講習会の話などをした。大島さんがコップにビールをつごうすると、女教員は手で蓋ふたをしてコップをわきにやつた。「一杯ぐら  
い、女だつて飲めなくては不自由ですな」と大島さんは元気に笑  
つた。西日が暖かに縁側にさして、狭い庭には大輪の菊が白く黄  
いろく咲いていた。畠も田ももうたいてい収穫がすんで、向こう  
のまばらな森の陰からは枯草かれぐさを燃やす煙けむりがところどころにあが  
つた。そばの街道を喇叭らっぱの音がして、例の大越おおごえがよいの乗合馬  
車が通つた。

その夜は学校にとまつた。翌日は午後から雨になつた。黄いろく色づき始めた野の 檜林 から雨滴あまだれがぽたぽた落ちる。寺に帰つてみると、障子がすつかりはりかえられて、室へやが明るくなつてゐる。荻生さんが天長節の午後から来て、半日かかつてせつせとはつて行つたという。その友情に感激して、その後会つた時に礼を言うと、「あまり黒くなつていたから……」と荻生さんはべつになんとも思つていない。「君は僕の留守に掃除はしてくれる、ご馳走は買っておいてくれる、障子ははりかえてくれる。まるで僕の細君みたようだね」と清三は笑つた。和尚さんも、「荻生君はほんとうにこまめで親切でやさしい。女だと、それはいい細君になるんだツたが惜しいことをしました」こういつてやつぱり笑

つた。

晴れた日には、農家の広場に唐箕とうみが忙わしく回つた。野からは刈り稻を満載まんさいした車がいく台となくやつて来る。寒くならないうちに晩稻おくれの収穫しゅうかくをすましてしまいたい、蕎麦そばも取つてしまいたい、麦も蒔まいてしまいたい。百姓はこう思つてみな一生懸命に働いた。十月の末から十一月の初めにかけては、もう関東平野に特色の木枯こがらしがそろそろたち始めた。朝ごとの霜は藁わらぶき葺ふきの屋根を白くした。

寺の庫裡くりの入り口の広場にも小作米こさくまいがだんだん持ち込まれる。豊年でもなんとか理屈をつけてはかりを負けてもらう算段に腐心ふしんするのが小作人の習いであつた。それにいつも夕暮れの忙わしい

時分を選んで馬に積んだり車に載せたりして運んで来た。和尚さんは入り口に出て挨拶して、まずさしで、俵から米を抜いて、それを明るい戸外に出して調べてみる。どうもこんな米ではしかたがないとか、あそこはこんな悪い米ができるはずがないがとかいろいろな苦情を持ち出すと、小作人は小作人で、それ相応な申しわけをして、どうやらこうやら押しつけて帰つて行く。豆を作つたものは豆を持つて来る。蕎麦をつくつたものは蕎麦粉を納めに来る。「来年は一つりつぱにつくつてみますから、どうか今年はこれで勘弁していただきたい。」誰もみんなそんなことを言つた。

「どうも小作人などというものはしかたがないのですな」と和お

尚さんは清三に言つた。

収穫がすむと、町も村もなんとなくにぎやかに豊かになつた。

料理屋に三味線の音が夜更けまで聞こえ、市日には呉服屋唐物屋の店に赤い蹴出しけだの娘をつれた百姓なども見えた。学校の宿直室に先生のとまつているのを知つて、あんころ餅を重箱にいつぱい持つて来てくれるのもあれば、鶏にわとりを一羽料理して持つて来てくれるものもある。寺では 夷えび 講すこう に新蕎麦をかみさんが手ずから打つて、酒を一本つけてくれた。

木枯の吹き荒れた夜の朝は、櫛ならや栗の葉が本堂の前のそこここに吹きためられている。銀杏いちょうの葉はすっかり落ちつくして、鐘鐘 楼とうろう の影がなんとなくさびしく見える。十一月の末には 手水ちょうず

## 鉢<sup>ばち</sup>に薄氷が張つた。

行田の友だちも少なからず変わつたのを清三はこのごろ発見した。石川は雑誌をやめてから、文学にだんだん遠ざかつて、訪問しても病氣で会われないこともある。<sup>うわさ</sup>噂では近ごろは料理屋に行つて、女を相手に酒を飲むという。この前の土曜日に、清三は郁治と石川と沢田とに誘われて、このごろ興行している東京の役者の出る芝居に行つたが、友の調子もいちじるしくさばけて、春あたりはあえて言わなかつた 戯<sup>じよう</sup>談<sup>だん</sup>などをも人の前で平氣で言うようになった。郁治の調子もなんとなくくだけて見えた。清三ははしやぐ友だちの群れの中で、さびしい心で黙つて舞台を見守つた。

二幕目が終わると、

「僕は帰るよ」

こう言つてかれは立ち上つた。

「帰る？」

みんなは驚いて清三の顔を見た。じょうだん 戯談かと思つたが、その

顔には笑いの影は認められなかつた。

「どうかしたのか」

郁治はこうたずねた。

「うむ、少し気分が悪いから」

友だちはそこそこに帰つて行く清三の後ろ姿を怪訝けげん そうに見送つた。後ろで石川の笑う声がした。清三は不愉快な気がした。戸お

外もとに出るとほつとした。

それでも郁治とは往来したが、もう以前のようではなかつた。

一夜あるよ、清三は石川に手紙を書いた。初めはまじめに書いてみたが、あまり余裕よゆうがないのを自分で感じて、わざと律語りつごに書き直してみた。

意氣を血を、叫ぶ声先づ消えて、

さてはまた、野に霜結むすんで枯るること、

卿等けいらうの声はまた立たず。

何んぞや一婦ふの痴ちに酔ひて、

俗の香巷かまたに狂ふ。

あゝ止みなんか、また前日の意氣なきや。

ついに止みなんか、卿等の痴態！

さて最後に咄！ という字を、一字書いて、封筒に入れてみたが、これでは友に警告するのになんだかはなはだふまじめになるような気がする。いろいろ考えたすえ、「こんなことはつまらぬ、言つてやつたつてしかたがない」と思つて破つて捨てた。

初冬の暖かい日はしだいに少なくなつて、野には寒い寒い西風が吹き立つた。日向の学校の硝子にこの間まで蠅<sup>はい</sup>がぶんぶん飛んでいたが、それももう見えなくなつた。田の刈つたあとの氷が午後まで残つてゐることもある。黄いろく紅<sup>あか</sup>く色づいた櫛<sup>なら</sup>や榛<sup>はん</sup>や栗の林も連日の西風にその葉ががらがらと散つて、里の子供が野の中で、それを集めて焚火<sup>たきび</sup>などをしているのをよく見かける。大越

街道を羽生の町へはいろいろとするあたりからは、日光の山々を盟主にした野州<sup>やしゅう</sup>の連山がことにはつきりと手にとるように見えるが、かれはいつもそこに来ると足をたたずめて立ちつくした。かれの故郷なる足利町は、その波濤<sup>はとう</sup>のように起伏した皺<sup>しわ</sup>の多い山の麓<sup>ふもと</sup>にあつた。あるひ一日、かれはその故郷の山にすでに雪の白く来たのを見た。

和尚さんも長い夜を退屈がつて、よく本堂にやつて来て話した。夜など茶をいれましたからと小僧を迎えるによこそることもある。庫<sup>くら</sup>裡<sup>り</sup>の奥の六畳、その間には、長火鉢に鉄瓶<sup>てっぴん</sup>が煮えたつて、明るい竹筒台<sup>たけづつだい</sup>の五分心<sup>らんぶ</sup>の洋燈のもとに、かみさんが裁縫をひろげていると、和尚さんは小さい机をそのそばに持つて来て、新刊の雑

誌などを見ている。さびしい寺とは思えぬほどその一間<sup>ま</sup>は明るかつた。茶請<sup>ちゃうけ</sup>は塩煎餅<sup>せんべい</sup>か法事でもらつたアンビ餅で、文壇のことやそのころの作者<sup>かたぎ</sup>氣質<sup>かたぎ</sup>や雑誌記者の話などがいつもきまつて出たが、ある夜、ふと話が旅行のこととに移つて行つた。和尚さんはかつて行つていた伊勢<sup>いせ</sup>の話を得意になつて話し出した。主僧は早稻田を出てから半歳ばかりして、伊勢の一身田<sup>いしんでん</sup>の専修寺の中学校に英語国語の教師として雇われて二年ほどいた。伊勢の大廟<sup>よう</sup>から二見の浦、宇治橋の下で橋の上から参詣<sup>さんけい</sup>人の投げる銭<sup>ぜに</sup>を網で受ける話や、あいの山で昔女がへらで銭<sup>ぜに</sup>を受けとめた話などをして聞かせた。朝熊山<sup>あさまやま</sup>の眺望、ことに全溪みな梅<sup>うめ</sup>で白いという月ヶ瀬の話などが清三のあくがれやすい心をひいた。それ

から京都奈良の話もその心をひき寄せるに十分であつた。和尚さんの行つた時は、ちょうど四月の休暇のころで、祇園嵐山の桜は盛りさかであつた。

「行違ふ舞子の顔やおぼろ月」という紅葉こうよう山人さんじんの句を引いて、新京極しんきょうごくから三条の橋の上の夜のにぎわいをおもしろく語つた。

その時は和尚さんもうかれ心になつて雪駄せつたを買って、チャラチャラ音をさせて、明るいにぎやかな春の町を歩いたという。奈良では大仏、若草山、世界にめずらしいブロンズの仏像、二千年昔の寺院などいうのをくまなく見た。清三の孤独なさびしい心はこれを聞いて、まだ見ぬところまだ見ぬ山水まだ見ぬ風俗にあくがれざるを得なかつた。「一生のうち一度は行つてみたい」こう思

つてかれは自己のおぼつかない前途を見た。

年の暮れはしだいに近寄つて來た。行田の母からは、今年の暮  
れはあつちこつちの 借銭しゃくせん が多いから、どうか今から心がけて、  
金をむやみに使つてくれぬようになると言つてよこした。蒲団が薄い  
ので、蝦えびのようにながめて寝る足は終夜暖まらない。<sup>うち</sup> 宅に言つ  
てやつたところでだめなのは知れているし、でき合いを買う余裕  
もないのに、どうかして今年の冬はこれで間に合わせるつもりで、  
足のほうに着物や羽織や袴はかまをかけたが、日ごとにのる夜寒よさむをし  
のぐことができなかつた。やむなくかれは米ずしから四布蒲団を  
一枚借りることにした。その日の日記に、かれは「今夜よりやう  
やく暖かに寝ることを得」と書いた。

行田から羽生に通う路は、吹きさらしの平野のならい、顔も向けられないほど西風が激しく吹きすきんだ。日曜日の日の暮れぐれに行田から帰つて来ると、秩父の連山の上に富士が淡墨色にはつきりと出ていて、夕日が寒く平野に照つていた。途中で日がまつたく暮れて、さびしい田圃道たんばみちを一人でくと歩いて来ると、ふとすれ違つた人が、

「赤城山あかぎさんなア、山火事さんぼみだんべい」

と言つて通つた。

ふり返ると、暗い闇を通して、そこあたりと覚しきところにはたして火光があざやかに照つて見えた。山火事！ 赤城の山火事！

！ 関東平野に寒い寒い冬が來たという徵しるしであつた。

今年の冬籠りのさびしさを思いながら清三は歩いた。

## 一二十四

「林さん、……貴郎は家の兄と美穂子さんのこと知つてて？」

雪子は笑いながらこうきいた。

「少しは知つています」

清三はやや顔を赤くして、雪子の顔を見た。

「このごろのことも存じ？」

「このごろツて……この冬休みになつてからですか」

「ええ」

雪子は笑つてみせた。

「知りません」

「そう……」

とまた笑つて口をつぐんでしまつた。

昨日、冬期休暇になつたので、清三は新しい年を迎えるべく羽生から行田の家に來た。美穂子が三四日前に、浦和から帰つて來ているということをも聞いた。今朝加藤の家を訪問したが、郁治は出ていなかつた。すぐ帰りかけたのを母親と雪子が、「もう帰るでしようから」とてたつてとめた。

清三は、くわしく聞きたかつたが、しかしその勇気はなかつた。胸がただおどつた。

雪子が笑つて いるので、

「いつたいどうしたんです？」

「どうしたつて いうこともないんですけど……」

やつぱり笑つて いた。やがて、

「変なことおうかがいするようですが……貴郎あなたは兄と北川さん  
とのことで、何か思つていらつしやることはなくつて？」

「いいえ」

「じゃ、貴郎あなた、二人の中にはいつてどうかしたツて いうようなこ  
とはなくつて」

「知りません」

「そう」

雪子はまた黙つてしまつた。

しばらくしてから、

「私、小畠さんから変なこと言われたから、……  
「変なことツて？ どんなことです」

「なんでもありませんけどもね」

話が謎のようでいつさい要領を得なかつた。

午後、とにかく北川に行つてみようと思つて沼の縁ふちを通つてい  
ると、向こうから郁治がやつて來た。

「やあ！」

「どこに行つた？」

「北川へちよつと」

「僕も今行こうと思つていた」と清三はわざと快活に、「Art先生帰つているツていうじやないか」

「うむ」

二人はしばらく黙だまつて歩いた。

「いつたいどうしたんだ?」

しばらくして清三がきいた。

「何が?」

「しらばつくれてるねえ、君は? 僕はちゃんと聞いて知つて

よ」

「何を?」

「大いに発展したツていうじやないか」

「誰が話した？」

「ちゃんと知つてゐるさ！」

「誰も知つてゐるものはないはずだがな」と言つて考えて、「ほんとうに誰が話した？」

「ちゃんと材料は上がつてゐるさ」

「誰だろうな！」

「あててみたまえ」

少し考えて、

「わからん」

「小畠が君、君のシスターに何か言つたことがあるかえ？」

僕の

ことで

「ああ、妹いもうとがしゃべったんだな、彼奴あいつ、ばかな奴だな！」

「まア、そんなことはいいから、僕のいうことを返事しましたえ」

「何を」

「小畠が君のシスタアに何か言つたかツていうことだよ」

「知らんよ」

「知らんことはないよ、僕が君と Art の関係について、中にはいつてるとかどうしたとか言つたことがあるそうだね」

「うむ、そういうえばある」と郁治は思い出したというふうで、

「君が北川によく行くのはどうかしたんじやないかなんて言つたことがある」

「君のシスタアについても何か先生言いやしなかつたか」

「戯談(jiyou dan)は言つたかもしらんが、くわしくはよく知らん」

二人は黙つて歩いた。

## 二十五

郁治と美穂子との「新しき発展」について、清三はいろいろとくわしく聞いた。雪子から美穂子にやる手紙の中に郁治が長い手紙を入れてやつたのは一月ほど前であつた。やがて郁治にあてて長い返事が来た。その返事をかれはその夜とある料理屋で酒を飲みながら清三に示した。その手紙には甘い恋の言葉がところどころにあつた。郁治の手紙を寄宿舎の暗い洋燈(lantern)の光のもとでくり返

しきり返し読んだことなどが書いてある。お互にまだ修業中であるから、おっしゃるとおり、社会に成功するまで、かたい交際を続けたいということも書いてある。これで見ると、郁治もそんなことを言ってやつたものとみえる。清三はその長い手紙を細かく読むほどの余裕はなかつた。かれは飛び飛びにそれを見たが、ところどころの甘い蜜のような言葉はかれの淋しい孤独の眼の前にさながらさまざまの色彩でできた花環<sup>はなわ</sup>のようにちらついて見えた。酒に酔つて得意になつて、友のさびしい心をも知らずに、平気におのろけを言う郁治の態度が、憎くもあり腹立しくもあり気の毒にもなつた。清三はただフンフンと言つて聞いた。

「その代わり僕は僕のできる限りにおいて、君のために 尽<sup>じんりょく</sup>力<sup>りょく</sup>

するさ！」

こんなことを郁治はいく度も言つた。

「小畠もそんなことを言つていたよ。僕だつて、君の心地こころもちぐらいは知つているさ」

こんなことをも言つた。

郁治はまた石川のこのごろ溺おぼれている加須かぞの芸者の話をした。

「先生、このごろは非常に熱心だよ。君も知つてるだろうが、自転車を買ってね、遠乗りとおのりをするんだとかなんとか言って、毎日のように出かけて行くよ。東京から来た小蝶こちようとかいう女で、写真を大事にして持つていたよ。金持ちの息子なんていうものの心はまるでわれわれとは違うねえ君。勉強なんぞしないでも、りつぱ

に一人前になつていかれるんだからねえ』

できるだけの力をつくすと言つた言葉、その言葉の陰に雪子がいることを清三はあきらかに知つていた。けれどそれが清三にはあまりうれしくは思われなかつた。つんとすました雪子の姿が眼の前を通つてそして消えた。かれはいまさらに美穂子の姿のいつそう強い影をその心に印<sup>いん</sup>しているのを予想外に思つた。こういう道行きになるのはかれもかねてよく知つていたことである。ある時はそうなるのを友のために祈つたことすらある。けれど想像していた時と事実となつた時との感ははなはだしく違つた。

清三の心はさびしかつた。自己の境遇が実際生活の上からも、恋愛の上からも、学問修業という上からも、ますます消極的に傾

いてきて、たとえば柱と柱との間に小さく押しつけられてしまつたような気がした。初めはどうしても酔わなかつた酒が、あとになるとその反動で激しく発して来て、帰るころには、歌をうたつたり詩を吟じたりして郁治を驚かした。

しかし一段落を告げたというような気がないでもなかつた。恋を失つたのはつらいが、恋に自由を奪われなかつたのはうれしいような気もする。今までの友だちに対しての気持ちも少しく離れて、かえつて自己をあきらかに眼の前に見るようになつた。

かれは懐に金を七円持つていた。その中のいく分を父母の補助に出すつもりであつたが、旅行をする気がないでもないので、わざとそれをしてしまつておいた。年の暮れももう近寄つて來た。西風

が毎日のように関東平野の小さな町に吹きあれた。乾物屋の店には数の子が山のように積まれ、肴屋には鮭が板台の上にいくつとなく並べられた。旧暦で正月をするのがこの近在の習慣なので、町はいつもに変わらずしんとして、赤い腰巻をした田舎娘も見えなかつた。郡役所と警察署と小学校とそれにおもだつた富豪などの注連飾りがただ目に立つた。

六畳には炬燵がしてあつた。清三は多くそこに日を暮らした。雑誌を読んだり、小説を読んだり、時には心理学をひもといてみることなどもあつた。そばでは母親が賃仕事のあい間を見て清三の綿衣を縫っていた。午後にはどうかすると町へ行つて餅菓子を買つて来て茶をいれてくれるなどもある。一夜尿が吹き

荒れて、雨に交つて霧が降つた。父と母と清三とは炬燵を取りまして戸外おもてに荒るるすさまじい冬の音を聞いていたが、こうした時に起こりかけた一家の財政の話が愚痴ぐちっぽい母親の口から出て、借金の多いことがいく度となくくり返された。

「どうも困るなア」

清三は長大息ためいきを吐いた。

「いま少し商売がうまく行くといいんだが、どうも不景氣でなア。何をやつたツてうまいことはありやしない」

父親はこう言つた。

「ほんとうにお前には気の毒だけれど毎月いま少し手伝つてもらわなくつては——」母親は息子の顔を見た。

「それは私は僕約をしているんですよ、これで……」と清三は言った、「煙草もろくろく吸わないぐらいにしているんですけどけれど……」

「お前にはほんとうに氣の毒だけれど……」

「父さんにもいま少しかせいでもらわなくつちや——」

清三は父に向かつて言つた。

父は黙つていた。

財政の内容を持ち出して、母親がくどくどとなお語つた。<sup>かた</sup>清三は母親に同情せざるを得なかつた。かれは熱心に借金の不得策<sup>ふとくさく</sup>なのを説いて、貧しければ貧しいように生活しなければならぬことを言つた。最後にかれはしまつておいた金を三円出して渡した。

友だちを訪問しても、もう以前のようにおもしろくなかった。

郁治はたえずやつて来るが、こつちからはめつたに出かけて行かない。会うとかならず美穂子の話が出る。それを聞くのが清三にはこの上なくつらかつた。北川にも行つてみようとは時々思うが、なんだか女々しいような気がしてよした。散歩もこのごろは野が寒く、それにあたりに見るものもなかつた。かれは退屈すると一軒おいて隣の家に出かけて行つて、日当たりのいい縁側に七歳八歳ぐらいの娘の児を相手に、キシャゴ<sup>はじ</sup>弾きなどをして遊んだ。

髪の長い眉の美しい児がその中にあつた。警察に転任して来た警部とかの娘で、まだ小学校へもあがらぬのに、いろはも数学もよく覚えていた。百人一首もとびとびに譜<sup>あんしょう</sup>誦<sup>よ</sup>して、恋歌など

を無意味なかわいい声で歌つて聞かせた。清三は一から十六までの数を加減して試みてみたが、たいていはまちがいなくすらすらと答えた。かれはセンチメンタルな心の調子で、この娘の児のやがて生いたたん行く末を想像してみぬわけにはいかなかつた。

「幸あれよ。やさしき恋を得よ」こう思つたかれの胸には限りなき哀愁がみなぎりわたつた。

熊谷に出かけた日は三十日で、西風が強く吹いた。小島も桜井も東京から帰つていた。小畠はことに熱心にかれを迎えた。けれどかれの心は昔のように快活にはなれなかつた。旧友はみな清三の蒼い顔に沈んだ調子と消極的な言葉とをあやしみ見た。清三はまたいつそう快活になつた友だちに対てなんだか肩身が狭いよせま

うな気がした。

熊谷の町はにぎやかであつた。ここでは注連飾りが町家の軒<sup>のき</sup><sub>しめ</sub>ごとに立てられて、通りの角<sup>かど</sup>には年の暮れの市が立つた。<sup>だいだい</sup>注連、昆布<sup>こんぶ</sup>、鰯<sup>えび</sup>などが行き通う人々の眼<sup>め</sup>にあざやかに見える。どの店でも弓張り<sup>ゆみは</sup>提灯<sup>ちようちん</sup>をつけて、肴屋<sup>さかなや</sup>には鮓、ごまめ、数の子、唐物屋<sup>うぶつや</sup>には毛糸、シャツ、ズボン下などが山のように並べられてある。夜は人がぞろぞろと通りをひやかして通つた。

大晦<sup>おおみそか</sup>日の朝、清三はさびしい心を抱いて、西風に吹かれながら、例の長い街道をてくてくと行田に帰つた。いまさらに感ぜられるのは、境遇につれて変わり行く人々の感情であつた。昨年の今ごろ、こうしたことがあろうとは夢にも思つておらなかつた。

親しい友だちの間柄がこういうふうに離れ離れになろうとは知らなかつた。人は境遇の動物であるという言葉をかれはこのごろある本で読んだことがある。その時は、そんなことがあるものかとよそごとに思つてすてた。けれどそれは事実であつた。

家に帰つてみると、借金取りはあつちこつちから來ていた。母親がいちいち頭を下げて、それに応対しているさまは見るにしおびない。父親は勘定が取れぬので、日の暮れるころ、しょぼしょぼとしおれた姿で帰つて来る。「あゝあゝ、しかたがねえ！」と長大息ためいきをついて、予算の半分ほどもない財布を母に渡した。清三は見かねて、金をまた二円出した。

夜になつてから、母親は巾着きんちやくの残りの錢をじやらじやら音

をさせながら、形ばかりの年越しをするために町に買い物に行つた。のし餅を三枚、ゴマメを一袋、鮭を五切れ、それに明日の煮染<sup>しめ</sup>にする里芋を五合ほど風呂敷に包んで、重い重いと言つてやがて帰つて來た。その間に父親は燈明を神棚<sup>かみだな</sup>と台所と便所とにつけ、火鉢には火をかつかつと起こしておいた。やがて年越しの膳<sup>ぜん</sup>はできる。

父親ははげた頭を下げて、しきりに神棚を拝んでいたが、やがて膳に向かつて、「でも、まあ、こうして親子三人年越しのお膳に向かうのはめでたい」と言つて、箸<sup>はし</sup>を取つた。豆腐汁に鮭、ゴマメは生<sup>なま</sup>で二疋<sup>ひき</sup>ずつお膳につけた。一室は明るかつた。

母親は今夜中に仕立ててしまわねばならぬ裁縫物<sup>しごと</sup>があるので、

遅くまでせつせと針を動かしていた。清三はそのそばで年賀状を十五枚ほど書いたが、最後に毎日つける日記帳を出して、ペンで書き出した。

### 三十一日。

今歳ことしもまた暮れ行く。

思ひに思ひ乱れてこの三十四年も暮れ行かんとす。

思ふまじとすれど思はるるは、この年の暮れなり。

かくて最後の決心はなりぬ。

無言、沈黙、実行。

われは運命に順したがふの人ならざるべからず。とても、とても、かくてかかる世なれば、われはた多くは言はじ。

明星、新声来る。

ああ終<sup>つ</sup>に終に三十四年は過ぎ去りぬ。わが一生において多く忘るべからざる年なりしかな。

言はじ、言はじ、ただ思ひいたりしつはこれよ、曰く、かかる世<sup>よの</sup>なり、一人言はで、一人思はむ。ああ。

かれは日記帳を閉じてそばにやつて新着の明星を読み出した。

## 二十六

一月一日。（三十五年）

これは三年の前、小畠と優<sup>ゆう</sup>なる歌記<sup>うたる</sup>さんと企<sup>くわだ</sup>て綴<sup>つづ</sup>りたる

が、その白きままにて今日まで捨てられたるを取り出でて、  
今年の日記書きに行く。

□去年、それもまだ昨日、終に世のかくてかかるよと思ひ定めては、またも胸の乱れて口やかましく情とくすべも知らず。草深き里に一人住み、一人自から高うせんに如かじ。かくては意氣なしと友の笑はんも知らねど、とてもかからねばならぬわが世の運命、それに逆はん勇なきにはさらさらあらねど、二十余年めぐみ深き母の歎きに、ままよ二年三年はかくてありともくやしからじと思へばこそよ。さてかく行かんとする今年の日記よ、言はじ、ただ世にかしこかれよ、ただ平和なれよ。ついにただ無言なれよ。

□恋は遂に苦しきもの、われ今またこれを捨つるもくやしからじ。加藤のそれ、かれの心事しんじ、懷ふところに剣をかくすを知ぬにあらねど、争はんはさすがにうしろめたく、さらばとてかれもまたかかる人とは思ひ捨てんこそ世にかしこかるべし。

□今日始めて熊谷の小畠に手紙出す。

二日。

昨夜鈴木にて一夜幼き昔を語りあかす。

□ああわれをして少年少女を愛せしめよ。またもかくての世に神は幸さちを幼きものにのみ下したまへり、ああわれをして幼きものを愛せしめよ。

□ AH ! それやなんなるぞ、とてもあさましき恋に争はんとにはあらじと思へば、時にいふがごとき冷静も乱れんも知れじを、ああなどて好ましからぬ思ひの添ふぞ、はかなきことなるかな。ああ終<sup>つい</sup>に終にかくてかかるなり。

□ 夕方西に紅の細<sup>くれないほそ</sup>き雲棚<sup>たなび</sup>引き、上<sup>のぼ</sup>るほど、うす紫より終に淡墨<sup>うすすみ</sup>に、下に秩父の山黒々とうつくしけれど、そは光あり力あるそれにはあらで、冬の雲は寒く寂しき、例<sup>たと</sup>へんに恋にやぶれ、世に捨てられて終に冷えたるある者の心のごときか。

三日。

昼<sup>こ</sup>より風出でて梢鳴<sup>すゑな</sup>ることしきりなり、冬の野は寒きかな、

荒む嵐のすさまじきかな。人の世を寒しと見て野に立てば、さてはいづれに行かん。タベの迷ひにまたも神に「救へ」と呼ばんの願ひなきにあらず。

#### 四日。

夕方、沢田来る。加藤われらを勧めすすて北川にかるた取りに行く。かれやなんらの友情も知らぬもの、友を売りてわが利を得んとするものか。また例の「君の望むことにてわが力にてでき得べき限りにおいて言へ」を言ふ。われ曰く「なし」と。この言げんはたして、かれの心よりの言葉か。

#### 五日。

たまく学友会の大会に招かれて行く。すなはち立ちて、

「集会において時間の約を守るべき」とにつきて述べる。

かくのごとき会合において演壇に立ちしは初めてなれば心少しくためらひなきにあらざりしが、思ひしより冷静をもつてをはりたり。余興として小燕林こえんりんの講談あり。

六日。

加藤と雪子と鈴木君の妹の君とかるた取る。

□夜、戸の外に西風寒く吹く。ああわれはこの力弱き腕を自己を、高きに進ますすら容易ならざるに、なほも一人の母と一人の父とのために走らざるべからざるか、さもあらばあれ、冷酷なる運命の道にすさむ嵐をしてそのままに荒しめよ。われに思ふ所あり、なんぞ妄みだりに汝なんじの渦かちゅう中に落

ち入らんや。

松は男の立ち姿

意地にやまけまい、ふけふけ嵐、

枝は折れよと根は折れぬ（正直正太夫）

□このごろの廻こがらしに、さては南の森陰に、弟の弱きむくろは  
いかにあるらん。心のみにて今日も訪はず。かくて明みょうに

日ちは東に行く身なり。

七日。

羽生の寺に帰る。

心にはかくと思ひ定めたれど、さすがに冬枯れの野は淋しきかな。

□○子よ、御身おんみは今はたいかにおはすや。笑止やわれはなほ御身こを恋へり。さはれ、ああさはれとてもかかる世ならばわれはただ一人恋うて一人泣くべきに、何とて御身わざらを煩はすべきぞ。

主の僧ととろろ食うて親しく語る。夜、寒し。

九日。

今朝けさ、この冬、この年の初雪を見る。

夜、荻生君來たり、わがために炭と菓子とをもたらす。冷やかなる人の世に友の心の温かさよ。願はくばわれをして友に誠ならしめよ。（夜十時半記）

□十日より二十日まで

この間十日余り一日、思ひは乱れて寺へも帰らず。かくて  
 老いんの願ひにはあらねど、さすが人ひとなみみかしこ並賢く悟りたるもの  
 を、さらでも尚とやせんかくやすらんのまどひ、はては  
 神にすがらん力もなくて、人とも多くは言はじな、語らじ  
 なと思へば、いとものうくて、日ごろ親しき友に文書ふみかかん  
 も厭や、行田へ行かんも厭いとふにはあらねどまたものうく、  
 かくて絵もかけず詩も出でず、この十日は一人過ぎぬ。

□土曜日に荻生君來たり一夜を語る。情深く心小さき友！

□加藤は恋に酔えひ、小畠はみづから好んで俗に入る。この  
 間、かれの手紙に曰く「好んで詩人となるなかれ、好んで  
 俗物となるなかれ」と。ああさても好んでしかも詩人とな

り得ず、さらばとて俗物となり得ず。はては惑ひのとやかくと、熱き情のふと消え行くらんやう覚えて、失意より沈黙へ、沈黙より冷静に、かくて苦笑に止まらん願ひ、とはにと言はじ、かくてしばしよと思へば悲しくもあらじ。され木枯吹きすきむ夜半<sup>よわ</sup>、幸多き友の多くを思ひては、またもこの里のさすがにさびしきかな、ままよ万事かからんのみ、奮励<sup>ふんれい</sup>一番飛<sup>ばんと</sup>び出でんかの思ひなきにあらねど、また静かにわが身の運命を思へば……、ああしばしさかくてありなん。

乱るる心を静むるのは幼き者と絵と詩と音楽と。

近き数日、黙々として多く語らず、一人思ひ思ふ。……

こういうふうにかれの日記は続いた。昨年の春ごろにくらべて、心の調子、筆の調子がいちじるしく消極的になつたのをかれも気がつかずにはいられなかつた。時には昨年の日記帳をひもといて読んでみることなどもあるが、そこには諧謔かいぎやくもあれば洒落しゃれもある。笑いの影がいたるところに認められる。今とくらべて、世の中の実際を知らぬだけそれだけのんきであつた。

消極的にすべてから——恋から、世から、友情から、家庭からまったく離れてしまおうと思うほどその心は傷ついていた。寺の

本堂の一間はかれにはあまりに寂しかつた。それに二里足らずの路みちを朝に夕べに通うのはめんどうくさい。かれは放浪ほうろうする人々のように、宿直室べやに寝たり、村の酒屋に行つて泊まつたり、時には寺に帰つて寝たりした。自炊じしがものういので、弁当をそこここで取つて食つた。駄菓子などで午餐ひるめしをすましておくことなどもある。本堂の一間に荻生さんが行つてみると、主あるじはたいてい留守で、机の上には塵ぢりが積もつたまま、古い新声と明星めいぜいとがあたりに散らばつたままになつてゐる。和尚おしようさんは、「林君、どうしたんですか、あまり久しく帰つて来ませんが……学校に何か忙しいことでもあるんですかねえ」と言つた。荻生さんが心配して忙しい郵便事務の閑すきを見て、わざわざ弥勒みろくまで出かけて行くと、清三

はべつに変わったようなところもなく、いつも無性<sup>ぶじょう</sup>にしている  
 髪もきれいに刈り込んで、にこにこして出て來た。「どうもこの  
 寒いのに、朝早く起きて通うのが辛いものだからねえ、君、ここ  
 で小使といつしょに寝ていれば、小供がぞろぞろやつてくる時分  
 までゆっくりと寝て いられるものだから」などと言つた。八畳の  
 一間で、長押<sup>なげし</sup>の釘には 古袴<sup>ふるばかま</sup>だの三尺帯だのがかけてある。机  
 には生徒の作文の朱で直しかけたのと、かれがこのごろ始めた水  
 彩画の写生しかけたのとが置いてあつた。教授が終わつて校長や  
 同僚が帰つてから、清三は自分で出かけて菓子を買つて来て二人  
 で食つた。かれは茶を飲みながら二三枚写生したましい水彩画を  
 出して友に示した。学校の門と、垣で夕日のさし残つたところと、

暮靄ぼあい

の中に富士の薄く出ているところと、それに生徒の顔の写生が一枚あつた。荻生さんは手に取つて、ジツと見入つて、「君もなかなか器用ですねえ」と感心した。清三はこのごろ集めた譜のついた新しい歌曲をオルガンに合わせてひいてみせた。

冬はいよいよ寒くなつた。昼の雨は夜の霧みぞれとなつて、あくれば校庭は一面の雪、早く来た生徒は雪達磨ゆきだるまをこしらえたり雪合戦ゆきがっせんをしたりしてさわいでいる。美しく晴れた軒には雀がやかましく百囀ももさえずりをしている。雪の来たあとの道路は泥濘でいねいが連日乾かず、高い足駄あしだもどうかすると埋まつて取られてしまうことなどもある。乗合馬車は屋根の被おおいまではねを上げて通つた。

机の前の障子にさし残る冬の日影は少なくとも清三の心を沈

静させた。なるようにしかならんという状態から、やがて「自己のつくすだけをつくしていさぎよく運命に従おう」という心の状態になつた。<sup>ためいき</sup>嘆息と涙とのあとに、静かなさびしいしかし甘い安静が來た。<sup>みぞれ</sup>霧の降る夜半に、「夜は寒みあられたばしる音しきりさゆる寝覚めを（母いかならん）」と歌つて家の母の情を思つたり、「さむきさびしき夜半の床も、さはれ心静かなれば、さすがに苦しからじ」と日記に書いてみずから独り慰めたりした。またある時は、「思うことなくて暮らさばや、わが世の昨日は幸なきにもあらず、幸ありしにもあらず」と書いた。またある日の日記には、「昨夜、一個の老鼠、係蹄にかかる。哀れる者よ。汝も運命のしものを免がれ得ぬ不運児か。ひそかに救け得させべく

ば救けも得さすべきを、われも汝をかくすべき縁持つ人間なればぞ、哀れなるものよ、むしろ汝は夜ごとの餌に迷ふよりは、かくてこのままこの係蹄わなに終われ。哀れなるものよ」と書いてあつた。日曜日を羽生の寺にも行田の家にも行かず、「今日は日曜日、またしても一日をかくてここに過ごさんと一人朝は遅くまでいねたり」と書いて宿直室に過ごした。

郁治も桜井も小畠も高等師範の入学試験を受けるために浦和に行つたという知らせがあつた。孝明天皇祭の日を久しぶりで行田に帰つてみると、話相手になるような友だちはもう一人もいなかつた。雪子は例のしらじらしい態度でかれを迎えた。かれはむしろ快活な無邪気なしげ子をなつかしく思うようになつた。帰る時、

母親は昨日からたんせいして煮てあつた鮒のさんろ煮を折りに入れて持たせてよこした。

このごろはまつたく世に離れて一人暮らした。新聞もめつたには手にしたことはない。第五師団の分捕問題、青森第三連隊の雪中行軍凍死問題、鉱毒事件、二号活字は一面と二面とに毎日見える。平生ならば、新聞を忠実に注意して見るかれのこととて、いろいろと話の種にしたり日記をつけておいたりするのであるが、このごろはそんなことはどうでもよかつた。人が話して聞かせても、「そうですか」と言つて相手にもならなかつた。愛読していた涙香の「巖窟王」も中途でよしてしまつた。学校の庭の後ろには、竹藪が五十坪ほどあつて、夕日がいつも

その葉をこして宿直室にさしこんでも来るが、ある夜、その向こうの百姓家から「福は内、鬼は外」と叫ぶ爺の声がもれて聞こえた。「あ、今日は節分かしらん」と思つて、清三は新聞の正月の絵付録日記を出してみた。それほどかれは世事にうとく暮らした。

毎日四時過ぎになると、前の銭湯の板木の音が、静かな寒い茅葺屋根の多い田舎の街道に響いた。

羽生の和尚さんと酒を飲んで、

「どうです、一つ社会を風靡するようなことをやろうじやありますせんか。なんでもいいですから」

こんなことを言うかと思うと、「自分はどんな事業をするにしても、社会の改良でも思想界の救済でも、それは何をするにして

も、人間として生きている上は生きられるだけの物質は得なければならない。そしてそれはなるべく自分が社会につくした仕事の報酬として受けたいと自分は思う。それには自分は小学校の教員からだんだん進んで中学程度の教員になろうか。それとも自分はこの高き美しき小学教員の生涯を以て満足しようか」などと考えることもある。一方には多くの友だちのようにはなばなしく世の中に出で行きたいとは思うが、また一方では小学教員を尊い神聖なものにして、少年少女の無邪気な伴侣はんりょとして一生を送るほうが理想的な生活だとも思つた。友に離れ、恋に離れ、社会に離れて、わざとこの孤独な生活に生きようというような反抗的な考えも起つた。

ある日校長が言った。「どうです。そうして毎日宿直室に泊まつているくらいなら、寺から荷物を持って来て、ここに自炊なりなんなりしているようにしたら……。そうすれば、私のほうでもわざわざ宿直を置かないでいいし、君にも間代まだいが出なくって経済になる。第一、二里の道を通うという労力がはぶける」羽生の和尚さんもこの間行つた時、「いつたいどうなさるんです、こうあけていらしつては間代を頂戴するのもお気の毒だし……それに、冬は通うのにずいぶん大変ですからなア」と言つた。清三は寺に寄宿するころの心地と今の心地といちじるしく違つてきたことを考えずにはいられなかつた。そのころからくらべると、希望も目的も感情もまったく違つてきた。「行田文学」も廃刊した。文学

に集まつた友の群れも離散りさんした。かれ自身にしても、文学書類を読むよりも、絵画の写生をしたり、音楽の譜の本を集めてオルガンを鳴らしてみたりすることが多くなつた。それに、行田にもそうたびたびは行きたくなくなつた。かれは月の中ごろに蒲団ふとんと本箱とを羽生の寺から運んで来た。

## 二十七

「喜平きへいさんな、とんでもねえこんだツてなア」

「ほんにさア、今朝行く時おら、己おのアでつくわしだアよ、網イ持つて行くから、この寒いのに日振りひぶに行くけえ、ご苦労なこつちや

なアツて挨拶しただアよ。わからねえもんただよなア」

「どうしてまアそんなことになつたんだんべい?」

「ほんにさ、あすこは掘切ほつきりで、なんでもねえところだがなア」

「いつたいどこだな」

「そら、あの西の勘三さんの田ン中の掘切ごで死ねていたんだツて  
よ。泥深い中に体からだ<sub>が</sub>半分突はんぶんっささつたまま、首いこうたれてつ  
めたくなつたんだツてよ」

「あつけねえこんだなア」

「今日ははア、御賽おさい日にちだツてに。これもはア、そういう縁縁を持  
つて生まれて來たんだんべい」

「わしらもはア、この春はるア、日振りひぶなんぞはよすべいよ」

湯氣の籠つた狭い銭湯の中で、村の人々はこうした噂をした。

喜平といふのは、村はずれの小屋に住んでいる、五十ばかりの爺で、雜魚や鱈を捕えては、それを売つて、その日その日の口をぬらしていた。毎日のようく汚ないふうをして、古いつくろつた網をかついで、川やら掘切やらに出かけて行つた。途中で学校の先生や村役場の人などにでつくわすと、いつもていねいに辭儀をした。それが今日掘切の中でこごえて死んでいたという。清三は湯につかりながら、村の人々のさまざまに噂し合うのを聞いていた。こうして生まれて生きて死んで行く人をこうして噂し合つてゐる村の人々のことを考えずにはいられなかつた。古網を張つたまま、泥の中にこごえた体を立てて死んでいた爺のさまをも想

像した。茫とした湯氣の中に水槽に落ちる水の音が聞こえた。

## 二十八

授業もすみ、同僚もおおかた帰つて、校長と二人で宿直室で話していると、そこに、雑魚売りざつこがやつて來た。

「旦那、鮒ふなをやすく買わんけい」

障子しようじを開けると、にこにこした爺じいが、びくをそこに置いて立つていた。

「鮒はいらんなア」

「やすく負けておくで、買ってくんないせい」

校長さんは清三を顧みて、「君はいりませんか、やすけりや少し買つて甘露煮にしておくといいがね」と言つた。で、二人は縁側に出てみた。

二つの びくには、五寸ぐらいから三寸ぐらいの鮒が金色の腹を光らせてゴチャゴチャしている。

「少し小さいな」

と校長さんは言つた。

「小さいどころか、甘露煮にするにはこのくらいがごくだアな。それに、板倉で取れたんだで、骨は柔らけい」

種類としては質のいい鮒なのを校長はすぐ見てとつた。利根川を渡つて一里、そこに板倉沼というのがある。沼のほとりに雷

とねがわ  
らいで

電でんを祭まつった神社じんじゃがある。そこらあたりは利根川りねがわの河床かわせよりも低い卑湿地ひしつちで、小さい沼ぬまが一面にあつた。上州じょうしゅうから来る鮒ますや雑魚ざつこのうまいのは、ここらでも評判ひょうばんだ。

「幾いくがけだね？」

「七なら高くはねえと思うんだが」

「七は高い！」

「目方めがたをよくしておくだで七で買つてくんない

「五ぐらいならいいが」

「五なんてそんな値はねえだ。じゃいま半分引くべい」

清三は校長さんの物を買うのに上手じょうしゅなのを笑つて見ていた。六  
がけで話が決まつて、小使おけいがそこに桶おけと摺り鉢ばちとを運んで來た。

ピンとするほどはかりをまけた鮎はヒクヒクと鰓を動かしている。

おやじ

爺はやがて錢ぜにを受け取つて軽くなつた びく をかついで帰つて行く。

「やすい、やすい。これを煮ておきや、君、十日もありますよ」

こう言つて校長さんは、鮎の中でも大きいのを一尾つかんで、「どうも、上州の鮎はいい、コケがまるでこつちで取れたのとは違うんですからな」と言つて清三に示した。半分に分けて、小桶に入れて、小使が校長さんの家に持つて行つた。

その日は鮎の料理に暮れた。まないた 炉板の上でコケを取つて、金

串しにそれをさして、囲爐裏いろうりに火を起こして焼いた。小使はその

そばでせつせと草鞋わらじを造つてゐる。一疋ぴきで金串がまったく占められるような大きなのも二つ三つはあつた。薄くこげるくらいに焼

いて、それを藁わらにさした。

「ずいぶんあるもんだね」と数えてみて、「十九串くしある」「やすかつただ、校長さん負けさせる名人だ。これくらいの鮒で六つていう値があるもんかな」

小使はそばから言つた。

試みに煮てみようと言うので、五串ばかり小鍋に入れて、焜爐こんろにかけた。寝る時味あじわつてみたが骨はまだ固かたかつた。

自炊生活は清三にとつて、けつきよく気楽でもあり経済でもあつた。多くは豆腐と油揚げと乾鮭からざけとで日を送つた。鮒の甘露煮は二度目に煮た時から成功した。砂糖をあまり使い過ぎたので、分けてやつた小使は「林さんの甘露煮は菓子を食うようだア」と

言つた。生徒は時々萩の餅やアンビ餅などを持つて来てくれる。

もろこしともちごめ糰米この粉で製したという餡餅あんこうなどをも持つて来てくれる。どうかして勉強したい。田舎いなかにいて勉強するのも東京に出て勉強するのも心持ち一つで同じことだ。学費を親から出してもらう友だちにも負けぬように学問したいと思つて、心理学や倫理学などをせつせと読んだが、余儀なき依頼で、高等の生徒に英語を教えてやつたのが始まりで、だんだんナショナルの一や二を持つて教わりに来るものが多くなつて、のちには、こう閑ひまをつぶされてはならないと思いながら、夜はたいてい宿直室に生徒が集まるようになつた。

二月の末には梅が咲き初めた。障子を開けると、竹藪たけやぶの中に

花が見えて、風につれていい匂いがする。

あるひ  
一日、かれは机に向かつて、

ひな  
鄙はさびしきこの里に

さきて出でにし白梅や、

一枝えいだきてただ一人

低くしらぶる春の歌、

と歌つて、それを手帳に書いた。淋しい思いが脈々として胸に上のぼつた。ふとそばに古い中学世界に梅の絵に鄙ひな少女おとめを描いた絵葉書のあるのを発見した。かれはそれを手に取つてその歌を書いて、「都を知らぬ鄙少女」と署しょして、さてそれを浦和の美穂子のもとに送ろうと思つた。けれど監督の厳重な寄宿舎のことを思つ

てよした。ふと美穂子の姉にいく子というのがあつて、音楽が好きで、その身も二三度手紙をやり取りしたことがあるのを思い出して、譜をつけてそこにやることにした。

かれは夕暮れなど校庭を歩きながら、この自作の歌を低い声で歌つた、「低くしらぶる春の歌」と歌うと、つくづく自分のさびしいはかない境遇が眼の前に浮かび出すような気がして涙が流れた。

このごろ、友だちから手紙の来るのも少なくなつた。熊谷の小畠にも、この間行つた時、処世上の意見が合わないので、議論をしたが、それからだいぶうとうとしく暮らした。郁治から来る手紙には美穂子のことがきつと書いてあるので、返事を書く気にも

ならなかつた。それに引きかえて、弥勒の人々にはだいぶ懇意になつた。このころでは、どこの家いえに行つても、先生先生と立てられぬところはない。それに、同僚の中でも、師範校出のきざな意地の悪い教員が加須かぞに行つてしまつたので、気のおける人がなくなつて、学校の空気がしつくり自分に合つて來た。

物日ものびの休みにも、日曜日ひようびにも、たいてい宿直室でくらした。利根川を越えて一里ばかり、高取たかとりというところに天満宮があつて、三月初旬の大祭には、近在から境内けいだいに立錐りつすいの地もないほど人々が参詣した。清三も昔一度行つてみたことがある。見世物、露店わにてん——鰐口わにぐちの音がたえず聞こえた。ことに、手習てならいが上手になるようにと親がよく子供をつれて行くので、その日は毎年学校が

休みになる。午後清三が宿直室で手紙を書いていると、参詣に行つた生徒が二組三組寄つて行つた。

## 二十九

発戸には機屋はたやがたくさんあつた。市ごとに百反いちたん以上町に持つて出る家がすくなくとも七八軒はある。もちろん機屋といつても軒をつらねて部落をなしているわけではない。ちよつと見ると、普通の農家とはあまり違つていない。蠶豆そらまめ、莢豌豆さやえんどうの畠がまわりを取り巻いていて、夏は茄子なすびや胡瓜きゅうりがそこら一面にできる。玉蜀黍とうもろこしの広葉ひろばもガサガサと風になびく。

けれど家の中にはいると、様子がだいぶ違う、藍瓶が幾つとなく入り口の向こうにあつて、そこに染工職人がせつせと糸を染めている。白い糸が山のように積んであると、そのそばで雇い人がしきりにそれを選り分けている。反物を入れる大きな戸棚も見える。

前の広庭には高い物干し竿が幾列びにも順序よく並んでいて、朝から紺糸こんいとがずらりとそこに干しつらねられる。糸を繰る座繰ざぐりの音が驟雨しゅううのようになつちこつちからにぎやかに聞こえる。

機屋のまわりには、賃機ちんばたを織る音が盛さかんにした。

あたりの村落のしんとしているのに引きかえて、ここには活気が充っていた。金持ちも多かつた。他郷からはいつて来た若い男

女もずいぶんあつた。

発戸は風儀の悪い村と近所から言われてゐる。埼玉新報の三面種にもきつとこの村のことが毎月一つや二つは出る。機屋の亭主が女工を片端から姦して牢屋に入れられた話もあれば、利根川に臨んだ崖から、越後の女と上州の男とが情死をしたことなどもある。街道に接して、だるま屋も二三軒はあつた。

八月が来ると、盛んな盆踊りが毎晩そこで開かれた。学校に宿直していると、その踊る音が手にとるように講堂の硝子にひびいてはつきりと聞こえる。十一時を過ぎても容易にやみそうな気勢もない。昨年の九月、清三が宿直に当たつた時は、ちょうど月のさえた夜で、垣には虫の声が雨のように聞こえていた。「発戸

の盆踊りはそれは盛んですが、林さん、まだ行つてみたことがないんですか。それじゃぜひ一度出かけてみなくつてはいけません……けれど、林さんのような色男はよほど注意しないといけませんぜ、袖そでぐらいちぎられてしまいますからな」と訓導の杉田が笑いながら言つた。しかし清三は行つてみようとも思わなかつた。ただそのおもしろそうな音が夜ふけまで聞こえるのを耳にしたばかりであつた。

そのほかにも、発戸ほつとのことについて、清三の聞いたことはいくらもあつた。一二年前まではここに男ぶりのいい教員などが宿直をしていると、発戸の女は群れをなして、ずかずかと庭からはいつて来て、ずうずうしく話をしていくことなどもあつたという。

それから生徒を見ても、発戸の風儀の悪いのはわかつた。同じ行儀の悪いのでもそこから来る生徒は他とは違っていた。野卑な歌を口ぐせに教場で歌つて水を満たした茶碗を持つて立たせられる子などもあつた。

春になつて、野に董すみれが咲くころになると、清三は散歩を始めた。

古ぼけた茶色の帽子をかぶつた背のすらりとしたやせぎすな姿はそこににもここにも見えた。百姓は学校の若い先生が野川の橋の上に立つて、ぼんやりと夕焼けの雲を見ているのを見たこともあるし、朝早く役場の向こうの道を歩いているのに出会うこともあるた。役場の小使と立ち話をしていることあれば、畠にいる人々と挨拶あいさつしていることもある。時には、学校の女生徒を、二三人

つれて、林の中で花を摘<sup>つ</sup>ませて花束を作らせたりなんかしていることなどもある。

弥勒野の林の角<sup>かど</sup>で、夕暮れの空を写生していると、

「やア、先生だ、先生だ！」

「先生が何か書いてらア」

「やア画を描<sup>か</sup>いてるんだ！」

「あの雲を描いてるんだぜ」

などと近所の生徒がぞろぞろとそのまわりに集まつて来る。

「うまいなア、先生は」

「それは当たり前よ、先生じゃねえか」

「あああれがあの雲だ」

「その下のがあの家だ」<sup>うち</sup>

黙つて筆を運ばせていると、勝手なことを言つてしゃべつてい  
る。どうしてあんなうまく書けるのかと疑うかのように、じつと  
先生の顔をのぞきこむ子などもあつた。翌日学校に行くと、その  
生徒たちはめずらしいことを見て知つているというふうにそれを  
他の生徒に吹き聴いた。<sup>ふいちょう</sup>「先生、昨日書いてた絵を見せてくだ  
さい！」などと言つた。

清三はだんだん近所のことにくわしくなつた。林の奥に思いも  
かけぬ一軒家があることも知つた。豪農の家の檻<sup>かし</sup>の垣の向こうに  
楊<sup>やなぎ</sup>の生えた小川があつて、そこに高等二年生で一番できる女生徒  
の家があることをも知つた。その家には草の茂つた井戸があつて

桔※<sup>はねつるべ</sup>がかかつていた。ちょうどその時その娘はそこに出ていた。

「お前の家はここだね」と言つて通り抜けようとする、「おかさん、先生が通るよ!」と言つた。母親は小川で後ろ向きになつてせつせと何か物を洗つていた。加須<sup>かぞ</sup>に通う街道には畠があつたり森があつたり榛<sup>はん</sup>の並木があつたりした。ある時櫛<sup>なら</sup>の林の中に色のこい董<sup>すみれ</sup>が咲いていたのを発見して、それを根ごしにして取つて来て鉢<sup>はち</sup>に植えて机の上に置いた。村をはずれると、街道は平<sup>へいた</sup>坦<sup>たんぽ</sup>な田圃<sup>たんぼ</sup>の中に通じて、白い塵<sup>ちりほこり</sup>埃<sup>埃</sup>がかすかな風にあがるのが見えた。機回り<sup>はたまわ</sup>の車やつかれた旅客などがおりおり通つた。

ある夜、学校の前の半鐘が激しく鳴つた。竹藪の向こうに出て見ると、空がぼんやり赤くなつてゐる。やがてその火事は手古<sup>てこばや</sup>

林であったことがわかつた。翌々日の散歩に、ふと気がつくと、清三はその焼けた家屋の前に立つてゐるのを発見した。この間焼けたのはこの家だなとかれは思つた。それは村道に接した一軒家で、藁わらでかこつた小屋掛けがもうその隅にできていた。焼けあとには灰や焼け残りの柱などが散らばつていて、井戸側の半分焼けた流しもとでは、櫛たすきをした女がしきりに膳ぜんわん椀を洗つてゐる。小屋掛けの中からは村の人が出たりはいつたりしてゐる。かれは平和な田舎に忽然として起こつた事件を考えながら歩いた。一夜の不意のできごとのために、一家の運命に大きな頓座とんざを来たすべきことなどをも思いやらぬわけにはいかなかつた。金銭のどうどい田舎では新たに一軒の家屋を建てるためにもある個人の一生を

激しい労働についやさねばならぬのである。かれはただただ功名に熱し学問に熱していく熊谷や行田の友人たちをこうしたハードライフを送る人々にくらべて考えてみた。続いて日ごとに新聞紙上にあらわれる豪い人々のライフをも描いてみた。豪い人にはそれはなりたい、りつぱな生活を送りたい。しかし平凡に生活している人もいくらもある。一家の幸福——弱い母の幸福を犠牲にしてまでも、功名におもむかなくってはならぬこともない。むしろ自分は平凡なる生活に甘んずる。こう考えながらかれは歩いた。

寒い日に体からだを泥の中につきさしてこごえ死んだ爺おやじの掘切ほつきりにも行つてみたことがある。そこには葦あしと萱かやとが新芽を出して、蛙かわづが音を立てて水に飛び込んだ。森の中には荒れはてた社やしろがあつたり、

林の角からは富士がよく見えたり、田に蓮華草が敷いたように  
 みごとに咲いていたりした。それにこうして住んでみると、聞く  
 ともなしに村のいろいろな話が耳にはいる。家事を苦にして用水  
 に身を投げた女の話、旅人にだまされて林の中に引つ張り込まれ  
 れて強姦された村の子守りの話、三人組の強盗が抜刀で上  
 村の豪農の家にはいつて、主人と細君とをしばり上げて金を奪  
 つて行つた話、繭の仲買いの男と酌婦と情死した話など、  
 聞けば聞くほど平和だと思つた村にも辛い悲しいライフがあるの  
 を発見した。地主と小作人との関係、富者と貧者はなはだし  
 懸隔、清い理想的の生活をして自然のおだやかな懷に抱かれて  
 いると思つた田舎もやっぱり争闘の巷利欲の世であるということ

がだんだんわかつてきた。

それに、田舎は存外 猥褻で淫靡で不潔であるということもわかつてきた。人々の 噂話にもそんなことが多い。やれ、どこ の娘はどうしたとか、どこのかみさんはどこの誰と不義をしていとか、誰はどこにこつそり妾をかこつておくとか、女のことで夫婦喧嘩が絶えないとか、そういうことがたえず耳を打つ。それに、そうした噂がまんざら虚偽でないという 証拠も時には眼にもうつつた。

かれは一日、また利根川のほとりに生徒をつれて行つたが、その夜、次のような新体詩を作つて日記に書いた。

松原遠く日は暮れて

利根のながれのゆるやかに

ながめ淋しき村の里の

ここに一年ひととせかりの庵いお

はかなき恋も世も捨てて

願ひもなくてただ一人

さびしく歌ふわがうたを

あはれと聞かんすべもがな

かれは時々こうしたセンチメンタルな心になつたが、しかしこ

れはその心の状態のすべてではなかつた。村の若い者が夜遅くな

つてから、栗橋の川向こうの四里もある中田まで、女郎買いに行

く話をもおもしろがつて聞いた。大越から通う老訓導は、酒でものむと洒脱な口ぶりで、そこから近いその遊廓の話をして聞かせることがある。群馬埼玉の二県はかつて廃娼論の盛んであつた土地なので、その管内にはだるまばかり発達して、遊廓がない。足利の福井は遠いし、佐野のあら町は不便だし、こらから若者が出かけるには、茨城県の古河か中田こがなかだかに行くよりほかしかたがない。中田には大越まで乗合馬車の便がある。大越から土手の上を二里ほど行つて、利根の渡しをわたれば中田はすぐである。「店があれでも五六軒はありますかなア。昔、奥州街道が栄えた時分には、あれでもなかなかにぎやかなものでしたが、今ではだめですよ。私など、若い時にはそれはよく出かけたもの

ですなア。利根川の渡しをいつも夕方に渡つて行くんだが、夕焼けの雲が水にうつって、それはおもしろかつたのですよ」と老訓導は笑つて語つた。

時には、

「今の若い者はどうもかた過ぎる。学問をするから、どうしてもそんなことはばかばかしくつてする気になれんのかしれんが、海え老茶びちゃとか、屁ひき髮しがみとかに關係をつけると、あとではのつぴきならんことが起こつて、身の破滅になることもある。それに、一人で書ほんばかり読んでいるのは、若い者には好し惡しですよ、神經衰弱になつたり、華嚴けいんに飛び込んだりするのはそのためだと言うじやありませんか。青瓢箪あおびょうたん」のような顔をしている青年ばかりこし

らえちや、学問ができる思想が高尚になつたつて、なんの役にも  
たたん、ちと若い者は浩然こうぜんの氣を養うぐらいの元気がなくつち  
やいけませんなア」

などという。

清三が書籍ばかり見て、蒼あおい顔をして、一人さびしそうにして

宿直室にいると、「あんまり勉強すると、肺病ほんが出ますぜ、少し  
遊ぶほうがいい。学校の先生だつて、同じ人間だ。そう道徳倫理  
で束縛そくばくされては生命がつづかん」こう言つて笑つた。校長が師  
範学校から出た当座、まだ今の細君ができる時分、川越でひど  
い酌婦にかかるつて、それがばれそうになつて転校した話や、つい  
この間までいた師範出の教員が小川屋の娘に気があつて、毎晩張

りに行つた話などをして聞かせたのもやはり、この老訓導であつた。宿直室に来てから、清三はいろいろな実際を見せられたり聞かせられたりした。中学校の学窓や親の家や友だちのサアクルや世離れた寺の本堂などで知ることのできないことをだんだん知つた。

### 発戸ほつと

発戸のほうに散歩をしだしたのは、田植え唄が野に聞こえるころからであつた。花が散つてやがて若葉が新しい色彩を村にみなぎらした。路の角で機かど<sub>はた</sub>を織つている女の前に立つて村の若者が何かしやべつていると、女は知らん顔でせつせと梭おさを運んでいる。機屋はたの前には機回りの車が一二台置いてあつて、物干しに並べてかけた紺糸が初夏の美しい日に照らされている。藍あいの匂いがどこ

からともなく、パンとして来る。竹藪の陰からやさしい唄がかすかに聞こえる。

加須街道方面とはまつたく違った感じをかれに与えた。むこうはしんとしている。ひとけ人にとぼしい。娘などもあまり通らない。

がいして活気にとぼしいが、こちらはどの家にもこの家にも糸を繰る音と機を織る音とがひつきりなしに聞こえる。村から離れて、田圃たんばの中に、飲食店が一軒あつて夕方など通ると、若い者が二三人きつと酒を飲んでいる。亭主はだらしないふうで、それを相手にむだ話をしている。かかあ嶋は汚ない鼻たらしの子供を叱つている。

発戸ほつとの右に下村君しもむらぎみ、堤つつみ、名村なむらなどという小字こあざがあつた、藁葺わらぶ屋根きやねが、晨あしたの星のように散らばつてゐるが、ここでは利根川は少し

北にかたよつて流れているので、土手に行くまでにかなりある。土手にはやはり発戸河岸<sup>がし</sup>のようにところどころに赤松が生えていた。しの竹も茂つていた。朝露のしどどに置いた草原の中に薊<sup>あざみ</sup>やら撫子<sup>なでしこ</sup>やらが咲いた。

土手の上をのんきそうに散歩しているかれの姿をあたりの人々はつねに見た。松原の中にはいつて、草をしいて、喪心<sup>そうしん</sup>した人のように、前に白帆のしずかに動いて行くのを見ていることもある。「学校の先生さん、いやに蒼い顔しているだア。女さア欲しくなつたんだんべい」と土手下の元気な婆<sup>ばばあ</sup>が言つた。機織り女の中にも、清三の男ぶりのいいのに大騒ぎをして、その通るのを待ち受けて出て見るものもある。下村君<sup>しもむらぎみ</sup>の村落にはいろいろとする

ところに、大和障子<sup>やまとしようじ</sup>を半分あけて、せつせと終日機を織つてゐる女がある。丸顔の、眼のぱつちりした、眉<sup>まゆ</sup>の切れのいい十八九の娘であつた。清三はわざわざ回り道していつもそこを通つた。

見かえる清三の顔を娘も見かえした。

ある時こういうことがあつた。土手の松原から発戸のほうに下りようとすると、向こうから機織り女<sup>はた</sup>が三人ほどやつて來た。清三はなんの気もなしに近寄つて行くと、女どもはげたげた笑つてゐる。一人の女が他の一人を突つくと、一人はまた他の一人を突つついた。清三は不思議なことをしていると思つたばかりで、同じ調子で、ステッキを振りながら歩いて行つた。坂には両側からしげつた檜<sup>なら</sup>の若葉が美しく夕日に光つてチラチラした。通りすが

る時、女どもは路をよけて、笑いたいのをしいて押さえたという  
ような顔をして、男を見ている、からかう気だなということが始  
めてわかつたが、しかしひだん悪い氣もしなかつた。侮辱さ  
れたとも氣まりが悪いとも思わなかつた。むしろこつちからも相  
手になつてからかつてやろうかと思うくらいに心の調子が軽かつ  
た。通り過ぎて一二間行つたと思うと、女どもはげたげた笑つた。  
清三がふり返ると一番年かさの女がお出でお出でをして笑つてい  
る。こつちでも笑つて見せると、ずうずうしく ふたあしみあし  
一步三歩近寄つて来て、

「学校の先生さん！」

一人が言うと、

「林さん！」

「いい男の林さん！」

と続いて言つた。名まで知つているのを清三は驚いた。

「いい男の林さん」もかれには、いちじるしく意外であつた。曲がり角でふり返つて見ると、女どもは坂の上の路にかたまつて、こちらを見ていた。

川向こうの上州の赤岩付近では、女の風儀の悪いのは非常で、学校の教員は独身ではつとまらないという話を思い出した。なんでもそこでは、先生が独身で下宿などをしてると、夏の夜など五人も六人も押しかけて行つて、無理やりにつれ出してしまっていきう。しかたがないから、夜は鍵<sup>かぎ</sup>をかけておく。こうそこにつとめ

ていた人が話した。かれは心にほほえみながら歩いた。

だるまやもそこに一二軒はあつた。昼間はいやに蒼い顔をした女がだらしのないふうをして店に出ているが、夜になると、それがみんなおつくりをして、見違つたようにきれいな女になつて、客を対手あいてにキヤツキヤツと騒いでいる。だんだん夏あおが来て、その店の前の棚たなの下には縁台が置かれて、夕顔の花が薄暮はくぼの中にはつきりときわだつて見える。

「貴郎あなた、どうしたんですよ、このごろは」

「だッてしかたがない、忙しいからナア」

「ちゃんと種たねは上あがつてるよ、そんなこと言つたツて」

「種があるなら上げるさ」

「憎らしい、ほんとうに浮氣者！」

ピシヤリと女が男の肩を打つた。

「痛い！ ばかめ」

と男が打ちかえそうとする。女は打たれまいとする。男の手と女の腕とが互いにからみあう。女は体からだを斜めにして、足を縁台の外に伸ばすと、赤い蹴出けだしと白い腿もものあたりとが見えた。

清三はそうしたそばを見ぬようにして通つた。

夜はことに驚かれた。路みちのほとりに若い男女がいく組みとなく立ち話をしている。闇には、白地の浴衣ゆかたがそこにもここにも見える。笑う声があつちこつちにした。

今年の夏休みがやがて來た。小畠と郁治とは高等師範の入学試

験に合格して、この九月からは東京に行くことにきまつた。桜井は浅草の工業学校に入学した。その合格の知らせが来たのは五月ごろであつたが、かれは心の煩悶はんもんをなるたけ表面に出さぬようにして、落ち着いた平凡なふつうの祝い状を三人に出しておいた。六月に、行田に行つた時に、ちよつと郁治に会つたが、もう以前のような親しみはなかつた。会えば、さすがに君僕で隠すところなく話すが、別れていれば思い出すことがすくなく、したがつて、訪問もめつたにしなかつた。

美穂子にも一度会つた。頬ほお<sub>こ</sub>のあたりが肥えて、眼にはやさしい表情があつた。けれど清三の心はもうそれがために動かされるほどその影がこくうつておらなかつた。ただ、見知り越しの女の

ように挨拶<sup>あいさつ</sup>して通つた。やがて八月の中ころになつて郁治は東京に行つた。石川もこのごろは病氣で鎌倉に行つてゐる。熊谷の友だちで残つてゐるものは、学校にいるころもそう懇意<sup>こんい</sup>にしていなかつた人々ばかりだ。清三もつまらぬから、どこか旅でもしてみようかと思つた。けれど母親の苦しい家計を見かねて五円渡してしまつたので、財布にはもういくらも残つていない。近所の山にも行かれそうにもない。で、月の二十日には、どうせ狭い暑い家<sup>うち</sup>に寝てるよりは学校の風通しのよい宿直室のほうがいいと思つて、弥勒<sup>みろく</sup>へと帰つて來た。途中で、久しぶりで成願寺に寄つてみると、和尚<sup>おしゃう</sup>さんは昼寝をしていた。

風通しのよい十畳で話した。和尚さんはビールなどを出してチ

ヤホヤした。ふと、そこに 傘髪に結つて、紫色の 銘仙の矢  
がすり がすり を着て、白足袋をはいた十六ぐらいの美しい色の白い娘が出て來た。

帰りに荻生さんに会つて聞くと、

「あれは、君、和尚さんの姪だよ。夏休みに東京から來てるんだよ。どうも、田舎の土臭い中に育つた娘とは違うねえ。どこかハイカラのところがあるねえ」

こう言つて笑つた。荻生さんはいぜんとしてもとの荻生さんで、町の菓子屋から餅菓子を買つて来てご馳走した。郵便事務の暑い忙しい中なかで、暑中休暇もなしに、不平も言わずに、生活している。友だちのズンズン出て行くのをうらやもうともしない。清三の心

持ちでは、荻生さんのようなあきらめのよい運命に従順な人は及びがたいとは思うが、しかしながらよくあきたらないような気がする。楽しみもなく道楽もなくよくああして生きていられると思う。その日、「どうです、あまりつまらない。一つ料理屋へでも行つて、女でも相手にして酒でも飲もうじやありませんか」と言うと、「酒を飲んだッてつまらない」と言つて賛成しなかつた。

清三は暑い木陰のないほこり道を不満足な気持ちを抱いて学校に帰つて來た。

盆踊りがにぎやかであつた。空は晴れて水のような月夜が幾夜か続いた。樽拍子たるびようしが唄につれて手にとるように聞こえる。そのにぎやかな氣勢けはいをさびしい宿直室で一人じつとして聞いてはいらなかつた。清三は誘われてすぐ出かけた。

盆踊りのあるところは村のまん中の広場であつた。人が遠近からぞろぞろと集まつて来る。樽拍子の音がそろうと、白い手拭いをかむつた男と女とが手をつないで輪をつくつて調子よく踊り始める。上手な音頭取りにつれて、誰も彼も熱心に踊つた。

九時過ぎからは、人がますます多く集まつた。踊りつかれると、あとからあとからも新しい踊り手が加わつて来る。輪はだんだん大きくなる。樽拍子はますますさえて来る。もうよほど高くな

つた月は向こうのひろびろした田から一面に広場を照らして、木の影の黒く地に印した間に、踊り子の踊つて行くさまがちらちらと動いて行く。

村にはぞろぞろと人が通つた。万葉集のかがいの庭のことがそれとなく清三の胸を通つた。男はみな一人ずつ相手をつれて歩いている。猥褻わいせつなことを平気で話している。世の羈絆きはんを忘れて、この一夜を自由に遊ぶという心持ちがあたりにみちわたつた。垣の中からは燈光あかりがさして笑い声がした。向こうから女づれが三四人來たと思うと、突然清三は袖そでをとらえられた。

「学校の先生！」

「林さん！」

「いい男！」

「林先生！」

嵐のように声を浴びせかけられたと思ったのも瞬間であつた。

両手を取られたり後ろから押されたり組んだ白い手の中にかかえ込まれたりして、争おうとする間に二三間たじたじとつれて行かれた。

「何をするんだ、ばか！」

と言つたがだめだつた。

月は互いに争うこの一群をあきらかに照らした。女のキヤツキヤツと騒ぐ声があたりにひびいて聞こえた。

「やア、学校の先生があまつちよにいじめられている！」と言つ

て笑つて通つて行くものもあつた。  
 樽拍子たるびようしの音が唄につれて、  
 ますます景氣づいて來た。

### 三十一

秋季皇靈祭の翌日は日曜で、休暇が二日続いた。大祭の日は朝から天気がよかつた。清三はその日大越の老訓導の家に遊びに行つて、ビールのご馳走になつた。帰途についたのはもう四時を過ぎておつた。

古い汚ないひさし廂の低い弥勒みろくともいくらも違わぬような町並みの前には、羽生通いの乗合馬車が夕日を帶びて今着いたばかりの客を

おろしていた。ラムネを並べた汚ない休み茶屋の隣には馬具や鋤などを見る古い大きな家があつた。野に出ると赤蜻蛉あかとんぼが群れをなして飛んでいた。

利根川の土手はここからもうすぐである。二三町ぐらいしか離れていない。清三はふとあることを思いついて、細い道を右に折れて、土手のほうに向かつた。明日は日曜である。行田に行く用事がないでもないが、行かなくつてはならないというほどのこともない。老訓導にも校長にも今日と明日は留守になるということを言つておいた。ふところ懐には昨日おりたばかりの半月の月給がはいつている。いい機会だ！と思つた心は、ある新しい希望に向かつてそぞろにふるえた。

土手にのぼると、利根川は美しく夕日にはえていた。その心がある希望のために動いているためであろう。なんだかその波の閃めきも色の調子も空氣のこい影もすべて自分のおどりがちな心としつくり相合っているように感じられた。なかばはらんだ帆が夕日を受けてゆるやかにゆるやかに下つて行くと、ようようとしたりかおもむき大河の趣をなした川の上には初秋でなければ見られぬような白い大きな雲が浮かんで、川向こうの人家や白壁の土蔵や森や土手がこい空氣の中に浮くように見える。土手の草むらの中にはキリギリスが鳴いていた。

土手にはどころどころ松原があつたり渡船小屋があつたり檣林があつたり藁葺の百姓家が見えたりした。渡し船にはここ

らによく見る機回りの車が二台、自転車が一個、蝙蝠傘が二個、商人らしい四十ぐらいの男はまぶしそうに夕日に手をかざしていた。船の通る少し下流に一ところ浅瀬があつて、キラキラと美しくきらめきわたつた。

路は長かつた。川の上にむらがる雲の姿の変わるたびに、  
脈のゆるやかに曲がるたびに、川の感じがつねに変わつた。夕日はしだいに低く、水の色はだんだん納戸色になり、空気は身にしみわたるようにこい深い影を帶びてきた。清三は自己の影の長く草の上にひくのを見ながら時々みずからかえりみたり、みずからなのしつたりした。立ちどまつて墮落した心の状態を叱してもみた。行田の家のこと、東京の友のことを考えた。そうかと思う

と、懐から汗によごれた財布を出して、半月分の月給がはいつているのを確かめてにつこりした。二円あればたくさんだということはかねてから小耳にはさんで聞いている。青陽樓せいようろうというのが中田では一番大きな家だ。そこにはきれいな女がいるということも知っていた。足をとどめさせる力も大きかつたが、それよりも足を進めさせる力のほうがいつも強かつた。心と心とが戦い、情と意とが争い、理想と欲望とがからみ合う間にも、体からだはある大きな力に引きずられるように先へ先へと進んだ。

阪ばんどう 渡良瀬川わたらせがわ の利根川がつに合がつするあたりは、ひろびろとしてまことに東太郎の名にそむかぬほど大河たいかのおもむきをなしていた。夕日はもうまったく沈んで、対岸の土手にかすかにその余光よこうが残つ

てゐるばかり、先ほどの雲の名残りと見えるちぎれ雲は縁を赤く染めてその上におぼつかなく浮いていた。白帆がものうそうに深い碧みどりの上を滑つて行く。

透綾すきやの羽織に白地かすりの絣かすりを着て、安い麦稈むぎわらの帽子をかぶつた清三の姿は、キリギリスが鳴いたり鈴虫がいい声をたてたり阜斯ばつた飛び立つたりする土手の草路くさみちを急いで歩いて行つた。人通りのない夕暮れ近い空氣に、広いようとした大河たいかを前景にして、そのやせぎすな姿は浮き出すように見える。土手と川との間のいつも水をかぶる平地には小豆あずきや豆まめやもろこしが豊かに繁つた。ふとある一種の響きが川にとどろきわたつて聞こえたと思うと、前の長い長い栗橋の鉄橋を汽車が白い煙けむりを立てて通つて行くのが見

えた。

土手を下りて旗井<sup>はたい</sup>という村落にはいつたころには、もうとつぶりと日が暮れて、<sup>あかり</sup>灯がついていた。ある百姓家では、垣のところに行水盤<sup>ぎょうすいだらい</sup>を持ち出して、「今日は久しぶりでまた夏になつたような気がした」などと言いながら若いかみさんが肥えた白い乳を夕闇の中に見せてボチャボチャやつていた。鉄道の踏切<sup>ふみきり</sup>を通る時、番人が白い旗を出していたが、それを通つてしまふと、上り汽車がゴーと音を立てて過ぎて行つた。かれは二三度路で中田への渡し場<sup>わたりば</sup>のありかをたずねた。夜が来てからかれは大胆になつた。もう後悔の念などはなくなつてしまつた。ふと路傍に汚ない飲食店があるのを発見して、ビールを一本傾けて、餌餉<sup>うどん</sup>の盛り

を三杯食つた。ここではかみさんがわざわざ通りに出て 渡船場に  
行く路を教えてくれた。

十日ばかりの月が向こう岸の森の上に出て、 渡船場の船縁に  
キラキラと美しく碎けていた。肌に冷やかな風がおりおり吹いて  
通つて、 やわらかな櫓の音がギーギー聞こえる。岸に並べた二階  
家の屋根がくつきりと黒く月の光の中に出ている。

水を越して響いて来る絃歌の音が清三の胸をそぞろに波だたせ  
た。

乗り合いの人の顔はみな月に白く見えた。船頭はくわえ煙管の  
火をぽつたり紅あかく見せながら、 小腰に櫓を押した。

十分のちには、 清三の姿は張り見世にごてごてと白粉おしろいをつけ

て、赤いものずくめの衣服で飾りたてた女の格子の前に立つてい  
た。こちらの軒からあちらの軒に歩いて行つた。細い格子の中に  
はいつて、あやうく羽織の袖を破られようとした。こうして夜ご  
とに客を迎うる不幸福な女に引きくらべて、こうして心の餓え、  
肉の渴きをいやしに来た自分のあさましさを思つて肩をそびやか  
した。廓の通りをぞろぞろとひやかしの人々が通る。なじみ客を  
見かけて、「ちよいと貴郎！」なぞという声がする。格子に寄り  
合つて何かなんなんと話しているものもある。威勢よくはいつて  
トントン階段を上がつて行くものもある。二階からは三絃や鼓の  
音がにぎやかに聞こえた。

五六軒しかない貸座敷はやがてつきた。一番最後の少し奥に引

つ込んだ 石菖の鉢の格子のそばに置いてある家には、いかにも土百姓の娘らしい丸く肥った女が白粉をごてごてと不器用にぬりつけて二三人並んでいた。その家から五六軒 薦藁菖の庇の低い人家が続いて、やがて暗い畠になる。清三はそこまで行つて引き返した。見て通つたいろいろな女が眼に浮かんで、上がるならあの女かあの女だと思う。けれど一方ではどうしても上がられるような気がしない。初心なかれにはいくたび決心しても、いくたび自分の臆病なのをののしつてみてもどうも思いきつて上がられない。で、今度は通りのまん中を自分はひやかしに来た客ではないというようにわざと大跨おおまたに歩いて通つた。そのくせ、気にいつた女のいる張り見世はみせの前は注意した。

河岸の渡し場のところに来て、かれはしばらく立っていた。月が美しく埠頭ふとうにくだけて、今着いた船からぞろぞろと人が上がつた。いつそ渡わたしを渡つて帰ろうかとも思つてみた。けれどこのまま帰るのは——目的をはたさずに帰るのは腑甲斐ふがいないようにも思われる。せつかくあの長い暑い二里の土手を歩いて来て、無意味に帰つて行くのもばかばかしい。それにただ帰るのも惜しいような気がする。渡し船の行つて帰つて来る間、かれはそこに立つたりしやがんだりしていた。

思いきつて立ち上がつた。その家には店みせに妓夫ぎふが二人出ていた。大きい洋燈らんぶがまぶしくかれの姿を照らした。張り見世の女郎の眼そそがみんなこつちに注そそがれた。内から迎える声も何もかもかれには

夢中であった。やがてがらんとした室<sup>へや</sup>に通されて、「お名<sup>な</sup>ざし」

を聞かれる。右から二番目とかろうじてかれは言つた。

右から二番目の女は静枝と呼ばれた。どちらかといえば小づくなりで、色の白い、髪の房<sup>ふきふき</sup>々した、この家でも売れる女<sup>こ</sup>であつた。眉と眉との遠いのが、どことなく美穂子をしのばせるようなどころがある。

清三にはこうした社会のすべてがみな新らしくめずらしく見えた。<sup>ひ</sup>引き付けといふこともおもしろいし、女がずっととはいつて来て客のすぐ隣にすわるといふことも不思議だし、台の物とかいつて大きな皿に少しばかり鮓を入れて持つて来るのも異様に感じられた。<sup>すし</sup>かれは自分の初心なことを女に見破られまいとして、心に

もない洒落しゃれを言つたり、こうしたところには通人だといふうを見せたりしたが、二階回しの中年の中年には、初心な人ということがすぐ知られた。かれはただ酒を飲んだ。

廁は階段はしごを下りたところにあつた。やはり石菖せきしょうの鉢はちが置いてあつたり、釣り葱つるいのぶが掛けてあつたりした。硝子がらすの箱の中に五分心の洋燈らんぷが明るくついて、鼻緒はなおの赤い草履ぞうりがぬれているのではないがなんとなくしめつていた。便所には大きなりつぱな青い模様の出た瀬戸焼きの便器が据えてある。アルボースの臭においに交つて臭い臭氣しうきが鼻と目とをうつた。

女の室は六畳で、裏二階の奥にある。古い簾笥たんすが置いてあつた。長火鉢の落としはブリキで、近在でできたやさしい鉄瓶がかかつて

いる。そばに一冊文學世界が置いてあるのを清三が手に取つて見ると、去年の六月に発行したものであつた。「こんなものを読むのかえ、感心だねえ」と言うと、女はにツと笑つてみせた。その笑顔を美しいと清三は思つた。室の裏は物干しになつていて、そこには月がやや傾きかげんとなつてさしていた。隣では太鼓と三三絃やみせんの音がにぎやかに聞こえた。

## 三十二

翌日は昼過ぎまでいた。出る時、女が送つて出て、「ぜひ近いうちにね、きつとですよ」と私語ささやくように言つた。昨夜、床の中

で聞いた不<sub>ふしあわせ</sub>幸<sub>わせ</sub>な女の話が流るるように胸にみなぎつた。

渡しをわたつて栗橋に出て昨日の路<sub>みち</sub>を帰るのはなんだか不安な  
ような気がした。土手で知つてる人に会わんものでもない。行田  
に行つたというものが方角違ちがいの方面を歩いていては人に怪しま  
れる。で、かれは昨夜聞いておいた鳥喰とりはみのほうの路を選んで歩  
き出した。初会<sub>しょかい</sub>にも似合<sub>あ</sub>わず、女はしんみりとした調子で、そ  
の父母の古河こがの少し手前ざいの在にいることを打ち明けて語つた。そ  
の在郷に行くにはやはり鳥喰を通つて行くのだそうだ。鳥喰の河<sub>か</sub>  
岸には上州じょうしゅうの本郷に渡る渡良瀬川わたらせがわのわたし場があつて、それ  
から大高島まで二里、栗橋に出て行くよりもかえつて近いかもし  
れなかつた。清三の麦稈帽子<sub>むぎわら</sub>は毎年出水につかる木影のない低

地の間の葉のなかば赤くなつた桑畠に見え隠れして動いて行つた。行く先には田があつたり畠があつたりした。川原の草藪の中にはやはりキリギリスが鳴いた。

河岸の渡し場では赤い雲が静かに川にうつっていた。向こう岸の土手では糸経いとだを着て紺の脚絆きやはんを白い埃ほこりにまみらせた旅商たびあき人らしい男が大きな荷物をしよつて、さもさも疲れたようなふうをして歩いて行つた。そこからは利根渡良瀬とねわたらせの二つの大きな河が合流するさまが手に取るように見える。栗橋の鉄橋の向こうに中田の遊廓の屋根もそれと見える。かれはしばし立ちどまつて、別れて来た女のことを思つた。

本郷の村落むらを通つて、路みちはまた土手の上にのぼつた。昨日向こ

う岸から見て下つた川を今日はこの岸からさかのぼつて行くのである。昨日の心地と今日の心地とを清三はくらべて考えずにはいられなかつた。おどりがちなさえた心と落ちついたつかれた心！わずかに一日、川は同じ色に同じ姿に流れているが、その間には今まで経験しない深い溝みぞが築かれたように思われる。もう自分は堕落したというような悔いもあつた。

麦倉河岸むぎくらがしには涼しそうな茶店があつた。大きな柵とちの木が陰をつくつて、冷めたそうな水にラムネがつけてあつた。かれはラムネに梨子なしを二個ほど手ずから皮をむいて食つて、さて花莫蘿はなござの敷いてある木の陰の縁台を借りてあおむけに寝た。昨夜ほとんど眠られなかつた疲労が出て、頭がぐらぐらした。涼しい心地のいい風

が川から来て、青い空が葉の間からチラチラ見える。それを見ながらかれはいつか寝入つた。

かれが寝ている間、渡し場にはいろいろなことがあつた。鶏のひよつ子を猫がねらつて飛びつこうとするところを茶店の婆さんはあわてておうと、猫が桑畠の中に入つてニヤアニヤア鳴いた。渡し舟は着くたびにいろいろな人を下ろしてはまたいろいろな人を載せた。自転車を走らせて来た町の旦那衆もあれば、反んもの物を満載した車をひいて来た人足もある。上流の赤岩に煉瓦を積んで行く船が二艘も三艘も竿を弓のように張つて流れにさかのぼつて行くと、そのかたわらを帆を張つた舟がギーと楫の音をさせて、いくつも通つた。一時間ほどたつて婆さんが裏に塵埃を捨て

てに行つた時には、縁台の上の客は足をだらりと地に下げて、顔を仰向あおむけに口を少しあいて、心地よさそうに寝ていたが、魚釣りに行つた村の若者がびくを下げるには、足を二本とも縁台の上に曲げて、肱ひじを枕にして高い鼾いびきをかいていた。その横顔を夕日が暑そうに照らした。額には汗がにじみ、はだけた胸からは財布が見えた。

かれが眼をさましたころは、もう五時を過ぎていた。水の色もやや夕暮れ近い影を帶びていた。清三は銀側の時計を出して見て、思いのほか長く寝込んだのにびっくりしたが、落ちかけていた財布をふと開けてみて銭の勘定をした。六円あつた金が二円五十銭になつてゐる。かれはちよつと考えるようなふうをしたが、その

中から二十銭銀貨を一つ出して、ラムネ二本の代七銭と、梨子二個の代三銭との釣り銭つせんを婆さんからもらつて、白銅を一つ茶代に置いた。

大高島の渡しを渡るころには、もう日がよほど低かつた。かれは大越の本道には出さずに、田の中の細い道をあちらにたりこちらにたりして、なるたけ人目にかかりぬようにして弥勒みろくの学校に帰つて來た。

かれの顔を見ると、小使が、

「荻生さんなア来さしやつたが、会つたんべいか」

「いや——」

「行田に行つたんなら、ぜひ羽生に寄るはずだがツて言つて、不

思議がつていさつしやつたが、帰りにも会わなかつたかな

「会わない——」

「待つていさつしやつたが、羽生で待つてるかもしんねえツて三時ごろ帰つて行かしつた……」

「そうか——羽生には寄らなかつたもんだから」

こう言つてかれは羽織をぬいだ。

### 三十三

次の土曜日にも出かけた。その日も荻生さんはたずねて來たがやつぱり不在ゐるすだった。行田の母親からも用事があるから来いとた

びたび言つて来る。けれど顔を見せぬので、父親は加須まで來たついでにわざわざ寄つてみた。べつだん変わつたところもなかつた。このごろは日課点の調べで忙しいと言つた。先月は少し書籍ほんを買つたものだから送るものを受けられなかつたという申しわけをして、机の上にある書籍ほんを出して父親に見せた。父親はさる出入り先から売却を頼まれたという 文晁ぶんちょう 筆ひつ の山水を長押なげしにかけて、「どうも少し怪しいところがあるんじやが……まあまあこのくらいならとにかく納まる品物だから」などとのんきに眺めていた。

母親の手紙では、家計が非常に困つているような様子であつたが、父親にはそんなふうも見えなかつた。帰りに、五十銭貸せと言つたが、清三の財布には六十銭しかなかつた。月末まで湯銭くらい

なくては困ると言うので、二十銭だけ残して、あとをすつかり持たせてやつた。父親は包みを背負つて、なかばはげた頭を夕日に照らされながら、学校の門を出て行つた。

金のない幾日間の生活は辛かつたが、しかし心はさびしくなかつた。朝に晩に夜にかれはその女の赤い 檻襴姿うちかけすがたと、眉の間の遠い色白の顔とを思い出した。そのたびごとにやさしい言葉やら表情やらが流るるようにみなぎりわたつた。その女は初会しょかいから清三の人並みすぐれた男ぶりとやさしいおとなしい様子とになみなみならぬ情を見せたのであるが、それが一度行き二度行くうちにだんだんとつのつて來た。

清三は月末の來るので待ちかねた。菓子を満足に食えぬのが中

でも一番辛かつた。机の抽斗ひきだの中には、餅菓子とかビスケットとか羊羹ようかんとかいつもきっと入れられてあつたが、このごろではただその名残りの赤い青い粉ばかりが残つていた。やむなくかれは南京豆を一銭二銭と買つてくつたり、近所の同僚のところを訪問して菓子のご馳走になつたりした。のちには菓子屋の婆ばばあを説きつけて、月末払いにして借りて來た。

音楽はやはり熱心にやつていた。譜を集めたものがだいぶたまつた。授業中唱歌の課目がかれにとつて一番おもしろい楽しい時間で、新しい歌に譜を合わせたものを生徒に歌わせて、自分はさもひとかどの音楽家であるかのようにオルガンの前に立つて拍子を取つた。一人で室へやにいる時も口癖くちぐせに唱歌の譜が出た。この間、

女の室で酒に酔つて、「響りんりん」を歌つたことが思い出された。女は黙つてしまいじみと聞いていた。やがて「琵琶歌ですか、それは」と言つた。信濃の詩人が若々しい悲哀を歌つた詩は、青年の群れの集まつた席で歌われたり、さびしい一人の散歩の野に歌われたり、無邪気な子供らの前でオルガンに合わせて歌われたり、こうした女のいる狭い一室で歌われたりした。清三はその時女にその詩の意味を聞いて聞かせて、ふたたび声を低くして誦した。二人の間にそれがあるかすかなしかし力ある愛情を起こす動機となつたことを清三は思い起こした。

弥勒野にふたたび秋が来た。前の竹藪を通して淋しい日影がさした。教員室の硝子窓を小使が終日かかつて掃除すると、いつそ

う空気が新しくこまやかになつたような気がした。刈り稻かいねを積んだ車が晴れた野の道に音を立てて通つた。

東京に行つた友だちからは、それでも月に五六たび音信おとずれがあつた。学窓から故山の秋を慕つた歌なども來た。夕暮れには、赤い夕焼けの雲を望んで、弥勒の野に静かに幼な児おさごを伴侶はんりょとしているさびしき、友の心を思うと書いてあつた。弥勒野から都を望む心はいつそう切せつであつた。学窓から見た夕焼けの雲と町に連なるあきらかな夜の灯ともしびがいつそう恋しいとかれは返事をしてやつた。

羽生の野や、行田への街道や、熊谷の町の新蕎麦そばに昨年の秋を送つたかれは、今年は弥勒野から利根川の河岸の路に秋のしづかさを味わつた。羽生の寺の本堂の裏から見た秩父連山や、浅間嶽

の噴煙や赤城榛名の翠色にはまつたく遠ざかつて、利根川の土手の上から見える日光を盟主とした両毛の連山に夕日の当たるさまを見て暮らした。

ある日、荻生さんが来た。明日が土曜日であつた。

「君、少し金を持つていらないだろうか」

荻生さんは三円ばかり持つていた。

「気の毒だけども、家のほうに少しいることがあつて、翌日行くのにぜひ持つて行かなけりやならないんだが……月給はまだ当分おりまいし、困つてゐるんだが、どうだろう、少しつごうしてもらうわけにはいかないだろうか。月給がおりると、すぐ返すけれど」

荻生さんはちよつと困つたが、

「いくらいるんです?」

「三円ばかり」

「僕はちょうどここに三円しか持っていないんですが、少しいることもあるんだが……」

「それじゃ二円でもいい」

荻生さんはやむを得ず一円五十銭だけ貸した。

翌朝、それと同じ調子で、清三は老訓導に一円五十銭貸してくれと言つた。老訓導は「僕もこの通り」と、笑つて銅貨ばかりの財布を振つて見せた。関さんもやつぱり持つていなかつた。いく度か躊躇ちゆううちよしたが、思い切つて最後に校長に話した。校長は貸してくれた。昨日の朝、行田から送つて来る新聞の中に交つて、

見なれぬ男の筆跡<sup>ひつせき</sup>で、中田の消印のおしてある一通の封書のは  
いっていたのを誰も知らなかつた。

午後から行田の家に行くとて出かけたかれは、今泉にはいる前の路から右に折れて、森から田圃<sup>たんぼ</sup>の中を歩いて行つた。しばらくして利根川の土手にあがる松原の中にその古い中折<sup>なかおれ</sup>の帽子が見えた。大高島に渡る渡船<sup>わたし</sup>の中にかれはいた。

### 三十四

渡良瀬川の渡しをかれはすくなくとも月に二回は渡つた。秋はしだいにたけて、櫛<sup>なら</sup>の林の葉はバラバラと散つた。虫の鳴いた蘆<sup>あ</sup>

原しばらも枯れて、白の薄すすきの穂しろがねが銀のように日影に光る。洲すのあらわれた河原には白い鷺さぎがおりて、納戸色なんどいろになつた水には寒い風が吹きわたつた。

麦倉むぎくらの婆の茶店にももう縁台は出ておらなかつた。栁とちの黄きばんだ葉は小屋の屋根を埋めるばかりに散ちり積つもつた。農家の庭に忙しかつた唐箕とうみの音の絶えるころには、土手を渡る風はもう寒かつた。

その長い路みちを歩く度数は、女に対する愛情の複雑してくる度数であつた。追憶おもいでがだんだんと多くなつてきた、帰りを雨に降られて本郷の村落のとつつきの百姓家にその晴れ間まを待つたこともある。夜遅く栗橋に出て大越の土手を終夜歩いて帰つて來たこと

もある。女の心の解<sup>げ</sup>しがたいのに懊惱<sup>おうのう</sup>したことも一度や二度ではなかつた。遊廓にあがるものの中初めて感ずる嫉妒<sup>しつと</sup>、女が回しを取る時の不愉快にもやがてでつくわした。待つても待つても、女はやつて来ない。自己の愛する女を他人が自由にしている。全身を自己に捧げていると女は称しながら、それがはたしてそうであるか否かのわからない疑惑——男が女に対するすべての疑惑をだんだん意識してきた。女はまた女で、その男の疑惑につれて、時々容易に示さない深い情<sup>なさけ</sup>を見せて、男の心をたくみに奪つた。

「もうこれつきり行かん。あれらは男の機嫌をとるのを商売にしているんだ。あれらの心は幾様<sup>いくよう</sup>にも働くことができるようになっている。自分に対すると同じような媚<sup>こび</sup>と笑いと情<sup>なさけ</sup>とをすぐ隣の

室で他の男に与えているのだ。忘れても行かん。忘れても行かん。  
 今まで使つた金が惜しい」などと、憤慨して帰つて来ることもあつたが、しかしそれは複雑した心の状態を簡単に一時の理屈で解釈したもので、女の心にはもつとまじめなおもしろいところがあることがだんだんわかつた。怒つたり泣いたり笑つたりしている間に、二人の間柄には、いろいろな色彩やら追憶おもいでが加わつた。女のものとにせつせと通つて来るなかに、清三の知つている客がすくなくとも三人はあつた。一人は栗橋の船宿の息子むすこで、家には相応に財産があるらしく、角帯に眼鏡をかけて鳥打ち帽などをかぶつてよく来た。色の白い丈たけのすらりとした好男子であつた。一人は古河こがの裁判所の書記で、年はもう三十四五、家には女房も子

供もあるのだが、根が道楽の酒好きで三日とかかずにやつて来る。女はそのしつこいのに困りぬいて、「お客様で来るのだからしかたがないけれど、ああいう人に勤めなけりやならないと思うと、つづくづくいやになつてしまふよ。貴郎<sup>あなた</sup>、早くこういうところから出してくださいな」などと言つて甘えた、そういう時には、「栗橋のにそう言つて出してもらつてやろうか」などと柄<sup>がら</sup>にもない口を清三はきいた。と、女はきまつて、男の膝をびしやりと平手で打つて、これほど思つて苦労しているのにという紋切り形<sup>もんき がた</sup>の表情をしてみせた。それからいま一人塚崎<sup>つかざき</sup>の金持ちの百姓の息子<sup>むすこ</sup>が通つて来た。田舎の女郎屋のこととて、室のつくりも完全していいので、落ち合うとその様子がよくわかる。その息子は丸顔の坊

ちゃん坊ちゃんした可愛い顔をしていた。「可愛いおとなしい人よ。なんだか弟のような気がしてしかたがない」と女はのろけた。

そのほかにもまだあるらしかつたが、よくわからなかつた。ひげ 鬚の生えた中年の男も来るようであつた。清三は女の胸に誰が一番深く影を印しているかをさぐつてみたが、どうもわからなかつた。自分の影が一番深いようにも思われることあれば、要するにうまくまるめられているのだと思うこともある。あの時、女はしみじみと泣いてそのあわれむべき境遇を語つた。黒目がちな眼からは、涙がほろほろとこぼれた。清三はその時自己の境遇と女に対する自己の関係とをまじめに考えた。自分は小学校教員である。そういうことがちよつとでも知れれば勤めていることはできぬ身

の上である。それに、家<sup>いえ</sup>はからうじて生活していく貧しい生活である。この女といつしょになることができないのは初めからわかれきつたことである。この女がある人に身請け<sup>みうけ</sup>されるなり、年季が満ちて故郷に帰ることができなりするのをむしろ女のために祝している。清三はゆくりなき縁<sup>えにし</sup>で、こうした関係となつていく二人の状態を不思議にも意味深くも感じた。清三はまた一步を進めて、今の生活のたつきをも捨てて、貧しい父母——ことに自分を唯一の力と頼む母をも捨てて、この女といつしょになる場合を想像してみた。功名のために、青雲の志を得んがために、母を捨てることができなかつたように、やつぱりかれにはどうしてもそうした気にはなれなかつた。帰りは、時々時雨<sup>しぐれ</sup>が来たり日影がさ

したりするという日の午後であつた。いつもわたる渡良瀬川の渡しを渡つて土手の上に来ると、ちょうど眼の前を、白いペンキ塗りの汚れた通運丸が、煙筒からは煤煙をみなぎらし、推進器からは水を切る白い波を立てて川をくだつて行くのが手にとるように見えた。甲板の上には汚れた白い服を着たボーアイが二三人仕事をしているのが小さく見えた。清三は立ちどまつてじつとそれを見つめた。白い煙が細くズツと立つと思うと、汽笛のとがつた響きが灰色に曇つた水の上にけたたましく響きわたつた。利根川はようようとして流れて下る、逝く者かくのことしが、感が清三の胸をおそつてきた。

## 三十五

清三の中田通いは誰にも知られずに冬が来てその年も暮れた。その間にも危険に思つたことは二三度はある。一度は村の見知り越しの若者の横顔を張り見世みせの前でちらと見た。一度は大高島の渡船とせんの中で村の学務委員といつしょになつた。いま一度は大越の土手を歩いているとひよつくり同僚の関さんにでつくわした。その時はこれてつきり看破かんぱされたと胸をドキつかせたが、清三のいつもの散歩癖を知つている関さんは、べつに疑うような口吻こうふんをもらさなかつた。

けれど菓子屋、酒屋、小川屋、米屋などに借金がだんだんたま

つた。「林さん、どうしたんだろう。このごろは払いがたまつて困るがなア」と小川屋の主婦は娘に言つた。菓子屋の婆<sup>ばばあ</sup>は「今月は少しや入れてもらわねえじや——よく言つてくんnaれ」と学校の小使に頼んだ。小使は小使で「どうしたんだんべい。林さんもとは金持つていたほうだが、このごろじやねつからお菜も買いやしねえ。いつも漬け物<sup>漬つ</sup><sub>もの</sub>で茶をかけて飯をすましてしまうし、肉など何日にも煮て食つたためしがねえ」などとこのごろはあまり菜の残りのご馳走にあづからないで、ぶつぶつと不平そうにひとり言を言つた。同僚の関さんや羽生の荻生さんなどが訪ねて来ても、以前のようにビールも出さなかつた。

様子の変なのを一番先きに気づいたのは、やはり行田の母親で

あつた。わざわざ三里の路をやつて来ても、そわそわといつも落ち着いていないばかりではない。友だちが東京から帰つて来ていつも訪問しようでもなく、昔のように相談をしかけてもフムフムと聞いているだけで相手にもなつてくれない。それに、なんのかのと言つて、毎月のものをおいて行かない。あれほど好きであつた雑誌をろくろく買わず、常得意の町の本屋にも力ヶをこしらえない。母親は息子むすこのこのごろどうかしているのをそれとなく感じて時々心を読もうとするような眼色めつきをして、ジツと清三の顔を見つめることがある。

ある時こんなことを言つた。

「この間ね、いい嫁があるツて、世話しようツて言う人があるん

だがね……お前ももう身もきまつたことだし、どうだ、もらう気はないかえ？」

清三は母の顔をじつと見て、

「だツて、自分が食べることきえたいていじやないんだから」

「それはそうだろうけれど、お前ぐらいの月給で、女房子を養つている人はいくらもあるよ。いつしょになつて、学校の近くに引っ越して、儉約して暮らすようにすれば、人並みにはやつていけないことはないよ」

「でもまだ早いから」

「でも、こうして離れていては、お前がどんなことをしているかわからぬし」と笑つてみせて、

「それに、お前だツて不自由な思いをして、いつまで学校にいたツてしかたがないじやないか」

「お母さん、そんなこと言うけれど、僕はまだこれで望みもあるんです。いま少し勉強して中学の教員の免状ぐらいは取りたいと思つてゐるんだから……今から女房などを持つたツてしかたがりやしない」

「そんな大きなのぞ望みを出したツてしかたがないじやないかねえ」

「だつて、僕一人田舎に埋もれてしまうのはいやですもの。一二年はまアしかたがないからこうしてゐるけれど、いつかどうかして東京に出て勉強したいと思つてゐるんです。音楽のほうをこのごろ少しやつてるから、来年あたり試験を受けてみようと思つて

いるんです。今から女房など持つちやわざわざ田舎に埋れてしま  
うようなもんだ」

「だッて、はいれたところで学費はどうするんのさねえ？」

「音楽学校は官費があるから」

「そうして家はどうするのだえ？」

「その時は父さんと母さんで暮らしてもらうのさ。三年ぐらいど  
うにでもしてもらわなくつちや」

「それはできないことはないだろうけれど、父さんはああいうふ  
うだし、私ばかり苦労しなくつちやならないから」

清三は黙つてしまつた。

またある時は次のような会話をした。

「お前、加藤の雪さんをもらう気はない？」

「雪さん？ なぜ？」

「くれてもいいような母さんのおつかの口ぶりだつたからさ」

「どうして？」

「それとはつきり言つたわけじやないけれど、たつて望めばくれるような様子だつたから」

「いやなこつた。あんな白々しい、おしゃらくは！」

「だつて、郁治さんはお前は兄弟のようだし、くれさえすりや  
望んでも欲しいくらいな娘じやないかね」

「いやなこつた」

「このごろはどうかしたのかえ？ 加藤にもめつたに行かんじや

ないか?」

「利益交換<sup>りえきこうかん</sup>なぞいやなこつた!」

こう言つて、清三はふいと立つてしまつた。母親にはその意味がわからなかつた。

一月には郁治も美穂子も帰つていた。郁治にも二三度会つて話をした。美穂子についての話はもうしなかつた。郁治はむしろ消極的に恋愛の無意味を語つた。「なぜあんなに熱心になつたか自分でもわからない。ちょうどさかりがついたもののようなものだつたんだね」と言つて笑つた。そのくせ郁治と美穂子とはよく相携<sup>いたずさ</sup>えて散歩した。男は高師の制帽をかぶり、女は新式の底<sup>ひさし</sup>あに結つて、はでな幅の広いリボンをかけた。小畠の手紙によ

ると二人はもう恋愛以上の交際を続けていたらしかつた。清三はいやな気がした。

ちょうどそのころ熊谷の小滝の話が新聞に出ていた。「小滝の落籍らくせき」という見出しで、伊勢崎の豪商に根曳ねびきされる話がひやかし半分に書いてある。小滝には深谷の金持ちの息子むすこで、今年大學に入学した情人いいひとがあつた。その男に小滝は並々ならぬ情なさけを見せたが、その家には許婚いいなづけのこれも東京の跡見女学校にはいつている娘があつて、とうてい望みを達することができぬので、泣きの涙で、今度いよいよ落籍ひかされることになつたと書いてある。その豪商は年は四十五六で、女房も子もある。「どうせ一二年辛い年貢ねんぐを納めると、また舞いもどつて二度のお勤め、今晚は——

と例のあでやかな声が聞かれるだろうから、今からおなじみの方々はその時を待つてゐるそうだ」などとひやかしてあつた。ほんとうの事情は知らぬが、清三はそうした社会に生おい立たつた女の身の上を思わぬわけにはいかなかつた。思いのままにならぬ世の中に、さらに思いのままにならぬ境遇に身をおいて、うき草のように浮き沈みしていく人々の身の上がしみじみと思いやられる。小滝のある間は——その美しい姿と艶なる声とのする間は、友人が離散し去つても、幼いころの追憶おもいでが薄くなつても、熊谷の町はまだかれのためになつかしい町、恋しい町、忘れがたい町であつたが、今はそれさえ他郷の人となつてしまつた。神燈じんとうの影艶かげまめかしい細い小路をいくら歩いても、にこにこといつも元気のいい

顔を見せて、幼いころの同窓のよしみを忘れない「われらの小滝」を見るることはできなくなつたのである。清三は三が日をすますと、母親のとめるのをふりはなつて、今までにかつてないさびしい心を抱いて、西風の吹き荒れる三里の街道を弥勒みろくへと帰つて來た。それでも懷ふところには中田に行くための金が三円残してあつた。

## 三十六

三月のある寒い日であつた。

渡良瀬川の渡し場から中田に来る間の夕暮れの風はヒュウヒュウと肌はだを刺すように寒く吹いた。灰色の雲は空をおおつて、おり

おり通る帆の影も暗かつた。

灯のつくころ、中田に来て、いつもの通り階段はしごを上がつたが、なじみでない新造しんぞうが来て、まじめな顔をして、二階の別の室へやに通した。いつも——客がいる時でも、行くとすぐ顔を見せた女がやつて来ない。不思議にしていると、やがてなじみの新造しんぞうが上つて来て、

「おいらんもな、おめでたいことで——この十五日に身ぬけができましたでな」

清三は金槌かなづちか何かでガンと頭を打たれたような気がした。

「貴郎さんあなたにもな、ぜひゆく前に一度お目にかかりたいって言つていましたけれど——貴郎あなたはちょうどお見えにならんし、急なも

のだと、手紙を上げてる暇もなし、おいらんも残念がつていまし  
たけれど、しかたがなしに、貴郎あなたが来たらよく言つてくれツてな  
——それにこれを渡してくれツておいて行きましたから」と風呂  
敷包みを渡した。中には一通の手紙と半紙に包んだ四角なもののが  
はいつていた。手紙には金釘かなくぎのような字で、おぼつかなく別れ  
の紋切り形もんき がたの言葉が書いてあつた。殘念々々殘念々々という字が  
いくつとなく眼にはいつた。しかし身請みうけされて行つたところは  
書いてなかつた。

半紙に包んだのは写真であつた。

おばさんは手に取つて、

「おいらんも罪なことをする人だよ」

と笑つた。

身請けされて行つた先は話さなかつた。相方あいかたはかねて知つて  
いる静枝の妹女郎が来た。顔の丸い肥つた女だつた。清三は黙つ  
て酒を飲んだ。黙つてその妹女郎と寝た。妹女郎は行つた人の話  
をいろいろとして聞かした。清三は黙つて聞いた。

翌日は早く帰途についた。存外心は平静であつた。「どうせこ  
うなる運命だつたんだ」とみずから口に出して言つてみた。「な  
んでもない、あたり前のことだ」と言つてみた。けれど平静であ  
るだけそれだけかれは深い打撃を受けていた。

土手に上がる時、

「憎い奴だ、復讐をしてやらなければならん、復讐！　復讐！」

と叫んだ。しかし心はそんなに激してはおらなかつた。

麦倉の茶店では、茶をのみながら、

「もうここに休むこともこれぎりだ」

大高島の渡しを渡つて、いつものように間道かんどうを行こうとしたが、これも思い返して、

「なアに、もうわかつたツてかまうもんか」

で、大越に出て、わざと老訓導の家とを訪うた。

老訓導は清三のつねに似ずきわだつてはしゃいでいるのを不思議に思つた。清三は出してくれたビールをグングンとあおつて飲んだ。

「何か一つ大きなことでもしたいもんですなア——なんでもいい

から、世の中をびっくりさせるようなことを」

こんなことを言つた。そしてこれと同じことを昨年羽生の寺で和尚さんにおしゃうさんに言つたことを思い出した。たまらなくさびしい気がした。

## 三十七

その年の九月、午後の残暑の日影を受けて、上野公園の音楽学校の校門から、入学試験を受けた人々の群れがぞろぞろと出て来た。羽織袴もあれば洋服もある。廊下に髪すみれに董色はかまはかまに董色の袴をはいた女学生もある。校内からは、ピアノの音がゆるやかに聞こえた。

その群れの中に詰襟<sup>つめえり</sup>の背広<sup>へい</sup>を着て、古い麦稈<sup>むぎわら</sup>帽子をかむつて、一人でくてくと塀<sup>へい</sup>ぎわに寄つて歩いて行く男があつた。靴は埃<sup>ほこり</sup>にまみれて白く、毛縄子<sup>けじゆす</sup>の蝙蝠傘<sup>こうもりがさ</sup>はさめて羊羹<sup>ようかんいろ</sup>色になつていた。それは田舎<sup>いなか</sup>からわざわざ試験を受けに来た清三であつた。

はいつただけでも心がふるえるような天井の高い室、鬚<sup>ひげ</sup>の生えた肥<sup>ふと</sup>つたりっぱな体格をした試験委員、大きなピヤノには、中年の袴<sup>たま</sup>をはいた女が後ろ向きになつてしまりに妙<sup>たえ</sup>な音を立てていた。清三は田舎の小学校の小さなオルガンで学んだ研究が、なんの役にもたたなかつたことをやがて知つた。一生懸命で集めた歌曲の譜もまったく徒勞<sup>とろう</sup>に属<sup>ぞく</sup>したのである。かれは初步の試験にまず失敗した。顔を真赤にした自分の小さなあわれな姿がいたずらに試

験官の笑いをかつたのがまだ眼の前にちらついて見えるようであつた。「だめ！　だめ！」とひとりで言つてかれは頭を振つた。

公園の口ハ台は木の影で涼しかつた。風がおりおり心地よく吹いて通つた。かれは心を静めるためにそこに横になつた。向こうには縁台に赤い毛布(けつと)を敷いたのがいくつとなく並んで、赤い櫻(たすき)であやどつた若い女のメリングスの帯が見える。中年増(ちゅうおどしま)の姿もくつきりと見える。赤い地に氷という字を白く抜いた旗がチラチラする。

動物園の前には一輛の馬車(りょう)が待つていた。白いハッピを着た御(ぎ)よしゃ者はブラブラしていた、出札所(しゆつさつしょ)には田舎者らしい二人づれが大きな財布から錢(ぜに)を出して札を買つていた。

東京に出たのは初めてである。試験をすましたら、動物園も見よう、博物館にもはいろいろ、ひととおり市中の見物もしよう、お茶の水の寄宿舎に小畠や郁治をも訪ねよう、こういろいろ心中に計画してやつて来た。田舎の空気によごれた今までの生活をのがれて、新しい都会の生活をこれから開くのだと思うと、中学を出たころの若々しい気分にもなれた。昨日吹上ふきあげの停車場をたつ時には、久しぶりで、さまざまの希望の念が胸にみなぎつたのである。かれは口ハ台に横よこたわりながら、その希望と今の失望との間にはさまつた一場の光景をまた思い浮かべた。

口ハ台から起き上がる気分になるまでには、少なくとも一時間はたつた。馬車はもういなかつた。なにがし子爵夫人ともいい

そうなりっぱな貴婦人が、可愛らしい洋服姿の子供を三四人つれてそこから出て来て、嬉々として馬車に乗ると、御者は鞭むちを一当あてあてて、あとに白い埃ほこりを立てて、ガラガラときしつて行つた。その白い埃を見つめたのをかれは覚えている。「せめて動物園でも見て行こう」と思つてかれは身を起こした。

丹頂たんちようの鶴つる、たえず鼻を巻く大きな象、遠い国から来たカンガルウ、駱駝らくだの驢馬ろばだの鹿だの羊だのがべつだん珍らしくもなく歩いて行くかれの眼にうつった。ライオンの前ではそれでも久しく立ちどまつて見ていた。養魚室の暗い隧道とんねるの中では、水の中にあきらかな光線がさしとおつて、金魚や鯛などが泳いでいるのがあざやかに見えた。水珠みずたまがそこからもここからもあがつた。

鷗や鴛鴦やそのほかさまざまの水鳥のいる前の口ハ台にかれはまた腰をおろした。あたりをさまざまな人がいろいろなことを言つてぞろぞろ通る。子供は鳥のにぎやかに飛んだり鳴いたりするのをおもしろがつて、柵につかまつて見とれている。しばらくしてかれはまた歩き出した。たか鷹きつねだの狐たぬきだの狸たぬきだのいるところをつて、猿が歯をむいたり赤い尻を振り立てているところを抜けて、北極熊や北海道の大きな熊のいるところを通つた。くじやく孔雀のみごとな羽もさして興味をひかなかつた。かれははいつた時と同じようにして出て行つた。

とうしょうぐう東照宮の前では、女学生がはでなこうもりりがさ蝙蝠傘こうもりがさをさして歩いていた。パノラマには、古ぼけた日清戦争の画かなんかがかかるつて

いて、札番あくびが退屈そうに欠をしていた。

竹の台に来て、かれはまた三たび口ハ台に腰をかけた。

眼下に横たわつてゐる大都会、甍いらかが甍に続いて、煙突えんとつからは黒いすさまじい煙けむりがあがつてゐるのが見える。あちこちから起ころ物音が一つになつて、なんだかそれが大都會のすさまじい叫びのようと思われる。ここに罪惡もあれば事業もある。功名もあれば富貴ふうきもある。飢餓きがもあれば絶望もある。新聞紙上に毎日のようにあらわれて来る三面事故のことなども胸にのぼつた。

竹の台からおりると、前に広小路の雜踏ざつとうがひろげられた。馬車鉄道があとからあとからいく台となく続いて行く。水撒夫みずまきがその中を平氣で水をまいて行く。人力車が懸け声ではしつて行く。

しばらくして、清三の姿は、その通りの小さい蕎麦屋そばやに見られた。

「いらっしゃい！」

と若い婢おんなの黄いろい声がした。

「ざる一つ！」

という声がつづいてした。

清三は夕日のさし込んで来る座敷のかたすみ一隅あづらで、逃あつらえの来る間を、大きな男が大釜の蓋ふたを取り閉たてたりするのを見ていた。釜の蓋を取ると、湯気が白くぱつとあがつた。長い竹の箸はしでかき回して、ザブザブと水で洗つて、それをざるに手で盛つた。「お待ち遠さま」と婢おんなはそれを膳に載せて運んで来た。足の裏が黒かつた。

清三はざるを二杯、天ぷらを一杯食つて、ビールを一本飲んだ。酔いが回つて来ると、少し元気がついた。

「帰ろう。小畠や加藤を訪問したツてしかたがない」

ふとこう  
懐から財布を出して 勘定かんじょうをした。やがて雑踏の中を停車場に急いで行くかれの姿が見られた。

## 三十八

荻生さんが和尚おしょうさんを訪ねて次のような話をした。

「どうも困りますんですがな」

と荻生さんが例の人のいい調子で、さも心配だという顔をする

と、

「それは困りますな」

と和尚さんも言つた。

「どうも思うようにいかんもんですから、ついそういうことにな  
るんでしようけれど……」

「校長からお聞きですか」

「いいえ、校長からじかに聞いたというわけでもないんですけど  
ど……借金もできたようですし、それに清三君が宿直室にいると、  
女がそろそろやつて来るんだツて言いますからねえ」

「いつたい、あそこは風儀が悪いところですからなア」

「ずいぶんおもしろいんですツて……清三君一人でいると、学校

の裏の垣根のところから、声をかけたり、わざと土塊つちくずをほうり込んだりするんですって。そうして誰もいないと、庭から回つてはいつて来るんだそうです」

「そして、その中に誰か相手ができるんですか」

「よくわかりませんけれど、できるんだそうです」

「どうせ、機織はたおりかなんかなんでしょう？」

「え」

「困るですな。そういう女に関係をつけては」

と和尚さんも嘆じた。

しばらくしてから、

「早くかみさんを持たせたら、どうでしょう」

「この間も行田に行きましたから、ついでに寄つたんですが、お袋さんもそう言つていました」

「加藤君のシスターはもらえないのですか」

「先生がいやだツて言うんです……」

「だツて、前にラブしていたんじやないです」

「どうですか、清三君、よく話さんですけれど、加藤君と何か仲

たがいかなんかしたらしいですね」

「そんなことはないでしよう」

「いや、あるらしいです」

と荻生さんはちよつとどぎれて、「この間も言つてましたよ、

僕はこういう運命ならしかたがない。一生独身で子供を相手にし

て暮らしても遺憾がないツて言つてましたよ」

「独身もいいが——そんなことをしてはしかたがない」

「ほんとうですとも」

と荻生さんは友だち思いの心配そうに、「校長が可愛がつてくれるからいいですけれど、郡視学の耳にでもはいるとたいへんですからな。それに狭い田舎いなかですから、すぐぱツとしてしまいますから……今度来たら、それとなく言つていただきたいものです

が……」

「それは言いましょう」

と和尚さんは言つた。

「それに、清三君は体からだが弱いですからな……」

と荻生さんはやがて言葉をついだ。

「やつぱり胃病ですか」

「え、相変わらず甘いものばかり食っているんですから。甘いものと、音楽と、絵の写生しゃせいとこの三つが僕のさびしい生活の慰藉いしゃくだなどと前から言つていきましたが、このごろじゃ――この夏の試験を失敗してからは、集めた譜は押し入れの奥に入れてしまつて、唱歌の時間きりオルガンも鳴らさなくなりましたから」「よほど失望したんですね」

「え……それは熱心でしたから、試験前の二月ばかりというものは、そのことばかり言つてましたから」

「つまり今度のことなどもそれから來てるんですな」と和尚さん

は考えて、「ほんとうに氣の毒ですね。ずいぶんさびしい生活ですものなア。それにまじめな性分だけ、いつそうつらいでしょから」

「私みたいにのんきだといいんですけれど……」

「ほんとうに、君とは違いますね」

と和尚さんは笑つた。

### 三十九

清三の借金はなかなか多かつた。この二月ばかり、自炊をする元気もなく、三度々々小川屋から弁当を運ばせたので、その勘定かんじ

定<sup>よう</sup>は七八円までにのぼつた。酒屋に三円、菓子屋に三円、荒物屋に五円、前からそのままにしてある米屋に三円、そのほか同僚から一円二円と借りたものもすくなくなかつた。荻生さんにも四円ほど借りたままになつていた。

中田に通うころに和尚さんに融通<sup>ゆうづう</sup>してもらつた二円も返さなかつた。

金の価値<sup>とうじ</sup>の貴い田舎<sup>いなか</sup>では、何よりも先にこれから信用がくずれ行つた。

ところがどうした動機か、清三は急にまじめになつた。もちろん校長からこんこんと説かれたこともあつた。和尚さんからもそれとなく忠告された。けれどもそのためばかりではなかつた。

頭が急に新しくなつたような気がした。自己のふまじめであつたのがいまさらのように感じられてきた。落ちて行く深い谷から一刻も早く浮かびあがらなければならぬと思つた。

失望と空虚くうきょとさびしい生活とから起こつた身体からだの不摂生ふせつせい、

このごろでは何をする元気もなく、散歩つとにも出ず、雑誌も読まず、同僚との話もせず、毎日の授業もお勤めだからしかたがなしにやるというふうに、蒼白あおじろい不健康な顔ばかりしていた。どことなく体がけだるく、時々熱があるのでないかと思われることなど

もあつた。持病の胃はますますつのつて、口の中はつねにかわい  
た。——ふまじめな生活がこの不健康な肉体を通じて痛切なる悔  
恨いこんをともなつて來た。弱かつたがしかし清かつた一二年前の生  
活が眼の前に浮かんで通つた。

「絶望と悲哀と寂※せきぱくとに堪へ得られるやうなまことなる生活を送  
れ」

「絶望と悲哀と寂※とに堪へ得らるる」とき勇者たれ

「運命に従ふものを勇者といふ」

「弱かりしかな、ふまじめなりしかな、幼稚なりしかな、空想くうそう

児じなりしかな、今日よりぞわれ勇者たらん、今日よりぞわれ、

わが以前の生活に帰らん」

「第一、体からだを重んぜざるべからず」

「第二、責任を重んぜざるべからず」

「第三、われに母あり」

かれは「われに母あり」と書いて、筆を持ったまま顔をあげた。胸が迫ってきて、蒼白い頬に涙がほろほろと流れた。

かれは中田に通い始めるころから、日記をつけることを廃した。めったなことを書いておいて、万一他人に見らるる恐れがないではないと思つたからである。かれは柳行李やなぎごうりを開けて、そのころの日記を出して見た。九月二十四日——秋季皇靈祭。その文字に朱で圈けんてん点が打つてあつた。その次の土曜日の条に、大高島から向こう岸の土手に渡る記事が書いてあつた。日記はたえだえながら

らも、その年の十月の末ころまでつづいていた。利根川の暮秋ぼしううのさまや落葉や木枯のことも書いてある。十月の二十三日の条に「この日、雨寒し——」と書いてあつた、あとは白紙になつている。その時、「日記なんてつまらんものだ。やはり他人に見せるという色氣があるんだ。自分のやつたことや心持ちが十分に書けぬくらいならよほうがいい。自分の心の大部分を占めてる女のことを一行も書くことのできぬような日記ならだんぜんよしてしまうほうがいい」こう思つて筆をたつたのを覚えている。その間の一年と二三か月の月日のことを清三は考えずにはおられなかつた。その間はかれにとつては暗黒な時代でもあり、また複雑した世相せそうにふれた時代でもあつた。事件や心持ちを十分に書けぬよう

な日記ならよすほうがいいと言つたが、それと反対に日記に書けぬようなことはせぬというところに、日記を書くということのまことの意味があるのでないかとかかれは考えた。

かれはふたたび日記を書くべく罫紙を五六十枚ほど手ずから綴じて、その第一頁ページに、前の三か条をれいれいしく掲げた。

明治三十六年十一月十五日

かれはこう書き出した。

## 四十一

「過去は死したる過去として葬らしめよ」

ほうむ

「われをしてわが日々のライフの友たる少年と少女とを愛せしめよ」

「生活の資本は健康と金銭とを要す」

「われをして清き生活をいとなましめよ」

こういう短い句は日記の中にたえず書かれた。

またある日はこういうことを書いた。

「野心を捨てて平和に両親の老後を養い得ればこれ余の成功にあらずや、母はわれとともに住まんことを予想しつつあり」

またある時は次のようなことを書いた。

「親しかりし昔の友、われより捨て去りしは愚かなりき。じょうす情薄かりき。われをしてふたたびその暖かき昔の友情を復活せしめよ。」

しよせん、境遇は境遇なり、運命は運命なり、かれらをうらやみて捨て去りしわれの小なりしことよ。喜ぶべきかな友情の復活！

昨日小畠より打ち解けたる手紙あり。<sup>う</sup><sub>と</sub> 今日また加藤より情に満たされたる便りあり。小畠は自分の読み古したる植物の書籍近きに送らんといふ。うれし』

校長も同僚も清三の態度のにわかに変わつたのを見た。清三は一昨年あたり熱心に集めた動植物の標本の整理に取りかかつた。

野から採つて来て紙に張つたままそのままにしてあつたのを一つ一つ誰にもわかるように分類してみた。今年の夏休暇<sup>なつやすみ</sup>に三日ほど秩父の三峰<sup>みつみね</sup>に関さんと遊びに行つた時採集して来たものの中にはめずらしいものがあつた。関さんは文部<sup>もんぶ</sup>の中学校教員検定試験

を受ける準備として、しきりに動植物を研究していた。その旅でも実際にについて関さんはしきりに清三にその趣味を鼓吹した。

小畠からやがてその教科書類が到着した。この秋まで音楽に熱心であつた心はだんだんその方面に移つていった。わからぬところは関さんに聞いた。

村の百姓たちはふたたび若い学校の先生の散歩姿を野道に見るようになつた。写生しているそのまわりに子供たちが圍わをかけていることもある。かれは弥勒野の初冬の林や野を絵はがきにして、小畠や加藤に送つた。

三たびこのさびしい田舎いなかに寒い西風の吹き荒れる年の暮れが來た。前の竹藪たけやぶには薄い夕日がさして、あおじやつぐみの鳴き声

が垣に近く聞こえる。二十二日ごろから、日課点の調べが忙しかつた。旧の正月に羽生で挙行せられる成績品展覧会に出品する準備もそれそうおうに整頓しておかなければならなかつた。図画、臨本模写、考案画、写生画、模様画、それに綴り方に作文、昆蟲標本、植物標本などもあつた。それを生徒の多くの作品の中から選ぶのはひとつおりの労力ではなかつた。どうか来年は好成績を博したいものだと校長は言つた。

それにどうしてか、このごろはよく風邪をひいた。散歩したくては、咳嗽が出たり、湯にはいつたとては熱が出たりした。煙草を飲むと、どうも頭の工合<sup>ぐあ</sup>いが悪い。今までに覚えたことのない軽い一種の眩惑<sup>めまい</sup>を感じる。「君、どうかしたんじやありませんか、

「医師に見てもらうほうがいいですぜ」と関さんは二十四日の授業を終わって別れようとする時に言つた。

荻生さんを羽生に訪問した時には、そう大して苦しくもなかつた。けれど成願寺に行つて久しぶりで和尚さんに会つて話そうと思つた希望は警察署の前まで来て中止すべく余儀なくされた。熱も少なくとも三十八度五分ぐらいはある。それに咳嗽<sup>せき</sup>が出る。ちょうどそこに行田に戻り車がうろうろしていたので、やすく賃<sup>ちんせ</sup>銭<sup>ひん</sup>をねぎつて乗つた。寒い路<sup>みち</sup>を日の暮れ暮れにようやく家に着いた。

年の暮れを一室に籠<sup>ひとま</sup>つて寝て送つた。母親は心配して、いろいろ慰めてくれた。幸<sup>さいわ</sup>にして熱は除れた。大晦日<sup>おおみそか</sup>にはちょうど

昨日帰つたという加藤の家を音信<sup>おとず</sup>ることことができた。郁治は清三のやせた顔と蒼白い皮膚<sup>ひふ</sup>とを見た。話しぶりもどことなく消極的になつたのを感じた。なんぞと言うとすぐ衝突して議論をしたり、大晦日の夜を感激して暁<sup>あかつき</sup>の三時まで町中や公園を話し歩いたりした三年前にくらべると、こうも変わるものかと思われた。二人はこのごろ東京の新聞ではやる宝<sup>たから</sup>探しや玄米一升の米粒<sup>こめつぶ</sup>調べの話などをした。万朝報<sup>まんちようほう</sup>の宝を小石川の久世山に予科の学生が掘りに行つてさがし当てたことをおもしろく話した。続いて、日露談判の交渉がむずかしいということが話題にのぼつた。「どうも、東京では近来よほど殺氣立つてゐる。新聞の調子を見てもわかるが、どこかこういつもに違つてまじめなところがある。い

よいよ戦<sup>せん</sup><sub>たん</sub>端<sup>端</sup>が開けるかもしねい」と郁治は言つた。清三もこのごろでは新聞紙上で、この国家の大問題を熱心に見ていた。

「そんな大きな戦争を始めてどうするんだろう」といつも思つていた。二人はその問題についていろいろ話した。陸軍では勝算があるが、海軍では噸<sup>とん</sup>数<sup>すう</sup>がロシアのほうがまさつていて、それに戦<sup>せん</sup><sub>とう</sub>艦<sup>かん</sup>が多いなどと郁治は話した。

元日の朝、床<sup>とこ</sup>間<sup>ま</sup>の花瓶<sup>かびん</sup>にかれはめずらしく花を生けた。早咲<sup>はや</sup>きの椿<sup>つばき</sup>はわずかに赤く花を見せたばかりで、厚いこい緑の葉は、黄いろい寒菊<sup>かんぎく</sup>の小さいのと趣<sup>おもむき</sup>に富んだ対照をなした。べつに蔓<sup>つる</sup>うめもどきの赤い実の鈴<sup>すずな</sup>生りになつたのを挿<sup>さ</sup>していると、母親は「私、この梅もどきツていう花大好きさ、この花を見るとお正月

が来たような気がする」こう言つて通つた。父親は今朝猫の額の  
 ような畠の角かどで、霜解けの土をザクザク踏みながら、白い手を泥  
 だらけにして、しきりに何かしていたが、やがてようやく芽を出  
 し始めた福寿草ふくじゅそうを鉢に植えて床の間に飾つた。朝日の影が薄く  
 障子しようじにさした。親子は三人楽しそうに並んで雑煮ぞうにを祝つた。

清三の日記は次のとく書かれた。

明治三十七年

一月一日——新しき生命と革新とを与ふべく、新しく苦心と  
 成功と喜びと悲しみとをくだすべく新年は來たれり。若き新  
 年は向上の好機なり。願はくば清く樂しき生活をいとなまし  
 めよ。

△「新年<sup>にいとし</sup>を床の青磁<sup>せいじ</sup>の花瓶に母が好みの蔓梅<sup>つるうめ</sup>もどき」△  
 小畠に手紙出す、これより勉強して二年三年ののち、検定試験を受けんとす、科目は植物に志す由言ひやる。△風邪心地やうやくすぐれたれば、明日あたりは野外写生せんとて画板など繕ふ。

二日——「たたずの門」のあたりに写生すべき所ありたれど、風吹きて終日寒ければやむ。△きく子が数へし玄米一合の粒<sup>ぶかず</sup>數七二五六。

三日——昨夜入浴せしため感冒ふたたびもとにもどる。△休暇中に野外写生の望み絶ゆ。

四日——万朝報<sup>まんちょうほう</sup>の米調べ発表。玄米一升七三二五〇粒。

△今年は僕約せんと思ふ。財囊ざいのうのつねに虚なるは心を温めしむる現象にあらず。しよせん生活に必要なるだけの金は必要なり。

五日——年賀の礼今年は欠く。

六日——牧野雪子（雪子は昨年の暮れ前橋の判事と結婚せり）  
より美しき絵葉書の年賀状き來たる。はれもの△腫物再發す。

七日——病後療養と腫物のため帰校をのばす。こうようしゅうとう△紅葉秋濤こうようしゅうとう  
著ちよ「寒牡丹」読みかけてやめる。

罪惡が発端ほつたんなり。△中学世界買つて来てよむ。△加藤帰京す。

八日——健康を得たし、健康を得たし、健康を得たし。

九日——「寒牡丹」読みて夜にはいつて読了す。罪悪に伴なふ悲劇中の苦悶、女主人公ルイザの熱誠なる執着、四百頁の大団円はラブの成功に終はる。△煙草は感冒のかぜの影響にて、にわかにその量を減じ、あらば吸ひ、なくば吸はぬといふやうになりたり。長くこの方法が惰性となればよけれどいかにや。明日はまた利根河畔の人となるべし。△日露の危機、外交より戦期にうつらんとすと新聞紙しきりに言ふ。吾人の最も好まぬ戦争は遂にさくべからざるか。

さびしい寒い宿直室の生活はやがてまた始まつた。昨年の十一月から節約に節約を加えて、借金の返却を心がけたので、財囊ざいのうはつねにつねに冷やかであつた。胃が悪く気分がすぐれぬので、

つとめて運動をしようと思つて、生徒を相手に校庭でよくテニスをやつた。かれの蒼白い髪の生えたすらりとやせた姿はいつも夕暮れの空氣の中にあざやかに見えた。かれは土曜日の日記の中に、「平日の課業を正直にすませ、満足に事務を取り、温かき晩餐」ののち、その日の新聞をよみ終はりて、さて一日の反省になんらもだゆることなく、安息すべき明日の日曜を思へば、テニスの運動の影響とて、右手の筋肉の筆どるにふるへるのほかたえて平和ならざるなし」と書いた。また「Mの都合あれば帰宅したけれど思いとまる。節約の結果三銭の刻み煙草四日を保つ」と書いた。しかしかれは夜眠られなくつて困つた。眠つたと思うとすぐ夢におそわれる。たいていは恐ろしい人に追いかけられるとか刀

で斬られるとかする夢で、眼がさめると、ぐつしより寝汗をかい  
ている。心持ちの悪いことはたとえようがなかつた。

中学校々友会の会報が年二季に來た。同窓の友の消息がおぼろ  
氣ながらこれによつて知られる。アメリカに行つたものもあれば、  
北海道に行つたものもある。今季の会報には寄宿舎生徒松本なに  
がしがみずから棄てて自殺した顛末が書いてあつた。深夜、ピ  
ストルの音がして人々が驚いてはせ寄つたことがくわしく記して  
あつた。かれは今まで思つたことのない「死」について考えた。

夜はその夢を見た。寄宿舎の窓に灯が明るくついて、人がガヤガ  
ヤしている。ピストルが続けざまに鳴つた。自殺した男が窓から  
飛んで來た。

朝ごとの霜は白かつた。夜半の霧みぞれで竹の葉が真白になつてゐることもあつた。ラツケツトをさばいて校庭に立つてゐるかれのやせぎすな姿を人々はつねに見た。解けやらぬ小川の氷の上にはあおじが飛び、空しい枝の桑畠にはつぐみが鳴き、榛はんの根の枯草からは水鶏くいなが羽音高く驚き立つた。櫛ならや栗の葉はまつたく落ちつくして、草の枯れた利根川の土手はただ一帯に代赭色たいしゃいろに塗られて見えた。田には大根の葉がひたと捨てられてあつた。

月の中ごろに、母親から来た小荷物には、毛糸のシャツがはいつていた。手紙には「寒さ激しく御座候間あいだあまり寒き時は湯をやすみ、風ひかぬやう御用心くだされたく候、朝夕よきこと悪しきことにつけお前一人便りに御座候間御身大切に御守り被下度候おまもくだされねまとう」

と書いてあつた。このごろは母を思うの情がいつそう切になつて、  
 土曜日に帰る途みちでも、稚児ちごを背に負つた親子三人づれの零落した  
 姿などを見ては涙をこぼした。母親もこのごろ清三のきわだつて  
 やさしくなつたのを喜んだが、しかしました心配にならぬでもなか  
 つた。にわかに気の弱くなつたのは病氣のためではないかと思つ  
 た。清三が行くと、賃仕事を午後から休んで、白玉のしる粉など  
 をこしらえてもてなした。寝汗が出るということを聞いて、「お  
 前、ほんとうにお医者いしゃにかかるわなくつていいのかね」  
 と顔に心配の色を見せて言つた。

時には荻生さんを羽生から誘つて来て、宿直室に一夜泊まらせ  
 ることなどもあつた。荻生さんはこのごろ話のある養子の口のこ

とを語つて、「その家は君、相応に財産があるんですつて、いまに、りっぱな旦那になつたら、たんとご馳走をしますよ。君ぐらい一人置いてあげてもいい」などと 戯談じょうだん を言つて快活に笑つた。荻生さんは床にはいると、すぐ軒いびきをたてて安らかに熟睡じゅくすい した。こうして安らかに世を送り得る人を清三はうらやましく思つた。

関さんはすいかずらやじやのひげや大黄などを枯れ草の中に見いだして教えてくれた。寒い冬の中にもきわだつて暖かい春のような日があつた。野は平らかに、静かに、広く、さびしく、しかも心地よく刈り取られて、榛はん のひよろ長い空むな しい幹が青い空におすように見られた。かれは午前七時にはからず起きて、燃ゆる

ような朝日の影の霜けぶりの上に昇るのを見ながら、いつも深呼吸を四五十度やるのを例にしていた。「どうして、こう気分がすぐれないんだろう。どうかしなくってはしかたがない」などと時にはみずから励ました。しかしやつぱり胃腸の工合くわいいはよくなかつた。寝汗も出た。

## 四十二

ある暖かい日曜に、関さんとつれだつて、羽生の原という医師のもとに診みてもらいに出かけた。町の横町に、黒い冠木かぶきの門があつて、庭の松がこい緑を見せた。白い敷布をかけた寝台ねだいが診察しんさつ

室しつにあつて、それにとなつた薬局には、午前十時ごろの暖かい冬の日影のとおつた硝子がらすの向こうに、いろいろの薬剤を盛つた小さい大きい瓶びんが棚たなの上に並べてあるのが見えた。医師は三十七八の髪を長くしたていねいな腰の低い人で、聴診器を耳に当てる、まず胸から腹のあたりを見た。次に、肌をぬがせて背中のあたりを見て、コツコツと軽くたたいた。

「やはり、胃腸が悪いんでしような」

こう言つて型のごとき薬を医師はくれた。

春のような日であつた。連日の好晴こうせいに、霜解けの路みちもおおかた乾いて、街道にはところどころ白い埃ほこりも見えた。霞かすみにつつまれて、頂いただきの雪ゆきがおぼろげに見える両毛りょうもうの山々を後ろにして、二

人は話しながらゆるやかに歩いた。野の角に背を後ろに日和ぼつこをして、ブンブン糸繰り車をくつている猫背の婆さんもあつた。  
なだい  
 名代の角の餃飴屋には二三人客が腰をかけて、そばの大釜からは湯気が白く立っていた。野には、日当たりのいい所には草がすでにもえて、なず菜など青々としている。関さんはところどころで、足をとめて、そろそろ芽を出し始めた草をとつた。そしてそれを清三に見せた。風呂敷にも包まずに持つてはいる清三の水薬の瓶には、野の暖かい日影がさしとおつた。

## 四十三

「先生」

とやさしい声がした。

障子をあけると、廊  
ひさしがみ  
髪に結つて、ちよつと見ぬ間に非常に

大人びた女生徒の田原ひでがにこにこと笑つて立つていた。昨年

の卒業生で、できのいいので評判であつたが、卒業すると、すぐ

浦和の師範学校に行つた。高等二年生の時から清三が手がけて教

えたので、ことにかれをなつかしがつてゐる。高等四年のころに、

新体詩などを作つたり和文を書いたりして清三に見せた。  
家はち

よつとした農家で、散歩の折りに清三が寄つてみたこともあつた。

あまり可愛がるので、「林先生は田原さんばかり聾  
ひいき  
聾にしてゐる」

などと生徒から言われたこともあつた。丸顔の色の白い田舎には

めずらしいハイカラな子で、音楽が好きで、清三の教えた新体詩をオルガンに合わせてよく歌つた。師範学校の寄宿舎からも、つねに自然の、運命の、熱情のと手紙をよこした。教え子の一人よりなつかしき先生へと書いて来たこと也有つた。時には、詩をくださいなどと言つて來ることもあつた。

「田原さん！」

清三は立ち上がつた。

「どうしたんです？」

続いてたずねた。

「今日用事があつて、家うちに参りましたから、ちよつとおうかがいしましたの」

言葉から様子からこうも変わるものかと思うほど大人びてハイカラになつたのを清三は見た。

「先生、ご病氣だつて聞きましたから」

「誰に?」

「関先生に——」

「関さんにどこで会つたんです?」

「村の角かどでちよつと——」

「なアにたいしたことはないんですよ」と笑つて、「例の胃腸おとなです——あまり甘いものを食くい過ぎるものだから」

ひで子は笑つた。

先生と生徒とは日曜日の午後の明るい室に相対してしばし語つ

た。寄宿舎の話などが出た。今年卒業するはずの行田の美穂子の話も出た。いぜんとして昔の親しみは残っているが、女には娘になつたへだてがどことなく出ていているし、男には生徒としてよりも娘という感じがいつものへだてのない会話をさまたげた。机の上には半分ほど飲んだ水薬の瓶<sup>びん</sup>が夕日に明るく見えていた。清三は今朝友から送つて来た「音楽の友」という雑誌をひろげてひで子に見せた。口絵には紀元二百年ごろの樂聖<sup>がくせい</sup>セント、セリシアの像が出ていた。オルガンの妙音から出た花と天使<sup>エンジェル</sup>の幻影とを樂聖はじつと見ている。清三はこの人はローマの貴族に生まれて、熱心なる工ホバの信者で、オルガンの創造者であるということを話して聞かせた。美容花<sup>びようはな</sup>のごとくであつたということをも語つ

た。

オルガンの音がやがて聞こえ出した。小使が行つてみると、若い先生が指を動かしてしきりに音を立ててゐるかたわらに、海老<sup>えび</sup>茶<sup>ちゃ</sup>の袴<sup>はかま</sup>を着けたひで子は笑顔<sup>えがお</sup>をふくんで立つた。

校庭は静かであつた。午後の日影に雀がチヤチヤと鳴きしきつた。テニスコートの線があきらかに残つていて、宿直室の長い縁側<sup>えんざい</sup>の隅にラケットやボールや網<sup>ねット</sup>が置いてあるのが見える。庭の一か隅には教授用の草木が植えられてあつた。

ひで子を送つて清三はそこに出で來た。

薔薇<sup>ばら</sup>の新芽<sup>しめう</sup>が出でているのが目についた。清三はこれをひで子に

示して、

「もう芽が出ましたね、早いもんだ、もうじき春ですな」

「ほんとうに早いこと！」

とひで子はその一葉をつまみ取った。

やがて校外の路みちを急いで帰つて行く海老茶袴の姿が見えた。

## 四十四

日露開戦、八日の旅順と九日の仁川じんせんとは急雷のように人々の耳を驚かした。紀元節の日には校門には日章旗にっしょきが立てられ、講堂からはオルガンが聞こえた。

東京の騒ぎは日ごとの新聞紙上に見えるように思われた。

一  
ひとつ

月き以前から政治界の雲行きのすみやかなのは、田舎で見ていても気がもめた。召集令はすでにくだつた。村役場の兵事係りが夜に日をついで、その命令を各戸に伝達すると、二十四時間にその管下に集まらなければならぬ壯丁そうていたちは、父母妻子に別れを告げる暇もなく、あるは夕暮れの田舎道に、あるは停車場までの乗合馬車に、あるは檜林ならばやしの間の野の路に、一包みの荷物をかかえて急いで国事こくじにおもむく姿がぞくぞくとして見られた。南埼玉さいたまの一郡から徵集されたものが三百余名、そのころはまだ東武線ができぬころなので、信越線の吹上駅ふきあげえき、鴻巣駅こうのすえき、桶川駅おけがわえき、奥羽線の栗橋駅、蓮田駅はすだえき、久喜駅くきえきなどがその集まるおもなる停車場であつた。

交通の衝<sup>しょう</sup>に当たつた町々では、いち早く国旗を立ててこの兵士たちを見送つた。停車場の柵<sup>さくない</sup>内には町長だの兵事係りだの学校生徒だの親類友だちだのが集まつて、汽車の出るたびごとに万歳を歓呼<sup>かんこ</sup>してその行をさかんにした。清三は行田から弥勒<sup>みろく</sup>に帰る途中、そうした壯丁<sup>じょうting</sup>に幾<sup>いく</sup>人もでつくわした。

旅順<sup>りょじゅん</sup>仁川<sup>じんせん</sup>の海戦があつてから、静かな田舎<sup>いなか</sup>でもその話がいたるところでくり返された。町から町へ、村から村へ配達する新聞屋の鈴の音は忙しげに聞こえた。新聞紙上には二号活字がれいりしくかかげられて、いろいろの計画やら、風説やらが記されてある。十二日は朝から曇つた寒い日であつたが、予想のごとく、敵の浦塙艦隊<sup>うらじおかんたい</sup>が津輕海峡<sup>つながるかいきょう</sup>に襲<sup>しゆ</sup>うらい来て、商船奈<sup>なこの</sup>

古浦丸を轟沈したという知らせが来た。その津軽海峡の艦  
作崎というのはどこに当たるか、それをたしかめるため、校長  
は教授用の大きな大日本地図を教員室にかけた。老訓導も関さん  
も女教師もみなそこに集まつた。

「ははア、こんなところですかな」

と老訓導は言つた。

清三は浦塩から一直線にやつて來た敵の艦隊と轟沈された  
わが商船とを想像して、久しくその掛け図の前に立つていた。

湯屋でも、理髪舗でも、戦争の話の出ぬところはなかつた。憎  
いロシアだ、こらしてやれという爺もあれば、そうした大国を敵  
としてはたして勝利を得らるるかどうかと心配する老人もあつた。

子供らは旗をこしらえて戦争の真似まねをした。けれどがいして田舎は平和で、夜はいつものごとく竹藪たけやぶの外に藁屋わらやの灯あかりがもれた。ちょうど旧暦の正月なので、街道の家々からは、酒に酔えつて笑う声や歌う声もした。

このごろかれは朝は六時半に起床し、夜は九時に寝た。正月の餅と餡飴うどんとに胃腸をこわすのを恐れたが、しかしたいしたこともなくてすぎた。節約に節約を加えた経済法はだんだん成功して負債さいもすくなくなり、校長の斡旋あつせんで始めた頼母講たのもしこうにも毎月五十銭をかけることもできるようになった。午後の二時ごろにはいつも新聞が来た。戦争の始まつてから、互いにかわった新聞を一つずつ取つて交換して見ようという約束ができた。国民に万朝報に

東京日日に時事、それに前の理髪舗から報知を持つて來た。

この多くの新聞を読むことと、日記をつけることと、運動をすることと、節儉をすることと、風を引かぬようにつとむることと、煙草たばこをやめることと、土曜日の帰宅を待つことと、それくらいがこのごろの仕事で、ほかにこれといつて変わつたこともなかつた。しかし煙草と菓子とをやめるは容易ではなかつた。気分がよかつたり胃がよかつたりすると、机のまわりに餅菓子からの竹皮や、日の出の袋などがころがつた。

写生にはだいぶ熱中した。天氣のよい暖かい日には、がばん画板と絵の具とをたずさえてよく野に出かけた。稻木いなぎ、榛はんの林、掘切ほつきりの枯かれ葦あし、それに雪の野を描いたのもあつた。ある日学校の付近の

紅梅をえがいてみたが、色彩がまざいので、花が桃かなんぞのよう見えた、嫁菜<sup>よめな</sup>、蓬<sup>よもぎ</sup>、なすなど緑をも写した。

月の末に、小畠から手紙が届いた。少しく病をえて、この春休みを故郷に送るべく決心した。久しぶりで一度会いたい。こちらから出かけて行くから、日取りを知らせてよこせとのことであつた。旅順における第一回の閉塞<sup>へいそく</sup>の記事が新聞紙上に載せられてある日であつた。清三は喜んで返事を出した。金曜日には行くといふ返事が折りかえして来る。清三は荻生さんにも来遊をうながした。その前夜は月が明るかつた。かれはそれに対して、久しうりで友のことを思つた。

## 四十五

小畠は昔にくらべていちじるしく肥えていた。薄い鬚などは生ひげやして頭をきれいに分けた。高等師範の制服がよく似合つて見える。以前の快活な調子で「こういう生活もおもしろいなア」などと言つた。

荻生さんは清三と小畠と教員たちとが、ボールを取つて校庭に立つたのを縁側からおりる低い階段の上に腰かけて見ていた。小畠の球たまはよく飛んだ。引きかえて、清三の球には力がなかつた。二三度勝負しょうぶがあつた。清三の額ひたいには汗が流れた。心臓の鼓動こどうも高かつた。

苦しそうに呼吸<sup>いき</sup>をつくのを見て、

「君はどうかしたのか」

こう言つて、小畠は清三の血色の悪い顔を見た。  
〔体<sup>からだ</sup>が少し悪いもんだから〕

「どうしたんだ?」

「持病の胃腸さ、たいしたことはないんだけれど……」

「大事にしないといかんよ」

小畠はふたたび友の顔を見た。

三人は快活に話した。清三が出して見せる写生を一枚ごとに手に取つて批評した。荻生さんの軽い駄洒落<sup>だじゃれ</sup>もおりおりは交つた。

そこに関さんがやつて来て、昆虫採集の話や植物採集の話が出る。

三峰みつみねで採集したものなどを出して見せる。小畠は学校にあるめずらしい標本や昨年の秋に採集に出かけた時のことなどを話して聞かせる、にぎやかな声がいつもはしんとした宿直室に満ちわたつた。

夕飯ゆうめしは小川屋に行つて食つた。雨氣あまけを帶びた夕日がぱツと障子しようじを明るく照らして、酒を飲まぬ荻生さんおぎゅうさんの顔も赤い。小畠は美穂子や雪子のことはなるたけ口にのぼさぬようとした。かれは談笑の間にもいちじるしく清三の活気がなくなつたのを見た。

荻生さんは清三のいない時に、

「あれでも去年はなかなか盛んだつたんですからな」

こう言つて、女が学校にやつて來たことなどを小畠に話して聞

かせた。小畠は少なからず驚かされた。

夜は小川屋から一組の蒲団を運んで来た。まだ寒いので、荻生さんは小使部屋に行つてはよく火を火鉢に入れて持つて來た。菓子もつき、湯茶もつき、話もつきてようやく寝ようとしたのは十時過ぎであつた。便所に出て行つた小畠は帰つて来て、「雨が降つてるねえ」と声低く言つた。

「雨！」

と明日朝早く帰るはずの荻生さんは困つたような声を立てた。

「明日は土曜、明後日は日曜だ。行田には今週は帰らんつもりだから、雨は降つたツてかまいやしない。君も、明日一日遊んで行くサ。めつたに三人こうしていつしょになることはありやしない」

と清三はこう萩生さんに言つたが、戸外にようやく音を立て始めた点滴てんてきを聞いて、「愉快だなア！ こうしたわれわれの会合の背景が雨になつたのはじつに愉快だ。今夜はしめやかに昔を語れツて、天が雨を降らしてくれたようなものだ！」

興きょうが大おおいに起こつて來たというふうである。小畠の胸にもかれの胸にも中学校時代のことがむらむらと思い出された。清三は帰りがおそらくなるといつもこうして一枚の蒲団ふとんの中にはいつて、熊谷の小畠の書斎に泊まるのがつねであつた。顔と顔とを合わせて、眠くなつてどつちか一方「うんうん」と受け身になるまで話をするのが例であつた。

「あのころが思い出されるねえ」

と小畑は寝ながら言つた。

荻生さんが一番先に鼾声をたてた。「もう、寝ちやつた！ 早いなア」と小畑が言つた。その小畑もやがて疲れて熟睡してしまつた。清三は眼がさめて、どうしても眠られない。戸外にはサツと降つて通る雨の音が聞こえる。いろいろな感があとからあとから胸をついてきて、胸がいっぱいになる。こうしたやさしい友もある世の中に長く生きたいという思いがみなぎりわたつたが、それとともに、涙がその蒼白あおじろい頬をほろほろと伝つて流れた。

中田の女のことも続いて思い出された。長い土手を夕日を帶びてたどつて行く自分の姿がまるでほかの人であるかのようにあざやかに見えた。涙が寝衣ねまきの袖そでで拭いても拭いても出た。

翌朝、小畠は言つた。

「昨夜、君はあれからまた起きたね」

「どうも眠られなくつてしかたがないから、起きて新聞を読んだ」「何かこそそ音がするから、目をあいてみると、君はランプのそばで起きている。君の顔が白くはつきりときわだつていたのが今でも見える」こう言つて清三の顔を見て、「夜、寝られないかえ？」

「どうも寝られんで困る」

「やはり神経衰弱だねえ」

土曜日は半日授業があつた。荻生さんは朝早く雨をついて帰つた。小畠は校長や清三の授業ぶりを参観したり、教員室で関さん

の集めた標本を見たり、時間ごとに教員につれられてぞろぞろと教場から出て来る生徒の群れを見たりしていた。女教員は黄いろい声を立てて生徒を叱つた。竹藪の中には椿が紅く咲いて、その縁にある盛りをすぎた梅の花は雨にぬれて泣くように見えた。清三は袴はかまをはいて、やせはてた体からだと蒼白あおじろい顔とを教室の卓の前に浮き出すように見せて、高等二年生に地理を教えていた。午後からは、二人はまた宿直室で話した。三時には馬車が喇叭らっぱを鳴らして羽生から来たが、御者ぎよしゃ者は今朝荻生さんに頼んでやつた豚肉の新聞包みを小使部屋にほうり込むようにして置いて行つた。包みの中には葱ねぎと手紙みょうじとが添えてあつた。手紙には明日午後から羽生に来い。待つている！ と書いてあつた。

雨は終<sup>しゆうじつ</sup>日<sup>ひ</sup>やまなかつた。硬い田舎<sup>いなか</sup>の豚肉も二人を淡く酔わせるには十分であつた。二人は高等師範のことやら、旧友のことやら、戦争のことやらをあかず語つた。

「今年はだめだが、来年は一つぜひ検定<sup>けんてい</sup>を受けてみたいんだが」と清三は言つた。

日曜日には馬車に乗つて羽生に出かけた。旅順が陥落<sup>かんらく</sup>したという評判が盛んであつた。まだそんなに早く取れるはずがないという人々もあつた。街道を鈴を鳴らして走つて行く号外売りもあつた。荻生さんは、銀行の一階を借りて二人を迎えた。ご馳走にはいり鳥と鶏肉<sup>けいにく</sup>の汁と豚鍋<sup>ぶたなべ</sup>と鹿子餅<sup>かのこもち</sup>。

「今日はなんだか飯のほうが副食のようだね」と清三は笑つた。

清三のいないところで、小畑は荻生さんに、  
「林君、どうかしてますね、体からだがどうもほんとうじやないようで  
すね?」

「僕もじつは心配してるんですがね」

「何か悪い病気じやないだろうか」

「さア——」

「今のうちにすすめて根本から療治させるほうがいいですぜ。手  
おくれになつてはしかたがないから」

「ほんとうですよ」

「持病の胃が悪いんだなんて言つてるけれど——ほんとうにそ  
うかしらん」

「町の医師いしゃは腸が悪いんだツて言うんですけど」

「しつかりした医師に見せたほうがいいと思うね」

「ほんとうですよ」

翌日の朝、銀行の二階で三人はわかれた。小畠は清三に言つた。  
「ほんとうに身体からだをたいせつにしたまえ」

## 四十六

戦争はだんだん歩を進めて來た。

ていしゅう 定州

の騎兵きへい

の衝突しょうとつ、

軍事公債応募者的好況、わが艦隊の浦塩攻撃、旅順口外の激戦、臨時議会の開院、第二回閉塞運動、広瀬中佐の壮烈なる戦死、

第一軍の出発につれて第二軍の編制、國民は今はまじめに戦争の意味と結果とを自覺し始めた。野はだんだん暖かくなつて、菜の花が咲き、董すみれが咲き、蒲公英たんぽぽが咲き、桃の花が咲き、桜が咲いた。号外の来るたびに、田舎町の軒には日章旗が立てられ、停車場には万歳が唱えられ、畠の中の藁屋わらやの付近からも、手製の小さい国旗を振つて子供の戦争ごっこしているのが見えた。学校では学年末の日課採点に忙わしく、続いて簡易な試験が始まり、それがすむと、卒業証書授与式じゅよしきが行なわれた。郡長は卓テーブルの前に立つて、卒業生のために祝辭しゃゆくじを述べたが、その中には軍國多事のことが縷々るるとして説かれた。「皆さんは記念とすべきこの明治三十七年に卒業せられたのであります。日本の歴史の中で一番まじめな時、

一番大事な時、こういう時に卒業せられたということは忘れてはなりません。皆さんは第二の日本国民として十分なる覺悟をしなければなりません」平凡なる郡長の言葉にも、時世の言わせる一種の強味と憧懐とがあらわれて、聴き人の心を動かした。

写生帳には瓶の梅花、水仙、学校の門、大越の桜などがあつた。沈丁花の花はやや巧みにできたが、葉の陰影にはいつも失敗した。それから緋纈蝶、紋白蝶なども採集した。小畑が送つてくれた丘博士訳の進化論講話が机の上に置かれて、その中ごろに董の花が枝折りの代わりにはさまれてあつた。菓子は好物のうぐいす餅、菜は独活にみつばにくわい、漬け物は京菜の新漬け。生徒は草餅や牡丹餅をよく持つて来てくれた。

利根川の土手にはさまざまの花があつた。ある日清三は関さんと大越から発戸ほつとまでの間を歩いた。清三は一々花の名を手帳につけた。——みつまた、たびらこ、じごくのかまのふた、ほとけのざ、すずめのえんどう、からすのえんどう、のみのふすま、すみれ、たちつぼすみれ、さんしきすみれ、げんげ、たんぽぽ、いぬがらし、こけりんどう、はこべ、あかじくはこべ、かきどうし、さぎごげ、ふき、なづな、ながばぐさ、しゃくなげ、つばき、こごめぎくら、もも、ひぼけ、ひなぎく、へびいちご、おにたびらこ、ははこ、きつねのぼたん、そらまめ。

新たにつくつた学校の花壇にもいろいろの草花が集められた。

農家の垣には梨の花と八重桜、畠には豌豆えんどうと蚕豆そらまめ、麦笛むぎぶえを鳴らす音が時々聞こえて、燕つばめが街道を斜めに突っ切るように飛びちがつた。あり蟻、蜂、油虫、夜は名の知れぬ虫がしきりにズイズイと鳴き、蛙の声はわくようにした。

あけび、ぐみ、さきごけ、きんぽうげ、じゅうにひとえ、たけにぐさ、きじむしろ、なんてんはぎなどを野からとつて来て花壇に移した。やがて山吹が散ると、芍薬しゃくやく、牡丹ぼたん、つつじなどが咲き始めた。

この春をかれはまつたく花に熱中して暮らした。新緑をとおし

た日の光が洪こうずい水のように一室にみなぎりわたつた。かれはそこで田原秀子にやる手紙を書き、めずらしいいろいろの花を封じ込めてやつた。ひで子からも少なくとも一週に一度はかならず返事が來た。歌が書いてあつたり、新体詩が書いてあつたりした。わが愛するなつかしの教え子とこつちから書いてやると、あつちからは、恋しきなつかしき先生まいると書いてよこした。

## 四十八

このごろ移転問題が親子の間にくり返された。

学校に自炊していくは不自由でもあり不経済もある。家のつ

「どうからいってもべつに行田に住んでいなければならぬという理由もない。父の商売の得意先もこのごろでは熊谷妻沼方面よりむしろ加須かぞ、大越おおごえ、古河こがに多くなつた。離れていて、土曜日に来るのを待つのもつらい。「それにお前も、もう年ところだから、相応あとののがあつたら一人嫁よめをもらつて、私にも安心させておくれよ」

母はこう言つて笑つた。

清三は以前のように反対しようともしなかつた。昨年からくらべると、心もよほど折れてきた。たえず動搖した「東京へ」もだいぶ薄らいだ。ある時小畠へやる手紙に、「当年のしら滝は知らずしらずの間に終ついに母まもを護まもるの子たらんといたし居り候」と書い

たこともある。

「羽生がいいよ……あまり田舎でもしかたがないし、羽生なら知つてる人も二三人はあるからね」

母がこう言うと、

「そうだ、引っ越すなら、羽生がいい。得意先にもちようどつごうがいい」

父も同意する。

そこには和尚さんもいれば、荻生さんもいる。学校にも一里半ぐらいしかないから、通うのにもそう難儀ではない。清三もこう思つた。

荻生さんにも頼んだ。ある日曜日を父親といつしょに羽生に出

かけて行つてみたこともあつた。その日は第二軍が遼東半島に上陸した公報の来た日で、一週間ほど前の九連城戦捷とともに人々の心はまつたくそれに奪われてしまつた。街道にも町にも国旗が軒ごとにたえず続いた。

「万歳、万歳！」

突然町の横町からこおどりして飛んで出て来るものもあつた。どこの家でもその話ばかりで持ち切つて、借家しゃくやなどを教えてくれるものもなかつた。

ねぎ、しゅろ、ひるがお、ままこのしりぬぐいなどが咲き、梨、桃、梅の実は小指の頭ぐらいの大きさになる。ところどころに茶ち摘やつみをする女の赤い襷たすきと白い手拭いとが見え、裸で茶を製してい

る茶師の唄が通りに聞こえた、志多見原にはいちやくそう、たか  
とうだいなどの花があつた。やがて麦の根元は黄ばみ、菖蒲の蕾  
は出で、桺の花は散り、にわやなぎの花は咲いた。蚕はすでに三  
眠を過ぎた。

続いてしらん、ぎしぎし、たちあおい、かわほね、のいばら、  
つきみそ、うてつせん、かなめ、せきちくなどが咲き、裏の畠の  
桐の花は高く薫つた。かや、あし、まこも、すげなどの葉も茂つ  
て、剖葦はしきりに鳴く。

金 州 の 戰い、大連湾の占領——第三軍の編制、旅順の背  
面攻撃。

「敵も旅順は頑強にやるつもりらしいですな。どうも海軍だ

けではだめのようですね」などと校長が言つた。旅順の陥落についての日が同僚の間に予想される。あるいは六月の中ごろといい、あるいは七月の初めといい、あるいは八月にはどんなにおくれても取れるだろうと言つた。やがて鶏一羽と鶏卵十五個の賭をしようということになる。そして陥落の公報が達した日には、休日であろうがなんであろうが、職員一統学校に集まつて大々的祝宴会を開こうと決議した。

六月にはいると、麦は黄熟こうじゆくして刈り取られ、胡瓜きゅうりの茎短みどりかきに花をもち、水草のあるところには螢ほたるやみが闇を縫つて飛んだ。ほそい、ゆきのした、のびる、どくだみ、かもじぐさ、なわしろいちご、つゆぐさなどが咲いた。雨は降つては晴れ、晴れてはまた

降つた。ある日、美穂子の兄からめずらしくはがきが届いた。かれは士官学校を志願したが、不合格で、今では一年志願兵になつて、麻布の留守師団にいた。「十中八九は戦地におもむく望みあり、幸いに祝せよ」と得意そうに書いてあつた。それに限らず、かれは野から畠から町から鋤犁<sup>すきくわ</sup>を捨て 算盤<sup>そろばん</sup>を捨て筆を捨てて国事におもむく人々を見て、心を動かさざるを得なかつた。海の外には同胞が汗を流し血を流して國のために戦つている。そこには新しい意味と新しい努力がある。平生<sup>へいぜい</sup>政見を異にした政治家も志を一にして公に奉じ、金を守るにもっぱらなる資本家も喜んで軍事公債に応じ、拳国一致、千載<sup>せんざい</sup>一遇の壮拳は着々として実行されている。新聞紙上には日ごとに壮烈なる最後をとげた士

官や、勇敢なる偉勲いくくんを奏した兵士の記事をもつて満たされ、それについて各地方の団隊の熱心なる忠君愛国の状態が見るよう記されてある。「自分も体からだが丈夫ならば——三年前の検査に戊種ぼうしゅくなどという憐むべき資格でなかつたならば、満洲の野に、わが同胞とともに、銃を取り剣をふるつて、わずかながらも国家のためにつくすことができたであろうに」などと思うことも一度や二度ではなかつた。かれはまた第二軍の写真班の一員として従軍した原杏花はらきょうかの従軍記のこのごろ「日露戦争実記」に出始めたのを喜んで読んだ。恋愛を書き、少女えがを描き、空想を生命とした作者が、あるいは砲煙ほうえんのみなぎる野に、あるいは死屍しきの横たわれる塹ざんご壕うに、あるいは機関砲のすさまじく鳴る丘の上に、そのさまざま

まの感情と情景を叙した筆は、少なくともかれの想像をそこにつれて行くのに十分であつた。三年前にイタリヤンストロウの意気な帽子をかぶつて、羽生の寺の山門からはいつて来たその人——酔つて詩を吟じて、はては本堂の木魚や鐘をたたいたその人が、第二軍の司令部に従属して、その混乱した戦争の巴渦の中にはいつているかと思うと、いつそうその記事がはつきりと眼にうつるような気がする。急行軍の砲車、軍司令官の戦場におもむく朝の行進、砲声を前景にした茶褐色のはげた丘、その急忙の中を、水筒を肩からかけ、ピストルを腰に巻いて、手帳と鉛筆とを手にして飛んで歩いている一文学者の姿をかれはうらやましく思つた。

ある日 和尚さんおじょうに、

「原さんからもお便りがありますか」

と聞くと、

「え、この間金州から絵葉書が来ました」

と和尚さんは机の上から軍事郵便と赤い判の押してある一枚の  
絵ハガキを取つて示した。それには同じく従軍した知名な画家が  
死屍しきのそばに菖蒲あやめが紫に咲いているところを描いていた。

「いい記念ですな」

「え、こういう花がたくさん戦場に咲いてるとみえますな」

「戦記にも書いてありましたよ」

と清三は言つた。

## 四十九

梅雨さみだれの中に一日カツと晴れた日があつた。薄い灰色の中からあざやかな青い空が見えて、光線がみなぎるように青葉に照つた。行田からの帰り途かえみち、長野の常行寺じょうこうじの前まで来ると、何かことがあるとみて、山門の前には人が多く集まつて、がやがやと話している。小学校の生徒の列も見えた。

青葉の中から白い旗がなびいた。

戦死者の葬式があるのだということがやがてわかつた。清三は山門の中にはいってみた。白い旗には近衛歩兵第二連隊一等卒白

井倉之助之靈と書いてあつた。五月十日の戦いに、あいが  
斐河のうがん右岸で戦死したのだという。フロツクコートを着た知事代理や、制服を着けた警部長や、はおりはかま羽織袴の村長などがみな会葬した。村の世話役があつちこつちに忙しそうにそこらを歩いている。

遺骨をおさめた棺は白い布で巻かれて本堂にすえられてあつた。  
 ちょうど主僧のお経がすんで知事代理が祭文さいもんを読むところであつた。その太いさびた声が一しきり広い本堂に響きわたつた。やがてそれに続いて小学校の校長の祭文がすむと、今度は戦死者の親友であつたという教員が、奉書に書いた祭文を高く捧げて、ふるえるような声で読み始めた。その声は時々絶えてまた続いた。  
 嘴おえつ咽する声があつちこつちから起こつた。

柩ひつぎが墓に運ばれる時、広場に集まつた生徒は両側に列を正して、整然としてこれを見送つた。それを見ると、清三はたまらなく悲しくなつた。軍司令部といつしよに原杏花が出発する時、小学校の生徒が両側に整列して、万歳となを唱えた。その時かれは「爾なんじ、幼き第二の国民よ、国家の将来はかかるて汝らの双肩なんじ そうけんにあるのである。健在なれ、汝ら幼き第二の国民よ」と心中に絶叫したと書いてある。その時ほど熱い涙が胸に迫つたことはなかつたと書いてある。清三も今そうした思いに胸がいっぱいになつた。幼い第二の国民に柩ひつぎを送られる一戦死者の靈——

砲煙のみなぎつた野に最後の苦痛をあじわつて冷たく横たわつた一兵卒べいそつの姿と、こうした梅雨晴れのあざやかな故郷の日光の

もとに悲しく嘗まれる葬式のさまだがいつしょになつて清三の眼の前を通つた。

「どうせ人は一度は死ぬんだ」

こう思つたかれの頬には涙がこぼれた。

かれはいつか寺を出て、例の街道を歩いていた。光線はキラキラした。青葉と青空の雲の影とが野の上にあつた。

二三日前からしきりに報ぜられる壱岐沖の常陸丸遭難と得利寺における陸軍の戦捷とがくり返しきり返し思い出される。

初瀬吉野宮古の沈没などをも考えて、「はたして最後の勝利を占めることができんだろうか」という不安の念も起つた。

野にとうご草があるのを見て、それをとつた。そばにある名を

知らぬ赤い草花は学校の花壇に植えようと思つて、根から掘つて紙に包み、汚れた手をみそはぎの茂る小川で洗つた。ふと一昨日浦和のひで子から来た手紙を思い出して、考えはそれに移る。羽生に移転してからの新家庭に、そのあきらかな笑顔を得たならば、いかに幸福であろうと思つた。かれはこのごろひで子を自分の家庭にひきつけて考えることが多くなつた。

羽生町の入り口では、東武鉄道の線路人夫がしきりに開通工事に忙しがつていたが、そのそばの藁葺家わらぶきやには、色のさめた国旗がヒラヒラと日に光つた。

羽生に移転する前日の日記に、かれはこう書いた。

「二十六年故山こさんを出でて、熊谷の桜に近く住むこと数年、三十三年にはここ忍沼おしほまのほとりに移りてより、また数年を出でずして蝸牛ででむしのそれのごとく、またも重からぬ殻からを負ひて、利根河畔羽生とねかはんに移らんとす。奇しきは運命のそれよ、おもしろきは人生のそれよ、回顧一番、笑つて昔古びたる城下の縁を出でて去らんのみ。歴史の章はかくのごとく、またかくのごとくして改められん」

羽生の大通りをちょっと裏にはいつたところにその貸屋があつた。探してくれたのは荻生さんで、持主は二三年前まで、通りで商売をしていた五十ばかりの気のよさそうな人であつた。下が六

畳に四畳半、二階が六畳、前に小さな庭があつて、そこに丈の低い柿の木が繁っていた。家賃が二円五十銭、敷金が三月分あるのだが、荻生さんのお友だちならそれはなくつてもよいという。父親も得意回りのついでに寄つてみて、「まあ、あれならいい！」と賛成した。

一週間の農繁休暇を利用して、いよいよ移転することになった。  
平生親しくした友だちは多くは離散して、その時町にいるものは、活版屋をしている沢田君ぐらいのものであつた。清三はその往来した友の家々を暇乞いとまごいをして歩いた。北川の家には母親が一人いた。入り口ですまそうとするのを、「まあまあほんとうにお久しぶりでしたね」と無理に奥の座敷へと請しょうされた。美穂子に

ついては、「あれも今年は卒業するのですけれど、意氣地<sup>いくじ</sup>がなくつて、学校が勤まりますかどうですか」などと言つた。移転のことを聞いては「まあまあお名残り惜しい、……けれどまあ貴君の身体<sup>からだ</sup>がおきまりになつて、お引っ越ししなさるんですから、結構ですねえ、お母さんもさぞお喜びでしよう。<sup>かおる</sup>薰<sup>かおる</sup>がおれば、お手伝いぐらいいたすんですけど、あれもこの七月には戦地に参るそうですから……」それからそれと、戦争の話やら町の話やらが続いた。母親の眼には、蒼<sup>あおじろ</sup>白<sup>おしぬま</sup>い顔をした眼の濁つた体<sup>からだ</sup>の姿がうつった。忍沼<sup>おしぬま</sup>のさびた水にはみぞかくしの花がところどころに白く見えた。加藤の家には母親も繁子も留守<sup>する</sup>で、めずらしく父親がいた。上がつて教育上の話などを一時間ばかりもした。

羽生からいますこし近いところにいい口があつたら、転任させてもらいたいということをも頼んだ。石川の店では、小僧が忙しそうに客に応対していた。そこへ番頭が向こうから自転車をきしらして帰つて来て、ひらりと飛び下りた。沢田さんは真黒になつて働きながら、「こつちのほうに来た時にはぜひ寄つてください」と言つた。清三は最後に弟の墓を訪うた。<sup>と</sup>祖父の墓は足利にある。祖母の墓は熊谷にある。こうして、ところどころに墓を残して行く一家族の漂泊的<sup>ひようはくつき</sup>生活をかれは考えて黯然<sup>あんぜん</sup>とした。一人他郷に残される弟はさびしかろうなどとも思つた。あじさいの花は墓を明るくした。

道具とてもない一家の移転の準備は簡単であつた。簾笥<sup>たんす</sup>と戸棚

とを薦でからげ、夜具を大きなさいみの風呂敷で包んだ。陶器はすべて壊れぬよう、簾笥の衣類の中や蒲団の中などに入れた。最後に椿や南天の草花などを掘つて、根を薦包みにして庭の一隅に置いた。

降るかと思つた空は午前のうちに晴れた。荷物を満載した三台の引つ越し車はガラガラと町の大通りをきしつて行く。ところで、母親と清三とが知人にでつくわして挨拶しているさまが浮き出すように見える。車の一番上に積まれた紙屑籠につめたランプのホヤがキラキラ光る。

長野の手前で、額が落ちかかりそうになつたのを清三は直した。母親はにこにことうれしそうな顔色で、いろいろな話をしながら

歩いて行く。熊谷から行田に移転した時の話も出る。

「こうして、たいした迷惑を人にもかけずに、昼間引っ越して行かれるのは、みんなお前のおかげだよ」などと言つた。長野をはずれようとするところで、向こうから号外売りが景氣よく鈴を鳴らして走つて來た。清三は呼びとめて一枚買つた。竹敷たけじきを出た上村艦隊が暴雨のため敵を逸いつして帰着したということが書いてある。車力しゃりきは「残念ですなア。敵かたきをにがしてしまつて……常陸丸まつるではこの近辺きんぺんで死んだ人がいくらもあるですぜ。佐間さまでは三人まであるですぜ」などと話し合つた。

ある豪農の壠へいの前では、平生引つ越し車などに見なれないでの犬がほえた。榛はんの並木に沿つた小川では、子供が泥だらけになつ

て、さで網で雜魚ざこをすくつている。繭まゆう売りの車がぞろぞろ通つた。

新しい家では、今朝早く来た父親と、局を休んで手伝いに來てくれた荻生さんとが、バタバタ畳をたたいたり、局を休んで手伝いに來てくれた荻生さんとが、バタバタ畳をたたいたり、雜巾ぞうきんがけをしたり、破れた障子しようじをつくりつたりしていた。大家さんは火鉢と茶道具とを運んで来て、にこにこ笑いながら、「何かいるものがありましたなら遠慮なくおっしゃい」と言つて、禿頭はげに頬冠ほおかむりをして尻をまくつた父親の姿を立つて見ていた。それも十二時ごろにはたいてい片づいて、蕎麦屋そばやからは蕎麦を持つて来る。荻生さんは買って来た大福餅を竹の皮包みから出してほおばる。そこの小路こうじにガタガタと車のはいる音がして、清三と母親の顔が見えた。

車力は繩<sup>なわ</sup>をといて、荷物を庭口から縁側へと運び入れる。父親と荻生さんが先に立つて簾笥や行李や戸棚や夜具を室内に運ぶ。長火鉢、簾笥の置き場所を、あれのこれのと考える。母親は櫻<sup>さくら</sup>がけになつて、勝手道具を片づけていたが、そこに清三が外から来て、呼吸<sup>いき</sup>をきらして水を飲んだ。

母親は手をどどめて、じつと見て、

「どうしたの？」

「少し手伝つたら、呼吸<sup>いき</sup>がきれてしかたがない」

「お前は無理をしてはいけないよ。父<sup>おとう</sup>さんがするから、あまり働くかずにおおきよ」

このごろ、ことに弱くなつた清三が、母親にはこのうえない心

配の種たねであつた。

やがてどうやらこうやらあたりが片づく。「こうしてみると、なかなか住心地すみごこちがいい」と父親は長火鉢の前で茶を飲みながら言つた。車力は庭の縁側に並んで、振舞ふるまわれた蕎麦をズルズルすすつた。

清三と荻生さんは二階に上がつて話した。南と西北とがあいているので風通しがいい。それに裏の大家の庭には、栗だの、柿だの、木犀もくせいだの、百日紅じつこうだのが繁つてゐる。青空に浮いた白い雲が日の光を帶びて、緑とともに光る。二人は足を投げ出して、のんきに話をしていると、そこに母親が茶をいれて持つて来てくる。大福餅を二人して食つた。

夜は清三は二階に寝た。久しぶりで家庭の団欒<sup>だんらん</sup>の楽しさを味わつたような気がする。雨戸を一枚あけたところから、緑をこしたすずしい夜風がはいって、蚊帳<sup>かや</sup>の青い影がかすかに動いた。かれはまんなかに広く蒲団<sup>ふとん</sup>を敷いて、闇<sup>やみ</sup>の空にチラチラする星の影を見ながら寝た。母親が階段<sup>はしご</sup>を上つて来て、あけ放した雨戸をそツとしめて行つたのはもう知らなかつた。

翌日は弥勒<sup>みろく</sup>に出かけて、人夫を頼んで、書籍<sup>しょせき</sup>寝具など<sup>などを</sup>運んできた。二階の六畳を書斎にきめて、机は北向きに、書箱<sup>ほんばこ</sup>は壁につけて並べておいて、三尺の床は古い幅物<sup>かけもの</sup>をかけた。荻生さん<sup>おぎうさん</sup>が持つて来てくれた菖蒲<sup>しょうぶ</sup>の花に千鳥草<sup>ちどりぐさ</sup>を交ぜて相馬焼き<sup>そうまや</sup>の花瓶にさした。「こうしてみると、学校の宿直室よりは、いくらい

いかしれんね」と荻生さんはあたりを見回して言つた。親しい友だちが同じ町に移転して來たので、なんとなくうれしそうににこにこしている。寺の本堂に寄宿しているころは、清三は荻生さんをただ情に篤い人、親切な友人と思つただけで、自分の志や学問を語る相手としてはつねに物足らなく思つていた。どうしてああ野心がないだろう。どうしてああ普通の平凡な世の中に安心していられるだろうと思つていた。時には自分とは人間の種類が違うのだとさえ思つたことがある。それが今ではまるで変わつた。かれは日記に「荻生君はわが情の友なり、利害、道義もつてこの間を犯し破るべからず」と書いた。また「かつてこの友を平凡に見しは、わが眼の発達せざりしたためのみ。荻生君に比すれば、われ

ははなはだ世間を知らず、人情を解せず、小畠加藤をこの友に比す、今にして初めて平凡の偉大なるを知る」と書いた。

前の足袋屋から天ぷら、大家から川魚の塩焼きを引つ越しの祝いとして重箱に入れてもらつた。いずれも「あいそ」という鱗のあらい腹の側の紅い色をした魚で、今が利根川でとれる節だとう。米屋、炭屋、薪屋なども通いを持つて來た。父親は隣近所の組合を一軒一軒回つて歩いた。清三は午後から二階の六畳に腹ばいになつて、東京や行田や熊谷の友人たちに転居の端書はがきを書いた。寺にも出かけて行つたが、ちょうど葬式で、和尚さんは忙しがつていたので、転居のことを知らせておいて帰つて來た。

大家の主人はおもしろい話好きの人であつた。店は息子に譲つ

て、自分は家作かさくを五軒ほど持つて、老妻と二人で暮らしていると  
 いうのんきな身分、釣つりと植木が大好きで、朝早く大きな麦稈帽むぎわらぼう  
 子こをかぶつて、びくを下げる、釣竿つりざおを持って、霧の深い間か  
 ら木槿もくげの赤く白く見える垣かきの間の道を、てくてくと出かけて行く。  
 そして日の暮れるころには、びくの中に金色こんじきをした鮎や鯉をゴ  
 チヤゴチヤ入れて帰つて来る。店子たなこはおりおり擂り鉢ばちにみごとな  
 鮎を入れてもらうことなどもある。釣に行かぬ時は、たいてい腰  
 を曲げて盆栽ぼんさいや草花などを丹念にいじくつている。そうかとい  
 つてべつにたいしたものがあるのでもない。楓かえでに、櫻けやきに、檜ひのき  
 蘇鉄そでつぐらいなものだが、それを内に入れたり出したりして、楽し  
 みそうに眺めている。花壇にはいろいろ西洋種もまいて、天竺てんじく

牡丹<sup>ぼたん</sup>や遊蝶草<sup>ゆうちょうそう</sup>などが咲いている。コスモスもだいぶ大きくなつた。また時には、はだしになつて垣の隅の畠を一生懸命に耕していることなどもあつた。

農繁休暇はなおしばし続いた。一週間で授業を始めてみたが、麦刈り養蚕田植えなどがまだすっかり終わらぬので、出席生徒の数は三分の一にも満たなかつた。で、いま一週間休暇をつづけることにする。清三は午後は二階の風通しのいいところでよく昼寝をした。あまり長く寝込んで西日に照らされて、汗をぐつしょりかいでいることなどもあつた。町も郊外もしばしの間はめずらしく、雨の降らぬ日には、たいてい画架<sup>がか</sup>をかついで写生に出かけた。警察のそばの道に沿つた汚ない溝<sup>みぞ</sup>には白い小さい花がポチポチ咲

いて、さびた水に夢見るような赤いねむの花がかすかにうつった。寺の門、町はずれから見たる日光群山、桑畠の鶏、路傍の吹き井、うどんひもかわと書いた大和障子などの写生がだんだんできた。夜は大家おおやの中庭の縁側に行つて話した。戦争の話がいつも出る。二三日前荻生さんから借りた戦争画報を二三冊また借してやつたが、それについてのいろいろの質問が出る。「どうももう旅順が取れそうなのですがなア」とさももどかしそうに主人は言つて、「それにもう、陸軍のほうもよほど行つたんでしょう。第一軍は九連城れんじょうを取つてから、ねつから進まんじやありませんか。第一軍は蓋平がいへいからもうよほど行つたんですか」

清三は新聞や雑誌で、得た知識で、第一軍第二軍が近いうちに

連絡して 遼陽のクロパトキン将軍の本營に迫る話をして聞かした。旅順の方面については、海陸ともにひしひしと押し寄せて、敵はもう袋の鼠ねずみになつてしまつたから、こつちのほうは遼陽よりも早く片づくはずである。「来月の十五日ぐらいまでにはきつと取れるツて校長なども言うんです。私はいま少し遅くなるかもしれないと思いますけれど、なにしろもうじきですな」などと清三は言つて聞かせた。

「なにしろ、日本は小さいけれども、拳國一致きよこくいっしですからかないませんやな。どんな百姓でも、無知な人間でも、戦争ツていえば一生懸命ですからな……天子様も国民の後援があつて、さぞ御心丈夫でいらっしゃるでしょう」と感嘆したような調子で言つて、

「日本は昔からお武士さむらいでできた国ですからなア！」

大家おおやはまた釣の話をして聞かせることがあつた。清三が胃腸を悩んでいるとかいうのを聞いて、「どうです、一ついつしょに出かけてみませんか。そういう病気には、気が落ち着いてごくいいですがな」こんなことを言つて誘つた。その場所はここから一里ぐらい行つたところで、田のところどころに掘ほつきり切がある。そこには葦荻ろてきが人をかくすぐらいに深く生い茂しげつている。鮎ふなや鯉こいやたなごなどのたくさんいるのといいのとがある。そのいるところを大家さんはよく知つていた。

二人で話している縁側の上に、中老の品のいい細君さいくんは、岐阜提灯ぎふぢんをつるしてくれた。

時には母親と荻生さんと三人つれだつて町を歩くこともあつた。今年は「から梅雨」で、雨が少なかつた。六月の中ごろにすでに寒暖計が八十九度まであがつたことがあつた。七月にはいつてから、にわかに暑さが激しく、田舎町の夜には、縁台を店先に出して、白地の浴衣<sup>ゆかた</sup>をくつきりと闇に見せて、団扇<sup>うちわ</sup>をバタバタさせている群れがそこにもここにも見えた。母親は買い物をする町の店に熟していないので、そうした夜の散歩には、荻生さんがここが乾物屋、ここが荒物屋<sup>あらものや</sup>、呉服屋ではこの家が一番かたいなどと教えてくれた。下駄屋の店には、中年のかみさんが下駄の鼻緒<sup>はなお</sup>の並んだ中に白い顔を見せてすわつていた。鍛冶屋<sup>かじや</sup>にはランプが薄暗くついて、奥では話し声が聞こえていた。水のような月が白い

雲に隠れたりあらわれたりして、そのたびごとにもつれた三つの影が街道にうつったり消えたりする。

用水の橋の上は涼しかつた。納涼に出た人々がぞろぞろ通る。冬や春は川底に味噌瀧みそこしのこわれや、バケツの捨てたのや、陶器の欠片かけらなどが汚なく殺風景さつぶうけいに見えていたのだが、このころは水がいっぱいにみなぎり流れて、それに月の光や、橋のそばに店を出している氷屋の提灯ちようちんの灯影ひかげがチラチラとうつる、流れる水の影が淡く暗く見える。向こうの料理店から、三絃しゃみせんの音が聞こえた。

三人は氷店に休んで行くこともある。母親は帰りに、八百屋に寄つて、茄子なすや白瓜しろうりなどを買う。局の前で、清三は母親を先に

帰して、荻生さんの室<sup>へや</sup>で十時過ぎまで話して行くことなどもあつた。

## 五十一

七月十五日の日記にかれはこう書いた。

「杜國<sup>とくく</sup>亡びてクルーゲル今まで歿す。<sup>ぼつ</sup>瑞<sup>すい</sup>西<sup>つづる</sup>の山中に肺に斃れたるかれの遺体<sup>いたい</sup>は、故郷<sup>ふるさと</sup>のかれが妻の側に葬<sup>ほうむ</sup>らるべし。英雄の末路<sup>ばつろ</sup>、言は陳腐<sup>ちんぷ</sup>なれど、事実はつねに新たなり。英雄クルーゲル元トランスヴァール共和国大統領ホウル・クルーゲル歿す。歴史はつねにかくのことし」

## 五十二

医師いしやはやつぱり胃腸こだと言つた。けれど薬はねつから効こうがなかつた。せき咳がたえず出た。体がだるくつてしかたがなかつた。ことに、熱が時々出るのにいちばん困つた。朝は病氣が直つたと思うほどいつも気持ちがいいが、午後からはきっと熱が出る。やむなく発汗剤をのむと、汗がびつしよりと出て、その気持ちの悪いことひととおりでない。顔には血の気がなくなつて、肌はだがいやに黄きばんで見える。かれはいく度も蒼あおじろ白い手を返して見た。

「お前ほんとうにどうかしたのじやないかね。しつかりした医師

にかかるてみるほうがいいんじゃないかな

母親は心配そうにかれの顔を見た。

学校はやがて始まつた。暑中休暇まではまだ半月ほどある。それに七時の授業始めなので、朝が忙しかつた。母親は四時には遅くも起きて竈の下を焼きつけた。<sup>かまど</sup>清三は薬瓶と弁当とをかかえて、例の道をてくてくと歩いて通つた。一里半の通いなれた路——それにもかれはいちじるしい疲労を覚えるほどその体は弱くなつていた。それに、このごろでは滋養品をなるたけ多く取る必要があるので、毎日牛乳二合、鶏卵を五個、その他肉類をも食つた。<sup>く</sup>移転の借金をまだ返さぬのに、毎日こうして少なからざる金がかかるので、かれの財布はつねにからであつた。馬車に乗りたくも、

そんな余裕はなかつた。

## 五十三

八阪神社の祭礼はにぎやかであつた。当年は不景氣でもあり、國家多事の際もあるので、山車も屋台だし やたいもできなかつたが、それでも近在から人が出て、紅い半襟や浅黄あさぎの袖口やメリソスの帶などがぞろぞろと町を通つた。こういう人たちは、氷店に寄つたり、瓜うりみせ店の前で庖丁ほうちょうで皮をむいてもらつて立ち食いをしたり、よせ切れの集まつた呉服屋の前に長い間立つてあれのこれのといじくり回したりした。大きな朱塗しゆぬりの獅子は町の若者にかつがれ

て、家から家へと悪魔をはらつて騒がしくねり歩いた。清三が火鉢のそばにいると、そばの小路こうじに、わいしょわいしょという騒がしい懸け声かかがして、突然獅子えしゃくがはいつて來た。草鞋わらじをはいた若者は、なんの会釈えしゃくもなく、そのままずかずかと置の上にあがつて、

「やあ！」

と大きな獅子の口を開けて、そのまま勝手もとにして行つた。

母親は紙に包んだおひねりを獅子の口に入れだ。一人息子ひとりむすこのため、悪魔を払いだまえ！ と心に念じながら……。

母親は二階の床の間に、燃ゆるような撫子と薄紫のあざみとまつ白なおかとらのおと黄いろいこがねおぐるまとを交ぜて生けた。時には窓のところにじつと立つて、夕暮れの雲の色を見ることもあつた。そのやせた後ろ姿を清三は悲しいようなさびしいような心地でじつと見守つた。

父親は二階の格子を取りはずしてくれた。光線は流るるように一室にみなぎりわたつた。窓の下には足長蜂が巣を釀してブンブン飛んでいた。大家の庭樹のかげには一本の若竹が伸びて、それに朝風夕風がたおやかに当たつて通つた。

五月六日には体量十二貫五百目、このごろ郵便局でかかつてみると、ひとえ単衣のままで十貫六百目、荻生さんは十三貫三百目。

ある日、田原ひで子が学校に来て手紙を小使に頼んでおいて行つた。手紙の中には、手ずから折つた黄いろい野菊の花が封じ込んであつた。「野の菊は妾わらわの愛する花、師の君よ、師の君よ、この花をうつくしと思ひたまはずや」と書いてあつた。

暑中休暇前一二日の出勤は、かれにとつてことにつらかつた。

その初めの日は帰途かえりに驟雨しううに会い、あとの一 日は朝から雨が横さまに降つた。かれは授業時間の間々あいだを宿直室に休息せねばならぬほど困憊こんぱいしていた。それに今月の月給だけでは、薬代、牛乳

代などが払えぬので、校長に無理に頼んで三円だけつごうしてもらつた。

旅順陥落の賭に負けたからとて、校長は鷄卵たまごを十五個くれたが、それは実は病氣見舞いのつもりであつたらしい。教員たちは、「もうなんのかのと言つても旅順はじきに相違ないから、その時には休暇中でも、ぜひ学校に集まつて、万歳となを唱えることにしよう」などと言つていた。清三は八月の月給を月の二十一日にもらいたいということをあらかじめ校長に頼んで、馬車に乗つてからうじて帰つて來た。

暑中休暇中には、どうしても快復させたいという考え方で、清三は医師いしゃを変えてみる気になつた。こんどの医師は親切で評判な人

であつた。診察の結果では、どうもよくわからぬが、十二指腸かもしれないから、一週間ばかりたつて大便の試験をしてみようと言つた。肺病ではないかときくと、そういう兆候は今のところでは見えませんと言つた。今のところという言葉を清三は気にした。

## 五十六

滋養物じようぶつを取らなければならぬので、錢ぜにもないのに、いろいろなものを買って食つた。鯉こい、鮒ふな、鰻うなぎ、牛肉ぎゅうにく、鷄肉けいにく——ある時はござきを売りに来たのを十五錢に負けさせて買った。嘴くちばしはあさみどり

緑り色、羽は暗褐色に淡褐色の斑点、長い足は美しい  
浅緑色をしていた。それをあらくつぶして、骨をトントンと音させてたたいた。それにすらかれは疲労を覚えた。

泥鱈どじょうも百匁ぐらいずつ買って、猫にかかられぬように桶おけに重おしをして、ゴチャゴチャ入れておいた。十尾びきぐらいずつを自分でさいて、鶏卵たまごを引いて煮て食った。寺の後ろにはこの十月から開通する東武鉄道の停車場ができて、大工がしきりに鉋や手斧の音を立てているが、清三は気分のいい夕方などには、てくてく出かけ行つて、ぽつねんとして立つてそれを見ていることがある。時には向こうの野まで行つて花をさがして來ることもある。えのころ、おひしば、ひよどりそう、おどぎりそう、こまつなぎ、なで

しこなどがあつた。

新聞にはそのころ 大石橋だいせつきょう の戦闘詳報が載つていた。

遼陽りょうよ

！ 遼陽！ という文字が至るところに見えた。ある日、母

親は急性の胃に侵おかされて、裁縫を休んで寝ていた。物を食うとす

ぐもどした。そして 吃逆しゃくり も激しく出た。土用のあけた日で、秋

風の立つたのがどことなく木の葉のそよぎに見える。座敷にさし

入る日光から考えて、太陽も少しは南に回つたようだなどと清三

は思つた。そこに郁治いくじ がひよつくり高等師範の制帽をかぶつた姿

を見せた。この間うちから帰省していて、いずれ近いうちに新居

を訪問したいなどという端書はがき をよこしたが、今日は加須まで用事

があつてやつて來たから、ふと来る気になつて訪ねたという。郁

治は清三のやせ衰えた姿に少なからず驚かされた。それに顔色の悪いのがことに目立つた。

親しかつた二人は、夕日の光線のさしこんだ二階の一間に相対してすわつた。相変わらず親しげな調子であるが、言葉は容易に深く触れようとはしなかつた。時々話がとだえて黙つていることなどもあつた。

「小畠はこの間日光に植物採集に出かけて行つたよ」

こんなことを言つて、郁治はとだえがちなる話をつづけた。

清三は、「君、からだ帰つたら、ファザーに一つ頼んでみてくれたまえな。どうもこう体が弱つては、一里半の通勤はずいぶんつらいから、この町か、近在かにどこか転任の口はないだろうかツて：

…。弥勒ももうずいぶん古参だから、居心地は悪くはないけれど、いかにしても遠いからね、君」

こう言つて転任運動を頼んだ。

夕餐には昨夜猫に取られた泥鱈の残りを清三が自分でさいてご馳走した。母親が寝ているので、父親が水を汲んだり米をたいたり漬け物を出したりした。

郁治は見かねてよほど帰ろうとしたが、あつちこつちを歩いて疲れているので、一夜泊めてもらつて行くことにした。

「郁さんがせつかくおいでくださったのに、あいにく私がこんなふうで、何もご馳走もできなくつて、ほんとうに申しわけがない」

しげしげと母親は郁治の顔を見て、

「郁さんのように、家のも丈夫だといいのだけれど……どうも弱くつてしかたがないんですよ。……それに郁さんなぞは。学校を卒業さえすれば、どんなにもりつぱになれるんだから、母さんもう安心なものだけれど……」

しみじみとした調子で言つた。

美穂子の話が出たのは、二人が蚊帳かやの中にはいつて寝てからであつた。学校を出るまではお互に結婚はしないが、親と親との口約束はもうすんだということを郁治は話した。

「それはおめでたい」

と清三がまじめに言うと、

「約束をきめておくなんて、君、つまらぬことだよ」

「どうして？」

「だッて、お互に弱点が見えたりなんかして、中途でいやにな  
ることがないとも限らないからね」

「そんなことはいかんよ、君」

「だッてしかたがないさ、そういう気にならんとも限らんから」「  
そんなふまじめなことを言つてはいかんよ、君たちのように前  
から氣心きごころも知れば、お互の理想も知つているのだから、苦情くじょうの起こりつけはありやしないよ。僕なども同じ仲間だから、

君らの幸福なのを心から祈るよ、美穂子さんにも久しく会わない  
けれど、僕がそう言つたツて言つてくれたまえ」

いつもの軽い言葉とは聞かれぬほどまじめなので、

「うむ、そう言うよ」と郁治も言つた。

蚊帳かやの外のランプに照らされた清三の顔は蒼白あおじろかつた。咳がたえず出た。熱が少し出てきたと言つて、枕まくらもとに持つて来ておいた水で頓服剤とんぷくざいを飲んだ。二人の胸には、中学校時代、「行田文学」時代のことが思い出されたが、しかも二人とも何ごとをも語らなかつた。郁治の胸にははなやかな将来が浮かんだ。「不幸な友!」という同情の心も起こつた。

あまり咳が出るので、背せなかをたたいてやりながら、

「どうもいかんね」

「うむ、治らなくつて困る」

汗が寝衣ねまきをとおした。

「石川はどうした？」

と、しばらくしてから、清三がきいた。

「つい、この間、東京から帰つて來た」と郁治は言つて、「あまり道楽をするものだから、家でも困つて、今度足どめに、いよいよ嫁さんが来るそうだ」

「どこから？」

「なんでも川越の財産家で跡見女学校にいた女だそうだ。あとみ 容色きりよう  
望のぞみという条件でさがしたんだから、きっと別嬪べっぴんさんに違たがないよ」

「先生も変わったね？」

「ほんとうに変わった。雑誌をやつてる時分とはまるで違う」

それから同窓の友だちの話がいろいろ出た。窓からは涼しい風がはいる……。

翌朝、郁治が眼をさましたころには、清三は階下しゃかで父親を手伝つて勝手かつてもとをしていた。いまさらながら、友の衰弱したのを郁治は見た。小畠に聞いたが、これほどとは思わなかつた。朝の膳ぜんには味噌汁に鶏卵たまごが落としてあつた。清三は牛乳一合にパンを少し食つた。二人は二階にまたすわつてみたが、もうこれといつて話もなかつた。

郁治が帰る時に、

「それじや学校の話、一つ運動してみてくれたまえ」

清三はくり返して頼んだ。

母親の病氣ははかばかしくなかつた。三度々々食物も満足に咽<sup>のど</sup>喉<sup>のど</sup>に通らなかつた。父親が商売に出たあとでは、清三がお粥<sup>かゆ</sup>をこしらえたり、好きなもの通りに出て買つて来てやつたりする。

また父親と縁側に東京仕入れの瓜<sup>うり</sup>を二つ三つ桶<sup>おけ</sup>に浮かせて、皮を厚くむいて二人してうまそうに食つていることもある。そういう時には清三は皿に瓜のさいたのを二片三片入れて、食う食わぬにかかわらず、まず母親の寝ている枕もとに置いた。母子の情合<sup>おやこじょうあ</sup>いは病<sup>や</sup>んでからいつそう厚くなつたように思われた。どうかすると、清三の顔をじつと見て、母親が涙をこぼしていることもあつた。清三はまた清三で、めつたに床についたことのない母親の長い病氣を気にして医師にかかることをうるさく勧<sup>すす</sup>めると、「お前

の薬代さえたいへんなのに、私までかかるては、それこそしかたがない。私はもう治るよ、明日は起きるよ」と母親は言つた。

二階の一間は新聞が飛ぶほど風が吹き通すこともあれば、裏の木の上に夕月が美しくかかつて見えることもあつた。けれど東がふさがつてゐるので、朝日にはつねに縁遠く清三は暮らした。朝の眺めとしては、早起きをした時北窓の雲に朝日が燃えるようになりはえるのを見るくらいなものであつた。

弥勒野みろくのはこのごろは草花がいつも盛りであつた。清三は関さんには手紙を書いた。「このごろは座敷の運動のみにて、野に遠ざかり居り候へば、草花の盛りも見ず、遺憾いがんに候。弥勒野みろくの、才塚野さいづかの、君の採集にはさぞめづらしき花を加へたまひしならん。秋海しゅうかいど

棠うことし 今歳は花少なく、朝顔もかはり種なく、さびしく暮らし居り候』

毎日二三回ずつの下痢げり、胃はつねに激しき渴かわきを覚えた。動かすにじつとしていれば、健康の人といくらも変わらぬほどに気分がよいが、労働すれば、すぐ疲れて力がなくなる。医師いしゃは一週間目に大便の試験をしたが、十二指腸虫は一疋もいず、ベン虫の卵が一つあつたばかりであつた。けれどこれは寄生虫でないから害はない。ふつう健康体にもよくいる虫だと医師はのんきなことを言つた。母親の病氣はまだすつかり治らなかつた。もうかれこれ十一二日目になる。按摩あんまを頼んでもませてみたり、ご祈祷を近所の人がやつて来て上げてくれたりした。ついでに清三もこのご祈

袴を上げてもらつた。

清三はこのころから夜が眠られなくて困つた。いよいよ不眠性の容易ならざる病状が迫つてきたことを医師はようやく気がつき始めた。旅順の海戦——彼我の勝敗の決した記憶すべき十日の海戦の詳報のしきりに出るところであつた。アドミラル、トオゴーの勇ましい名が、世界の新聞雑誌に記載せらるるところであつた。

医師はある日やつて来て、あわてて言つた。「どうも永久的衰弱ですからなア」こう言つてすぐ言葉を続けて、「あまり無理をしてはいけません。第一、少しよくなつても、一里半も学校に通つてはいけません。一年ぐらい海岸にでも行つているといいですがな」

それから葡萄酒ぶどうしゅを飲用することを勧めた。

## 五十七

医師の言葉を書いて、ぜひ九月の学期までに近い所に転任したいが、君に一任してよきや、みずから運動すべきやと郁治いくじのもとに書いてやると、折りかえして返事が来て、視学に直接に手紙をやれ、羽生の校長にも聞いてみろ、自分もそのうち出かけて運動してやると書いてあつた。

だんだん秋風が立ち始めた。おおや大家で飼かつておいたくさひばりが夕暮れになるといつもいい声を立てて鳴いた。とこばしら床柱ばらの薔薇の

一輪<sup>りんざ</sup>挿し、それよりも簾戸<sup>すだ</sup>をすかして見える朝顔の花が 友禅染<sup>ゆうぜんぞ</sup>めのように美しかつた。

あるひ、午後四時ごろの暑い日影を受けて、例の街道を弥勒<sup>みろく</sup>に行く車があつた。それには清三が乗つていた。月の俸給を受け取るためにわざわざ出かけて來たのであつた。学校はがらんとして、小使もいなかつた。関さんも、昨日浦和に行つたとて不在<sup>する</sup>であつた。

宿直室にはなかば夕日がさしとおつた。テニスをやるものもないとみて、網もラケットも縁側の隅にいたずらに束ねられてある。事務室の硯<sup>すずり</sup>箱<sup>ばこ</sup>の蓋<sup>ふた</sup>には塵埃<sup>ちり</sup>が白く、椅子<sup>テーブル</sup>は卓の上に載せて片づけられたままになつてゐる。影を長く校庭にひいた清三

のやせはてた姿は、しづかに廊下をたどつて行つた。

教室にはいつてみた。ボーリドには、授業の最後の時間に数学を教えた数字がそのままになつてゐる。 $12+15=27$ と書いてある。チヨークもその時置いたままになつてゐる。ここで生徒を相手に笑つたり怒つたり不愉快に思つたりしたことを清三は思い出した。東京に行く友だちをうらやみ、人しれぬ失恋の苦しみにもだえた自分が、まるで他人でもあるかのようにはつきりと見える。色の白い、肉づきのいい、赤い長襦袢ながじゆばんを着た女も思い出された。

オルガンが講堂の一角かたすみに塵埃ぢりに白くなつて置かれてあつた。何か久しぶりで鳴らしてみようと思つたが、ただ思つただけで、手をくだす気になれなかつた。

やがて小使が帰つて來た。かれもちよつと見ぬ間に、清三のいたく衰弱したのにびっくりした。

じろじろと不氣味ぶきみそうに見て、

「どうも病あんべい気ぶきがよくねえかね？」

「どうもいかんから、近いところに転任したいと思つているよ……」

：今度の学期にはもう来られないかもしね。長い間、おなじ

みになつたが、どうもしかたがない……」

「それまでには治るべいかな」

「どうもむずかしい——」

清三は嘆息ためいきをした。

小川屋にはもう娘はいなかつた。この春、加須かぞの荒物屋に嫁かたづい

て行つた。おばあさんが茶を運んで來た。

すぐ目につけて、

「林さんなア、どうかしたかね」

「どうも病氣が治らなくつて困る」

「それア困るだね」

しみじみと同情したような言葉で言つた。夕飯は粥にしてもらつて、久しぶりでさいの煮つけを取つて食つた。庭には鶏頭けいとうが夕日に赤かつた。かれは柱によりかかりながら野を過ぎて行く色ある夕べの雲を見た。

転任については、郁治も来て運動してくれた。町の高等も尋常ようも聞いてみたが、欠員がなかつた。弥勒の校長からは、「不本意ではあるが、病気なればしかたがない、いいように取り計らうから安心したまえ」と言つて來た。けれど他から見ては、もう教員ができるような体からだではなかつた。

ある日、荻生さんが、母親に、

「どうも今度の病氣は用心しないといけないって医師いしやが言いまし  
たよ。どうも肺という徵候はないようだが、ただの胃腸とも違う  
ようなところがあると言つてました。なんにしても足に腫氣すいきがき  
たのはよくないですな……医師の見立てみたてが違つてているのかもしれ

ませんから、行田の原田につれて行つて見せたらどうです？ 先生は学士ですし、評判がいいほうですか」

そして、そういうつもりがあるなら、自分が一日局を休んでつれて行つてやつてもいいと言つた。

「どうも、ご親切に……お礼の申し上げようもない」

母親の声は涙に曇つた。

弥勒に俸給を取りに行つた翌日あたりから、脚部 大腿部にかけておびただしく腫氣が出た。足も今までの足とは思えぬほどに甲がふくれた。それに、陰囊もその影響を受けて、起ち居にもだんだん不自由を感じて来る、医師は罨法剤と睾丸帶とを与えた。

蘇鉄の実を煎じて飲ませたり、ご祈祷を枕もとであげてもらつたり、不動岡の不動様の御符をいただかせたり、いやしくも効験があると人の教えてくれたものは、どんなことでもしてみたが、効がなかつた。秋風が立つにつれて、容体の悪いのが目に立つた。

やがて盂蘭盆がきた。町の大通りには草市が立つて、苧殼や藺蓆やみそ萩や草花が並べられて、在郷から出て来た百姓の娘たちがぞろぞろ通つた。寺の和尚さんは紫の衣を着て、小僧をつれて、忙しそうに町を歩いて行つた。茄子や白瓜や胡瓜でこしらえた牛や馬、その尻尾には畠から取つて来た玉蜀黍の赤い毛を使つた。どこの家でも績殻で杉の葉を編んで、仏壇を飾つて、

代々の位牌<sup>いはい</sup>を掃除して、萩の餅やら団子やら新里芋やら玉蜀黍<sup>とうもろこし</sup>やら梨やらを供えた。

女の児は新しい衣<sup>きもの</sup>を着て、いそいそとしてあつちこつちに遊んでいた。

十三日の夜には迎え火が家々でたかれる。通りは警察がやかましいので、昔のように大仕掛けな焚火<sup>おおじか</sup><sup>たきび</sup>をするものもないが、少し裏町にはいると、薪<sup>たきぎ</sup>を高く積んで火を燃している家などもあつた。まわりに集まつた子供らはおもしろがつてそれを飛んだりまたいだりする。清三の家では、その日父親が古河<sup>こが</sup>に行つてまだ帰つて来なかつたので、母親は一人でさびしそうに入り口にうずくまつて、績<sup>おお</sup>がらを集めて形ばかりの迎え火をした。大家の入り口には

いま少し前焚たいた火の残りが赤く闇に見える。

軒には昨年の盆に清三が手ずから書いた菊の絵の燈籠とうろうがさげてある。清三は便所に通うのに不便なので、四五日前から、床とこを下の六畳に移した。

風にゆらぐ盆燈籠をかれはじつと見ていた。大家の軒の風鈴ふうりんの鳴る音がかすかに聞こえる。仏壇には灯あかりがついていて、蓮の葉はすの上に供そなえた団子だの、茄子なすや白瓜しろくわでつくった牛馬だの、真しんちゆ鎗うの花立てにさしたみそ萩などが額縁がくぶちに入れた絵のように見える。明るい仏壇の中はなんだか別の世界でもあるかのように清三には思われた。

母親がそこへはいつて来て、

「病氣でないと、政<sup>まさいち</sup>（弟の名）のところにもお参りに行つて  
もらうんだけれど……今年は花も上げてくれる人もないツてさび  
しがつているだろう」

「ほんとうにさ……」

「父<sup>おとつ</sup>さんがつごうがよければ行つてもらいたいと思つていたんだ  
けれど……」

「ほんとうに、遠くなつて淋しがつてゐるだろう」

清三は亡くなつた弟をしみじみ思つた。

「明日あたり私がお参りに行こうかと思つてゐるけれど……」

「ナアに、治つてから行くからいいさ」「  
しばらく黙つた。

母子の胸には今月の払<sup>おやこ</sup>いのことがつかえている。薬代、牛乳——それだけでもかなり多い。今月は父親のかせぎがねつからだめだつた上に、母親も病氣で毎月ほど裁縫をしなかつた。先ほど、医師<sup>いしゃ</sup>から勘定書きを書生が持つて来たのを母親は申しわけなさそうにことわつていた。

「なアに、父さんが帰つて来れば、どうにかなるから、心配せずにおいでよ」

と母親はその時言つた。

父親が帰つて来てもだめなことを清三は知つてゐる。

「病氣さえしなけりやなア！」

と清三は突然言つた。

やがて言葉をついで、「こんな病気にかかりさえしなけりや、  
今年はちつとは母さんにも樂をさせられたのになア！」

母親はオドオドして、

「そんなことを思わないほうがいいよ。それより 養ようじょう 生じょうじょう して！」

「ナアに、こんな病気に負けておりやせんから、母おつかさん。心配しないほうがいいよ。今死んでは、生まれて來たかいがありやしない」

「ほんとうともねえ、お前」

「世の中というものは思いのままにならないもんだ！」

言葉は強かつたが、一種の哀愁は仏壇の灯あかりのみ明るい一室に充ちわたつた。

\*

\*

\*

\*

\*

隣近所では病人が日増しに悪くなるのを知つた。医師が毎日鞆ひまを下げるやつて来る。荻生さんが心配そうな顔をしてちよいちよい裏からはいつて来る。一週間前までは、蒼白にやせはてた顔をして、頭髮かみのけをぼうぼうさせて、そこらをぶらぶらしている病人の姿を人々はよく見かけたが、このごろでは、もうどつと床について、枕を高く、やせこけて、螽斯ばつたのようになつた手を蒲團ふとんの外になげだすようにして寝ているのが垣の間から見える。井戸端などで母親に容体を聞くと、「どうも少しでもいいほうに向かってくれるといいのですけれど……」と言つて、さもさも心配にたえぬような顔をした。

肺病だろうということは誰も皆前から想像していた。「どうも咳嗽<sup>せき</sup>の出るのが変だと思つてました」と隣りの足袋屋<sup>たびや</sup>の細君<sup>さいくん</sup>が言つた。「どうも肺病だツてな、あの若いのに氣の毒だなア。話好きなおもしろい人だのに……」と大家<sup>おおや</sup>の主人<sup>あるじ</sup>も老妻<sup>かみさん</sup>に言つた。「一人息子<sup>と</sup>をあれまで育てて、これからかかろうという矢先にそんな悪い病気に取つかれては……」と老妻<sup>かみさん</sup>はしみじみと同情した。あつちこつちから見舞いを持つて行くものなどもだんだん多くなる。大家の主人<sup>あるじ</sup>がある日一日釣つて來た鮎<sup>ふな</sup>を摺<sup>す</sup>り鉢<sup>ばち</sup>に入れ持つて行つてやると、めずらしがツて、病人はわざわざ起きて來て見た。それから梨を持つて來るものもあれば林檎<sup>りんご</sup>を持つて來るものもある。中には五十錢銀貨を一つ包んで來るものもあつた。

転任のむずかしいこと、たとえ転任ができても、この体では毎日の出勤はおぼつかないということがしだいに病人にもわかつてきた。かれは郁治いくじにあてて、病氣で休んでいれば何か月間俸給がおりるかということを父の郡視学に聞いてもらうように手紙を書いた。やがてその返事が来て埼玉県令十号の十三条に六十日の病氣欠席は全俸ぜんぽう（願書がんしょ診断書しんだんしょ付き）その後二か月半俸としてあることを報じて來た。

## 五十九

行田の町の中ほどに西洋せいよう造づくりりのペンキ塗ぬりのきわだつて目に

つく家<sup>うち</sup>があつた。陶器の標札には医学士原田龍太郎とあざやかに見えて、門にかけた原田医院という看板はもう古くなつていた。

午前十時ごろの晴れた日影は硝子<sup>がらす</sup>をとおした診察室の白いカーテンを明るく照らした。

診察が終わつて、そこから父親と荻生さんとにたすけられて出て来たのは、二三日来ますます衰弱した清三であつた。荻生さんが万一を期して、ヤイヤイ言つてつれて來た親切は徒労に帰した。  
医師<sup>いしや</sup>は父親と友とに絶望的宣告を与えたようなものであつた。

荻生さんが懇意<sup>こんい</sup>なので、別室できくと、

「いま少し早くどうかすることができそなものだつた」

医師はこう言つた。

「やつぱり、肺でしようか」

「肺ですか……もう両方とも悪くなっている！」

荻生さんはどうすることもできなかつた。眼眩めまいがしてそこに立つていられぬ病人をほとんどかかえるようにして車に乗せた。

「車に乗せてつれて来るのはちとひどかつたね」と言つた医師の言葉を思い出して、「医師をよんでは車代がたいへんだから……五円ではあがらないから、私が車に乗せてつれて行つてあげる」と言つたことを悔いた。

その二里の街道には、やはり旅商人たびあきんどが通つたり、機回りはたまわの車が通つたり、自転車が走つたりしていた。尻をまくつて赤い腰巻を出して歩いて行く田舎娘もあつた。もう秋風が野に立つて、

背景をつくつた森や藁葺屋根や遠い秩父の山々があざやかにはつきり見える。豊熟した稻は涼しい風になびきわたつた。

幌をかけた車はしづかに街道をきしつて行つた。

七色の風船玉を売つて歩く老爺のまわりには、村の子供がたかつていた。

## 六十

寺の和尚さんおじょうが鶏卵たまごの折りを持つて見舞いに來た。

和尚さんもしばらく会わぬ間に、こうも衰弱したかとびつくりした。

わざと戦争の話などをする。

「旅順がどうも取れないですな」

「どうしてこう長びくんでしょう」

「ステッセルも一生懸命だとみえますな。まだ兵力が足りなくつて第八師団も今度旅順に向かつて発つという噂うわさですな」

「第九に第十二に、第一に……、それじやこれで四個師団……」「どうもあそこを早く取つてしまわないとしかたがないんでしよう」

「なかなか頑強がんきょうだ！」

と言つて、病人は咳嗽せきをした。

やがて、

「遼陽のほうは?」

「あつちのほうが早いかもしれないッていうことですよ。第一軍はもう榆樹林子を占領して遼陽から十里のところに行つてますし、第二軍は海城を占領して、それからもつと先に出ているようです……」

「ほんとうに丈夫なら、戦争にでも行くんだがなア」

と清三は慨嘆して、「国家のために勇ましい血を流している人もあるし、千載の一遇、国家存亡の時にでつくわして、廟堂の上に立つて天下とともに憂いでいる政治家もあるのに：…こうしてろくろくとして病氣で寝てるのはじつに情ない。和尚さん、人間もさまざまですな」

「ほんとうですか？」

和尚さんも笑つてみせた。

しばらくして、

「原さんから便りがありますか？」

「え、もう帰つて来ます。先生も海城で病気にかかつて、病院に

一月もいたそうで……来月の初めには帰つて来るはずです」

「それじや遼陽は見ずに……」

「え」

衰弱した割合には長く話した。寺にいる時分の話なども出た。

その翌日は弥勒みろくの校長さんが見舞いにやつて來た。

「こんなになつてしましました」

と細い手を出して見せた。

「学校のほうはいいようにしておきますから、心配せずにおいでのなさい、欠席届けさえ出しておくと、二月は俸給がおりるんですから」

校長さんはこう言つた。

戦争の話が出ると、

「おそらく、休暇中には旅順が取れると思つたですけれどなア。よほどむずかしいとみえますな。このごろじや容易に取れないなんて、悲観説が多いじゃないですか。常陸丸ひたちまるにいろいろ必要な材料が積んであつたそうですね」

こんなことを言つた。

二三日して、今度は関さんが来た。おみなえし 女郎花すすきと薄すすきとを持つて来てくれた。弥勒みろくの野からとつたのであると言つた。母親は金かなだら鹽まくらに水を入れて、とりあえずそれを病人の枕まくらもとに置いた。清三はうれしそうな顔をしてそれを見た。

関さんはやがて風呂敷包みから、紙に包んだ二つの見舞いの金を出した。一つには金七円、生徒一同よりとしてあつた。一つは金五円、下に教員連の名前がずらりと並べて書いてあつた。

## 六十一

遼陽の戦争はやがて始まつた。国民の心はすべて満州の野に向

かつて注がれた。深い沈黙の中にかえつて無限の期待と無限の不安とが認められる。神経質になつた人々の心はちよつとした号外売りの鈴の音にもすぐ驚かされるほどたかぶつていた。そうしている間にも一日は一日とたつ。あんざんてん 鞍山站から一押ひとおしと思つた首しゆざ山堡んぱが容易に取れない。第一軍も思つたように出ることができない。雨になるか風になるかわからぬうちに、また一日二日と過ぎた。——その不安の情じょうが九月一日の首山堡占領の二号活字でたちまちにしてとかれたと思うと、今度は鬱うつ積せきした歓呼の声が遼陽占領の喜ばしい報につれて、すさまじい勢いで日本全国にみなぎりわたつた。

遼陽占領！ 遼陽占領！ その声はどんなに暗い汚ない巷路こうじに

も、どんな深い山奥のあばら家にも、どんなあら海の中の一孤島にも聞こえた。号外売りの鈴の音は一時間といわずに全国に新しいわしい報をもたらして行く。どこの家でもその話がくり返される、その激しかつた戦いのきまがいろいろに色彩をつけて語り合わされる。太子河たいしがの軍橋を焼いて退却した敵将クロパトキンは、第一軍の追撃に会つてまつたく包囲されてしまったという虚報さえ一時は信用された。

全都国旗をもつて埋まるという記事があつた。人民の万歳の声が宮城の奥まで聞こえたということが書いてあつた。夜は提灯行列んぎようれつが日比谷公園から上野公園まで続いて、桜田門付近馬場先門さくらだもんぱさきもん付近はほとんど人で埋めらるるくらいであつたという。

京橋日本橋の大通りには、数万燭の電燈が昼のように輝きわたつて、花電車が通るたびに万歳の声が終夜聞こえたという。

清三はもう十分に起き上がることができなかつた。容体は日一日に悪くなつた。昨日は便所からはうようにしてからうじて床にはいつた。でも、その枕もとには、国民新聞と東京朝日新聞とが置かれてあつて、やせこけて骨立つた手が時々それを取り上げて見る。

遼陽の占領が始めて知れた時、かれは限りない喜びを顔にたたえて、

「母さん！ 遼陽が取れた！」

ときもさもうれしそうに言つた。

それからいろいろな話を母親にしてきかせた。二千何人という死傷者の話をもしてきかせた。戦争の話をする時は、病気などは忘れたようであつた。いしゃ 医師いしかが来て、新聞などは読まないほうがいいと言つた。病人自身にしても、細かい活字こまをたどるのはずいぶん難儀であつた。手に取つても五分と持つていられない。疲れてじきそばに置いてしまつた。時には半分読みかけた頁ページを、鬚ひげの生えたやせた顔の上に落として、しばらくじつとしていることなどもある。

日本が初めて歐州の強国を相手にした曠古こうこの戦争、世界の歴史にも数えられるような大きな戦争——そのはなばなしの国民の一員と生まれて来て、その名譽ある戦争に加わることもできず、そ

の万分の一を国に報いることもできず、その喜びの情<sup>じょう</sup>を人並みに  
万歳の声にあらわすことすらもできずに、こうした不<sup>ふしあわせ</sup>運<sup>よこ</sup>な病  
いの床に横たわって、国民の歓呼の声をよそに聞いていると思つ  
た時、清三の眼には涙があふれた。

<sup>かばね</sup>屍<sup>死体</sup>となつて野に横たわる苦痛、その身になつたら、名誉でもな  
んでもないだろう。父母<sup>ちちはは</sup>が恋しいだろう。祖国が恋しいだろう。  
故郷<sup>ふるさと</sup>が恋しいだろう。しかしそれらの人たちも私よりは幸福だ  
――こうして希望もなしに病<sup>やまい</sup>の床に横たわっているよりは……。  
こう思つて、清三ははるかに満州のさびしい平野に横たわった同  
胞を思つた。

## 六十二

枕もとにすわった医師の姿がくつきりと見えた。

父親はそれに向かつて默然としていた。母親は顔をおおつて、たえずすすりあげた。

室のまんなかにつつたランプは、心が出過ぎてホヤがなから黒くなつていた。室には陰深の気が充ちわたつて、あたりがしんとした。鬚を長く、頬骨が立つて、眼をなから開いた清三の死に顔は、薄暗いランプの光の中におぼろげに見えた。

医師の注射はもう効がなかつた。

母親のすすりあげる声がしきりに聞こえる。

そこに、戸口にけたたましい足音がして、白地のかすり縫を着た荻生さんの姿があわただしくはいつて来たが、ずかずかと医師と父親との間に割り込んでわって、

「林君！……林君！　もう、とうとうだめでしたか！」

こう言つた荻生さんの頬を涙はホロホロと伝つた。

母親はまたすすりあげた。

遼陽占領の祭りで、町では先ほどから提灯行列がいくたびとなくにぎやかに通つた。どこの家の軒にも鎮守ちんじゆの提灯が並んでつけてあつて、国旗が闇にもそれと見える。二三日前から今日占領の祭りをするという広告をあつちこつちに張り出したので、近在からも提灯行列の群れがいく組となくやつて來た。荻さんは危き

篤の報を得て、その国旗と提灯と雜踏の中を、人を突き退ける  
ようにして飛んで来た。一時間ほど前には清三はその行列の万歳  
の声を聞いて、「今日は遼陽占領の祭りだね」と言つて、そのに  
ぎやかな声に耳を傾けていた……。

今、またその行列が通る。万歳を唱える声がにぎやかに聞こえ  
る。やがて暇を告げた医師は、ちょうどそこに酸漿提灯を篠け  
竹の先につけた一群れの行列が、子供や若者に取り巻かれてわ  
いわい通つて行くのに会つた。

「万歳！ 日本帝国万歳」

昼間では葬式の費用がかかるというので、その翌日、夜の十一時にこつそり成願寺に葬ることにした。

荻生さんは父親をたすけてなにかれと奔走した。町役場にも行けば、桶屋に行つて棺をあつらえてもやつた。和尚さんは戦地から原杏花が帰るのを迎えて東京に行つてあいにく不在なので、清三が本堂に寄宿しているころ、よく数学を教えてやつた小僧さんがお経を読むこととなつた。近所の法類からしかるべき導師を頼むほどの御布施が出せなかつたのである。

夜は星が聴しげにかがやいていた。垣には虫の声が雨のように聞こえる。椿の葉には露がおいて、大家の高窓からもれたランプ

の光線がキラキラ光つた。木の黒い影と家屋の黒い影とが重なり合つた。

棺こうが小路こうじを出るころには、町ではもう起きている家はなかつた。組合のものが三人、大家おおやのあるじ、それに父親に荻生さんとがあとについた。提灯が一つ造り花も生花もない列をさびしげに照らして、警察の角かどから、例の溝みぞに沿つた道を寺へと進んだ。

溝くぼのさびた水が動いて行く提灯の光にかすかに見えた。おおいかぶさつた木の葉裏はうらが明るく照らされたり消えたりした。路傍の草にも、畠にも、藪にも虫の音はたえず聞こえる。一行は歩むにつれてバタバタと足音を立てる。誰も口をきくものはなかつた。寺の本堂は明け放あはなされて、如来様によらいさまの前に供えられた裸はだかろうそく

燭くの夜風にチラチラするのが遠くから見えた。やがて棺はかつ  
き上げられて、読経が始まつた。

丈の低い小僧はそれでも僧衣こうもを着て、払子ほつすを持った。一行の携たずさ  
えて来た提灯は灯ひをつけられたまま、人々の並んだ後ろの障子の  
桟さんに引っかけられてある。広い本堂は蠟燭の立てられてあるにか  
かわらずなんとなく薄暗かつた。父親の禿頭はげあたまと荻生さんの白  
地の單衣ひとえものがかすかにその中にすかされて見える。読経の声には重  
々しいところがなかつた。いやにさえ走つたような調子であつた。  
鉢かねがけたたましい音を立てて鳴る。

「ここでこうして林君のおとむらいをしようとは夢にも思いがけ  
なかつた」

荻生さんは菓子の竹皮包みを懷に<sup>ふところ</sup>入れてよく昼寝にここに来たころのことを思い出して、こう心の中に言つた。

式がすんで、階段から父親がおりると、そこに寺のかみさんが立つていて、

「このたびはまア……とんでもないことで……それにお悔みにもまだ上<sup>や</sup>がりもいたしませんで……あいにく宿<sup>やど</sup>で留守<sup>する</sup>なものですか

ら」と、きれぎれの挨拶をした。

夜はもう薄ら寒かつた。单衣<sup>ひとえ</sup>一枚では肌<sup>はだ</sup>がなんとなくヒヤヒヤする。棺はやがて人足にかつがれて、墓地へと運ばれて行く。選ばれたのは、畠と寺とを劃<sup>かぎ</sup>つた榛<sup>はん</sup>の木に近いところであつた。

ひよろ長い並木の影が夜の闇の中にかすかにそれと指さされる。

垣の外にいたずらにのびた桑の広葉がガサガサと夜風になびく。

穴は型のごとく掘つてあつた。赤土と水が出て、あたりは踏み立てられぬほど路がわるかつた。組合の男はいち早く草履ぞうりを踏み込んで、買いたての白足袋を散々にしたと言つてゐる。穴掘り男は頭髪かみのけまで赤土だらけにしながら、「どうも水が多くつて、かい出してもかい出しても出て來るので、困つたちやねえだ！」などと言つた。

父親は提灯を振りかざして、穴をのぞいてみた。穴の底の赤く濁にごつた水が提灯にチラチラうつった。

荻生さんものぞいてみた。

やがて棺が穴に下ろされる。土塊つちくずれのバタバタと棺に当たる音がする。時の間に墓は築かれて小僧の僧衣姿こうもが黒くその前に立つたと思うと、例の調子はずれの読經どきょうが始まつた。暗い闇の中の提灯は、木槿垣もくげがきを背にして立つた荻生さんの蒼白い顔と父親の禿頭はげあたまとそのほかの群れのまるく並んでいるのをかすかに照らした。

## 六十四

一年ほどして、そこに自然石じねんせきの石碑が建てられた。表には林清三君之墓、下に辱知有志じょくちゆうしと刻きざんであつた。荻生さんと郁治いくじと

が奔走して建てたので、その醸金者きよきんしゃの中には美穂子も雪子もしげ子もあつた。

一人息子ひとりむすこを失つた母親は一時はほとんど生きがいもないようまで思つたが、しかしそう悔んで嘆いてばかりもいらぬなかつた。かれらは老いてもなお独りひとり働いて食わなければならなかつた。母親は息子の死んだ六畳でせつせと裁縫の針を動かした。父親の禿頭はやはりその街道におりおり見られた。

墓にはたえず花が手向むかけられた。花好きの母親はその節ごとに花を携たずさえて来てはつねにその前に供えた。荻生さんも羽生の局に勤めている間はよく墓参りをした。ある秋の日、和尚さんは、廊ひに結つて、矢絣やがすりの袖つむぎに海老茶えびちゃの袴はかまをはいた女学生ふうの髪さしがみに結つて、

娘が、野菊や山菊など一束にしたのを持つて、寺の庫裡くりに手桶を借りに来て、手ずから前の水草の茂つた井戸で水を汲んで、林さんの墓のありかを聞いて、その前で人目も忘れて久しく泣いていたということをかみさんから聞いた。

「どこの娘だか」

などとその時かみさんが言つた。

ところがそれから二年ほどして、その墓参りをした娘が羽生の小学校の女教員をしているという話を聞いた。

「あの娘は林さんが弥勒みろくで教えた生徒だとサ」とかみさんはどこかで聞いて来て和尚さんに話した。

秋の末になると、いつも赤城あかぎおろしが吹きわたつて、寺の裏の

森は潮のうしおのように鳴つた。その森のそばをアシカが足利まで連絡した東武鉄道の汽車があしたに夕べにすさまじい響きを立てて通つた。



# 青空文庫情報

底本：「田舎教師 他一編」旺文社文庫、旺文社

1966（昭和41）年8月10日初版発行

1985（昭和60）年重版発行

初出：「田舎教師」佐久良書房

1909（明治42）年10月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「芋殻《おがら》」と「績殻《おがら》」、「蠶豆」と「蚕豆」の混在は底本どおりです。

※「毛布」に対するルビの「けつとう」と「かつ」との混在は、底本通りです。

※誤植を疑つた箇所を、初出の表記にそつて、あらためました。  
※本文中の編者による語注は省略しました。

※本文中の挿画は省略しました。

入力：林 幸雄

校正：松永正敏

2007年2月2日作成

2020年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://w>

[www.aozora.gr.jp/](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 田舎教師

## 田山花袋

2020年 7月12日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>